
僕と歪んだ愛情表現？

まあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と歪んだ愛情表現？

【Nコード】

N7326N

【作者名】

まあ

【あらすじ】

兄『吉井 明久』を兄妹と言う垣根を越えて愛する暴走美少女『吉井 深秋』。

彼女のアタックから明久は逃げ切れるんでしょうか？

投稿キャラを加え、完全に原作から外れながら今日も深秋は暴走中。清涼祭編に突入して深秋はどこまで行くんでしょうか？

自サイト『悠久に舞う桜』にもリンクしています。

オリキャラデータ

吉井 よしい 深秋 みあき

性別 女

所属 21F

吉井 明久を兄妹と言う垣根を越えて愛そうとする明久の双子の妹。成績は明久より少しだけ上、明久と同様に趣味に生きる美少女。明久がゲームやマンガに仕送りを使い込むため、自分の趣味は自分のお金でバイトをしているため、金銭感覚は兄の明久よりは優れている。

明久と同様に『観察処分者』であり、生活指導の西村教諭に『まさか、初めての観察処分者が吉井兄妹セットとは』と本気で呆れられた。

得意教科は家庭科、現代文。他の教科は兄と同様。

明久や仲の良い友人からは『みあ』と呼ばれている。玲からは『みあちゃん』。

大河 おおかわ 咲耶 さくや

性別 男

所属 2-A

深秋のバイト仲間。成績はAクラスに所属しているため、勉強はできるが、本人はあまり勉強に時間を割いている感じはなく、学校が終わると直ぐにバイト先に直行する。文月学園を選んだ理由は近くて学費が安かったから。精格は人当たりも良く、友人は多いタイプだが他人をバカにするような人間は好きになれないようで、Bクラス代表の根本恭二とは1年の時のクラスメートだが彼の人を見下す態度が気に入らないため仲は悪い。

得意教科は深秋と同様に家庭科、文系。

苦手教科は特になし。

深秋を通して明久とも仲が良く。深秋からは『さつくん』、明久からは『サク』と呼ばれている。

投稿キャラクター

原口 薫 はらぐち かおる

性別：男

所属：Eクラス

得意科目：世界史392 日本史383

苦手科目：上記以外平均30くらい

総合：1130

タイプ：特化型

備考：線が細い、大人し目の少年。

中林宏美の幼なじみの気弱な少年で彼女に惚れている。ただし、言い出すことも出来ず、恋愛の相談を持ちかけられて応援してしまうタイプ。

戦史に詳しく、頭の回転は早いが、なかなか言い出せずに終わってしまうことがほとんど。中林とは家が隣同士で、小さい頃は仲が良かった。顔つきは中性的で、性格は内向的。人と争うのが嫌いで、何事も譲ってしまいがち。

ただし、中林の助けにはなりたいと強く思っており、そのためになら頑張れる模様。

趣味は本を読むことで、運動部の多いEクラスでは浮いており、クラスの内外を問わず友達は少ない。

投稿者：GAUさん

有栖 ありす 恋華 れんか

性別：女

所属：Cクラス

得意教科 日本史398 世界史387 古文278

苦手科目 上記以外30～50点台

総合得点 1556

タイプ：特化型

備考：小柄で髪型はツインテール、端正な顔立ちであるがやや幼さが見える。

重度の歴史好きでかなりの考古学など歴史に関わる知識はかなりの物だが、

興味の無い事には基本的に見向きもしない性格で基本的に物静かで無口だが歴史の話になると途端に饒舌になる。

試召戦争については基本的にやる気を見せず地獄の補習すら恐れずさっさと退場する凶太い精神を持っている。

基本的に無表情で無愛想なので友人はCクラスの代表小山友香のみである。

投稿者：リザクさん

加賀屋^{かがや} 真子^{まこ}

性別：女

所属クラス：Eクラス

得意教科：数学300 英語W300

苦手教科 その他の科目全て

総合得点 1176点

タイプ 特化型

備考

剣道部所属。普段は大人しいが、部活と試召戦争になると性格が変わり、戦闘狂に変わる。

宏美にはいつも迷惑かけるお騒がせ娘でBL本や近親相姦が大好物で密かに集めていたたりする。

容姿は黒髪ポニーテールの釣り目で一見クールに見えて結構人気があるらしい。

投稿者：レフェルさん

米倉^{よねくら} 巧^{たくみ}

性別：男

所属クラス：E

得意科目：化学400 物理400

苦手科目：文系科目（英語・古典・現社・歴史）

総合点：1100点

タイプ 隊長型

備考：誇るべき面倒臭がり。超頭脳派の理系少年。

「勉強したくない」ただその一心で最も試召戦争になる可能性が少なくなると予想し、Eクラスに入る。

本来、少し勉強すればBクラスの成績になるはずなのにわざと成績を調節した。

ムツツリーニを一番警戒したり、秀吉を男と認識することから、頭がよいことがうかがえる。

投稿者：黒丸さん

みかがみ
水鏡 陽菜 はるな

性別：女

所属：Eクラス

得意科目：世界史278 日本史298

苦手科目：上記以外

総合得点：1186点

タイプ：特化型

備考：いわゆる歴女で、歴史を語らせたら右に出るものがあまりいないほど、歴史通である。特化型ではあるが、おっとりとした性格で書くスピードも遅いため300点前後を行ったり来たりしている。

容姿に关しましては黒髪のアートヘアをすべてお団子にし、あまっ
た髪を三つ編みにしてお団子に巻いています。 また眼鏡をかけて
います。

投稿者：光闇雪さん

八幡 公介 やばた こうすけ

性別：男

所属クラス：C

得意科目、苦手科目：特になし

総合点：1520点

タイプ バランス型

備考

常にハイテンション。あまり物事を深く考える方ではなく、勢い任せに不用意な発言をして周りにドン引きされる事もしばしば。コミックリリーフであり空気の読めない愛すべきバカ。

戦闘スタイルは猪突猛進。代表の小山に非常に忠実でついた渾名が『忠犬八子公』

バランス型で弱点らしい弱点もないかわりに突出しているものも無い。点数はすべてCクラスの平均よりやや上程度

投稿者：クロさん

羽鳥 恋 はとり れん

性別：女

所属クラス：C

得意教科：英語250 美術270

苦手教科：理数系

総合点 1500

タイプ バランス型

備考

性格はのんびり天然系。興味無い事はとことん気にしないが仲間思いで卑怯な手を嫌う。代表の小山友香とは余り仲が良くないが彼女の機転や戦略に助けられているため強くは言えない。

髪型はサイドポニーで端正な顔立ちだが童顔で幼く見える。

投稿者：ヒヨウガさん

眞崎 蓮 まさき れん

Cクラス 男子

得意教科：日本史170 古典178

苦手教科：数学、英語

総合：1547

タイプ：バランス型

備考

シヨタつ子。様々なキャラのコスプレをさせられ弄ばれているが、気が弱いために強く拒めない。

自分の弱気な性格にコンプレックスがあり、男らしく強い男子に憧れ慕っているが、その様子は一部の趣味を持っている人間のツボにストライクである。

身長も低く（151?）声変りもしていないため、Cクラスのマスコットのな存在となっている。

投稿者：あづまさん

名前：三津屋 流 ミヅヤマ リュウ

性別：男

所属：2-B、料理研究会

得意教科：家庭科、美術

苦手教科：特になし

タイプ：バランス型

総合得点：2015点

備考：近所の甘味どころの跡取り息子。和菓子だけではなく洋菓子も好きであり、咲耶や美春の家の常連でもあり、その関係で深秋や明久とも面識はある。

すでに実家を継ぐと決めているため、咲耶と経営学の勉強をしたり、商店街を盛り上げるためにたまに図書室で熱い口論を行っている様子が見られ、図書委員に追い出されている姿も見られる。

咲耶や美春の実家は彼に取っては商店街の仲間であり、おかしな敵対心はないが美春個人とはあまり仲は良くなく口論している姿が見られる。

根本のやり方は個人的に嫌いだが代表としてやらないといけない事ではあると理解していたため、試召戦争は普通に参加した。

去年の深秋達と恭二の軋轢は詳しくは知らないため、恭二には恭二の考えがあったと思っっている。

投稿者：青空さん

名前：阿久津 鈴アクト スズ

性別：女

所属：2 - B、手芸部

得意教科：家庭科、数学

苦手教科：特になし

タイプ：バランス型

総合得点：1980点

備考：手芸部に所属する内向的な少女。恭二が権力を失い、1人でいる姿を気になげながらも何も言えずにいる。

深秋とも面識はあるが明るい深秋がちょっと苦手、Fクラス対Bクラス戦は友人に引きずられて早々に不戦を行う形になる。

恭二のやり方には賛成できないがクラス代表を見捨ててしまった負い目はあるようで今のクラスでの恭二が浮いている様子をどうにかしたいが行動には移せない。

投稿者：神苑さん

名前：神村 海カミムラ カイ

性別：男

所属：2 - D

得意教科：化学

苦手教科：英語

タイプ：バランス型

総合得点：1358点

備考：暴走気味のDクラス女子（美春、美紀）を源二とともに抑えつけようと努力する少年。

源二とは去年も同じクラスであり、仲が良く、代表会議に出ている源二の代わりにクラスをまとめようとしているが美春と美紀の暴走により、いつも彼の行動は無駄に終わる。

立ち位置的にはDクラス代表補佐。だけど、彼の努力は無駄になる苦勞人。

投稿者：ナツクさん

第1問

「アキ兄、起きて。朝だよ」

深秋は新学期初日に遅刻するわけにも行かないため、双子の兄の明久を起こそうと体を揺すが明久は明け方までゲームをやっていたようで起きる気配はない。

「仕方ないなあ」

深秋はため息を吐くと嬉しそうに明久の布団をめくり、

「アキ兄のここは今日は元気かな？」

明久のパジャマのズボンに手をかけようとする。

「はっ！？ 邪悪な気配！？」

「……………ううう。今日もお預け」

明久は深秋の行動に身の危険を感じたようで素早く起き上がると深秋は残念そうな表情で言う。

「お預けじゃないよ。どうして、みあも姉さんも僕に変な事をしようとするんだよ？」

「それはアキ姉もぼくもアキ兄を愛してるからだよ。兄妹なんて些細な事を気にしないくらいに」

「お願いだから、気にしてよ!? 全然、些細な事じゃないから!」

明久は深秋の言葉に彼女と姉の玲の行き過ぎる愛情に声をあげるが、

「アキ兄、知ってる? 愛って障害があればあるほど燃え上がるんだよ」

「燃え上がるな!?! 僕は少なくとも、みあを愛してないから!?!」

「ううう。アキ兄、酷いよ」

深秋はそれでも明久を愛してると言つと明久は全力で否定すると深秋は涙目で明久を非難する。

「ちょっと、みあ、泣かないでよ!?! 僕は『家族として』みあを愛してるよ!?!」

「女の子としては?」

明久は深秋の様子に彼女を泣き止ませようと言つと深秋は顔を明久に近づけて行く。

「いや、みあはかわいいと思うよ。だからこそ、僕じゃなくてもっと良い人を探して欲しいんだ」

「ぼくはアキ兄が良いの」

明久は慌てていると深秋は明久の顔のすぐそばに顔を運び、そっと目を閉じる。

「……いや、ダメだ。みあは僕の血のつながった『妹』。こんな事をして良いわけがない!!」

「……ちっ」

明久はなんとか理性を保つと深秋は明久の様子に舌打ちをする。

「ちよつと!?! みあ、今の舌打ちは何!?!」

「良いよ。今日はひとまず、これで」

深秋は明久の事など気にせず懐から、再生機を取り出し、『僕はみあを愛してるよ!!』と先ほど明久の言った言葉を編集して流す。

「ちよつと、それは何!?! や、止めてよ。実の妹に手を出した変態だと思われるから!?!」

「大丈夫。ぼくはアキ兄が望むなら緊縛だって、青姦だって何でもいけるから」

「まるで、僕がみあに強要しているように言うのは止めてよ!?!」

明久は慌てて深秋を止めようとすると、

「だって、アキ兄は御奉仕して貰いたいんだよね? やっぱり、メイド服が良いのかな? それとも首輪?」

深秋は明久のベッドの下から、『保健体育の実技の教科書』を取り出す。

「みあはこんなものを見ちゃダメだ!？」

「そうだよ。アキ兄が見るのはこれしか許さないから」

明久は深秋の手から『保健体育の実技の教科書』を取り上げようとするが、深秋は明久の手を交わすと明久に『妹属性の保健体育の実技の教科書』を手渡す。

「あ、ありがとう……って、違う。と言うか、みあ、僕のパジャマに手をかけるな!? そして、どうして着ている制服を脱ごうとするんだ!？」

「……ちっ」

明久は深秋から手渡された『妹属性の保健体育の実技の教科書』を何ページか読んだ後、我に返ると深秋は明久のパジャマのボタンを2つほど外し、自分の着ていた制服を脱ぎかけている。

「いや、いつまでたってもアキ兄が着替ええないから、手伝おうと思っ
つて」

「なら、みあが脱ぐ必要ないよね!? 僕は1人で着替えられるから、みあは出て行ってよ」

明久は深秋を自分の部屋から追い出すとこれ以上、やっているが遅刻すると思ったよう
で制服に着替える。

第1問（後書き）

まさかの『バカとテストと召喚獣』3作目です。

いや、夜中に話がつながりました。原作沿いではありませんが超絶ブラコンの深秋は兄の明久以外に興味を持つのでしょうか？

そして明久は深秋に食べられてしまうのか？

作者にもわかりません。（爆笑）

第2問

「……眠いよ」

「そう言うのなら、遅くまでゲームしなければ良いじゃない」

深秋と明久は並んで文月学園まで歩いていてその姿は端から見れば仲の良い兄妹かカップルに見えるが現実には実の兄の貞操を本気で奪おうとする妹と毎日、実の妹に襲われかけている兄と言うなんと言うて良いかわからない歪んだ関係である。

「みあだつて、遅くまで何かしてただろ。それなのにどうして朝早くから起きられるんだよ」

「それはぼくにとつてアキ兄のかわいい寝顔を見る事がその日1日……違うね。この腐りきった世界を生き抜く活力になるからだよ
そして、アキ兄の大切なものを手に入れるためだよ」

明久は自分の隣で元気に歩く深秋の様子に納得がいかなさそうに言う
うと深秋は拳を握りしめて言う。

「……みあ、あなた、朝からこんなところでおかしな事を言わない」

「相変わらず、みあのブラコンは全開じゃのう」

深秋の発言に明久と深秋の周りの生徒達が距離をとるなか、深秋と明久と同様に双子の姉弟である木下優子と木下秀吉が声をかけてくる。

「ゆづちゃんにひでくん、おはよう」

「秀吉、木下さん、おはよう」

「うむ。おはようなのじゃ」

「2人ともおはよう」

4人は挨拶を済ませると一緒に学園に向かい歩き始めるなか、

「みあ、あなたが吉井くんの事を好きなのはわかるけど、公然と道路の真ん中で言うのは止めない？」

「どうして？」『ぼくとアキ兄が毎日のようにお互いの肢体をむさぼるように愛しあってる事を周りに声高に宣言したくなる』でしょ」

「……明久、お主、実の妹に何をしておるのじゃ？」

優子は行き過ぎた深秋の行動をいさめようとすが深秋は首を傾げながら言うと、秀吉は軽蔑するような視線を明久に向ける。

「無いから!?! 秀吉も木下さんも勘違いしないで!! 僕は無実だ。何もやってない!?!」

「……酷いよ。アキ兄、初めての時はあんなに優しくかったのに、ぼくに飽きちゃったの?」

「……………」

明久は全力で否定するが深秋は涙目で明久に向かい言うと、近くを

歩いていた男子生徒が鼻から大量の血を吹き出し、倒れ込む。

「な、何！？」

「……………あの川の間は楽園」

「ムツツリーニ！？ 行っちゃダメだ！！ その川を渡ると帰ってこれなくなる」

「戻ってくるのじゃ！？ ムツツリーニ！！」

優子は突如として吹き上がった赤い噴水に何があったかわからないため、慌てるが明久と秀吉はすぐに何があったか理解したようで男子生徒を抱きかかえて、現世につなぎ止めようと声をかける。

「あつ！？ こうくんだ。おはよう」

「……………みあ、あなた、状況を理解しているの？」

「うーん？ 朝の挨拶をするのは当たり前前的事だよ」

「そうじゃなくてね」

深秋は倒れた男子生徒が深秋、明久、秀吉の共通の友人である土屋康太だと気づき挨拶をするが康太からの反応はなく、優子は引きつった笑みを浮かべるが深秋は意味がわからずにきょとんとしている。

「……………大丈夫だ。まだ、逝くわけには行かない。俺にはまだ見るべきものがある」

「ムツツリーニ、良かった」

康太は何とか立ち上がると明久と秀吉は安堵のため息を吐く。

「みあ、お願いだから、あんまりおかしな事を言わないで、実の妹に襲われたら、吉井くんだって困るでしょ」

「何で？ ゆうちゃんだって、ひでくんみたいなかわいい弟の寝顔を見たら、ムラっとするでしょ。ぼくはそれが抑えきれないだけ」

「しないわよ！？ あたしはみあみたいに変態じゃないわ！？」

「そうだよね。ゆうちゃんはできれば実の兄弟（x）（って言うのを見るのふぁ……いふあい、いふあいよ。ゆうちゃん」

「余計な事を言っいけない口はこれかしら？」

優子は深秋の明久に向けた歪んだ愛情をいさめようとするが、深秋は優子の趣味をばらしかけ優子は額に青筋を浮かべながら深秋の頬をつねる。

第3問

「……………ううう。痛いよお」

深秋は優子につねられた頬をさすりながら優子を非難するような視線を彼女に送るが、

「あたしとの約束を破ろうとしたみあが悪いのよ」

優子は額に青筋を浮かべたまま言い切り、

「……………うん。ごめんなさい。気をつける」

「わかれば良いのよ。それより、早く行きましょう。新学年初日に遅刻したくないでしょ」

優子に睨まれた深秋は落ち込んでいるようで小さな声で申し訳なさそうに優子に謝ると優子は深秋の落ち込んだ表情に弱いようであるため息を吐きながら急ぐように言う。

「姉上の言う通りじゃのう。このまま、遅刻と言うのはさすがに避けたいのじゃ」

「そうだね。せっかく」

「……………（くくくく）」

4人は復活した康太を加えて文月学園に向かう。

「テツセンサー、おはようございます」

「……吉井妹、その挨拶はなんだ？」

「そうだよ。みあ、さすがに鉄人にでもテツセンサーは失礼だよ」

「……吉井くん、あなたも充分に失礼よ」

深秋が校門の前で仁王立ちしている西村教諭に挨拶をすると西村教諭は深秋の挨拶にため息を吐くと明久は深秋を叱るように言うがその言葉も西村教諭には失礼だと優子はため息を吐きながら言う。

「えっ！？ そうなの？ それなら、どうしよう……そうだ。鉄人が喜ぶような事を言って話をそらそう。みあ、わかった？」

「うん。わかったよ。アキ兄」

「……明久、みあ、それは口に出さない方が良いのではないか？」

明久はない頭をフル稼働させて答えを出すと深秋は明久の答えに頷くが西村教諭の額には目に見えるくらい青筋が浮かび上がっており、秀吉は西村教諭の様子に引きつった笑みを浮かべるが、

「西村先生、今日も黒いですね」

「黒くて硬いです。こんなので攻められる奥さんは幸せ者ですよね」

明久と深秋は笑顔で親指を立てながら、西村教諭を誉めているつもりであるがそれは誉め言葉ではなく、深秋の言葉にいたっては少し

卑猥である。

「……吉井兄妹、お前達は俺を怒らせないと気がすまなのか!！」

「……痛いです」

「……バカになったらどうするんですか？」

鉄人は深秋と明久を叱ると2人の頭にげんこつを落とし、2人は涙目で頭を押さえる。

「大丈夫だ。お前達吉井兄妹はそれ以上、バカになる事はない」

明久の訴えを西村教諭は一喝すると、

「本題から、ズレたな。吉井兄妹、木下姉弟、土屋、これが振り分け試験の結果だ」

西村教諭は懐から5枚の封筒を取り出し、5人に配る。

「アキ兄、クラスはどこかな？」

「僕は振り分け試験は結構できたから、Cクラスくらいだと思っただ」

「ええ!? それなら、アキ兄と離れちゃうよ。ぼくはアキ兄から貸して貰った『シャイニングアンサー』が絶対調だったから、AクラスはムリでもBクラスはいけたと思うから」

明久は振り分け試験は調子が良かったと自信ありげに言うと深秋は

明久とクラスが離れてしまおうと言う事で落ち込んだような表情で言う。

「……大丈夫でしょ。みあと吉井くんだし」

「……そうじゃのう。なぜ、明久もみあも自分がBやCだと思えるのかが不思議じゃ」

「……………（こくこく）」

深秋と明久の様子に優子はため息を吐きながら言つと秀吉と康太は同意見のようで頷き、

「……吉井兄妹、今だから言つがな。俺はお前達2人を去年1年見て、『もしかすると、吉井兄妹はバカなんじゃないか?』なんて疑いをかけていたんだ」

「それは大いなる間違いですね。そんな誤解をしているようじゃ、更に『節穴』なんてあだ名をつけられちゃいますよ」

「そうですよ。ぼくとアキ兄はバカじゃないですよ」

西村教諭はどこか遠くを見つめて言つと深秋と明久は封筒のノリが上手く外れないようで2人で同じ動きをしながら、封筒を開けようとしている。

「ああ。振り分け試験の結果を見て、先生は自分の間違いに気がついたよ」

「そう言つて貰えると嬉しいですよ」

「はい」

深秋と明久は封筒が上手く開けられないため、2人そろって封筒の上を軽く破るとそこには折り畳まれた1枚の紙が入っている。

「喜べ、吉井兄妹。お前達2人への疑いはなくなった」

深秋と明久が紙を開くと、

『吉井 明久……Fクラス』

『吉井 深秋……Fクラス』

と大きく書かれており、

「お前達はバカだ」

こうして、深秋と明久の最低クラス生活が幕を開けた。

第4問

「アキ兄とおんなじクラス」

「……Fクラスかぁ。けっこう、できたと思っただけだな」

教室に向かう途中、Fクラスと言う結果に明久は少し落ち込んでいるようだが、深秋はFクラスと言う結果より、明久と同じクラスと言う事が嬉しいようである。

「……みあは明久と同じクラスが嬉しいようじゃの」

「うん だって初めて、アキ兄と一緒にのクラスになれるんだよ」

秀吉は深秋の様子を見て疑問を口にする。深秋は明久と同じクラスと言う事が本当に嬉しいようである。笑顔で言う。

「確かにね。双子が同じクラスなのは、いろいろと問題があるからね。あたしも秀吉と同じクラスになった事ないし」

「そう言われるとそうじゃの」

優子と秀吉は深秋の言葉に頷いたところでAクラスの優子と別れる場所に着く。

「みあ、あたしはAクラスだから、ここまでね」

「うん。ゆうちゃん、またね」

優子は深秋に向かい言うと深秋は笑顔で返し、

「結局、木下さんだけ別クラスなんだよね」

「姉上はAクラスじゃからのう」

「ゆうちゃん、頭が良いからね。あんな趣味のクセに」

「みあ、あんな趣味って、何？」

4人になりFクラスに向かう途中、深秋は口を滑らせ、明久は深秋に聞く。

「えーと？ アキ兄、ごめんなさい。これを言うとぼくはひでちゃんみたいにゆうちゃんに間接技かけられるから言えない」

「えっ！？ みあ」

「……それは言ってるのと変わらんと思っつのじゃが」

深秋は明久の疑問に目を逸らしながら笑うと明久から逃げ出すようにFクラスの教室に向かい走り出すが秀吉はため息を吐く。

「おはようございます」

「早く座れ、このウジ……なんだ。みあか。明久はどうした？」

「アキ兄なら、もう直ぐ、ひでちゃんとこっちゃんと一緒にくるよ……あつた」

深秋は勢いよく教室のドアを開くと深秋と明久の共通の友人である『坂本 雄二』が深秋を誰かと勘違いしたようで罵声を浴びせるが深秋だと言う事に気づいて止めると、深秋は雄二の罵声を気にしている素振りなどは見せないがポケットから携帯電話を取り出すとどこかに電話をかけようとすする。

「みあ、待て!？ 俺が悪かった。だから、それだけは勘弁してくれ!！」

「うーん。どうしよっかな ゆうじくんはぼくがいくらお願いしても、アキ兄にヒドい事するし」

雄二は深秋の電話の先に恐怖を感じたのか慌てて、深秋に謝ると彼女は楽しそうに言う。

「みあ、雄二、何してるの?」

「明久、お前からこいつに言ってくれ」

「また、雄二はみあを怒らせたの?」

深秋より少し遅れた明久、秀吉、康太の3人は雄二が深秋に謝っている姿を見て、わりと見慣れた光景のようで雄二を気にする事なく、Fクラスの教室を見渡すと、

「……………置?」

「卓袱台?」

「座布団じゃのう?」

Fクラスの設備のひどさに啞然とする。

「……わかっておったけど、ひどいのう」

「そうかな？ たたみだよ。これでいつでもアキ兄はぼくを押し倒せるよ」

「みあ、おかしな事を言わないでよ！？ 僕がみあを押し倒す事なんてないから！！」

秀吉はFクラスの設備にため息を吐くが深秋は3人と違いこの設備が気に入っているようで、明久を押し倒すと言うと明久は声をあげる。

「そつだよね。ぼくがアキ兄を押し倒すんだよね」

「そつじゃないから！？」

深秋と明久が騒いでいるのを見て、

「……相変わらずだが明久は大変だな」

「………実の妹じゃなければ、明久は始末されてた」

雄二は自分が助かった事に安心したのかため息を吐くと深秋と明久のこのやりとりはすでに有名なのか、怪しい覆面を被った人間達がカッターを手に、明久に投げつけるか葛藤している。

第5問

「アキ兄、ぼく、もう我慢できない」

「ちよつと!? みあ、抱きつかないでよ!? そして、どうして、ベルトに手をかけるんだよ!?」

深秋はいつでも、明久を押し倒せる環境に口元から垂れだしたよだれを手で拭うと明久に襲いかかり、明久は慌てて、深秋を引き剥がそうとするが彼女はすでに全開のため、止まる気配はない。

「ダメだよ。みあ、これ以上やられたら、僕、お嫁に行けなくなるよ!? だから、だから、パンツだけは!」

「大丈夫。ぼくは頭が悪いけど、何をしてもアキ兄を養って行くから」

「そんなのダメだよ!? みあは女の子なんだから、自分を大切にしなきゃ!」

「ぼくの事を心配してくれるって事は、やっぱり、アキ兄はぼくを愛してくれてるんだね」

「ち、違う!? だから、それはダメだつて!」

明久は必死に最後の砦を死守しているが、深秋は攻撃の手を緩める事はなく、明久の砦の防備は徐々に削られて行く。

「明久、愛されてるな」

「違うから!? 雄二も秀吉も助けてよ!!! って、ムツツリー二!? どうして、カッターを構えてるの!?!」

雄二は苦笑いを浮かべて言うと、明久は必死の抵抗を見せながら援軍を要請するが、援軍はすでに明久に弓を引き初めている。

「……………明久、すまない。これ以上はいくら、兄妹だろうが抑えきれない」

康太が明久に向かい言った時、

「血の繋がった実の妹と禁断の恋だ!!! ゆるせねえ!!!」

「吉井の野郎、家で一緒だと言うのを良いことに純粋なみあちゃんを……………」

溜まっていた何かが溢れ出したようでクラスメートから妬みの声上がる。

「ちょっと待ってよ!?! 襲われてるの僕だから!?!」

「うるせえ。実の妹だろうが、女の子といちゃついてる時点で異端者だ!!!」

明久は自分に向けられた妬みを否定するが、明久が許されるわけがなく、教室のなかには「カチカチ」とカッターの刃がのばされている音が響く。

「……………お主ら、そのまま、カッターを投げれば明久だけではなく、

みあにも危険が及ぶのじゃ」

「吉井、貴様、汚いぞ！！ みあちゃんを盾にするな！！ この極悪人が！！」

「完全に逆恨みだよね！？ 今は完全に僕が被害者だよ！？」

明久に向け、カッターを投げつけようとしているクラスメート達に向かい秀吉が言うが、すでに明久を敵と判断しているせいか、明久の言葉を聞き入れる事はない。

「……みあ、お主もそこまでにするのじゃ、このままではお主の大切な明久が酷い目にあうのじゃぞ」

「大丈夫。ぼくはアキ兄の泣きそうな表情も大好きだから なんなか、アキ兄の泣きそうな表情を見るとぞくぞくすると言うか、快感が背中の後ろを駆け上がって行くと言うか」

秀吉はため息を吐きながら、深秋を明久から引き離して彼女をいさめようとしますが、みあの発言はかなり吹っ飛んでいる。

「……明久、悪いな。今まで、みあは重度のブラコンなだけだと思っていたが、違ったようだ」

「……理解してくれたなら、助けてよ」

「……無理だ。俺にはみあを敵に回せないわけがある」

雄二は改めて、深秋の異常さに苦笑いを浮かべると明久はため息を吐き、制服のズボンあげ、ベルトを締めながら、雄二に言うが、

雄一は首を振る。

第5問（後書き）

どうも、作者です。

数日、開きましてすいません。

最近は仕事が忙しいため、書くひまがありません。他の作品も似たような感じですが見捨てないでください。

本題

……話が進みません。（苦笑）

深秋は暴走するし、FFF団、結成前のはずなのにすでにまとまっている。

深秋と明久はクラス内で消されてしまっうんでしょうか？

作者にもわかりません。（苦笑）

第6問

「おはよう。みあに吉井、また、朝から何かしてたの？」

教室でのバカ騒ぎが廊下にも響いていたようで長い髪をポニーテールにした胸が『絶壁』の少女『島田 美波』が教室に入ってくるなり、深秋と明久に声をかけてくる。

「おはよう。みなみちゃん」

「ちょっと、みあ!?! 何で抱きつくのよ!?!」

「もちろん。みなみちゃんとのスキンシップ　みなみちゃんもうちゃんもだけどこの一見、無いように見えるのに確かに感じる感触が……い、痛い」

深秋が美波に抱きつき、朝の挨拶をすると美波は慌てるが深秋の言葉に躊躇なく、拳を深秋の頭に叩きつけ、深秋は涙目になりながら頭を押さえるとこのやりとりを見ていたクラスメートたちは若干、前かがみになっている。

「島田さん、おはよう。やっぱり、島田さんもFクラスなんだね」

「吉井、ウチがバカだとしても言いたいなの？ 何度も言うけど、ウチは帰国子女だから、問題文が読めないだけなの」

明久が深秋に遅れて美波に挨拶をすると美波は頬を膨らませて反論する。

「しかし、なんだかんだ言って、いつものメンバーがそろったな」

「そうじゃのう」

雄二は明久、康太、秀吉、深秋、美波の顔を見渡して苦笑いを浮かべると秀吉は頷くと、

「ゆうじくんは試召戦争をやりたいんでしょ？」

「……みあにはバレてるか」

深秋は何か雄二の様子に何か感じていたようにつこりと笑いながら雄二に言つと雄二はため息を吐く。

「うん。ゆうじくんはわかりやすいよ。アキ兄と同じくらい」

「……明久と一緒にだよ」

「だって、ゆうじくんは振り分け試験だけでも真面目にやってくれば、勉強しなくてもDクラスかCクラスには行けたはずだもん。何か企んでるから、Fクラスにいるんでしょ」

雄二がFクラスにいる事に深秋だけは違和感があったようで雄二に向かい言つと、雄二は凶星を突かれたようで頭を乱暴に掻き、

「明久もそうだが、何で、みあも勉強以外には頭が回るんだ？」

「うーん。ぼくもアキ兄もだけど集中力や観察力はあると思うんだよね。それが勉強には向かないだけ」

深秋は雄二の言葉に苦笑いを浮かべる。

「確かに、みあは好きな教科だけは点数が良いからのう。明久もここぞと言う時の集中力は凄いからのう」

「確かにな。なあ、みあ。お前の得意教科って……現代文と家庭科だったか？」

「うん　ぼくは本を読むのが好きだしね。家庭科は趣味が重なるから」

秀吉が苦笑いを浮かべ言うと雄二は試召戦争の戦力の確認をしたいのか深秋の得意教科を確認すると深秋は笑顔で答える。

「……ムツツリー二の保健体育にみあの現代文と家庭科。他に上位クラスと戦えるのは……」

「みなみちゃんの数学はBクラスくらいはあると思うよ。後ね……」

深秋と雄二は近いうちに必ず起きる試召戦争の事を話し始めると深秋はとっておきの情報があるのか雄二の耳元で何かを言う。

「マジかよ！？　それは良い事を聞いた」

「どこまで行けそう？」

「決まってるだろ。目標はAクラスだ」

「相手は絶対にしょうこちゃんだよ」

「だからこそ。俺は勝たないといけない」

雄二は深秋からの情報が朗報だったようで少し興奮気味に言う。

「ゆうじくんの事だから、ぼくにはわからない戦力を立ててと思うけど、Aクラスとの試召戦争までには勉強しておいてよ。ぼくはしょうこちゃんに勝てる人がいるとしたら、ゆうじくんだけだと思うからね。作戦は完璧だったのにゆうじくんの力が足りなかったみたいなおチはイヤだよ」

「……ああ。そうならないように少しは努力する」

深秋が雄二に向かい言うと雄二は頭を掻きながら答えた時、

「みなさん、席についてください。HRを始めます」

担任教師らしき男性が教室に入ってくる。

第7問

教室に入ってきた男性はFクラスの担任の『福原 慎』であり、簡単な自己紹介をした後、淡々とした口調でHRに入り、生徒達に自己紹介をするように言う。

(……やっぱり、アキ兄の泣き顔は最高だよ。ボクはこれでご飯、3杯はいけるよ)

「……みあ、危ない妄想をしているなか、悪いのじゃが、お主の番じゃぞ」

自己紹介の途中に美波の『趣味は吉井明久を殴ることです』の一言に怯える明久を見ながら、深秋はニヤニヤと笑っていると、次は深秋の自己紹介のようで隣の秀吉が深秋の肩を叩く。

「あつ!?! うん、ひでくん、ありがとう」

「待つんじゃない。立ち上がる前にこれでよだれを拭くのじゃ」

「ありがとう ひでくんは優しいなあ」

深秋は慌てて立ち上がろうとするが秀吉は彼女を制止してハンカチを出す。

「……やっぱり、ない。まあ、これはこれで萌える」

「みあ!?! お主は何をしておるのじゃ!?!」

深秋は秀吉に抱きつき彼に胸が無いことを再確認すると秀吉は自分の目の前に深秋の顔がある事に慌てる。

「うーん。無いのは納得するけど……この細さは何？」

「待つんじゃない？ なぜ、お主はワシの制服まで脱がそうとするのじゃー!？」

深秋は秀吉の腰の細さに女の子として負けたと思ったようで秀吉の上の制服のボタンを外し、マジマジと秀吉の上半身を眺めると秀吉は顔を真っ赤にしながら慌てて自分の上半身を隠す。

「……………美少女2人の絡み合い」

「ムツツリーニ!? ダ、ダメだよ。そっちに行っちゃダメだ」

「……みあちゃん、最高だ。もう1枚、お願いします!!!!!!」

深秋の行動に康太が沈み、教室内に歓声があがるなか、

「……………みあ、いい加減にしろ。話が進まん」

「うーん。そうだね。せつかくのひでくんの裸体だし。ただみさせるのはもったいないし、あんまり、ハデにやるとゆうちゃんにひでくんがいじめられちゃうから……美少年の身体に癒って、ちよっと萌えない?」

「みあ、待つんじゃない? なんだか、お主の目が危ないのじゃ!？」

雄二はため息を吐きながら、深秋を止めるが逆にその一言で深秋の

危ないスイッチがもう1つ入り、秀吉は顔をひきつらせて1歩下が
る。

「大丈夫。痛いのは最初だけだよ」

「ま、待つんじゃない？ ワシにはそんな趣味はないのじゃ」

秀吉は立ち上がると深秋から全力で逃げ始めるが深秋は目を輝かせ
ながら、秀吉を追いかけて行き、

「……明久、さっきも思ったんだが、みあは大丈夫なのか？」

「……たまに自信なくなる」

明久と雄二が顔をひきつらせた時、

「すみません。保健室に行っていて、遅れました」

深秋の小学校からの友人の巨乳娘で本来なら、Fクラスにいるわけ
がない才女『姫路 瑞希』が教室のドアを開ける。

「本当に姫路だ。みあの言ってた事は本当だったな」

「……姫路さん」

雄二は瑞希の姿に先ほど深秋に耳打ちした時の事を驚きながら言っ
と、明久は瑞希がこのクラスにきた理由を知っているようで表情を
曇らせる。

「みずきちゃん、おはよー」

「み、みあちゃん!？」

深秋は瑞希の登場に秀吉を追いかけるのを止め、瑞希の豊満な胸に吸い込まれるように瑞希の胸に顔をうずめる。

「このポリウム。やっぱり、みずきちゃんの胸はあつたかくと気持ち良いです」

「み、みあちゃん、ダ、ダメです。恥ずかしいです」

深秋は瑞希の胸に顔をうずめて言うと瑞希の顔は真っ赤に染まって行く。

「やっぱり、顔をうずめるなら、わずかなふくらみ……」

「みあ、ちょっと、良いかしら？」

「……えーと、できれば遠慮したいかな？」

深秋の言いかけた言葉に美波は額に青筋を浮かべてて深秋の肩をつかむと深秋は美波に引きずられて行く。

第7問（後書き）

どうも、作者です。

久しぶりの更新ですが、相変わらず、話は進みません。（苦笑）

深秋は自分の欲望に忠実ですね。『嘘と話術とノラ猫』の伐がノラ猫なら、深秋は好奇心旺盛な子犬と言った感じですよ。

子犬はどこまで暴走するんでしょうか？

そして、秀吉を襲いかけたのはフラグなんじゃないか？
作者にもわかりません。（爆笑）

第8問

「えーと、みあちゃん、大丈夫ですか？」

「……大丈夫じゃないから、みずきちちゃんのその豊満すぎる胸で癒やし……冗談です」

深秋は美波に引つ張られた頬をさすりながら、泣きそような表情をしていると瑞希は心配そうに深秋の顔を覗き込むと深秋は調子にのつて、また、瑞希の胸に顔をうずめようとしますが、美波の殺気が混じった視線に押され、小さくなる。

「それでは話も落ち着いたようなので、姫路さん、今は自己紹介の途中なので、お願いできますか？」

「は、はい。姫路瑞希です。よろしくお願いします」

担任の言葉に瑞希は慌ててクラスメート達に頭を下げると、本来、Aクラス確実の彼女がFクラスにいる理由がわからずに教室内はざわついている。

「みずきちちゃん、Fクラスになった理由も言った方が良いでしょう」

「そうみたいですね。あの、私は振り分け試験で体調を崩してしまいました、途中退席なので、0点扱いになりました」

深秋は本来、Fクラスにいるはずもない瑞希の登場にざわついているクラスメート達を鎮めるために、瑞希に説明を頼むと彼女は苦笑いを浮かべて振り分け試験中に退席してしまったと言う。

「そうなの？ もったいないわね」

「それでは、自己紹介に戻りましょう」

瑞希がFクラスにきた理由を聞いて、美波は驚いていると担任は自己紹介に戻るように指示を出して行く。

「緊張しました」

「お疲れさま、姫路さん」

瑞希は1人で教壇に立つての自己紹介に緊張していたようで胸をなで下ろすと明久が瑞希を労う。

「吉井くん、おはようございます」

「うん。おはよう。姫路さん」

「ん。明久、お主と姫路は知り合いなのか？」

明久と瑞希が挨拶を交わすのを見て、秀吉が明久に声をかけると、

「小学校と中学校が一緒だったんだよ。それに姫路さんとみあは仲が良いからね。うちにもきたことあるし……！？」

明久は瑞希と仲が良い理由を説明しているとクラスメート達が怪しい覆面を被り、明久に向かいカッターを投げつける準備を始めているなか、

「……へえ、ずいぶんと仲が良いのね」

美波の背後からは何かどす黒いものが溢れ出ている。

「みあちゃんと2人暮らしの上に姫路さんが遊びにくるだと?」

「許せねえ。今すぐ、吉井を消すべきだ」

「その意見には賛成だが、待つんだ。殺る前に吉井に『僕が死んだ後はみあちゃんを頼む』って書いたこの念書にサインをさせないと」

「そんなものは吉井を始末した後にあいつの血で血判を押せば良いんだ」

「……それだ!?」「」

クラスメイト達はカッターの刃を出したり、戻したりしながら明久を痛めつける事を話始めると、

「ちょっと待つてよ!? 何で、僕が殺されないといけないんだよ!?」

明久は理不尽なクラスメイト達の言葉に声を荒げる。

「まあ、待て。今は自己紹介の途中だ。明久が自己紹介で何か面白い事を言ったら、今回は見逃さないか?」

「雄二、助けてくれるんだね」

雄二はクラスメイト達の様子に明久に助け舟を出すと明久は雄二の

言葉を聞いて、安心したように胸をなで下ろすと、

「反対！！ 反対です！！ それだとアキ兄の泣きそうな顔が見れません！！」

「みあ！？」

なぜか、深秋が反対意見を出し、明久は深秋の名を呼ぶ。

「心配するな。何か面白い事って言っても、バカな明久が思いつくわけないだろ」

「確かにそうなんだけど、養殖物より、天然物は強いよ。乗り切る可能性も……」

「大丈夫だ。面白くても、半数が面白くないと言えば良いんだからな」

「そうだね。民主主義は少数意見は切り捨てろって考え出し、面白くないって罵声を浴びせた後で追い詰めれば今まで以上に可愛いアキ兄の泣き顔が……」

「「「それだ！？」「」」

「だから、それだ！？ じゃないよ！？」

深秋は明久の泣き顔を思い浮かべてうつとりとした表情を見せると明久は声を上げて止めようとするが、すでに明久を痛めつけると決めているクラスメート達は止まるわけがない。

第8問（後書き）

どうも、作者です。

話が進みませんと言うか、これは明久がかawaiiそんな作品だな……と書く度に思いますね。

深秋は明久をいじめてるだけなのか？

本当に明久が好きなのか？

作者にすらわかりません。（苦笑）

第9問

「と言う事で、アキ兄の自己紹介です」

「みあ、ちよつと待ってよ!? 僕に考える時間はないの!?!」

深秋は笑顔で明久の自己紹介だと言うと何も考える時間がなかった明久は当然、声をあげる。

「別に結果は決まってるんだ。何を言っても関係ないだろ」

「雄二、貴様!! そこまで言うなら、絶対にこの教室を爆笑の渦に巻き込んでやる!!」

雄二は明久が言う事などたかが知れてると言うとな明久のプライドに火が点いたようで明久は叫ぶが、

「……もう少し、時間をください!!」

その後の行動はともあわなく、命の危険があるため畳の上で土下座をする。

「みあ、どうする?」

「うーん。そうだね……」

「みあも雄二も待つんじゃない。いきなり過ぎるし。多少なりじやが、明久に時間をあげて欲しいのじや」

明久の様子に雄二はニヤリと笑い深秋に話をふると秀吉が明久に助け舟を出す。

「ありがとう。秀吉、僕の味方は秀吉だけだよ」

「明久、何をするのじゃ!？」

明久は自分をかばってくれた秀吉に抱きつき礼を言つと、

「アキ兄、ひでくんとくつつかない!！」

「そうですよ。木下くんが驚いてます!！」

「吉井、離れなさい!！」

明久は深秋、瑞希、美波の3人に引き離される。

「……ひでくんの言いたい事はわかったよ」

「みあ、ありがとう」

明久と秀吉を引き離した後、深秋は頷くと明久は笑顔で礼を言うが、

「……ぼくには抱きついてこないんだ」

「みあ、どうしたの?」

先ほど明久が秀吉に抱きついていたので見ているせいか、明久が自分には抱きつかないため、深秋はムスツと頬を膨らませるが明久が気づく事はなく、

「それじゃあ、アキ兄の自己紹介は締めね」

「さらっと、ハードル上げたよ!？」

深秋は明久の自己紹介を最後に回す。

「うし、それじゃあ。自己紹介に戻るか？ みあ、お前も途中だっただろ。明久が教室を大爆笑の渦に巻き込んでくれるんだ。早く進めようぜ」

「雄二まで、ハードルをあげるな!？」

「そうだね」

深秋の一言で上げられたハードルを雄二は楽しそうにもう一つ上げると明久は叫ぶが、深秋は大きく頷き、

「吉井 深秋です。アキ兄とは双子です。吉井じゃ、アキ兄とわかりにくいので、みあって読んでください。後は、えーと、趣味は読書（BL含む）と服作り（コスプレ）です。後、アキ兄と2人暮らしなんで料理も得意です。好みのタイプは……」

『『『タイプは?』』』』

深秋は自分の好みのタイプを言おうとするとクラスメート達は体を乗り出し、深秋の次の言葉を待ち構える。

「アキ兄です。ハート」

『『『吉井をブチ殺せ!!』』』』

深秋は顔を赤らめながら恥ずかしそうに言つとクラスメート達は再び、明久に向けて攻撃の意志を見せ始めるが、

「ちなみにアキ兄を本気でイジメたら許さないからね」

『『『……ちっ、みあちゃんに免じて今回は許してやるよ。お兄様』』』

「ちよつと、変な風に呼ばないで!? 気持ち悪いし、見てよ!? この鳥肌!?!」

深秋が頬を膨らませて言つとクラスメート達は明久への攻撃を一先ず、考え直すか、深秋を狙っているのか明久を『お兄様』と呼び、明久はその呼び方が気持ち悪かったようで体には鳥肌が立っている。

「お兄様が嫌なら……いつもみたいにご主人様?」

「……明久、お主、まさか、本当に」

「秀吉、勘違いしないで、僕はそんな事してないから!?! みあ、まるで僕がいつも、みあにおかしな呼び方をさせてる風に言つのは止めて!?!」

「……………」

深秋は明久の顔を覗き込み上目づかいで瞳をウルウルさせながら言つと秀吉は疑いの視線を明久に向け、明久は全力で否定する。

第9問（後書き）

どうも、作者です。

中断されていた深秋の自己紹介でした。（苦笑）

書いてて思いますが……つっこみが不足してます。

オリキャラを追加するかな？とか考えながら、もうしばらくは放置です。

明久がマンガとゲームと言う事で深秋は腐女子なコスプレイヤーに見えました。

……濃い。

第10問

「はいはい。その人達、静かに……え、替えを用意してきます」

福原先生は流石にまもらない生徒達をいさめようとし、教卓を叩くと教卓は大きな音を立てて壊れ、福原先生は教室を出て行く。

「……雄二、ちょっと良い？」

「あ？」

明久は福原先生が出て行くのを見て雄二に声をかけると2人で教室を出て行く。

「あれ？ 吉井と坂本は？」

「ん？ さっきまでいたはずじゃが」

美波と秀吉は2人がいなくなった事に気づいて首を傾げるが、

「こほこほ」

「みずきちゃん、大丈夫？」

瑞希は教卓が壊れた時に上がった埃を吸い込んでおり、咳をしているため、深秋は瑞希の背中をさすると、

「ごめんね。みんな、少し掃除しよ。この教室、埃っぽいし、みずきちゃんの体に悪いから、お願い」

『『了解しました!!』』』

クラスメート達に向かい言々とクラスメート達は深秋に向かい敬礼をするなり、窓を開け換気をし、掃除に取りかかる。

「みあちゃん、ありがとうございます」

「落ち着いた？」

「はい。私達もお掃除しましょう。みんなでやれば早く終わりますし……こほこほ」

瑞希は咳も落ち着き、背中をさすってくれている深秋に礼を言つと自分も掃除を言つと自分が掃除により舞い上がった埃を吸い込み咳き込む。

「もう少し休んでて」

「ですけど」

「大丈夫。みずきちゃんの分はぼくがするから、こっくん、みずきちゃんの下着覗いてないで、手伝って」

「……………覗いてなんかいない」

深秋は瑞希に休むように言つと腕まくりをするとカバンからエプロンを取り出し、瑞希のスカートの中を覗いている康太に声をかける。

「はわっ!?!?」

「それじゃあ、みんなやるよ。みなみちゃん、ほうきの使い方はそうじゃないよ。片方だけ使ってるとほうきがダメになるんだから」

「そうなの？ ウチ、あんまりほうきなんかつかわないから」

「ひでくん、窓は……」

瑞希がスカートを押さえる隣で深秋は先ほど、明久にくつついていた人物とは思えないくらいに的確にクラスメート達に指示を出し、掃除を始めて行く。

「みあ、お主、ずいぶんと張り切っておるのう」

「ぼくは掃除好きだもん。それにひでくん、きちんとお掃除できないと良いお嫁さんになれないんだからね。ひでくんもしっかりと覚えないとダメだよ」

「……みあ、ワシは男じゃと何度も言うておるつに」

掃除を始めて生き生きとしている深秋に秀吉が声をかけると深秋は笑顔で秀吉に言うつと秀吉はため息を吐く。

「でもね。ひでくんはかわいいから、そっちの可能性もあるしね」

「無いのじゃ！？ ワシはお嫁さんなどにはならんのじゃ」

深秋は秀吉の反応を見て楽しそうに笑っていると、

「ねえ。みあ、吉井と坂本はどこに行ったの。あの2人だけ、掃除

してないのよ」

「アキ兄とゆうじくんなら、たぶん、ちょっとお話してるよ。これからの事をね」

「これからの事？」

美波は掃除を手伝わない明久と雄二に文句をありそうな表情をする
と数名のクラスメートが美波の後ろで頷くが、深秋は2人には他に
やる事があると言うと美波は首を傾げる。

「それは何なのじゃ？」

「うーん。ぼくが言うよりはゆうじくんの口から聞いた方がよいよ。
その話をするなら、ぼくは役不足だから」

秀吉は深秋の言葉に首を傾げると深秋は自分では役不足だと笑いな
がら言い、

「大丈夫だよ。2人は2人の仕事をしてるから、今のぼく達の仕事
は『いつまでいるかわからない教室』だけでも綺麗にする事
だよ。こんな汚い教室だとみずきちゃん以外にも病気になるっちゃう
かもしれないしね」

「そうね」

「確かにのう」

深秋の言葉に明久と雄二に不満を言っていたクラスメート達は頷き、

「それじゃあ、一気にやっちゃおう」

深秋は高々と手を上げるとクラスメート達はノリが言いようで深秋に続き手を上げる。

第10問（後書き）

どうもです。

明久と雄二が密談している間に深秋はクラスメートを巻き込んでお掃除です。

エプロンは計算なのかなんなのか？（苦笑）

第11問

「あれ？ 教室がキレイになってる」

「おっ。ホントだな」

明久と雄二が話し合いを終えて帰ってくると掃除が行き届いた教室を見て驚きの声をあげる。

「明久、雄二、お主らは何をしておったのじゃ？」

「ん？ ちょっとな。後で全員に話す」

秀吉が2人にいなくなっていた理由を聞くが雄二は苦笑いを浮かべると、

「まったく、みあも後でわかるような事を言っておったのじゃが、ワシは仲間外れにされてるようで寂しいのじゃ」

秀吉は自分が仲間外れにされているように感じたようで寂しそうな表情をする。

「すぐにわかるよ。だから、秀吉も協力してね」

「わかっておるのじゃ。ワシは友の頼みは断らんのじゃ」

明久が秀吉に向かい協力を仰ぐと秀吉は笑顔を見せて、任せると言いたげに自分の胸を叩くがその仕草はひどくかわいい。

「ひでくん、何でそんなにかわいいの」

「み、みあ！？ お主、な、何をするのじゃ！？ な、なんでこんなところに布団があるのじゃ！？」

秀吉の様子を見ていたのか、深秋は秀吉に飛びつく教室にはなぜか1組の布団があり、秀吉は布団の上に押し倒される。

「みんなから、座布団の綿を少しずつ貰って、ボクが仕立てたんだよ。これでいつでも、アキ兄を押し倒せるでしょ」

「ちよつと！？ みあ、止めてよ！！ お願いだから！！ みんなも協力しないで！！」

深秋は笑顔で明久を押し倒す時のために作ったと言うと当然、明久は深秋とクラスメートの行動に声をあげる。

「さつきは確認できなかったから、ひでくん、覚悟してね」

「ま、待つんじゃない？ 確認するまでもないのじゃ。ワシは男じゃ！！ だいたい、みあは女の子なのじゃから、そんなはしたない事をしてはいけないのじゃ！！ 明久、お主もみあを止めるのじゃ！！」

深秋は笑顔で秀吉の身体検査を始めようとする。秀吉は顔を赤らめながら深秋を止めようとするが勢いに乗った彼女が止まるわけもなく、秀吉は明久に助けを求めるが、

「…………ごめん。秀吉、そこに近づくと僕の身が危険だから、無理だよ。それに秀吉の制服がはだけるのは僕も見たい」

「木下君、男の子なのに色っぽいです」

「木下、ウチは負けないわ」

助けを求められた明久は自分の身と欲望を優先し、深秋と秀吉の様子をクラスメート達は色々複雑な思いで見ている。

「……なあ、明久。前から思ってたんだが」

「何、雄二？」

雄二だけは深秋と秀吉の様子に何か思ったようで少し考えると明久を呼ぶ。

「いや。みあのお前や秀吉をいじるのを見ていて思ったんだが、みあは秀吉が好きなんじゃないのか？」

「雄二、何を言ってるんだよ。みあのはもともとの性格だよ。何より、女の子同士何だから、兄として僕はそれを認めるわけには行かないよ」

雄二は恐る恐る明久に深秋は秀吉を好きなんじゃないかと聞くが明久は雄二の考えを否定する。

「ワシは男じゃー!」

「だから、今からそれを確認………あっ!? 嘘、すごいかも」

秀吉は深秋の行動と明久の言葉に声をあげるなか、深秋は秀吉の大

事なところに触れてしまったようで頬を赤く染める。

『嘘だ!!! 木下にはそんなものは付いてない!!!!!!』

「……………ワシは男なのじゃ。どうしても誰も信じてくれんのじゃ。みあはワシが嫌いなのかな」

クラスメート達は深秋の反応に涙を流しながら教室を出て行き、秀吉は深秋に大切なものを奪われた気分のようにさめざめと泣いている。

「……………みあ、お前は何がしたかったんだ？」

「確認かな？ ぼくとしてははつきりさせておいた方が都合が良いから」

雄二は人気の無くなった教室で頭を押さえながら深秋に聞くと深秋は笑顔で答え、

「……………お前は好きな子をいじめる小学生か」

「ん〜、だって、アキ姉やお母さんから、好きな人はいじめなさいって教わったから」

「……………お前の家族はいろいろと大丈夫なのか？」

雄二は自分の考えが確信に変わった事に苦笑いを浮かべた後、大きなため息を吐く。

「？」

しかし、深秋は雄二のため息の意味がわからずに首を傾げる。

第11問（後書き）

どうも、作者です。

深秋は秀吉ルート？（爆笑）

深秋にかかれば秀吉は完全にMです。

さめざめと泣く秀吉に深秋は襲いかかるのか？

秀吉は深秋の気持ちに気づくのか？

全てを察した雄二の運命は？

何より、秀吉と同様に深秋に押し倒される明久は？

どうなるんでしょう？（爆笑）

第12問

「えー、吉井くんは締めと言う話でしたので、坂本君、お願いします」

福原先生が教室に戻ってくると自己紹介が再開され、残りは明久と雄二の2人になる。

「了解」

担任に呼ばれた雄二は立ち上がると当たり前のように教壇の上にかかるこ、

「Fクラス代表の坂本 雄二だ。俺の事は代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ……みあ、お前だけは今まで通りで頼む。ここで話を折るな」

「ええ！？ つまんない」

真面目な話をしようとする深秋の邪魔が入るためか、深秋に釘を指すと雄二はゆっくりと、全員の目を見る。

間の取り方が上手いせいか、伐を抜かした全員の視線はすぐに雄二に向けられるようになった。

皆の様子を確認した後、雄二の視線は教室内の各所に移りだす。

かび臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れた卓袱台

つられたようにクラスメートは雄二の視線を追い、それらの備品を順番に眺めていった。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいがー」

一呼吸おいて、静かに告げる。

「ー不満はないか？」

『大ありじゃあっ!!』

Fクラス生徒魂の叫びを聞きながら、

(……しようこちゃんに送信)

深秋は雄二の晴れ姿を携帯電話で写すと翔子に送る。

「だろう？ 俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱えている」

『そつだ。そつだ!!』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！！ 改善を要求する！！』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？ あまりに差が大きすぎる！！』

雄二の問いかけに堰を切ったかのように次々とあがる不満の声。

「これは代表としての提案だがー」

雄二は自分の演説が上手くいっている事に満載しているのかニヤリと笑うと、

「ーFクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」
Fクラス代表、坂本 雄二は戦争の引き金を引いた。

しかし、Aクラスへの宣戦布告は最下層のFクラスにとっては現実味の乏しい提案にしか思えず、

『勝てるわけがない』

『これ以上、設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんとみあちゃんがいたら何もいらぬ』

当然、そんな悲鳴が教室内のいたるところであがるなか、

「そんな事はない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

雄二の中では完全にAクラス撃破までの道筋が出来上がっているよ
うで自信ありげに宣言をするが、クラスメート達が簡単に信じるわ
けはない。

しかし、雄二は康太、秀吉、瑞希を紹介すると教室内はざわざわと
もしかしたら行けるんじゃないかと言う声が上がりがり始める。

「ゆうじくん、みなみちゃんの数学はBクラス並みだよ」

「ちよつと、みあ。いきなり何を言い出すのよ!？」

「ん？ そうだったな。島田の数学は康太の保健体育には劣るがそ
れでも強力な戦力だ」

深秋は美波も忘れないでと言うと美波は恥ずかしそうに言い、雄二
は頷くと、

「それに吉井明久、吉井深秋の吉井兄妹もいる」

ニヤリと笑いながら、深秋と明久の名前を呼ぶ。

「ちよつと、雄二!？ 何で僕とみあを出すんだよ。僕達はそんな
に成績は良くないよ」

「兄妹で観察処分者だからね。アキ兄とお揃い」

明久は雄二からの呼びかけに声をあげるが深秋は嬉しそうに笑って
いる。

『観察処分者？ それってバカの代名詞じゃなかったか？』

「ち、違うよ。ちよっとお茶目な……」

『吉井が観察処分者だろうが、そんな事はどうでも良い。吉井がみあちゃんとお揃いだと言う事を許すな！……！』

クラスメートは観察処分者と言う肩書きより、明久が深秋と一緒に言う事に殺気立つ。

第13問

「まあ、待て」

『止めるな。坂本、俺達はこのバカを殺さないと気がすまない』

雄二は殺気だつクラスメートを止めるがクラスメート達が止まるわけはない。

「待て。殺すのはいつでもできる。どうせ、自己紹介がつまらなかつたら殺すんだ。殺るなら、恥をかかせてからにするべきだ」

「雄二、貴様！！ 僕を助けるんじゃないのか？」

雄二は自己紹介前に明久を殺すのはもつたいたいと言うと明久は雄二に向かい叫ぶが、

「誰がお前なんか助けるかバカ久。だいたい、観察処分者は試召戦争に必要なコマだが、みあがいるんだ。お前はいらん」

「確かにみあの方が吉井より点数は高いわよね」

雄二は明久をいらぬと言いつ切り、美波は単純に明久より深秋の成績が上だと言う。

「家庭科は学年トップだよ。ぶい」

「後は現代文も得意じゃったのう」

深秋は家庭科には自信があるようでVサインをしようと秀吉は深秋のもう一つの得意教科を上げるとクラスメート達はどよめきの声をあげる。

『それじゃあ、吉井は本当にいららないんじゃないか？』

『役にたたない観察処分者なんて恥でしかないぞ』

『『』なら、俺達がバカと一緒にされる前に消そう』』』

深秋の存在で明久の存在価値も薄れる。

「ちよつと待つてよ！！ 何で僕が」

「大丈夫。アキ兄が動けなくなったら、ボクがアキ兄の世話をするから、もちろん……アキ兄、やっぱり、ボクの事」

明久はクラスメートに消される筋合いはないと言おうとすると深秋は動けなくなつた明久のいろんな世話をするつもりのように頬を赤く染めながら妄想の世界に飛び立とうとする。

「み、みあ！？ お、おかしな事を言わないでよ！？ みんなからの殺気が怖いから」

「もう凄いよ。アキ兄とヒデくんの。2人にそんなに攻められたら、ボク……」

「なぜ、ワシも混じつておるのじゃ!？」

明久は妄想の世界に入りかけている深秋の体を揺するが深秋が戻つ

てくるわけもなく、深秋の妄想の中では秀吉と明久に攻められている。

『みあちゃん、吉井を排除してから、詳しく!!』

「……ヒデくんって鎖骨がキレイだね。男の子なのに、こんなにくびれて」

「み、みあ、や、止めるのじゃ!?!」

クラスメイト達の魂の叫びが深秋に伝わったようで深秋の妄想の相手は秀吉に代わり、秀吉は顔を真っ赤にしながら深秋の体を揺する。

「……ダメだよ。ヒデくん、後ろじゃなくてま……ヒデくん?」

「止まったのじゃ」

秀吉の必死の呼びかけに深秋は正気に戻ると秀吉は疲れたようため息を吐くが、

「……ヒデくん、優しくしてね」

深秋は頬を染めながら、秀吉の顔を上目づかいで見上げる。

「!?!」

『美少女2人の絡み合い!? 眼福じゃあ!!!!』

秀吉は深秋の不意打ちに顔を真っ赤に染めると深秋と秀吉の絡み合いを想像したクラスメイト達は赤い海に沈んで行く。

「……みあちゃん、掃除やり直さないと行けませんね」

「そうだね」

「……みあ、やりすぎよ」

瑞希は苦笑いを浮かべて教室を掃除しなおさないといけないと言つと美波はため息を吐きながら言う。

「だって、ヒデくんが」

「ワ、ワシは何もしておらぬのじゃ！？　ワシは被害者なのじゃ」

深秋は秀吉が悪いと言つと秀吉は全否定するが、

「ひどいよ。この間、ボクの体を舐めまわすように見たのに」

「……木下、あんた、男らしくないわよ」

「待つんじゃない。島田、それはみあが春休みに姉上の部屋に泊まった時にパジャマ姿を見ただけじゃ」

「アキ兄以外の男の子に見せた事ないのに」

「木下くん、ダメですよ。責任はちゃんと取らないと」

「だから、ワシは無実なのじゃ！！」

秀吉が深秋にからかわれ始めたなか、

「……先に進まない」

「雄二、なんかゴメン」

雄二はため息を吐き、明久は珍しく雄二に謝る。

第13問（後書き）

どうも、作者です。

久しぶりの更新ですが深秋の暴走は大丈夫何でしょうか？

深秋と優子は仲が良い。

吉井家には泊まらないけど木下家にはお泊まりあります。

いずれ、秀吉は妄想の中だけではなく、深秋に本当に食べられる気がする。（苦笑）

第14問

「と言う事で俺達はAクラスに試験召喚戦争をしかける」

『ムリムリ、俺達が勝てるわけないだろ。姫路さんやみあちゃんがいるんだ。このままで良いよ』

クラスメート達が復活した後、雄二は試験召喚戦争を始めると言うが、クラスメート達の反応は薄いが、

「みんな、召喚戦争やろうよ。みんながカッコよく戦うところをボクはみたいな。みずきちゃんもそう思うよね？」

「は、はい」

深秋は笑顔で試験召喚戦争をやろうと言うと瑞希に話をふり、瑞希は明久をちらちら見ながら頷くと、

「……………落ちたな」

「……………そうじゃのう」

2人の言葉はFクラス男子生徒に火を点けるには充分すぎる言葉であり、おかしな歓声まであがりはじめ雄二と秀吉はため息を吐く。

「それじゃあ、決まりだな。明久」

「えっ。何、雄二？」

深秋の言葉で盛り上がっているなか、雄二は明久を呼ぶと、

「お待ちかねの自己紹介だ」

「アキ兄 アキ兄」

ニヤリと笑うと深秋は明久コールを始めだし、クラスメート達は深秋のコールが続いている。

「……みあ、どうしてハードルをあげるの？」

「場は温めたよ」

明久は教室内の盛り上がり顔に顔をひきつらせるが深秋は良い笑顔で良いことをしたと思っており、

「それでは吉井君、よろしくお願いします」

担任の福原先生は淡々とした口調で明久に自己紹介をするように言う。

「えーと、吉井 明久です。知つての通り、みあの双子の兄……」

『『『……ちっ』』』

明久は立ち上がり、自分が深秋の兄だと言うと教室内からは隠す気などない舌打ちが聞こえる。

「ちょっと、何で舌打ちをするんだよ!？」

「吉井君、自己紹介を続けてください」

明久はクラスメート達の舌打ちに声をあげるが福原先生は淡々とした口調で自己紹介を続けるように言い、

「……はい。僕の事は『ダーリン』と呼んでください」

明久は決まったと言いたげに言うと、

「ダーリン」

深秋1人が全力で明久を『ダーリン』と呼び、

『『『……ちっ』』』

教室内には再び、舌打ちが響くが、

「あれ？ みんな言わないの？」

深秋が首を傾げると、

『『『ダーリン』』』

教室内から男の野太い声が響く。

「……ごめんなさい。忘れてください」

明久はあまりに不快だったようでそう言い席に座ると、

「みあ、明久の自己紹介はアウトか？ 『はい』か『イエス』で答

えてくれ」

「ちょっと、雄二。それ、どっちも同じ意味だよな？」

「アウトかどうかを『はい』か『イエス』で答えるの？ 難しいね」

雄二は明久の自己紹介は面白くないと言うと明久は雄二の言葉に声をあげるが、当然無視され、深秋は少し考えるような素振りをする
と、

「はエス？」

「……みあ、わけがわからんのじゃ」

なぜか言葉が混じり、秀吉はため息を吐く。

「と言う事で明久を殺す事が決定したんだが、何かないか？」

雄二は明久の自己紹介はアウトだと言い、クラスメイトに明久を処分する方法を聞くと、『火あぶり』や『ヒモなしバンジー』などの案が上がるが、

「決め手にかけるな」

「ちょっと、雄二、おかしいから、完全に僕を殺す気だよな」

雄二はどれも面白くないと言うと明久は当然、声をあげる。

「みあ、何かないか？」

「うーん。そうだね。作る時に味見してないみずきちゃんの『MP
(瑞希ポイント)許可』の手料理を食べるとか？」

『『……ちっ』』

「それは罰ゲームなの？」

雄二は深秋に話をふると深秋は瑞希の料理を明久に食べさせると言う
とクラスメート達は舌打ちをし、美波は意味がわからずに首を傾
げるなか、

「……………」

「あ、明久、お主、いったいどうしたのじゃ？」

明久は何かを思い出したのか、顔を真っ青にして小刻みに震えてお
り、秀吉は心配そうに明久の体を揺する。

第14問（後書き）

どうも、作者です。

深秋の明久処刑方法に震える明久。

明久はすでに瑞希の手料理体験済みです。（爆笑）

深秋がいると明久の不幸さがあがるけどももう少しこのままで様子を見ましょう。（悪笑）

第15問

「なあ、みあ」

「なに？」

雄二は明久の様子に1つの答えを導き出したようだが、瑞希には聞かせてはいけなないと判断したようで深秋を呼ぶと、

「まずいのか？」

小さな声で深秋に聞くが、

「うん。100人食べたら100人が食べ物じゃないって答える」

深秋は笑顔でクラスメート達に聞こえるように答え、

「お、おい。みあ！？」

雄二は慌てて深秋の口をふさぐ。

「事実だよ」

「だからと言っても、言い方があるのじゃ。それにみあはそれを知っておるなら、姫路に料理を教えるはどうじゃ？」

深秋は隠す必要などないと言い切り、秀吉はそれなら、深秋が瑞希に料理を教えないのかと聞くが、

「何を言ってるの。ヒデくん、瑞希ちゃんが料理を覚えて良い訳がないでしょ。」

深秋は秀吉の言葉が不服だと卓袱台を叩く。

「なあ、みあ。姫路が傷ついているんだが」

「良いの。みずきちゃんが料理できないのは事実だし、何より、みずきちゃんが料理を覚えたら萌ポイントが減るでしょ。」

雄二が瑞希が落ち込み始めたのを見て、深秋を止めるが、深秋には深秋の言い分があると言う。

「ねえ。みあ、その萌ポイントって何？」

「みなみちゃん、わからないの？ みなみちゃんの萌ポイントがツンデレで『絶壁』なおむ……………ギブ、ギブ！？ ぼくの関節はそっちに曲がらないよ！？」

美波はため息を吐きながら深秋に聞くと深秋は美波の萌ポイントを例に上げようとしますが、美波の怒りを買って、関節技をかけられる。

「ううう。ひどい目にあつたよ」

「自業自得なのじゃ」

「まったくよ」

美波から解放された深秋は涙目で言うと秀吉と美波はため息を吐く。

「ヒデくん、あの夜のようにボクを抱きしめて」

「ない。そんな事実はないのじゃ!？」

「みあ、話が進まない。早くしないとHRが終わる」

深秋は秀吉に抱きつこうとするが、雄二は深秋の首をつかみ、秀吉が襲われるのを止めて言う。

「ん〜、仕方ないな。ボクが瑞希ちゃんに料理を教えないのは考えてもみてよ。容姿『極上』、性格『天然』、頭も良い。ここまで完璧なんだよ。弱点があった方が萌るでしょ!!！」

『『『確かに!?!?!』』』』

深秋が拳を握り締めて言うところクラスメイト達は深秋の言葉に賛同する。

「……………それで良いのか？」

「もちろんだよ。ゆうじくんだって、あれだけ完璧なしようこちゃん。『天然』なところをかわいって思うでしょ?」

雄二はため息を吐きながら言うが深秋はニヤニヤと笑いながら言う
と、

「……………話がズレたな。明久」

雄二は深秋の話を切り上げようと明久を呼び、

「何？」

「死にたくなかったら、Dクラスに宣戦布告をしてこい」

明久に宣戦布告の使者をしろと言う。

「それをしたら、姫路さんの料理を食べなくて良いの？」

「ああ」

「行く」

明久は瑞希の料理では本当に自分は死ぬと思っているようですぐに頷き、

「それじゃあ、僕はDクラスに行ってくるよ」

全力で教室から逃げ出そうとするが、

「アキ兄、待って」

「ぐえっ!？」

逃げ出そうとする明久の制服を深秋がつかむと明久の首は締まる。

「みあ、お前は何がしたいんだ？」

「だって、宣戦布告の使者だよ。制服なんて失礼だよ。これとかこれとかが……これは違うね」

雄二は深秋の行動にため息を吐くと深秋はカバンから何着か衣装を取り出した時、胸元に『2年F組 坂本雄二』と書かれた白のスクール水着を慌ててカバンに戻す。

「みあ、今のはなんだ!？」

「え? やっぱり、紺が良かった?」

雄二は慌てて声をあげるが深秋は雄二に色が気に入らないかと聞く。

「そう言う問題じゃない!? 何で、俺の名前が!？」

「しょうこちゃんから頼まれたんだよ。ゆうじくんが浮気した時のためにつて」

雄二は翔子に何をされるかわからずに顔を真っ青にする。

第16問

「み、みあ、翔子は何をする気だ？」

「えーと、わかんない。ゆうじくんが浮気しなければ問題ないだろうし、気にしなくても良いんじゃない」

雄二は顔をひきつらせたまま深秋に翔子は何をするつもりか聞くが、深秋は興味がないようでカバンを漁るのを再開すると、

「メイド服、紺のスクール水着、ナース服、某有名女子校の制服の4択になるけど、アキ兄、どれが良いかな？」

明久に着せる服を明久本人に聞くが選択肢はおかしい。

「ちょっと、みあ！？ おかしいから、この選択肢はおかしいから、みんなもそう思うよね？」

「はい。吉井くんは絶対に似合うと思います」

「ウチはこれが良いかな」

『……………吉井は女顔だし、似合うんじゃないか？』

明久は深秋の選択肢に声をあげ、クラスメート達に助けを求めると、明久を助けるものは誰もいない。

「みあ、お願いだから、これは止めてよ！？」

「うーん。アキ兄がそこまで言うなら、ネコ耳メイドとつさ耳のバニーちゃんにしてあげるよ」

「違うから!?!? って言うか、さらに選択肢がおかしくなったから」

明久の必死な様子に深秋は優しさを見せて選択肢を変えるがさらにマニアックな選択肢に変わり、明久は声をあげる。

「ごめんね。アキ兄、アキ兄の大好きな『競泳水着』や『陸上部のユニフォーム』は用意できなかったんだ」

「違うから、僕はそんなマニアックな趣味はないから!?!?」

深秋は明久に向かい申し訳なさそうに言うと明久は自分にそんな趣味はないと全力で否定しようとするが、

「えっ? アキ兄、競泳水着好きだよね?」

「大好……もちろんだよ!?!」

深秋が首を傾げて聞き返すと明久からは本音がただ漏れる。

「……明久、お主、本音が漏れておるぞ」

「!?!? 違う!?!? 違うんだ。秀吉。僕が好きなのは……」

「裸にハイソックス?」

「そう。それ!?!」

秀吉は明久の様子にため息を吐くと明久は全力で否定しようとするが深秋の言葉に全力で頷く。

「それじゃあ、それで良いね」

「違う!？ 違うから!？ 見るのと着るのじゃ違うから!！ ちよつと、なんでみただけじゃなく、姫路さんと島田さんまで僕の制服に手をかけようとするの!？」

深秋は笑顔で明久との距離を縮めるとなぜか深秋の後ろに瑞希と美波がついてきて明久の制服に手をかける。

「……みあのあれは伝染するようじゃのう」

「……秀吉、冷静に言うのは良いんだが、このままだと本当に明久は裸にされるんじゃないのか？」

秀吉は明久が襲われている様子に顔をひきつらせて言うと雄二は明久の行く末を心配する。

「……僕、もうお嫁にいけない」

「……………」

深秋、瑞希、美波から解放された明久はメイド服を着せられており、涙目で言うと、その様子を康太がシャッターが擦り切れるくらいの勢いでカメラに写して行く。

「……………良かったな。明久、死守を出来て」

「……吉井くんの肌。白くてきれいでした」

「あの肌触り。ウチも負けてられないわ」

雄二は明久の様子に顔をひきつらせたまま言う隣で瑞希と美波は明久の体にいろいろと思う事があつたようぶつぶつと自分の世界に入り込んでいる。

「や、止めてよ。ムツツリーニ!? みんなも僕をそんな目で見ないで!？」

「あ、明久、お主はその格好でどこに行くつもりじゃ!？」

「明久、宣戦布告頼んだぞ」

明久は自分に向けられるいろいろな感情が混じった視線に教室からメイド服のまま逃げ出し、秀吉は明久を引き止めようとするが、明久は止まる事はなく、教室を出て行き、

「こうくん、追いかけるよ」

「……………了解」

デジカメを持った深秋は康太を誘い楽しそうに明久を追いかけて教室を出て行き、

「……………明久、あいつは良く今までグレなかつたな」

「……………前に明久が学園が1番安全と言っていた意味がわかつたのじや」

「……ああ。文月みたいな特殊なクラス分けじゃなければ双子が同じクラスになるのはないだろうしな」

雄一と秀吉は明久の事を心配するが、助けようとはしない。

第17問(前書き)

今回はちょっとだけ、深秋が違う表情を見せてくれますがすぐに戻ります。

第17問

「みあ、本当に行くの？」

「宣戦布告の使者をやらないとアキ兄、ミンチだよ」

「……わかったよ。行くよ」

明久と深秋は雄二から言われた宣戦をするためにDクラスの教室に向かい2人で並んで歩く。

「ねえ。みあ」

「何？」

「宣戦布告の使者は僕1人で良いから、みあは教室に戻って、下位からの宣戦布告だしさ」

明久は下位クラスからの宣戦布告の使者は危険だから、兄らしく深秋に教室に戻るよう言うが、

「いや。ボクはアキ兄を守るために一緒に行くの」

「ダメだよ。僕は試召戦争を雄二に持ちかけたから、覚悟はできてるから、みあは……」

深秋は明久の言葉に首を振ると明久は深秋に言い聞かせようとするが、深秋は指で明久の口を塞ぎ、

「覚悟なら、ボクだって出来てるよ。ずっと前からね。アキ兄がゆうじくんに試召戦争を持ちかけた理由もアキ兄のみずきちゃんへの想いも知ってるから」

今までの深秋とは違い優しい笑みを浮かべて言う。

「み、みあ？」

「アキ兄がここまで真剣になってるのはみずきちゃんの体調が心配だから、ボクも一緒だよ。みずきちゃんの体は心配。それにね。誰かのためにムリをするアキ兄が1番心配。アキ兄のみずきちゃんもボクにとって何より大切だから」

明久はあまり見る事のない深秋の表情に驚くが、深秋は自分の大切な2人のためなら頑張れると言う。

「みあ？」

「だから、ボクをもっと頼って。ボクだっていつまでもアキ兄の後ろを追いかけていた子供じゃないんだから」

「うん。みあ、一緒にきて」

明久は深秋の言葉に頷くと、深秋の手を握り、

「……アキ兄」

「何？ 不安？」

深秋は明久の手を握り返すと深秋も不安なようで手は少しだけ震え

ており、明久は優しげな声で聞く。

「アキ兄と一緒にだから、怖くないよ。あのね。ボクはどんな事をしてもアキ兄の味方だからね」

「そう言うのなら、こういうのは勘弁して欲しいかな」

深秋の言葉に明久は照れ隠しなのが苦笑いを浮かべる。

「それは罰だよ。いつまでも自分の気持ちとみずきちゃんのお気持ちに気づかないふりをしてるアキ兄への罰だから」

「……みあ」

「……アキ兄は自分で思ってるより、ずっと魅力的な男の子だよ。だから、自信を持って」

「……もう少しだけ時間があるんだよ」

深秋の言いたい事は明久もわかっているが、明久はまだ時間が欲しいと言っ。

「なら、もう少しだけ、ボクのお罰も続くんです」

「お手柔らかに頼むよ……さてと行くところか？」

「うん」

明久と深秋はDクラスの教室の前に到着すると、

「失礼します」

2人で教室のドアを開ける。

「えーと、吉井さんに……」

「げんじくん、こちらはボクのお兄ちゃんの吉井明久です」

「は、はあ。平賀源二です。妹さんとは去年からお世話になってます」

「えーと、こんな格好でごめんなさい。みあの兄です」

2人が教室に入ると深秋の知り合いの平賀源二が2人に気づいて近寄ってくる。深秋は明久を源二に紹介し、2人は頭を下げている。

「それで、2人はどうしたんだい？ お兄さんに至っては吉井さんの趣味に巻き込まれたままで」

「えーと、この格好で言う事じゃないんだけど、僕達FクラスはDクラスに試験召喚戦争を仕掛ける。開戦は今日の午後から」

明久の宣戦布告にDクラスは殺気づくが、

『……いや、さすがにあんな哀れなヤツはほこれないだろ』

『そうだな』

メイド服を着せられている明久には同情の声が向けられ、深秋と明久に襲いかかってくる生徒はいないように見えたが、

「……吉井深秋。良くも美春の前に出てくる事ができましたね！」

「はるちゃん」

1人の女子生徒が深秋に敵意を込めた視線を向けるが深秋は女子生徒の視線を気にする事なく、彼女に抱きつく。

第17問（後書き）

どうも、作者です。

いつもと違い、明久を心配する深秋。どちらが本当の彼女でしょうか？

そして、深秋とすでに知り合いな『平賀源二』。

まさかの深秋×源二ルートはあるのか？

そして、深秋は美春の天敵？

何より、あの暴走娘の登場は？

どうなるでしょう？（悪笑）

第18問

「放れなさい!?! 美春に抱きついて良いのはお姉さまだけですわ!?!」

「うーん。はるちゃん、冷たい事を言わないでよ。ボクははるちゃんに似合う服を作ったんだから アキ兄、ぼくのカバンから某魔法少女の服を取ってきて」

美春となのる少女は深秋に抱きつかれてジタバタとしているが、深秋は明久に教室まで戻ってカバンから服を取ってきて欲しいと言う。

「えーと、あの」

「彼女は清水美春。吉井さんとは去年からの友人だよ」

「えーと、みあがいつもお世話になってます」

明久は目の前で行われているやりとりはどうして良いかわからないように苦笑いを浮かべていると源二が明久に美春を紹介し、明久は頭をさげると、

「違いますわ!?! 美春はこんな変態娘と友達なわけありませんわ!?!」

「ううう。はるちゃん、ひどいよ」

美春は深秋と友人だと言う事を全力で否定し、深秋は泣きそうな顔になる。

「うー!? そ、そんな顔をしてもだまされせんわ」

「……彼女、良い人だね」

「ああ。たまに変なスイッチが入る事があるみたいだけど、女の子からは慕われてるみたいだよ」

深秋に遊ばれている美春を見て、明久は苦笑いを浮かべていると源二は明久に美春の事を話し、2人のなかで緩い空気が漂った時、

「みきちゃん、みきちゃん、手伝って。はるちゃんにはぼくの新作を着てもらおうの」

「だから、そんなものは着ないわよ!!」

深秋はDクラスに美春と源二以外にも友人を見つけたようでヘルプを求める。

「……みあ、そろそろ。僕は帰らないと」

「た、助かったの?」

明久は美春の裸には興味があるが、兄として深秋を美春から引き離すと美春は安心したのか腰を落とす。

「アキ兄、邪魔しないで、はるちゃんにはるちゃんにはぼくの新作を着て貰うの。『魔女っこ』なの。ツインテールなの」

「……みあ、そんな理由で」

明久の腕のなかでジタバタしながら深秋は美春にコスプレさせたい
と言つと明久は呆れ顔でため息を吐くが、

「アキ兄、わかつてない。この年でツインテール何だよ。狙ってる
としか思えないでしょ!!」

「……何も狙つてないわよ」

深秋は不服だと言いたげに彼女の考えを言つが美春は深秋から距離
を取る。

「えーと、清水さん、みあが迷惑かけたみたいでごめん」

「……こ、こちらこそ。助けていただいてす!？」

「ツンデレはるちゃんかわいい」

明久はひとまず、美春に謝り、深秋を引きずりながら教室を出て行
こうとするが、深秋は明久の手から脱出して美春に再度、抱きつく。

「……吉井君、君も大変だね」

「……うん。でも今は僕より、清水さんの方が大変じゃないかな」

深秋の様子に明久と源二は苦笑いを浮かべていると、

「みあちゃん!!」

「ふえ!?!」

先ほど、深秋に『みきちちゃん』と呼ばれていた女子生徒が深秋を呼び、深秋は驚きの声を上げる。

「みあちゃんのお兄さんですか。私、みあちゃんの友人の玉野美紀です」

「あ、はい。みあがいつもお世話になってます」

美紀は深秋が驚いている隣をすり抜けると明久の前まで移動し、明久に自己紹介をすると明久は頭を下げる。

「みきちちゃん、手伝って欲しいのははるちゃんのお着替え」

「お兄さ……お姉さん。メイド服じゃなくてこの『巫女服』を着て見ませんか？」

深秋は美紀に手伝ってと呼ぶが美紀は目を輝かせてどこからか巫女服を取り出し、明久に着替えるように言い、

「着ないから！？　って、君、いきなり何を言ってるの僕にそんな趣味ないから！？　それに僕は男だから！？　みあの兄だから！？」

明久は美紀の提案を拒絶するが、

「お姉さんにはきつと似合うはずです。だから、アキちゃん、この巫女服に着替えて！！」

「いやだあ！？」

「待つて。アキちゃん　巫女服が気に入らないなら、これとかこれとか　アキちゃんになら似合うから」

美紀の目はすでにおかしな光を灯しており、明久のメイド服に手をかけ、明久は美紀から感じる異常さに全力で教室から逃げ出すと美紀は巫女服以外にも女物の服を持って明久を追いかけて行く。

「……はるちゃん、ぼく、少し反省するね」

「……そうしてください」

深秋は明久と美紀の姿を自分と美春に重ね合わせたようで美春に謝る。

第18問（後書き）

どうも、作者です。

玉野さん暴走（爆笑）

彼女はいつも全開です。その姿を見て少しだけ反省する深秋。
まあ、反省は今だけだと思います。（苦笑）

深秋と源二が知り合いと言う事でまさかの源二ルートの可能性。

作者はまだ決めてません。

候補本命は秀吉。対抗馬は久保くんを考えていましたが、源二の追
い上げ。

どうしよう？（爆笑）

第19問

「たっだいま」

「おつ。みあ、帰ってきたか……明久はどうした？」

深秋がFクラスの教室に戻ると明久はまだ美紀に追いかけていられるようで教室に戻ってきていない。

「アキ兄、まだ、みきちやんに追いかけてるんだ」

「追いかけられる？ みあ、お主は無事なのか？」

深秋は苦笑いを浮かべると秀吉は下位からの宣戦布告の使者になった深秋と明久の体を心配したようで深秋に声をかける。

「ヒデくん、ボクを心配してくれたんだね」

「おわ！？ みあ、いきなり、何をするのじゃ！？」

秀吉が深秋を心配する様子に深秋は嬉しそうな表情をして秀吉に抱きつくと秀吉は畳にきれいに押し倒される。

「ボクの事をそこまで心配してくれるなんて、やっぱり、あの夜の事は嘘じゃなかったんだね」

「み、みあ！？ お主は何を言うてるのじゃ！？ ない！？ そんな事実はないのじゃ！？」

深秋は秀吉に抱きつきながら、彼のシャツのボタンに手をかけはじめ、秀吉は顔を真っ赤にして深秋の言葉を全力で否定しているが、

「そこまで、言うなら、あの夜と同じ事、ここでしょ」「

深秋が止まるわけがない。

「止めるのじゃ！？ 人前でして良いことではないのじゃ！？」

「ヒデくん、ボクが相手じゃ、いや？」

「そ、そんな事はないのじゃ！？ しかし、場所や順序などいろいろと問題があるのじゃ！？」

秀吉は深秋が自分の上に馬乗りになっているため、顔を真っ赤にして深秋に思いとどまるように説得しようとするが、深秋の潤んだ瞳を見てさらに真っ赤に染まって行く。

「……みあ、あまり、秀吉をいじめてやるな」

「いじめ？ ゆうじくん、人聞きの悪い事を言わないですよ。ボクはヒデくんの事を……ぼっ」

「……」

雄二はこのままでは深秋が秀吉の大事なものを奪ってしまおうと思い、深秋を止めると深秋は恥ずかしいのか顔を赤くして秀吉から視線を逸らすと秀吉はあまり見ない深秋の反応に顔から湯気が上がり始め、

「……みあ、やりすぎだ」

「うん。ごめんね。でも、ボクもしょうこちゃんと一緒に好きな人は押し倒したくなるんだよ」

雄二はため息を吐き、深秋はさすがにやりすぎたと反省する。

「あのな。男にだって意地があるんだぞ。それこそ、好きな女に押し倒されるってのはいろいろとな」

「それはゆうじくんはしょうこちゃんからじゃなく、自分から行きたいって意味で良いよね」

雄二はうかつにもため息混じりで本音を漏らし、深秋は良いことを聞いたと言った表情でニヤニヤと笑う。

「……言うなよ」

「まあ、ボクも女の子だから、好きな人からは告白してもらいたいし、今は言わないよ　ゆうじくんは考えがあるんだろうし」

雄二は失敗したと言いたげに深秋に言うと深秋は雄二の事を信じる笑顔で言うが、

「……だけど、しょうこちゃんを泣かせるような事したら、本気でぶっ飛ばすから」

雄二のネクタイをつかみ、彼の顔を自分に近づけると今までの深秋とは違う真面目な声で言う。

「……わかってるよ。あいつの泣き顔は2度とごめんだ」

「なら、よし。頑張つてね。ゆうじくん」

雄二は深秋にはかなわないと思つているところもあるため、気まずそうに頭を掻く。

「……つたく、厄介だな」

「ボクもアキ兄と本質は似てるから、大切な友達は応援したいんだよ。だから、ゆうじくんとしようこちゃんを応援するの」

雄二はため息を吐きながら言うと、深秋は笑顔で言うが、

「明久は何も考えてないだろ」

「まあね。でも、ボクは考えずにあんな行動をするアキ兄を尊敬してるんだよ。お嫁にいけなくなるくらいに」

深秋は明久を好きだと笑顔で言い、

「……一線は越えるなよ」

雄二は深秋の笑顔に顔をひきつらせた時、

「……ただいま」

巫女服に着替えさせられた明久が教室に戻ってくる。

第20問

「ア、アキ兄」

「ちょっと、みあ!？」

深秋は明久の巫女服姿に目を輝かせて抱きつくと明久は深秋の行動に驚きの声をあげる。

「じじくん」

「……………任せろ」

「ムツツリーニ!? 止めて!? こんな僕を見ないで!? みあも止めて!？」

康太は深秋と明久の様子に写真を撮り、明久はこんな恥ずかしい姿を見て欲しくないと叫ぶが、

「……………ゆうじくん、どうしよう? 巫女服だよ。神職補佐だよ。このままじゃ、ボク、アキ兄を汚せないよ」

「……………まずは実の兄貴だと言う事を思い出せ」

深秋はショックだと言いたげに明久から巫女服を脱がせる手を止めて言うと雄二はため息を吐くが、

「そつだよね。前のはマズいけど後ろのあ……………」

「みあ、女の子何だから、そんな事を言ったらだめ!? それに僕は男だから!？」

深秋の行き着く答えは外れており、明久は深秋の口を手で塞ぐ。

「大丈夫だよ。ゆうちゃんの持つてる薄い本じゃ、アキ兄もヒデくんも……ぼっ」

「何!? 何!? 秀吉のお姉さんは何を持つてるの!? 止めて!?! みんなも変な目で僕を見ないで!?!」

「みあ、何度も言わせるでない。ワシは男なのじゃ!?!」

深秋は明久と秀吉の顔を見た後、頬を赤く染めると明久と秀吉は何か背筋に冷たいものが伝う。

「大丈夫だよ。2人が受けなのは知ってるから、だから、ボクは2人のために攻めになるって決意したんだよ」

「……みあ、それ以上は止める。召喚戦争前にうちのクラスが全滅する」

深秋の言葉にクラスメートの多くが血の海に沈みかけているため、雄二はため息を吐きながら、深秋を止めると、

「明久、みあ、宣戦布告はしてきたんだろうな」

「うん。今日の午後からって」

雄二の質問に明久は真面目な顔をして答える。

「そうか。それなら、打ち合わせをしたいが……生きてるヤツは屋上に集まってくれ。明久、秀吉、康太には話をしたいから連れて行くの手伝ってくれ」

雄二は試召戦争の打ち合わせをしようとするが、教室は先ほどの深秋、明久、秀吉の絡みを見て鼻血を吹き出したクラスメート達の屍が積み重なっているため、雄二は屋上に移動しようと言う。

「うん。ムツツリー二、起きて」

「……ねえ。吉井、あんた、その格好で屋上まで行く気？」

明久は康太の体を揺すっている様子を見て、美波が明久に聞くと、

「そつだ！？ みあ、僕の制服は？」

「アキ兄、今なら、執事服、柔道着、スーツの3択だけど」

明久は深秋に制服を返すように言うが、深秋は明久の制服を自分のカバンの奥に詰め込み、代わりの服を取り出す。

「どうした？ みあにしては選択肢が優しいな」

「……ボクも少し反省したんだよ。コスプレは楽しくないといけな
いから」

「……何があつたかわからないがそうしてやってくれ」

雄二は深秋の出した服に疑問を持つと深秋は先ほどの美紀の姿が衝

撃的だったようで遠い目をして言うと雄二は苦笑いを浮かべる。

「みあ、そう思うなら、制服を返して」

「それはそれ……そうだよ。この選択肢じゃ、アキ兄の魅力は出せないよね。アキ兄の貧相な胸板じゃ、柔道着は似合わないし、アキ兄の……」

「みあ、何で、僕の顔を見てさめざめと声を殺して泣くの!？」

明久は深秋に制服を返すように言うが深秋は明久の顔を見てさめざめと泣き始め、

「みあ、明久がブサイクですまん」

「って、雄二!？」

なぜか、雄二が深秋に謝り、明久は声を上げて文句を言うが、

「うん。そこは諦めてるから」

「って、みあまで!？」

深秋は雄二の言う通りだと言い、明久は深秋にブサイクと言われたため、涙を流し、

「……みあ、お主は明久が好きなんではないのか？」

「だって、アキ兄もヒデくんもボクが予想していた以上に男物のコスプレが似合わないんだよ。女物はあんなに似合うのに」

秀吉はため息を吐くが深秋は悔し涙を流しながら言い、

「ワシは男じゃ!？」

秀吉は深秋の言葉に声をあげる。

第21問

「さてと、屋上に集まってもらったわけだが」

「ねえ。雄二、どうして、Dクラスに仕掛けるの。普通ならEクラスからじゃないの」

屋上に集まり、雄二が話を始めようとする、明久が雄二に質問する。

「決まってるだろ。Eクラスは相手じゃないからだ。見てみる。ここにいるメンバーを」

「えーと、美少女が3人、バカが2人にムツツリが1人とブラコンが1人いるね」

雄二が明久に集まったメンバーを見ると言い、明久は全員の顔を見直し言つと、

「誰が美少女だと!?!」

「どうして、雄二が美少女に反応するの!?!」

「……………(ポツ)」

「ムツツリーニまで!?! どうしよう!?! 僕だけじゃツッコミ切れないよ!?!」

美少女に雄二と康太が反応して明久は声を上げる。

「アキ兄、美少女は3人じゃないよ」

「みあ！？ ダメだよ。僕はそんなものは着ないよ!？」

「ワシも着ないのじゃ!？」

「「えっ!?!」」

明久が声をあげている隣で深秋は楽しそうに女子の制服を見せると明久と秀吉は深秋から全力で逃げようとする、瑞希と美波は明久が女装をしないと云う言葉に驚きの声をあげる。

「ちよつと、姫路さんも島田さんもなんで驚くの!？ 当たり前でしょ。僕は男なんだから!! みあもわかったね」

「うん。わかった」

「ホント?」

明久は絶対に嫌だと言うと深秋はすぐに頷き、明久は安心したようにため息を吐く。

「美少女に反応したこうくとゆうじくんに着てもらえば良いんだよね」

「何!?!」

「……………(ぶんぶん)」

深秋はニヤリと笑うと雄二と康太に言い、自分にくると思っていなかった2人は顔をひきつらせる。

「ゆうじくんは肩幅が広いから、胸に詰め物をして　こうくんはあんまり身長もないし、そのままでもいけると思うんだよね」

「みあ、待て!?　考え直せ!!　って、明久、てめえ、裏切ったな!!」

「裏切るも何も僕はみあの味方だよ」

深秋は女子の制服を手に雄二との距離を縮めて行くと雄二は逃げようとするが、明久は雄二にも女装をさせたいようで雄二を押さえつける。

「康太、助ける!!」

「……………避難」

雄二は自分と同じ立場の康太に助けを求めるが、康太は自分の身を優先して逃げ出そうとするが、

「ゆうくん」

「ム、ムツツリーニ!?　みあ、お主は何をするのじゃ、はしたないのじゃ!」

深秋はスカートをめくり、太ももを見せると康太は血の海に沈み、秀吉は康太を抱きかかえながら深秋に言う。

「ふふふ。これでごうくんは逃げられない　さあ、ゆうじくん、おきがえタイムだよ」

「やめ、やめろ!？」

深秋が雄二の制服のボタンに手をかけ、ゆうじが叫んだ時、

「……みあ、雄二にはこれ」

胸に『坂本雄二』とかかれた白のスクール水着を手にした黒髪の美少女が深秋を止める。

「誰？」

「しよ、翔子、お前が何でここに!？」

明久はその美少女の事を知らないため、首を傾げると雄二は面識があるようで顔をひきつらせる。

「アキ兄、こちらはボクの友達の『霧島翔子』ちゃん。しようちゃんはゆうじくんの婚約者さんで、来年のゆうじくんの誕生日に籍を入れるんだよ」

「……はじめまして、うちの雄二がいつもお世話になってます」

深秋は翔子を明久達に紹介すると翔子は深々と頭を下げると明久は驚きのあまり、雄二から手を離す。

「そんな事実あるか!？」

「……雄二、うるさい」

雄二は深秋の言葉を否定しようとするが、翔子は懐からスタンガンを取り出し、雄二に押し当てる。

「えーと？ みあ、霧島さんって？」

「りょくさいけんぼなゆうじくんの恋人」

明久は雄二が黒こげになり、倒れたのを見て顔をひきつらせるが深秋は笑顔で言い切る。

第21問（後書き）

どうも、作者です。

まずはAクラス戦の前の翔子の登場に謝罪を出したかったんです。
深秋がいれば翔子と雄二をいじれるから（苦笑）

まさかの翔子の登場にどうなる雄二？（爆笑）

つくづく、原作沿いがかけません。（苦笑）

翔子登場への非難、中傷は優しくお願いします。

第22問

「坂本くんの彼女さんですか」

「へえ、意外」

瑞希と美波は深秋の紹介にスタンガンで黒こげになっている雄二の事など見えていないのか、翔子と挨拶をしている。

「み、みあ、雄二は大丈夫なのかう？」

「大丈夫じゃない？ ゆうじくんは頑丈だし」

秀吉は顔をひきつらせて深秋に聞くが深秋は笑顔で言い切ると雄二の制服を脱がして行く。

「うん。アキ兄もゆうじくんくらい筋肉があれば男物のコスプレも似合うのになあ」

「み、みあ。どうしてそんなにマイペースなの？」

深秋は雄二の肉体を見て言うと明久は顔をひきつらせて言うが、

「しょうごちゃん。これも変える？」

「……もちろん」

深秋は翔子にパンツも変えるかと聞き、翔子は雄二のパンツに手を伸ばそうとし、

「それは止めてあげて!!」

明久は全力で2人を止める。

「ごうくんがダウンしてるから、構図とかどうしようかな?」

「記念撮影はするんだ?」

「……みあ、雄二と2人の写真撮ってもらっても良い?」

「……なんと言うか、霧島は本当に雄二の彼女なのかう」

雄二と康太の女装を完成させた深秋は2人の痴態をデジカメに写しており、翔子と雄二の様子に秀吉はため息を吐く。

「うん。アキ兄とヒデくんにも負けなくらいの作品になった」

「ちよつと、みあ、まさか、僕の写真も残してるの!?!」

「ちよつと待つんじゃない。ワシはみあに女装させられた事はないのじや!?!」

雄二と康太の写真を撮り、満足そうな顔をする深秋に明久と秀吉は深秋の言葉に声をあげるが、

「え!?!」

深秋は2人の驚いている意味がわからないと言う表情をする。

「……さっきの吉井くんの巫女服もメイド服もかわいかったです」

「ホントよね」

「ちょっと、姫路さんも島田さんも何を思い出してるの!? 忘れて!? あれは僕じゃないよ!」

瑞希と美波は先ほどの明久の女装姿を思い出して顔を赤らめると明久は声をあげるが、

「あれはアキちゃんだよ。みきちゃんも言ってたし」

「……吉井くん、みきちゃんって誰ですか?」

「吉井、教えてくれるかしら」

深秋の口から出た名前に瑞希と美波は背後に黒いものはみ出す。

「えっ!? ちょっと、姫路さんも島田さんも何を言ってるの!」

「み、みあ、明久を助けなくて良いのか?」

明久が2人に捕まっている様子に秀吉は顔をひきつらせるが、

「良いんじゃない。それより、Dクラス戦、どうしよっか?」

「……お主がいつてよい言葉ではないと思うのじゃが」

深秋は混沌とした様子に首を傾げると秀吉はため息を吐く。

「まあ、ゆうじくんが目を覚ますまで……しょうこちゃん、ストツプ!? まだ、ボク達はゆうじくんが必要だから、放課後まで待つて!」

「……どうして?」

深秋は雄二と翔子に視線を移すと翔子が怪しげな薬を雄二に飲ませている、雄二の目は虚ろになり、深秋のカバンからタキシードを取り出し着替え始めようとし、翔子も深秋のカバンからウェディングドレスを取り出しており、

「……みあのカバンの中はどうなっておるのかのう」

秀吉は出てくるはずのないサイズの服が入っている深秋のカバンに顔をひきつらせる。

「だって、いつも言ってるでしょ。2人の結婚式の衣装はこんな片手間で作ったのじゃなくて、2人の意見も取り入れて最高のものを作りたいって、こんなのじゃ、ダメなの」

「……そうだった。みあ、ごめんなさい」

深秋が翔子を止めた理由はズレているが翔子もズレているようで深秋に謝り、

「……根本的におかしいのじゃ」

秀吉はため息を吐く。

第22問（後書き）

どうも、作者です。

進まない作戦会議。このままだとDクラスに勝てるかが不安です。
（爆笑）

負けさせるのもありかな？（苦笑）

第23問

「……始まったけど、どうしようか？」

開戦時間になり、Fクラス対Dクラスの試召戦争の火蓋は切つて落とされたのだが、雄二は翔子から飲まされた怪しい薬の影響でぐったりしており、指示が出せる状況ではなく、明久がクラスメートに聞くが良い意見は上がってこない。

「はい。ひとまず、みずきちゃんは振り分け試験が0点扱いだから、回復試験を受けてきたら良いと思います」

「そ、そうですね」

深秋の言葉に瑞希は慌てて教室を出て行くと、

「どうするのじゃ？ このままでは一気に本陣まで攻められるのじゃ」

秀吉は心配そうな表情をする。

「えーと、どうしたら良いかな？」

「吉井、何か良い手はないの？」

明久は乱暴に頭を掻きながら言うと美波は明久に向かい聞くが良い考えなど簡単に出てくるはずもない。

「アキ兄、前線はボクが指揮をとってくるから、本陣は任せるよ」

「みあ、ちょっと待って。今、行っても補習室に行くだけだよ」

「ボクを心配してくれるんだね」

「みあ、抱きつかないで!？」

深秋が前線に出ると言うと明久は深秋を引き止め、深秋は明久に嬉しそうに抱きついた後、

「アキ兄、難しく考えないで、これは戦略ゲームだよ。味方の能力から、最善の手を導けば勝てるよ」

「そっか。ゲームか」

明久の不安を取り除くような優しい声で言うと明久は深秋の言葉に冷静になったのか苦笑いを浮かべると、

「みあ、教科は何を持って行くつもり？」

「Dクラスの代表はげんじくんだから、家庭科と現代文じゃ勝負させて貰えないから、英語R。なんとかCくらいはあると思う」

「わかった。英語Rが得意な人はみあに付いて行って、誰か捨てゴマになって貰う事になるかも知れないけど、現代文か家庭科の先生を引きずってきて」

「今のフィールドは数学でしょ。うちが行くわ」

深秋の不足している部分を補うために明久はクラスメートに指示を

出して行く。

「明久、お主はどうするのじゃ？」

「ボクは美波のフォローをするよ。秀吉、みあをお願い」

「わかったのじゃ」

明久は秀吉に指示を出すと美波を追いかけようとするが、

「足手まといよ。吉井はここを守って」

「うん。ゆうじくんがあの状態なら、アキ兄が指示を出して」

「でも……」

深秋と美波に雄二の代わりに指揮を取るように言われた明久は不安そうな表情をする。

「アキ兄」

「……みあ、わかってるよ。僕らの作戦は姫路さんが回復試験を終わらせるまで雄二を死守する事。姫路さんが戻ってきたら、僕達の勝利だ！！各自、1分1秒でも生き残って時間を稼ぐんだ。DクラスはFクラスを舐めているから、多対一に持ち込んでギリギリまで戦う事。試召戦争後、危ないと思ったら、周りとの点数を確認しながら、回復試験を受けて」

深秋は不安そうな表情で明久に声をかけると明久は顔を上げると今回の作戦は時間稼ぎだと言う。

「そんな消極的な作戦で良いのかのう？」

「ベストは姫路さんを待たずに深秋の現代文か家庭科でDクラス代表の平賀君を討ち取る事だよ。この先の事を考えると姫路さんは見せたくない」

秀吉の疑問に明久は苦笑いを浮かべて答えると、

「みんな、作戦は良いね。行くよ」

深秋のかけ声にクラスメートは続き、出陣していく。

「秀吉、みあの事は任せるよ。みあは無理するから」

「うむ。任せるのじゃ」

明久は深秋の事を秀吉に任せると、

「残りは僕に付いてきて、みあ達から少し離れて待機。補充や援護に働いて貰うよ」

明久は残りのメンバーの点数を確認するとぶつぶつと戦略を立て始める。

第23問（後書き）

どうも、作者です。

まさかの明久軍師化計画（大爆笑）

悪知恵の働く明久にはわりと合っていると思うのですが誰もやらな
いため、やろうと計画を立ていました。
そのための最強であり最弱の矛の深秋がいます。

明久がやろうとしている事をどこかで感じ取り動くかはやっぱり双
子かな？つてもありましたけど。

明久は深秋をフォローし、深秋は明久をフォローする。
どちらからの一方的なフォローじゃない対等な2人。まあ、深秋は明
久に甘えますけど。（苦笑）

第24問

「Fクラス、吉井深秋が英語R勝負を挑みます。試験召喚^{サモン}」

深秋は前線にたどり着くと自分の召喚獣を呼び出すと、

「ヒデくん、みんな、ボクが削るから、後をお願いね」

「わかったのじゃ」

深秋の召喚獣は弓を構えており、少し離れた位置から、Dクラスの生徒の召喚獣を撃ち抜き、それをFクラスのクラスメイト達が集団で襲い掛かって行く。

『吉井深秋が出てきたぞ。代表の言う通り、理数系で攻めるんだ。彼女の理数系は1ケタだ』

「……やっぱり、弱点はバレてるよね」

深秋の登場にDクラスの生徒から、深秋の得意科目で勝負をするなと言う指示が飛び交い、深秋は苦笑いを浮かべると召喚フィールドは数学に戻される。

「ボクは確かに理数系は苦手だけど、でもね。数学は毎日、家計簿をつけてるから、そこまでひどくないんだよ」

『みあちゃん、嫁にきてください!!』

数学に変えられたフィールドで深秋の点数は下がるが、それでもD

クラスより、低いがそれでもFクラスの中堅くらいである。

『なんだと!?!』

『驚くな。点数は下がったんだ。押し切るぞ』

「行くよ」

予想より、深秋の点数が下がらなかったため、Dクラスの生徒には動揺が見えるが直ぐに深秋を標的に攻撃を仕掛けてくるが、

「ごめんね。でも、ボクも簡単に負けるわけにはいかないんだよ」

深秋は観察処分者の利点である召喚獣の操作技能で攻撃を交わしながら、ちまちまと相手から点数を削って行く。

『ちっ、なんだ？ 点数的にはゼロなのに当たらないぞ』

『あんな攻撃を喰らっても痛くない。捕まえて仕留めるぞ』

深秋へ攻撃が当たらないためか、Dクラスの男子生徒の召喚獣が深秋の召喚獣を四方から囲まれた時、

「助けて、犯される」

『みあちゃんに手を出すとは良い度胸だ』

『殺す、ころす。コロす。コロす』

深秋はわざとらしくとんでもない事を言うと、Fクラスの男子生徒

達は怪しい覆面を被り出し、深秋の周りを囲んでいた召喚獣を集団で痛めつけ、

「戦死者は補習!!!!!!」

『いやだあ!! 鬼の補習はいやだあ!!』

深秋を囲んでいた男子生徒は西村教諭に補習室に連行されて行く。

「なんとか、押し返したのじゃ」

「うん……」

Dクラスを押し返し、秀吉は一息吐くと深秋は彼女の持てる力を全力で使っていたためか、疲弊しているようで肩で息をしている。

「みあ、お主、大丈夫か？」

「うん……大丈夫。少し、休めばもとに戻るから」

「しかし、大丈夫そうには見えんのじゃ」

秀吉は心配そうに深秋の顔を覗き込むと、

「ヒデくん」

「み、みあ!? ……大丈夫なのじゃな？」

「うん」

深秋は秀吉に抱きつき、秀吉は驚きの声を上げるが彼女の体が小さく震えているため、心配そうに声をかけると深秋は頷き、

「ちょっと、怖いだけ。ボクとアキ兄は感覚のフィードバックがあるから、攻撃が当たったら、きつと痛いだろうから」

秀吉に心配をかけないように笑顔を見せる。

「……みあ、心配しなくても良いのじゃ。ワシがお主の盾になるのじゃ。安心して戦うのじゃ」

秀吉は優しい声で深秋に言うと彼女の頭を優しく撫で、

「みあ、援護を頼むのじゃ」

前線に出て行き、

「ヒデくん、嬉しいけど、それって死にフラグ」

深秋は秀吉の言葉に苦笑いを浮かべると秀吉の後を追いかけて行く。

第24問（後書き）

どうも、作者です。

割と強い深秋。なぜ、Fクラス？と思う方もいると思うので

Fクラスの総合点は合計で1000点以下として、

家庭科 450点くらい。

現代文 200点くらい。

英語R 150点くらい。

古典、数学 80点くらい。

後は1桁前半。

って感じです。

基本的には文系ですが、深秋、曰わく、数学は家計簿をつけてるため、ちよつと良いです。（爆笑）

家計簿じゃ、数学は上がらないって。（苦笑）

こんな感じですね。

Fクラス次席くらいで考えていてください。

第25問

(……やっぱり、僕には無理だったんだ)

明久は不足した戦力を補強するために後方部隊に指示を出しているが、深秋と秀吉が指揮をしていない部隊の消費は激しく、戦死者は出ていないもののでに予備戦力はそこをつきかけている。

(……ダメだ。みあが僕を信じて頑張ってくれてるんだ。兄の僕が弱気になっちゃダメだ)

明久は前線で一生懸命に指示を出している深秋の姿を思い浮かべ、不安を振り払うかのように首を振り、

「……島田さんや先生を呼びに行った人は帰ってきそうにない。回復試験を受けに行った人に姫路さんへの指示は出してある」

自分の周りのクラスメイトに自分の不安を振り払うように声をかけると、

「すでに前線はボロボロの状態だ。だけど、みあや秀吉の善戦でDクラスも疲弊している。どうせ、押し切られたら、雄二は直ぐにやられる。どうせ、負けるなら、前に進んでみあや秀吉、仲間とともに戦おう」

明久は叫ぶように声を張り上げると先ほどまでの明久の指示に明久はクラスメイトの信頼を得ているようで誰一人欠ける事なく、明久とともに歩き出す。

「みあ、大丈夫か？」

「……さすがに無理かも」

前線では深秋を守るように布陣し、深秋はDクラスの生徒を撃ち抜いてはいるがフィードバックのある深秋にかかるプレッシャーはやはり大きいようで、時間が経つ度に深秋の攻撃の精度は落ちており、深秋の盾になっている生徒の召喚獣の点数もそこをつきかけている。

「……ヒデくん、みんな、このなかだとボクが1番、召喚獣の操作が上手いから、ボクが時間を稼ぐから、みんなは1度、退却して」

「何を言っておるのじゃ。お主1人を見捨てるわけには行かんのじゃ」

深秋は笑顔を見せて自分1人が囿になると言うが、当然、秀吉は反対をする。

「ワシとみあがしんがりをつとめる。お主達は先に回復試験に向かうのじゃ」

演劇部で鍛えたであろう、よく響く声で撤退命令を出す。

「……ヒデくん、むちゃだよ。ヒデくんだって、もうギリギリでしょ」

「そうとは言え、誰かがやらねばならぬ事なのじゃ。それにワシは明久にお主を頼まれておるし」

秀吉の行動に深秋は苦笑いを浮かべると秀吉は深秋の不安を振り払

うために優しい笑みを浮かべる。

『Fクラスは撤退したぞ。今が攻めるチャンスだ』

「みあ、ワシもお主ほどではないが、少々、召喚獣の扱いになれてきたようなのじゃ。援護を頼むのじゃ」

「うん」

秀吉の召喚獣は武器である長刀を構えると先頭でこちらに向かってくるDクラスの召喚獣に向かっていき、

「うおおお!!」

相手の初撃を交わすと長刀を叩き込む。

『おいおい。もう点数がわずかなんだから頑張りすぎるなよ』

『俺達も早く終わらせて帰りたいんだからな』

Dクラスの生徒が秀吉の行動を無謀だと笑った時、

『なに!?!』

素早く動く何か秀吉の召喚獣を抱えて深秋の召喚獣の元まで戻る。

「アキ兄!?!」

「明久!?!」

「ごめん。待たせたね。ここからは消耗線だよ。この部隊のおかげでDクラスの戦力はだいぶ減った。みあ、僕達が前線を守るから援護を頼むよ。秀吉、ごめん。悪いけど、回復試験に行ってもらう余裕はないから、みあの警護を頼むよ」

明久は深秋と秀吉に遅れた事を謝ると指示を出し、

「ここが踏ん張りどきだ。死ぬ気で進め」

大声で叫ぶと明久の召喚獣は先陣を切って走り出す。

「……みあ」

「ヒデくん、アキ兄って不思議だね。アキ兄の一言一言がボク力になるんだ」

「うむ」

深秋は自分達を見捨てる事なく、現れた明久の声に苦笑いを浮かべると先ほどまでのフィードバックのプレッシャーは弱くなってきたのかくすりと笑うと、

「ボクはボクのやれる事をする。アキ兄はフィードバックがあるのに出たんだ。後ろから攻撃するボクが怖がってちゃいけないよね」

深秋の召喚獣はゆっくりと弓を引き、

「ヒデくん、指示をお願い。ボクはやれる限り、弓を引くから、ボクの攻撃で倒せそうな召喚獣か多対一でも分か悪いところを教えて。」

全部、撃ち抜くから」

「うむ」

狙う敵を全て秀吉に任せると言つと明久達Fクラスの生徒を援護するため次々と弓を放って行く。

第25問（後書き）

どうも、作者です。

逆パートは終わりを告げました。（爆笑）

深秋と秀吉のピンチに駆けつけた明久。

美波は帰ってこない。美春に彼女は食べられてしまったのか？

そして、明久の登場に彼女はどう動く？（大爆笑）

第26問

「左側が押されてる。須川くん、お願い」

「ああ、任せておけ」

明久は前線でも戦力の状況を見ての適切な人員の配置と後方からの深秋の援護射撃により、戦況は若干、Fクラス有利に動いているように見えたが、

「アキちゃん、見つけた」

「た、玉野さん!？」

『玉野 美紀』彼女の出現により、戦況に変化が訪れる。

「みあ、明久はどうかしたのか？ 指示が聞こえなくなってきたのじゃ？」

「えーと、アキ兄がやられたら戦意が下がるし、まずいよね」

「そんなに強力な相手なのか？ そうは見えんのじゃ……明久、逃げのじゃ!？」

秀吉は見るからに低下した明久の統率力に首を傾げていると明久の目の前に立っていた美紀の目は怪しい光を放ち、

「アキちゃん、今度はこれに着替えて」

手にはナース服を持ち、明久との距離を縮めて行く。

「いや、いやだあ!?!」

「大丈夫だよ。絶対に似合うから」

「似合うわけないよ。違う!! 似合ってたまるかあ!?!」

明久が全力で逃げようとするが、

『今度はナース服か?』

『アキちゃん? 確かにみあちゃんと双子だけあってかわいかったよな?』

Fクラスの生徒だけではなく、Dクラスの生徒にまで『明久の女装』は有効なように戦況は停止し、

「……なんだろう? この状況」

「わからぬのじゃ」

深秋でさえ、ついていけないように秀吉と2人で啞然とすると、

「みあ、秀吉、助けて!?!」

明久は深秋と秀吉の後ろに隠れる。

「みあちゃん、どいて、私にアキちゃんを渡して」

「ダメだよ。アキ兄を今のみきちやんに渡すわけにはいかないよ。だって、ナース服より、これの方が似合うから」

深秋は美紀の言葉は聞けないと言うと某喫茶店の制服を取り出す。

「……みあ、それは違うのじゃ」

「……冗談だよ。間違えたただけだから」

秀吉は深秋の行動にため息を吐くと深秋は苦笑いを浮かべ、

「だいたい、そのナース服はスカートの丈が長い。何より、ナースキャップがない。そんなものをボクは認めない!!」

深秋には何か譲れない事があるようで美紀に向かい叫ぶと、

「ダメだよ。みあちゃん、看護婦さんから看護師さんになってこっちが主流になったんだから、そんな、過去の異物にいつまでも縛られてちゃ、いけないんだよ」

美紀は真面目な表情で返す。

「……決着をつけないといけないみたいだね」

「そうだね。できれば、みあちゃんとは戦いたくなかったんだけど」

深秋と美紀の間には緊迫した空気が流れ、周りにもその空気は伝染しているが、

「……内容が明らかにおかしいのじゃ」

「……そうだね」

明久と秀吉は2人のそばにいと飛び火してくると思ったように後ろに下がりがら言う。

「Fクラス、吉井深秋が……」

「Dクラス、玉野美紀に……」

「現代文勝負を挑みます!!」

深秋と美紀は声を合わせて叫ぶが、

「……みあ、現代文の先生はいないよ」

明久からツッコミが入ると、

「……わかってたよ」

「……冗談だよ」

深秋と美紀は気まずそうに視線を逸らす。

『みあちゃん、ドジっこ』

『ドジっこ、萌えええ!!』

『みあ みあ』

『みきちや ああん』

深秋と美紀の様子に周りからは2人を応援する声が響く。

「……何で、周りの戦意が上がるのかな？」

「わからんのじゃ」

その様子に明久と秀吉はため息を吐く。

第26問（後書き）

どうも、作者です。

最初に言っただけですが、深秋のコスプレの趣味と作者の趣味は関係ありません。ご理解ください。

満を持して、玉野さん登場

大暴走中です。

すべてを抑え込んでの1対1。

どんな勝負になるのか？（悪笑）

第27問(前書き)

今回はいつも以上に短いです。

第27問

「……」

「……」

明久のツッコミの後、しばらく、深秋と美紀の間に沈黙が流れた時、

「ゴメン。遅れたわ」

「島田さん！？ 無事だったんだね」

美波が息を切らせながら明久に駆け寄り、明久は美波の合流に嬉しそうに声をあげる。

「ゴメンね。家庭科も現代文も先生が捕まらなかったのよ。その代わりになるかわからないけど、高橋先生にきて貰ったわ」

美波はどの教科にも対応してくれる学年主任の『高橋 洋子』教諭を引っ張ってきてくれており、

「美紀ちゃん、これで決着がつけられるね」

「そうだね」

再び、深秋と美紀の2人の間には緊張感が漂う。

「これはいったいどういう状況ですか？」

「はい。説明します」

高橋教諭は停止している召喚戦争に説明を求めると明久は簡単に説明し、

「……わかりました。一騎打ちを望んでいるようですね。私が立会人になります。吉井深秋さん、玉野美紀さん、教科の選択をお願いします」

洋子は納得したようで、深秋と美紀に説明を求める。

「そうだね。よーこ先生が立会人なら……美紀ちゃん、あれで良いかな？」

「うん。私はかまわないよ」

深秋と美紀は教科選択を話し始め、まとまったようだが、

「高橋先生、逃げて!!」

明久は深秋と美紀の様子に何かを察したようで高橋教諭にこの場から逃げると叫ぶ。

「明久、いきなり、何を言っておるのじゃ」

「そうよ。高橋先生が立会人なら、みあは無敵でしょ」

「違う!? 違うんだ!? 秀吉、島田さん、みああの顔は何かを企んでいる顔なんだ。みあのなかじゃ、召喚戦争より何か他のものが大切になってるんだ!!」

秀吉と美波は明久を見てため息を吐くが、明久は真剣な表情で高橋教諭に逃げると叫び続けるが、

「それでは、選択した教科を」

高橋教諭は明久の言葉を聞き入れる事なく、深秋と美紀に言う。

「それじゃあ、現代文の限定テスト『朗読テスト』をお願いします
」

「異論はないです」

深秋と美紀は高橋教諭に向かい言うと、

「限定テストですか？ 少し待ってください。テキストを用意しますから」

真面目な彼女は深秋と美紀の提案を真面目に聞こうとし、朗読テストの題材を探しに行こうとするが、

「大丈夫です。この小説を使ってください」

「私もみあちゃんの小説で問題ないです。と言う事で、高橋先生、最初にお手本をお願いします」

深秋は高橋教諭にカバーがかかった1冊の小説を渡し、

「わかりました。それでは……」

高橋教諭は深秋から渡された小説を開く。

「……ねえ。高校生にもなって朗読テストってどうなの？」

「わからんのじゃ」

秀吉と美波は苦笑いを浮かべていると、

「……」

みるみるうちに高橋教諭の顔は真っ赤に染まって行く。

「よーこ先生、お手本はまだですか？」

「そ、それは!？」

深秋は高橋教諭に聞くが彼女は慌てふためく。

「……何を読ませてると思う？」

「……先ほどまでの様子で気を抜いておったのじゃ。みあはやはりみあじゃったのじゃ」

明久は予想した通りだとため息を吐くと秀吉は苦笑いを浮かべる。

第27問（後書き）

どうも、作者です。

まさかの高橋女史が被害者。（爆笑）

高橋女史は何を見せられた？（悪笑）

第28問

「高橋先生、みあのペースに巻き込まれないで!!」

「し、しかしですね。生徒からの……」

明久は高橋教諭に向かい深秋と美紀が選んだテストは却下しろと言
うが、彼女の真面目な性格ではそれも出来ないように顔を赤くして、
明久から目を逸らすと、

「……みあ、高橋先生に何を渡したの？」

明久は何か気づいたようで顔をひきつらせて深秋に聞く。

「え？ ゆうちちゃんから頼まれてた。ゆうじくん×アキ兄本だよ」

「最悪だああ!!!」

「あ、アキちゃん、かわいい」

深秋は明久の質問に笑顔で答えると明久は泣きながら走り出すと美
紀はそんな明久の姿がストライクだったようで明久を追いかけて行
き、この場所の空気が一瞬、止まる。

「み、みあ。明久がいなくなつては後が困るのではないか？」

「大丈夫だよ。アキ兄はお人好しだから、ボクらが戦っている限り、
戻ってくるから」

秀吉は走り去った明久を見て、顔をひきつらせながら言っていると深秋は笑顔で言った後、

「高橋先生、吉井深秋がこの場にいるDクラス生徒全員に家庭科勝負を挑みます。試獣召喚^{サモン}」

「しよ、承認します」

まるで、空気が固まる事を最初から計算していたかのように言っていると深秋の召喚獣が呼び出され、その腕には金色に光り輝く腕輪がはめられており、

「……なるほど」

深秋は自分の召喚獣の腕輪を見て楽しそうに笑うと、

「それじゃあ。バイバイ」

腕輪の能力を発動させる事なく、点数の高い生徒から順に弓で撃ち抜いて行く。

『まずいぞ。退却だ』

『むちゃ言うな。勝負を挑まれて逃げた時点で補習室送りだぞ。ここで彼女を止めないと全滅だ。全員でかかれ!!』

Dクラス生徒は深秋以外のFクラス生徒を後に回し、全員で深秋の召喚獣に襲いかかるが観察処分者の深秋の召喚獣を捕らえる事はできない。

「決まったわね」

「そうじゃのう。今のみあは最強の移動兵器じゃ」

深秋の様子に秀吉と美波が苦笑いを浮かべ始めると、

「ヒデくん、みなみちゃん、みんな。よーこ先生がいるうちに召喚して」

深秋からFクラスの生徒に召喚しろと指示が出る。

「なぜじゃ。これなら……」

「良いから、Dクラスの生徒が疲弊してる今しかチャンスがないの」

秀吉は首を傾げるが深秋は召喚しろと言ったため、

「わかったわよ。みあが何を考えているかわからないけど、Fクラス島田美波」

「木下秀吉以下Fクラス全員がDクラス全員に家庭科勝負を挑む」

『『『サモン
試獣召喚』』』

Fクラス全員が召喚獣を呼び出すと、

「ヒデくん、みなみちゃん、みんな、ちょっとだけ持ちこたえて」

「う、うむ。わかったのじゃ」

深秋の召喚獣が後ろに下がり、

「それじゃあ、行くよ」

召喚獣の腕輪が再び金色に光り輝くと深秋の召喚獣は天井に向けて弓を引く。

「な、何をするのじゃ!？」

「えい」

深秋の召喚獣から放たれた弓は天井スレスレで1度、止まるといくつもの光に分かれ、Fクラス全員の召喚獣に向けて飛んで行き、その光はFクラス全員の召喚獣を優しく包み込む。

「な、何、これ? 削られた点数が戻って行くわ」

「ボクの腕輪の能力は治癒みたいなんだよね。家庭科だけじゃなく他の点数も最初まで戻るみたいだよ」

Fクラスは深秋の腕輪の能力で開戦前の点数に戻ると、

『嘘だろ!?! こっちは疲弊してるのにあんなもん何発も使われたら勝てるわけがないだろ』

『待て。逃げるな。背を向けたら』

Dクラスは深秋の腕輪の能力を聞いて撤退し始め、後ろを向いた時、

「ごめんね」

背を向いたDクラス生徒の召喚獣を深秋が撃ち抜くと、

「うむ。今が攻め時じゃ。みあからの援護を信じて前に進むのじゃ
！」

「行くわよ。みあ」

「うん。任せて」

秀吉と美波はFクラス全員を前に押し出し、深秋は後ろから点数の高いDクラス生徒を狙い撃ちして行く。

第29問

「やっぱり、上位クラスだね」

「そうじゃな」

Fクラスは家庭科を戦力にDクラスを押ししていたのだがDクラスに待ち伏せを受け、教科を化学に変えられ押され始める。

「みあ、少しでも良いからDクラスの点数を削ってこのままじゃ、押し切られるわ!!」

「う、うん」

美波からの援護要請に深秋は弓を引くが深秋の化学点数は1ケタのため、何の援護にもならない。

「こうやって見ると明久が指揮をとっているのは心強かったのう」

「そうね……」

「……ボクだって反省してるよ」

不利になってきた戦況に秀吉は明久が指揮していた時を思い出して苦笑いを浮かべると美波は深秋を非難するように言い、深秋は小さい声で謝った時、

「お姉さま、見つめましたわ」

「み、美春!？」

美春が美波を見つけて目を輝かせるが美波は美春とは対称的に顔をひきつらせる。

「島田、じ指名のようじゃ……」

「はるちゃん」

「吉井深秋!？」

秀吉は美春の登場を見て美波に言うつと深秋は美春の姿を見て勢いよく抱きつき、美春は驚きの声を上げる。

「ふふふ。捕まえたよ。はるちゃん」

「ちょっと、制服に手をかけないでください!？　美春にそんな趣味はありませんわ!？」

深秋は美春に馬乗りになるとどこからか某魔法少女の衣装を取り出し、彼女の制服に手をかけると美春はバタバタと動きながら深秋から逃げようとする。

「みあ、美春にはお仕置きが必要よ!!　好きなだけやっちゃいなさい……!」

「島田、お主、あの娘と何かあったのか?」

美波は美春が苦手なのか秀吉の後ろに隠れながら深秋に言うつと秀吉は首を傾げる。

「何もないわ!? 木下、余計な事を詮索しないで!!」

「……あれ?」

美波は深秋に向かい美春をどうにかしろと叫んでいると深秋の美春を押さえている手が緩み、美春は首を傾げる。

「……みなみちゃん、いま、みなみちゃんは言うてはいけない事を言った」

「みあ、どうしたのじゃ」

深秋はゆっくりと立ち上がると秀吉は今まで見た事のない深秋の様子に声をかける。

「……はるちゃん、お願いがあるんだけど」

「な、何ですか?」

深秋の背後にはまがまがしいものが溢れ出し、美春は深秋の言葉に背中に冷たいものが伝い、逃げ出したいようだが、彼女の本能がこの場から逃げ出すのは危険だと判断したようで顔をひきつらせて頷き、彼女と同様に深秋の様子にこの場は凍りついている。

「みあ、お主、どうしたのじゃ?」

「……ヒデくん、みなみちゃんがコスプレをバカにしたんだよ。ボクはそれが許せない」

秀吉は深秋に近づいて聞くと深秋は美波の発言にお怒りの様子であるが、

「ウチ、そんな事は言っていないわよ」

「言った。ボクが一生懸命作った衣装をお仕置きって言った!」

美波は深秋が怒っている意味がわからないと言うが深秋は美波を睨みつける。

「……みあ、お主、そんな事で」

「そんな事じゃないよ。ヒデくんだって、演劇の事をバカにされたら怒るでしょ!! ボクだって一緒だよ!!」

秀吉は深秋をなだめようとするが深秋は秀吉を怒鳴り、

「許さない。許さナイ。ユルさナイ。ユルサナイ。ユルサナイ」

彼女の目には怪しい光が灯り始める。

「……木下、ウチ、逃げた方が良いわよね?」

「……逃げる前に謝った方が良いのではないかのう」

美波は深秋の変貌に顔をひきつらせて秀吉に意見を求めると秀吉はため息を吐きながら、美波に謝るように言つと、

「みあ、ゴメン。ウチはコスプレをバカにしたわけじゃないのよ!」

美波は慌てて深秋に謝るが、

「ユルサナイ。ハルチャン、ミナミチャンヲオサエテ、ミナミチャ
ンニコスプレのスバラシサヲオシエテアゲルカラ」

「わ、わかりましたわ!？」

「いやあ!!!????」

深秋は美春に指示を出して美波を押さえつけさせると美波との距離を縮めていく。

第29問（後書き）

どうも、作者です。

深秋、まさかの人外化。（爆笑）

彼女の前で拒否はしてもコスプレをバカにはいけません。（苦笑）

第30問

「み、美春、放して!? お願いだから!? このままじゃ、ウチは!?!」

「す、すいません。お姉さま。美春にもあの状態の吉井深秋には2度と逆らいたくないのです!?!」

美春が美波を押さえつけると美波は全力で逃げ出そうとするが、美春はあの状態の深秋の怖さを身を持って体験しているようで体を震わせながら美波を押さえつけている。

「ミナミチャン、カクゴシテネ。イマカラボクガコスプレノタノシサヲオシエテアゲルカラ、マズハコレカラ」

「いやああ!?!」

深秋はメイド服を手に美波の前まで行くと美波は叫び声を上げるが、

「……オムネノサイズガタリナイ」

「……みあ、あんた殺すわ」

深秋は美波の胸に手を置き言つと美波から殺意が溢れ出す。

「美春はお姉さまのこのわずかな膨らみが大好きですわ」

「……美春、あんたもウチの敵ね」

美春は美波をフォローしようとするがそれが美波の怒りの炎に油を流し込み、美波の怒りは美春にも向けられるが、

「そんな事はありません。美春はお姉さまを愛しています!!」

美春は全力で美波の怒りは間違っていると叫ぶと美波を押さえつけていた手が緩むと美波は美春の手から抜け出し、

「フッフ、ソナコウゲキハイマノボクニハキカナイヨ」

「な、何でよ!？」

深秋に関節技をかけるが深秋の精神はすでに肉体を凌駕しているように美波を跳ね飛ばす。

「オムネガタリナイカラ、ロリッコマハウシヨウジヨニシヨウ」

「な、なんで、この娘は止まらないのよ!？」

美波は深秋の様子に顔を青くすると秀吉の後ろに隠れる。

「ヒデクン、ミナミチャンヲボクニワタシテ。ワタシテクレナイナ
ラ、ヒデクンニモキテモラウヨ」

『みあちゃん、木下には巫女服でお願いします!!』

『俺はメイド服が良い!!』

深秋は秀吉に美波を引き渡すように言うと秀吉の着せ替えに周りの生徒は盛り上がり始める。

「ワシは男じゃー!!」

「ミコフクハダメ。ヒデクンヲヨゴセナクナルカラ……ヨゴセナイハズノミコフクヲヒキサイテ、ヒデクンの純潔を奪う? それで行こう」

秀吉が声を上げると深秋は秀吉への歪んだ愛情が美波への怒りを上回り、正気に戻る?

「ヒデくん、覚悟は良いね」

「みあ、ま、待つんじゃない? と言うか意味がわからんのじゃ!?!」

深秋は巫女服を手に秀吉に詰め寄り始め、秀吉は顔を青くして後ろに下がろうとするが、

「し、島田、なぜ、ワシをみあの方に押すのじゃ!?!」

「木下なら、大丈夫よ。みあはきつと優しくしてくれるから」

美波は秀吉を深秋に引き渡して自分は助かろうとしている。

「ヒデくんの巫女服姿」

「やめ、やめるのじゃ!?!? ワシはこんな形ではいやなのじゃ!?!?」

深秋が秀吉の制服に手をかけた時、秀吉は声をあげると、

「……ねえ。ヒデくん、それなら、どんな形が良いの?」

深秋が秀吉の言葉に反応をする。

「そ、それはもう少し、段階を踏んでお互いの気持ちを確認しあった上で……何を言わせるのじゃ!？」

「……ちっ、最後まで聞けなかったか」

秀吉が顔を真っ赤にして言うが最後まで言い切らず、深秋は秀吉の気持ちを確認できなかった事に舌打ちをすると、

「アキ兄、攻撃指示をちょうだい 教科はみなみちゃんもいるし」

「わかってるよ。数学でしょ。吉井明久以下、FクラスがDクラスの生徒全員に数学勝負を挑みます。試獣召喚サモン!!」

明久が戻ってきている事に気づいていたようでナース服に着替えさせられた明久に指示を仰ぎ、明久は戦争を再開させると、

「ちよつと待て!?!」

「アキちゃんのために勝利を!!」

Dクラスの生徒はいきなりの戦争の再開に驚きの声をあげるなか、明久の女装になぜかFクラスの生徒は勢い尽く。

第30問（後書き）

どうも、作者です。

明久は美紀から逃げ切れませんでした。（爆笑）

着替えてからこいよ。

そして、なぜ、数学？と言っ疑問はおいといてください。（苦笑）

第31問

「……吉井、どうして、そんな格好なの？」

「……玉野さんから何とか逃げたけど制服は取り戻せなかったんだよ」

美波は召喚獣を操作しながらも明久の格好に付いて聞くと明久はギリギリで美紀から逃げてきたようである。

「……あんたも大変ね」

「……うん。それでみあなら、男物の服も持つてると思ったから、こんな格好恥ずかしいし」

美波は明久の言葉にため息を吐くと明久は深秋を頼ってきたと言うが、そのせいで周囲に女装を見られているのが明久らしい。

「……明久、少なくとも戻ってこないで隠れておれば、周りからおかしい目では見られなかったのではないかのう」

「しまった!？」

秀吉は明久の姿を見てなぜか戦意が上がっているクラスメイト達を冷たい目で見て言うと明久は言われて初めて気づいたようである。声をあげる。

「しかし、過ぎてしまった事は仕方ないのじゃ。それにみあはお主はワシらを見捨てずに戻ってくると信じておうた。経緯はどうであ

れ、明久、お主はみあの期待に応えたのじゃ。だからこそ、ワシらの戦意も上がっておるのである。」

「そうかな……そうだと思おう」

秀吉は深秋が明久を待っていた事を話すと明久は照れたように笑い、

「島田さん、一人で前に出ないで囲まれて集中攻撃を受けるから、秀吉はみあの援護、後は……」

「うむ」

「わかったわ」

明久は現在のFクラスの核になっている深秋と美波が討たれた場合の士気の低下を考慮して指示を出し、

「……の3人は僕と一緒に右側を助けに行くよ」

『吉井、前線は俺達がやる。お前は後ろで全体を見ててくれ』

『頼むぞ。軍師様』

自分も前に出ようとしますが、クラスメート達は深秋と美波と同様に明久が討ち取られた時に戦意が下がる事を理解しているようで明久に後ろで全体を見るように言い、前線に上がって行く。

「みあ、ワシも手伝うのじゃ……!」

「ヒデくん、待って、ここはボクに任せて欲しいの」

秀吉は明久の指示に従い、深秋のフォローに向かうと深秋は美春と対峙しており、深秋は美春との1対1を望んでいる。

「どきなさい。吉井深秋。美春とお姉さまの邪魔をしないで」

「無理だよ。ボクにも退けない理由があるからね」

美春は深秋を睨みつけるが深秋は真面目な表情でまっすぐと美春を見据えて言うが、

「はるちゃん、ボクが勝ったら約束通り、これを着て撮影会だよ」

「そんな約束してませんわ!？」

真面目な表情は続かなく、手に某魔法少女のコスプレ衣装を手に言ううと美春は声をあげる。

「ボクに勝てたらみなみちゃんを好きにして良いよ」

「……吉井深秋、あなたとの因縁。今日で断ち切らせていただきますわ!！」

「……なぜ、清水はみあのペースに巻き込まれるのじゃ？」

深秋は美波を餌にすると美春はすぐに条件に頷き、秀吉は2人の様子にため息を吐くと、

「ちょっと、みあ、あんだ、何を言ってるのよ!？」

「この娘を倒せばお姉さまは美春のもの」

美波は深秋と美春の間で勝手に交わされている約束に声をあげるが美春は聞き入れる気はなく、

「みなみちゃん、ボクに逆らう気？」

「み、みあ、お願いだから負けないでね」

深秋は先ほどの美波の発言にまだ怒っているようで笑顔だが逆らう事は許さないと言うと美波は顔をひきつらせてまだ安全だと思われる深秋を応援する。

「……島田さん、ひよつとして、みあの前でコスプレをバカにした？」

「……ええ。ちよつと、口を滑らせたわ。まさか、あんなに怒るとは思わなかったのよ。それより、良くわかったわね」

明久は深秋と美波の様子に何があったか理解したようで苦笑いを浮かべると美波は気まずそうに言う。

「まあ、昔、似たような事もあったしね」

「似たような事？」

「うん。みあが初めて縫った服をバカにした男の子がいてね。みあは泣きながらも最終的にはその男の子に謝らせたんだよ」

明久は深秋の子供の頃を思い出して懐かしむように笑うと、

「島田さん、欲望に忠実な時のみあは誰にも負けないから安心して、島田さんは自分の方に集中して」

「……わかったわ」

美波に集中するように言い、美波は背中に美春の視線（冷たいものを感じながらも召喚戦争を続ける。

第32問

「……」

深秋と美春の間には緊張感があり、どちらから攻めるか相手の初動を読んでいくかのように見える。

(……相手の武器は弓ですから、近づかなければどうにもなりませんわね)

(……はるちゃん性格と武器から言っただけで中に飛び込まれたらボクが不利だよな。なら……)

2人の行動が決まり、

「美春の前から消えなさい。吉井深秋!!」

「ごめんね。はるちゃん、ボクは負けるわけには行かないんだよ」

美春が1歩先に、深秋の召喚獣に向けて自分の召喚獣を走らせるが、深秋も直ぐに行動に移り、美春の召喚獣の足に矢を射る。

「……ちっ、卑怯ですわ。吉井深秋」

「仕方ないでしょ。ボクの武器は弓なんだから、近づかれちゃうと終わりだしね」

美春の召喚獣は深秋の召喚獣の攻撃があたり、点数を削られるが深秋の召喚獣の点数が低いのと割とダメージの少ない足に矢を受けた

ためか損傷は小さい。

「美春があなたの元につけば美春の勝利」

「ボクがはるちゃんから逃げ切れればボクの勝ちだね」

「やる事が明白ですから、すっきりしてやりやすいですわ」

「そうだね」

2人ともあまり多くを考えられない性格のためか単純にやる事を確認しあうと、

「行きますわよ。吉井み……まだ、話している途中ですわよ!？」

「ええ、だって、はるちゃんのお話長いんだもん。ボクは早く決着をつけてはるちゃんのコスプレを見たいんだよ」

美春は改めて深秋の召喚獣に攻撃をしようとするが、話の途中で深秋の召喚獣から弓が放たれ、美春は交わすのが遅れてしまい、また小さく点数が削られる。

「ひ、卑怯ですわ」

「はるちゃん、知ってる。不意打ちや謀略も戦争の基本なんだよ。目的があるなら手段なんて選んじやいけないんだよ」

美春は深秋の行動に声を荒げるが深秋は美春の考えは甘いと言い切り、

「……バイバイ。はるちゃん、撮影会を楽しみにしてるよ」

笑顔で美春の召喚獣の心臓を撃ち抜く。

「そ、そんな、お姉さまと美春の甘いひとときが」

「残念だったね。はるちゃん、だけどね。本気で愛の道を進みたいなら、汚い手段を使っても勝たないといけないんだよ」

美春は深秋の攻撃を受けて消えてしまった自分の召喚獣を見て膝を落とすと深秋は美春の肩に手を置き言う。

「……あ、あの。吉井深秋、まさか今からと言いませんわよね？」

「今からで良いの」

美春は深秋のコスプレ撮影会から逃げる算段を立てようとするが、その一言を深秋は自分の都合の良い方に受け取るうとするが、

「戦死者は補習……！」

西村教諭の声が響き、美春が捕まり、美春を含めた戦死者を補習室に引きずって行く。

「……後回しか。残念、まあ、みなみちゃんの撮影会もあるし、今日は良いか」

「……みあ、お主、先ほどの演技だったのか？」

深秋は連れて行かれた美春を見てつぶやくと秀吉は深秋の言葉に何

かが引つかかり聞き返すと、

「ヒデくん、女の子はみんな女優さんなんだよ。だから、ボク以外に騙されたらダメだよ」

「……うむ。気をつけるようにするのじゃ」

深秋はイタズラな笑みを浮かべて秀吉に言い、秀吉は顔を赤くして深秋から視線を逸らす。

「ヒデくん、行くよ。ここを押し切れれば後、少しだから」

「うむ。わかっておるのじゃ。みあ、島田と向き合っているものが強いようじゃ。援護を頼むのじゃ」

「うん」

深秋と秀吉は今日の開戦からともに戦ってきているためか、なれた様子で戦争を再開させる。

第32問（後書き）

どうも、作者です。

深秋対美春に決着。

勝ち方は卑怯。（爆笑）

美春、美波の撮影会は決まりました。

深秋コーディネートで康太撮影。

製本まで行く事は確実です。（爆笑）

深秋と秀吉は皆さんにはどう思われているんでしょうか？
お似合い？ 反対？

そして、深秋と明久は仲の良い兄妹に見えるのかな？

第33問

「とりあえず、落ち着いたかな？」

「そうね」

Dクラスを退けて明久はため息を吐くと美波は頷く。

「アキ兄」

「何、みあ？ ……無理！？ 無理だから！？」

深秋は明久を呼び、明久は振り返ると深秋の手には先ほどの深秋と美紀の戦いの火種になった『ナース服』を持っている。

「大丈夫だよ。と言うか、ボクはアキ兄がそんな紛い物を着ているのが許せないんだ！！」

「そうじゃないから、ボクは男だから、ナース服は着ないから！？」

深秋はナース服を手にじりじりとにじりよるが明久は顔を真っ青にして深秋から距離を取ろうと後ろに下がって行く。

「……みあ、今はそんな事をやってる時間ではないのじゃないかのう」

「そうだよ。秀吉、良い事を言った！！」

秀吉は2人の様子にため息を吐くと明久は全面的に秀吉を支援する

が、

「……ボクのお願ひ聞いてくれないなら、帰りもそれだよ」

深秋は笑顔で明久を脅す。

「……それを着たら、帰りには男物を着せてくれるの」

「アキ兄はボクを信じてくれないの？」

明久は深秋を疑いながらも聞き返すと深秋は笑顔で言うが、

「……木下、どっちだと思っ？」

「うむ。みあの事なのじゃ。多めに見ても五分五分と言つとこころじや」

秀吉と美波は深秋の言葉の真意をはかりかねている。

「わかったよ……いや、待って」

「待たないよ」

「い、いやああ!？」

明久は1度、頷くがまだ迷いがあるようで深秋を止めようとするが、深秋は明久に飛びつく。

「……やっぱり、ダメそうね」

「そうじゃな」

その様子に秀吉と美波はため息を吐く。

「完成」

明久は深秋にひんむかれたのがショックなようで声を殺してさめざめと泣いているが深秋は満足そうに笑う。

「あれ？ みあ、ナース服じゃないのね」

「……明久、大丈夫か？」

「うん。みあが男物の服にしてくれたしね」

美波は明久が他の高校の制服を着ているため、少し残念そうにしている。

「まあ、スカートは動きにくいからね。放課後になるし、人ゴミに紛れての戦いになるからね。行くよ。アキ兄」

「……うん。次の事を考えると姫路さんは隠しておきたい。このメンバーで平賀くんの首を獲るんだ」

深秋は笑いながら、明久に手を伸ばすと明久は深秋の手を取り立ち上がると先ほどまでとは表情をしてFクラスに指示を出す。

「明久、どう攻めるのじゃ？」

「たぶん、平賀くんは下校時間に紛れて態勢を立て直す事も考えて

今日は退却するつもりだ。このメンバーを3つに分けて正門と裏門に1つずつ配置。正門を美波、裏門を須川くん」

「わかったわ」

「おう」

明久はFクラスを3つに分けると美波と須川に任せると、

「みあと秀吉には平賀くんの首を獲って貰うよ。姫路さんを使えない状況なら、2人がFクラスの最強のカードだから」

「うむ。わかったのじゃ」

「頑張ろうね。ヒデくん」

明久は勝負を深秋と秀吉に任せると言う。

「後のメンバーはゴメン。囿になると思う。平賀くんの周りに残っている残りのDクラスのみなどと戦うよ」

明久は自分が囿を買って出ると言う。

「吉井、大丈夫なの？」

「大丈夫も何も作戦を立てたのは僕なんだ。1番割の合わないところは僕がいかないといけないしね」

美波は明久を心配して声をかけると明久は苦笑いを浮かべる。

「アキ兄、気をつけてね」

「わかってるよ。上手く、誘導して見せるよ」

「違うよ。たぶん、げんじくんの近くにはみきちゃんがいるから」

深秋の呼びかけに明久は苦笑いを浮かべて頷くが深秋の心配は別にあり、

「忘れてた!？」

「……明久、気をつけるのじゃぞ」

「だ、誰か代わって!？」

明久は声をあげると秀吉は明久に何も言える事はないと首を横に振ると明久はうるたえて代わりを探すが、

「ダメだよ。アキ兄、みきちゃんを引つ張り出すのはアキ兄が適任なんだから、それにみきちゃんはDクラスじゃ、げんじくんに次ぐくらいの成績だから戦わなくて済むならそれにこした事はないからね」

深秋が明久の手を取り言う。

「……うん。さっき決めたばかりなのにゴメン」

明久は深秋の言葉に頷くと、

「これが最後だ。絶対に勝つぞ!！」

最後の指示を出す。

第34問

「……みあ、明久は大丈夫かろう？」

「今はアキ兄を心配している余裕はないよ。ボクとヒデくんの奇襲が失敗したら終わりなんだから」

深秋と秀吉は下校時間になり、人通りが多くなっている玄関近くに身を隠している。

「それにアキ兄の読みが外れて雄二くんを奇襲された……ヒデくん、戻るよ。急いで!!」

2ヶ所の出口は封鎖したが、問題は源二が明久の読み通りに動くかを考え始めた時に深秋はDクラスに残っているもう1つの手が頭をよぎり立ち上がる。

「どうしたのじゃ!? このまま待ち伏せをせんで良いのか？」

「1つ、忘れてたんだよ。ゆうじくんの守りが手薄なんだよ。ボクとヒデくんはみずきちゃんを抜かせば攻撃力と機動性で十分に勝ちを取りに行ける。みなみちゃんの数学もね。須川くんもアキ兄の補佐する形で動いてくれたから倒せないにしても戦況を長引かせればアキ兄の部隊とボクたちで挟み撃ちができた」

深秋は秀吉の手を取りFクラスの教室を目指し出す。

「うむ。そうじゃな。明久の作戦は良く出来ておると思うのじゃ」

「うん。だけど、げんじくんの性格が配慮されてないんだよ。げんじくんはどちらかと言えば熱血漢なの。逃げるより、玉砕を選ぶ可能性が高い」

深秋は去年からの友人であるDクラス代表『平賀 源二』の顔を思い出して唇を噛む。

「それはまずいのではないのか!？」

「うん。ゆうじくんの周りは数人しか残してない。こうくんを配置しているとは言え、先にあっちから保健体育以外で仕掛けられたら簡単に落ちるよ」

秀吉は深秋の言葉に状況を理解したようで驚きの声をあげると深秋とともに階段を駆け上がった時、

「いた。げんじくんだ……アキ兄!？」

Dクラスの残りの生徒を自ら率いた源二と明久の部隊が戦っている。

「明久、お主、どうしてここに!？」

「みあ、秀吉、やっぱり来てくれた。ムツツリーニ、みんな、島田さんと須川くんが合流するまで持ちこたえるよ」

「……………了解」

秀吉は居るはずのない明久に驚きの声をあげるが明久はこの展開を読んでいたようで深秋や秀吉、美波と言った別部隊には別の指示を出してDクラスを待ち構えていたようで、明久の本当に最後である

う指示が飛ぶとFクラスはDクラスを押し返し始める。

「……吉井さん、君のお兄さんがここまでの策士だとは思わなかったよ」

「あはは。ボクもアキ兄に騙されてたから、おあいこかな」

源二は援軍がくる前に押し切ろうとしたが明久の指示は的確で人数の少ないDクラスはFクラスの壁を抜けられないためか、源二は振り返ると狭み撃ちを回避するため、深秋と秀吉を倒し退却する作戦に出る。

「人を減らして僕らをおびき寄せるなんてね。でも、後ろが手薄なうちに僕らは退かせて貰うよ!!」

「そうはいかんのじゃ。ワシにもプライドがある。ここまで、ワシらを信じてくれた明久の作戦を無駄にするわけにはいかんのじゃ!!」

源二はまだ2人しかいない後方からの攻撃を自ら叩こうと1歩前にでると秀吉が深秋を守るように源二の前に立ちふさがり、

「Fクラス、木下秀吉」

「同じく吉井深秋がDクラス代表『平賀源二』に現代文勝負を挑みます!!」

「『試獣召喚!!』」

「Dクラス代表平賀源二受けます。試獣召喚!!」

床から魔法陣が浮かび上がり、3人の召喚獣が呼び出される。

「さすがは代表じゃ、疲弊していないせいか。点数は五分と言っところじゃな」

「ごめんね。ボクの腕輪はボクは治癒の対象外みただから」

秀吉は源二の点数を見てつぶやくと戦闘を重ねてきて主力のはずの現代文の点数が下がってきている深秋は申し訳なさそうに秀吉に謝る。

「別にかまわんのじゃ。みあ、援護を頼むのじゃ」

「木下くん、2人で相手をした方が良いんじゃないかな?」

秀吉は深秋に下がるように言うと秀吉の召喚獣は長刀を構え、源二の召喚獣と対峙する。

「なに、みあの武器は弓なので。お主を食い止めるのがワシの役目じゃ」

「……そう。吉井さんにずいぶんとやられたみたいだしね。逆転するためには吉井さんを倒さないといけないから、逆転の足がかりにさせて貰うよ!」

源二の言葉とともに源二の召喚獣は秀吉の召喚獣に攻撃を仕掛けるが召喚獣の扱いになれてきた秀吉は点数を少しずつ削られながらも深秋が弓を放つためのスキを作ろうと源二の攻撃を受けて行き、

「これで終わりだ!!」

「うじじや、みあ、頼むのじゃ!!」

「うん」

秀吉の点数が底をつきかけた時、源二の攻撃が大ぶりになったのを秀吉は見逃さず、源二の召喚獣の武器を長刀で弾き飛ばし、一瞬、無防備になった源二の召喚獣に向け、深秋の召喚獣の矢が放たれ、

『勝者、木下秀吉、吉井深秋』

矢は源二の召喚獣の胸に深々と突き刺さると立ち会いの教師から深秋と秀吉の勝利が宣言され、Fクラス対DクラスはFクラスの勝利で幕を閉じる。

第34問（後書き）

どうも、作者です。

長かったDクラス戦もようやく終わりましたが、未だに雄二は復活せず、まだ雄二には免疫が足りません。（爆笑）

雄二がいない戦後処理はどうなるんでしょうか？

そして、瑞希、出番なし。（苦笑）

第35問

「……勝った」

「……明久、立て。お前がそれだとしまらない」

Fクラスの勝利が告げられると明久は張り詰めていたものが切れたように腰を落とすと康太が明久に手を伸ばす。

「あ、うん。ごめ……うわ!? ちょっと、みあ!？」

「アキ兄、勝ったよ　ボク、頑張ったんだから、誉めて、誉めて」

明久は康太の手を取り立ち上がるうとした時に深秋の突撃を喰らう。

「……みあ、そこまでにするのじゃ。明久が落ちるのじゃ」

「へ?　ちょっと、アキ兄!？」

秀吉は深秋を止めると深秋の勢いに巻き込まれた明久は目を回している。

「……みあ、あんたは何をやってるのよ」

「……殺したいほど憎らしい」

深秋が明久の体を揺るのを見て追いついてきた美波はため息を吐き、康太を中心としたクラスメート達は血涙を流しながら、明久に

向けてカッターを投げつけようとしているが深秋がいるため、投げつけられずにいる。

「……これは勝てないわけだね」

「ん？ どう言う意味じゃ」

勝利をおさめ、バカ騒ぎをしているFクラスの様子を見て源二がため息を吐くと秀吉は源二に聞き返す。

「僕らは試召戦争に必要なものが欠けていた。クラスメートが一丸となり勝利を獲りに行く気概がなかった。今日、会ったばかりの人間も多いし、他のクラスもそうだと思うってたけど、Fクラスは違ってたようだ」

「……まとまり方に問題があるようじゃがのう」

源二はFクラスに完全にスキをつかれたとため息を吐きながら言うと秀吉はFクラスのおかしなまとまり方にため息を吐く。

「それも才能だよ。このクラスは強くなりそうだ。僕らも頑張らないと」

「才能ね」

源二が苦笑いを浮かべて言うと美波は信じられないと言う表情をする。

「現状の戦力から勝てるクラスを選んだ指揮官と自分達の兵力から最善の策を導いた吉井くん、吉井くんを信じて戦った吉井さん、少

なくともここには信頼感があつたと思う。僕らにはなかったよ。誰もFクラスに負けるわけではないと思つてたから」

「実際、ウチ達も勝てると思つてなかつたしね」

源二は自分のクラスをまとめきれなかつた事を悔いるように笑つと美波は苦笑いを浮かべる。

「それで、戦後処理はどうするのか？ 今日はまだ遅いし、出来れば明日の朝からが良いんだけど」

「……うむ。雄二はまだ動けんようじゃし、明久も同じじゃ」

「別に良いんじゃない？ 明日で」

源二が設備移動の話をする時秀吉は首を傾げるが美波が頷き、部長として指揮をとつていた美波の意見に反対は出さず、

「それじゃあ、僕らは先に帰らせて貰つよ」

Dクラスは帰宅を始める。

「……うーん？」

「アキ兄！？ 良かった」

「みあ！？ 落ち着くのじゃ！？」

深秋が明久の体を揺すり続けていると明久は目を覚ますが深秋が同じ事をしようとするため、秀吉は深秋を抱きしめて止める。

「……えーと、秀吉、島田さん、僕達は勝ったんだよね？」

「うむ。お主の活躍のおかげじゃ」

「そっか……」

明久はFクラスが勝利した事を秀吉に確認すると秀吉は笑顔で頷き、明久は安心したように言う。

「吉井、Dクラスの代表から、設備移動は明日でって言われたけど、問題なかったわよね？」

「うん。僕らも今日は疲れたから、帰りたいたいね」

美波は源二からの伝言を伝えると明久は設備に関しては何も考えなくて、頷き、

「なら、教室に戻って帰ろっか？ ゆうじくんとみずきちゃんに報告しないといけないしね」

「うむ。そうじゃのう……と言うか、今更じゃが、雄二はまだ動けるのか？」

「……さっき、ムツツリー二に聞いたら、何度か霧島さんが来て何かしてたって」

教室に戻る途中で秀吉が雄二の様子を聞くと明久が目を逸らしながら答え、

「誰も坂本を助けなかったの？」

「……………誰だって自分の命は惜しい」

美波の当然の疑問に康太が答えると雄二の護衛に付いていたクラスメイト達は大きく頷く。

第35問（後書き）

どうも、作者です。

明久と雄二がくたばってる間の戦後処理（爆笑）

人の考えている事を裏切るのが大好きです。

雄二の策が使えなくなったFクラスのとり道は？

そして、翔子から投薬を受け続ける雄二の運命は？

アキちゃん、みあちゃん姉妹のファンクラブになりかけているFクラスはFFF団を結成するのか？（爆笑）

番宣です。

バカテス二次創作でまさかの4作目を書き始めました。

『あたしと優菜とFクラス』と言う作品です。

たぶん、これも異色。（爆笑）

第36問

「みずきちゃん、ただいま」

「みあちゃん!？」

Fクラスの教室に戻ると深秋は瑞希を見つけて抱きつく。

「あつたかい。ボクもこれくらいあれば良いのに」

「み、みあちゃん、動かないでください。くすぐりたいです」

深秋は瑞希の胸に顔をうずめて言うと瑞希は顔を真っ赤にして言い、男性陣は前かがみになっている。

「……みあ、あんた、またウチにケンカ売ってるわよね？」

「それはみなみちゃんの思い違いだよ。ボクはみなみちゃんの好きだよ」

美波は額に青筋を浮かべて深秋の肩を叩くと深秋は振り返り、

「だから、こんなにミナミちゃんニアイソウナフクモヨウイシタ
ンダヨ」

どこからかコスプレ衣装を取り出し、先ほどまで押さえつけていたであろうものがはみ出し出す。

「み、みあ、それは終わったんじゃないの!？」

「ミナミチャン、ソレハソレダヨ。ボクハミナミチャンニコスプレノタノシサヲオシエルトイウシメイガアルノ、ニドトコスプレヲバカニデキナイヨウニネ。コウクン、サツエイハマカセルヨ」

「……………任せる」

「い、いやああ!!?!?!?!?!」

美波は深秋の変化に顔をひきつらせると深秋はゆっくりと立ち上がり、美波との距離を縮めて行き、康太に写真を撮るように言う。

「……………明久、みあを止めてよいのか？」

「……………うん。助けに行くのは危険だから、後、着替え中に覗きに言ったら、今の島田さんと同じ目に遭うから気をつけてね」

秀吉は顔をひきつらせて明久に聞くと明久が今の深秋に近づくのは危険だと言うが、

『島田の着替え!?!』

『ひ、貧乳はステータスだ!?!』

『ツルペタ、ツルペタ』

クラスメイト達は美波の着替えを覗く気で盛り上がり始めると、

「……………コスプレヲバカニスルナ」

『みあちゃん？』

『い、いやあああ！！！！？？？？』

美波の着替えに盛り上がったクラスメイト達に深秋の本能はコスプレを侮辱したと判断したようで深秋の手により、制服を剥がれ、次々と女物のコスプレ衣装に変えられて行く。

「た、助かったわ」

「一時的だろうけどね」

「……これはなんだ？」

美波は自分以外に矛先が向かった事で安心し、明久が苦笑いを浮かべた時、雄二が目を覚ます。

「雄二、大丈夫かい？」

「……ああ、頭がクラクラするが大丈夫だとは思う。それで俺はどれくらい落ちてたんだ？ 試召戦争はどうなったんだ？」

雄二はまだ正常に動いていないであろう頭を押さえながら今の状況を確認すると、

「勝ったわよ。吉井の作戦が当たってね……」

美波は雄二にFクラスの勝利を簡単に説明する。

「そうか。姫路を使わないで勝っては上出来だな。それで戦後処理

はどうした？」

「戦後処理？　って、普通に設備交換よ。今日は遅いから設備交換は明日にしたけどね」

「……そうか」

美波が雄二の質問に答えると雄二は苦虫を噛み潰したような表情をする。

「何かまずかった？」

「ああ。設備交換は俺がAクラスにたどり着くまでには考えてなかったんだ」

「どついう事じゃ？」

美波は雄二の表情に何かあったかと聞くと雄二は自分の考えから外れてしまったと言い、秀吉は首を傾げる。

「簡単に言うと設備交換を無しにすると言うのをエサにしているいと手伝って貰おうと思っていたんだ。それに……」

「それに？」

「Fクラスが試召戦争でDクラスの設備を手に入れたって事は前だけを向いていられなくなっただって事だ」

雄二ははっきりとは言わないがその言葉はEクラスからの宣戦布告を意味している。

「連戦つて事だよな？」

「ああ、俺がEクラスの代表なら明日の朝には宣戦布告をする」

明久が雄二に確認すると雄二は頷き、

「まあ、設備交換の話をして置かなかつた俺の落ち度だ」

「いや、元をたどればみあのせいだし……」

雄二はため息を吐くと明久はクラスメートを追いかけている深秋を見て苦笑いを浮かべる。

「まあ、考えても仕方ないな。姫路が無傷なんだ。Eクラス程度には負けないが……」

「出来れば、姫路さんを見せたくないよね？」

「そう言う事だ。お前ら、点数がギリギリなものを言え、明日の朝に回復試験を受けれるように申請して帰るからな」

明久と雄二のなかではEクラス程度には瑞希を使いたくないと言う共通の認識があるようで頷くと雄二はクラスメート達に効率良く回復試験を受けさせるために点数の確認を行って行く。

第36問（後書き）

どうも、作者です。

深秋の人外化でカオスな教室。

生け贄「コスパレさせられたクラスメート」を捧げられて目覚める雄二。（爆笑）

Dクラスの設備を手に入れた事で試召戦争はどう変わって行くのでしょうか？

第37問

「……みあ、そろそろ止める。帰るぞ」

「……イヤ、サイゴハミナミチャンニ」

雄二はクラスメートから点数の状況を確認すると下校するぞと言い深秋を止めるが美波の着替えを覗こうとしたクラスメート全てを沈めた深秋はメイド服を手にメインディッシュに移ろうとする。

「まだ諦めてなかったの!？」

「アタリマエダヨ。ミナミチャンニコスプレノタノシサヲオシエルノハボクノシメイダヨ」

美波は深秋の様子に顔をひきつらせるが深秋は美波との距離を縮めていく。

「えーと、吉井くん、みあちゃんを止める事はできないんでしょうか？」

「あの状態のみあには……あれ？ みあ、今日、バイトじゃなかった？」

瑞希は苦笑いを浮かべながら明久に深秋を止められないかと聞くと明久は苦笑いを浮かべて無理だと言う途中で、深秋にバイトじゃなかったかと聞くと、

「……バイト？ コスプレ？ バイト？ コスプレ？」

深秋の頭のなかで葛藤が始まったようで口からはバイトとコスプレの二言が繰り返される。

「……明久、みあは大丈夫なのか？」

「……自信ない」

雄二は深秋の異様な状態に明久を肘でつついて聞くと明久は困ったように言う。

「……シカタナイ。ミナミチャンノコスプレハアトニスル」

「……止めると言う選択肢はないのじゃのう」

「トウゼン」

深秋はバイトを優先すると言うと秀吉はため息を吐くが深秋は背後に黒いものをまとったまま言い切ると、

「アキニイ、ユウハントオセンタクオネガイネ。ボクノイナイアイダニ好きなダケボクの下ギヲ被ってて良いカラ」

「しないから！？ そんな変態みたいな事はしないから！？」

深秋は明久いじりをして、黒いものが四散していく。

「被らないなら、いつもみたいに口に含む？」

「しないから！？ そんな事した事ないから！？」

深秋の言葉に明久は声を上げて否定するが、

「明久、お主、実の妹のみあに何をやっておるのじゃ？」

「……………吉井くん」

秀吉と瑞希は明久をジト目で睨む。

「ちよつと待つて！？　だまされしないで、僕は妹に手を出すような趣味はないよ！？」

「でも、こつ言うのは好きだよね？」

明久は秀吉と瑞希に弁明するが深秋はどこからか妹属性の保健体育の教科書を取り出すと、

「……………だから、信じてよ。2人とも」

「明久、目を通した後に懐にしまったら説得力も何も無いぞ」

明久は保健体育の教科書に目を通した後、懐にしまう。

「ごめんね。アキ兄、今日はボクがバイトだから、アキ兄の食器代わりのボクの女体盛りができなくてゴメンね」

「だから、そんな事させたこともないし、おかしい事言わないでよ。みあ！？」

「……………もう限界」

深秋はさらに明久いじりを続け、明久が声を上げた時、康太がつぶやくと、

『吉井、貴様！！ みあちゃんに何をさせてるんだ！！』

『そつだ！！ そんなうらやましい事を！！』

コスプレをさせられたクラスメート達が明久に殺意を込めた視線を送りながら吠える。

「ちよつと待つてよ！？ 僕は何もしてないから、みあは実の妹であつて……」

『僕はみあの事を愛してるよ』

「みあ！？ なんでこのタイミングで!?!」

明久はクラスメート達に全力で弁明しようとするが、深秋は今朝、録音して編集した明久の言葉を流す。

「吉井くん、ちよつとお話があるんですが良いですか？」

「吉井、少し話したい事があるんだけど」

深秋の流した言葉に瑞希と美波は笑顔で明久の肩をつかむが背後には真つ黒な殺意ものがはみ出ている。

「えーと、姫路さん、島田さん、どうしたの？」

「いえ、少しお話したい事があります」

「そうね」

「……僕、夕飯の買い物があるから帰るね!!」

明久は2人の様子を見て全力で教室から逃げ出すと瑞希、美波を先頭にしてコスプレをしたクラスメイト達が明久を追いかけて教室を出て行き、

「……みあ」

「ヒデくん、ゆうじくん、ボク、バイトの時間があるから帰るね」

「うむ。気をつけて帰るのじゃぞ」

雄二が顔をひきつらせるが深秋は気にする事なくバイトに向かう。

第37問（後書き）

どうも、作者です。

ひとまず、Dクラス戦完結です。

次からはEクラス戦？

オリジナルの展開ですがどうなるんでしょうか？

第38問

「雄二、本当にEクラスから宣戦布告はあるの？」

「ああ。間違いなくな。Eクラスは体育会系の筋肉バカが多いからな。策略とかを考えずにFクラスが相手なら勝てるってな」

Dクラス戦が終わった次の日の朝、明久は雄二に聞くと雄二は面倒だと言いたげにため息を吐く。

「まあ、仕方ないよ。それが文月のルールだし、それにボクトシテはEクラスとタタかうノになンノモンダイもナイヨ」

「みあ、どうしたのじゃ！？ 朝から何があつたのじゃ！？」

深秋は明久と雄二の会話を聞いている途中でなぜか人外化が始まり、秀吉は驚きの声をあげる。

「……ゴメン、ヒデくんトリミダしたね。まだ、早いよネ」

「……吉井、みあはEクラスに何かあるの？」

深秋はまだ完全に人外化を制御していないようで人と獣の間をさまよっており、美波は深秋が自分にも飛びかかってくる可能性もあるため、瑞希の後ろに隠れながら明久に聞くと、

「えーと、僕にはわからないかな？」

「俺はなんとなくわかるぞ」

明久は苦笑いを浮かべてわからないと言うが雄二はため息を吐きながら深秋がどうしてああなっているか予想がついていると言う。

「坂本くん、みあちゃんがこうなった理由って何なんですか？」

「教えるのじゃ」

秀吉と瑞希は雄二に聞くと、

「簡単な事だろ。Eクラスはさつきも言ったが体育会系が多いんだよ。そんなヤツらがみあみたいなおたくって言われる人種を見たらどうなる？」

「……なるほどのう。みあはEクラスの人間とは因縁が多そうじゃな」

雄二の言葉に秀吉は納得がいったように頷くが、

「どづい事ですか？」

瑞希は意味がわからないように首を傾げる。

「オモイシラせてやる。ボク達のコトをバカニスルヤツらにボクラハ趣味のハンチュウでタノシンドルのにオタクはキモいとか偏見でシカ見ナイ。キンニクばかりにもタタキコンデやる」

「みあ、落ち着くのじゃ！？ まだ、試召戦争は始まっていないのじゃ」

「まったくだ。みあ、Eクラスを血祭りにあげる前に回復試験だ。昨日の話を聞いたぞ。お前と秀吉のペアも今日の主力だからな。出来れば今日も姫路は使いたくない」

深秋はすでに臨戦態勢になっており、黒い殺意（モ）をはみ出しながら、教室を出て行くこととし、秀吉は慌てて深秋を捕まえると雄二は深秋にその怒りをためておけという。

「今日も私はお休みですか？」

「ああ。姫路に出て貰うのは次からだな。いきなりAクラス戦はつらいだろうからな。使い方になれと貰わないといけないからな。お前達も昨日、明久を見て実感しただろ。点数だけじゃなく、操作性をあげる事が優位になるってな。バカでも試召戦争なら戦えるってな」

瑞希は首を傾げると裕二は苦笑いを浮かべたまま、点数が低いながらも指揮を取り前線を支えた明久を前に出して言う。

「ちよつと、雄二、その言い方はないだろ！！」

「うるさいぞ。バカ久、昨日、活躍したからって頭にのるんじゃないえ」

「バカ雄二、貴様は昨日、まったく役に立たなかったクセになんだ。その態度は」

明久と雄二はお互いを罵倒して睨み合いをはじめ出す。

「……あれは雄二なりに明久を誉めているのではないのかわかる？」

「そうですね。みあちゃん、何をしてるんですか？」

秀吉は明久と雄二の様子にため息を吐くと瑞希は苦笑いを浮かべることが途中で深秋が秀吉のベルトに手をかけているのに気づき声をあげると、

「みあ、何をするつもりじゃ!？」

「ヒデくん、タタミノ上じゃなくなっちゃったけど、一緒にお布団に入る」

「やめ、やめるのじゃ、みあ!？」

深秋はつき物が取れたようでいつもの笑顔になり、秀吉を運んできた布団に押し倒し、

「やっぱり、あのみあを止めるには木下を差し出すのが1番ね」

美波は深秋と秀吉の様子に自分が深秋に捕まらないようにするには何が必要か理解したように頷く。

第38問（後書き）

どうも、作者です。

深秋、全開（爆笑）

美波は深秋を止める手段を思いつきましたが本当にそれで深秋は止まるんでしょうか？（悪笑）

深秋は予想の斜め上を行いますから。（爆笑）

第39問

「宣戦布告って本当にくるの？」

「たぶんな。気にしないで休み時間に少しでも詰めておけよ。明久」

「わかってるよ。でもさ」

申請した回復試験の休憩時間に明久は予想しているEクラスからの宣戦布告の使者がこないため、明久は少し気が抜けてきたようである。

「仕掛けてくるとしたら、今しかないんだよ。Eクラスは部活中心の人間達だから自分達は勉強じゃ、上位クラスに勝てない事は理解してる。けど何かの偶然でFクラスがDクラスに勝った。Fクラス相手なら余裕だったな」

「それはワシらを完全に見下していると言っわけじゃな？」

雄二は点数が減ってないため、回復試験を受ける必要はないはずなのだが、回復試験を受けており、教科書を覗きながら言っくと秀吉は雄二の言っくEクラスの考えが気に入らないようであるが、

「仕方ないだろ。仮に俺がEクラス代表でも仕掛けるなら今日だ。まあ、俺なら昨日、決着がついて直ぐに宣戦布告したけどな」

雄二はあまり、Eクラスは敵ではないと思っくているようである興味なさそうに言っく。

「そうなの？」

「せっかく、上のクラスが負けてくれたんだ。それを倒したクラスだって疲弊してるんだ。回復するヒマなんて与える必要なんてないだろ」

「確かにね」

雄二の説明に美波が納得したように頷くと、

「成績は俺達より少し上で完全に俺達を舐めてる。召喚獣の操作の練習するにはちょうど良い相手だと思わないか？」

「確かにそうだね」

雄二はすでにAクラス戦まで立てていた計画の変更を割り切っているようでニヤリと笑うと明久は頷く。

「だから、みあ、今回は現代文と家庭科は禁止だ。島田の得意な数学で戦うからな。明久は昨日と同じように指揮をとれ」

「……ドウシテ？ ボクハアノキンニクバカどもをゴミクズのようにケチラさないとイケないんだヨ。だから、コンナにカテイかとゲンダイブンをガンバッテいるノニ」

雄二はEクラス相手だと圧倒的な深秋の得意教科を禁止すると深秋は人外化が始まっているため雄二に向けて黒い殺意ものを向けて言うと、

「これをやるから言う事を聞け」

「……シカたないネ。コンカいはコノ、アキにイトひでくんのメイド服の写真で手をうつよ」

雄二は深秋に写真を渡すと深秋の黒い殺意は四散するが、

「それは何!？」

「何でそんなものがあるのじゃ!？」

明久と秀吉は驚きの声をあげる。

「気にするな。些細な事だ」

「アキ兄とヒデくんのメイド服の写真」

雄二は明久は秀吉に気にするなと言い切り、深秋は幸せそうな表情をして写真を覗き込んでいる。

「みあ、その写真を……」

「明久、秀吉、それを奪うとみあは襲いかかってくるぞ」

明久と秀吉は深秋から写真を取り上げようとするが雄二は興味なさそうにあくびをしながら言うと2人は自分達が深秋に押し倒される姿が思い浮かんだようでも固まり、

「……………これはこれで売れる」

康太は幸せそうな深秋の笑顔の写真を撮って行く。

「……ムツツリーニ、すまぬがその今のみあの写真をワシに譲ってくれんかのう？」

「……………一枚、100円と言いたいが秀吉にはいろいろと世話になっっているから50円で良い」

「……………いろいろ世話になっていると言うのが気になるのじゃが、気にしないでおくのじゃ」

秀吉は康太に遠慮がちに声をかけて深秋の写真を購入した時、

「失礼するわ。代表はいるかしら？」

勢いよく教室のドアが開き、Eクラスの代表らしき女子生徒を中心に10名の生徒が教室に入ってきて、

「ようやくお出ましか？ 姫路、目立たないようにしとけよ」

「は、はい」

雄二はニヤリと笑うと瑞希に目立たないようにしろと言うと立ち上がり、Eクラスの宣戦布告の使者を迎え入れる。

第39問（後書き）

どうも、作者です。

深秋の暴走を写真2枚で抑えつける雄二はやっぱり代表なんだと思います。（苦笑）

そして、秀吉がムツツリ商会から写真を買う姿に若干違和感を感じますが気にしない方向で、Eクラスの宣戦布告に雄二はどう対応するんでしょうか？（悪笑）

第40問

「俺が代表の坂本雄二だが、こんな大人数で何のようだ？」

「Eクラス代表の『中林 宏美』よ。私達、EクラスはFクラスに
試召戦争を申し込むわ。開戦は午後からよ」

雄二は面倒そうに使者の元に向かうとEクラス代表の『中林 宏美』
は雄二を指差し、威勢良く雄二に向かい宣戦布告をするが、

「午後から？ 悪いな。俺達は今日1日は回復試験であんたらの相
手をしてるヒマはない」

雄二は宏美に向かい『こいつ、バカじゃないか？』と言いたげに断
ると雄二は自分の席に戻るうとする。

「ちょっと待ちなさい！！ 下位勢力からの宣戦布告は断れないは
ずでしょー！！」

「悪いな。俺達は上を狙ってるんだ。あんたらみたいだ。ザコの相
手をするヒマはないんだ」

宏美は雄二の態度に声をあげるが、雄二はEクラスなど相手をする
ほどヒマじゃないと言い切る。

「まぐれでDクラスに勝ったからって、頭にのるんじゃないわよ！
！ 私達と戦うのを逃げたくせに」

「勘違いするなよ。俺達が最初Dクラスを狙ったのはEクラスと戦

つてもなんの特もないからだ。上位クラスだとは言っても筋肉バカの集まりだろ。作戦も考えられないし、難しい作戦を遂行するだけの容量もない。そんなのを相手するだけ無駄だろ」

宏美は雄二に向かい何を勘違いしてるのかFクラスはEクラスとの試召戦争を避けたと言うが雄二は呆れたようなため息を吐き、宏美を挑発すると、

「バカのくせに私達をバカにするんじゃないわよ!!」

「バカ? 知ってるか。Eクラスはスポーツをやってるから成績が悪いだ。部活に打ち込んでるから仕方ないだ。違うだろ。バカにスポーツはできない。違うな。バカじゃ、スポーツを出来ても作戦や戦術を覚えられないから、勝てないんだよ」

宏美は雄二の挑発にのると雄二はさらに宏美の火に油を流し込む。

「……雄二はあんなに中林さんを挑発する必要あるのかな?」

「……雄二の事じゃ、何か考えがあるのじゃろう」

明久は雄二と宏美の様子を見て秀吉に聞くと秀吉は雄二には何か考えがあるのではないかと言う。

「俺達は確かにバカかも知れないが、バカだと認めている。スポーツのせいにしてるなんてバカな上にみつともなくないか?」

「坂本!! 許さないわ!! あんた達みたいなまぐれで勝つたくせに調子にのったバカが私達は嫌いなもの!! 努力も何もしないくせにまぐれで勝つただけで頭にのるんじゃないわよ!!」

雄二の挑発に宏美は激怒して雄二を怒鳴りつけるとEクラスの生徒は宏美を押さえつけるが敵意を向けた視線で雄二を睨みつけているが対称的に雄二の口元は小さくゆるんでいる。

「まぐれ？ まぐれだって言うなら、俺達が回復試験を受け終えて至って勝てるんだろ。なのに、回復試験も待たずに宣戦布告か？ バカでみっともない上に卑怯者か？ スポーツマンシップって言葉を知ってるか？」

「やってやるわよ。あんた達が回復試験受けたってたかが知れてるって事を思い知らせてあげるわ！！」

雄二の挑発に宏美はブチ切れたようで雄二を怒鳴りつけると、

「待てよ。俺達は受けてやる身だぞ。お願いするなら、お願いする態度があるだろ。頭くらい下げたらどうだ？ うちがDクラスに宣戦布告した時はそれくらい常識としてやってきたぞ。FクラスをバカにするEクラスの代表様はそれくらいはできないのか？」

雄二は宏美に向かい頭を下げると言う。

「……ユウジくん、ソレナラこのカツコウでして貰おうヨ」

「ちょっと、みあ！？ はみ出てる！？ はみ出てるから落ち着いて！？」

深秋はその姿を見てメイド服を手に言うと明久は深秋を引っ張り戻す。

「……まあ、良いか。なら、開戦は回復試験の終わった明日の朝からで良いな」

「ええ。受けてたつわ」

雄二は深秋が連れ戻される様子に苦笑いを浮かべながらも直ぐに表情を戻すと宏美は頷くと、

「首を洗ってまっぴらなさい!!」

宏美は捨て台詞を吐いてEクラスの生徒を引き連れて帰って行く。

第40問（後書き）

どうも、作者です。

雄二の挑発は物足りなかったでしょうか？（爆笑）

久しぶりの雄二の出番ですが深秋は黒いものがはみ出ているため、撮影はなしです。

さあ、宣戦布告を受けたFクラス。次は開戦？（悪笑）

第41問

「上手くいったな」

「雄二は何がしたかったの？ あんなに挑発して」

雄二は宏美とEクラスの生徒が戻って言ったのを見てニヤリと笑うと明久は雄二に挑発の意味を聞くと、

「簡単な事だ。回復試験が終わるまでの時間稼ぎと作戦を立てる時間を作るためだ。そんな事もわからないのか？」

雄二はため息を吐く。

「だとしても、やりすぎじゃない。えーと、中林さんだけ？ そうとう怒ってたわよ」

「まあな。その分、こっちは作戦を立てやすくなっただろ。たぶん、明日はEクラスは総攻撃で俺の首を獲りにくるだろうな」

美波はため息を吐くと雄二はニヤリと笑い、

「明久、そっちの指揮はお前に任せるぞ。Dクラスより、弱い相手だ。力攻めなら昨日のお前なら、どうにかなるだろ？」

明久に前線の指示を任せると言う。

「えっ！？ 僕？」

「ああ、俺は俺でやりたい事があるんでな。島田は俺と来てもらおう。康太は前線に出ないで情報収集に働いて貰うからな。明久には秀吉とみあをつける。姫路はここに残って隠れている」

明久は雄二が自分に指揮を任せた事に驚きの声をあげるが雄二は気にする事なく指示を出す、

「少しでも点数を上げるように努力しろよ。あの筋肉女は俺達をバカにしてるんだからな。何より、今回、活躍すればみあの評価が上がるぞ」

『『『!?!?』』』』

Dクラスの設備を獲った事で落ちかけていたクラスメートのやる気を煽る。

「……雄二、みあをエサに使わないでくれないかな？」

「全くじゃ」

明久は雄二の言葉にため息を吐くと秀吉は雄二を睨みつける。

「勝つためには何でも使わないといけないだろ。あいつらのやる気しだいで姫路を出さないといけなくなるんだからな」

雄二は2人の反応にため息を吐くと、

「……それにあいつら以上に秀吉が活躍すれば良いんだろ」

「べ、別にワシは!?!?」

秀吉を見てニヤリと笑うと秀吉は顔を真っ赤にして否定しようとする。

「別に隠すな。今更だしな。ちゃんと、みあを守らないとあいつらに取られる……事はないと思うけどな」

「ヒデくんのメイド服に巫女服」

雄二は康太から新たな写真を渡されて静かになっている深秋を見てため息を吐くと、

「なぜ、増えておるのじゃ!? ワシはそんなものを着た覚えはないのじゃ!?」

秀吉は深秋の手の中にある写真に驚きの声を上げる。

「まあ、秀吉も気にしないでこんなに似合ってるんだからさ」

「……………なかなかの売れ筋」

明久は深秋と同じように秀吉の写真を握りしめながら言うと康太は頷くが、

「そつ言う問題ではないのじゃ!?」

「木下、うるさいわよ。そろそろ、鐘がなるから座りなさいよ」

秀吉は声を上げて明久と康太から写真を取り上げようとするが美波に座るように言われる。

「しかし、ワシは男なのじゃ。あんな写真は見られたくないのじゃ……」

「秀吉、試召戦争で男らしいところを見せれば評価も変わるんじゃないのか？」

秀吉は納得がいかないとうつぶくと雄二が苦笑いを浮かべながら秀吉をフォローし、

「そ、そうじゃのう。明日の試召戦争でワシが男じゃと言う事を証明して見せるのじゃ……」

秀吉は明日のEクラスとの試召戦争に新たな決意をして挑む。

第41問（後書き）

どうも、作者です。

雄二は何を考えているんでしょうか？

良い事は考えて無いだろうけど。（悪笑）

第42問

「終わった」

「うむ」

申請していた回復試験も終わり、明久は思いっきり体を伸ばすと秀吉も回復試験が終わり安心したようで頷く。

「吉井、木下は調子はどうだったの？」

「うむ。昨日、帰ってから、復習したところが出てのう。振り分け試験よりは良さそうじゃ」

「僕もだよ」

美波は明久と秀吉にテストの出来を聞くと明久と秀吉は振り分け試験よりは良さそうと答えるが、

「明久、すぐにバレる嘘を吐くな」

すぐに雄二が明久の言葉だけを否定する。

「雄二、ちょっと待ってよ。何で、僕の言葉を疑うんだよ!？」

「当然だろ」

明久は雄二の言葉に反論するが雄二は聞く耳を持つ気はなく、

「みんな、聞いてくれ。回復試験、ご苦労だった。さっきも話した通り、Eクラスとの試召戦争は明日の朝からだ。各自、今日はゆっくりと休む事」

「そうじゃのう。昨日、初めて、長い時間、召喚獣を使ったせいから少し疲れが抜けてない気はするしのう」

「そうね」

「そうかな？ 僕はそんな感じはしないけど」

クラスメイト達にしっかりと休むように言うと秀吉と美波は雄二の休めと言う指示をありがたいと頷くが明久は1人で首を傾げている。

「召喚獣を長時間使って疲れてないのはお前とみあくらいだ。お前から2人は観察処分者の仕事でいつも使ってるから気にならないだろうけどな」

「うーん。そんなものかな？」

雄二は明久に観察処分者にある利点だと言うが明久は意味がわからないように首を傾げていると、

「解散するぞ。いつまでも教室にいても仕方ないしな」

雄二が各自帰宅しろと言った時、

「待って、ゆうじくん」

深秋が何か話す事があると言いたげに手を上げる。

「なんだ？」

「まだ、やる事が残っているよ。トテも重要なことだよ」

雄二が深秋に聞き返すと深秋の背後からは黒いものはみ出し始めており、

「木下、後は任せたわよ！？」

「し、島田！？ いきなり何をするのじゃ！？ …… みあ、お主は何を考えておるのじゃ？」

「ヒデくんのメイド服？ シャしんだけじゃ満足できないヨ」

美波は深秋に秀吉を押すと深秋は秀吉と雄二から貰った秀吉のメイド服の写真を見比べると、どうやら秀吉にターゲットを変えたようで、美波はその間に全力で逃げ出そうとするが、

「……失礼します。吉井深秋は……お姉さま」

「み、美春！？ 止めて、抱きつかないで！？ ウチは逃げないとダメなの！？」

律儀にも深秋との約束を守りにきたであろう美春にぶつかると美波の姿に美春の変なメーターは一気にレッドゾーンに突入する。

「清水さん？ どうしたの？」

「……おい。明久、みあから秀吉を助けなくて良いのか？」

明久は深秋に秀吉が襲われているのを見ないようにして美春にFクラスを訪れた理由を聞くと雄二がため息を吐きながら、秀吉を助けると言っ。

「雄二が助けに行ったら、雄二のメイド服姿なら、霧島さんも喜ぶよ」

「……秀吉なら、大丈夫だな」

明久は雄二に向かい自分で止めろと言つと雄二は秀吉を見捨てる。

「ヒデくん、オキがえシヨウね」

「ま、待つのはじゃ。ワシは男なのじゃ!? そ、それにそう言う服はみあが着た方が可愛いのはじゃ!」

深秋の手が秀吉のベルトにかかった時、秀吉が深秋に向かい叫ぶと、

「……………ふ、ふしゅう!?」

「と、止まったのじゃ」

秀吉の言葉に深秋の顔は真っ赤に染まり、煙をあげる。

「何があつたんだ?」

「わかんないけど、みあ? って、あつっ!」

雄二は深秋の様子に首を傾げると明久は深秋の体に触れると深秋の

体は熱い。

「ど、ど、どうしよう!？」

「明久、落ち着くのじゃ。ま、まずは何をすれば良いのじゃ!？」

「みあちゃん!? 大丈夫ですか!？」

「……一先ず、落ち着け。まずは保健室に連れて行くぞ」

明久、秀吉、瑞希が深秋の様子に慌てると雄二は3人に落ち着けと言うと冷静に深秋を保健室に連れて行くと言い、

「島田、清水、今日はみあは無理そうだから、帰れ。明久、1人で運べるか？」

「う、うん。大丈夫だよ」

明久は深秋をおぶり、保健室に向かい歩き出し、雄二、秀吉、瑞希は明久の後を付いて行くと、

「待って。ウチも行くわよ!？」

「待ってください。お姉さま」

美波と美春も保健室に続く。

第42問（後書き）

どうも、作者です。

深秋倒れる？（爆笑）

秀吉の言葉が原因？

それとも他に原因が？

美波と美春の撮影会は流れたのかな？（悪笑）

第43問

「風邪ですか？」

『そうね。吉井くん、あなたは一緒にいたのに気づかなかったの？』

保健室に深秋を運ぶと養護教諭は深秋の診断をすると明久を見てた
め息を吐く。

「……………すみません」

『別にあなたを責めているわけじゃないわ。ここまで無理をした吉井さんにも問題があるんだからね。とりあえず、今日は帰りなさい。薬は市販のヤツしかないけど、持ってく？』

「……………すみません」

明久はベッドで横になり、苦しそうにしている深秋の顔を心配そうに覗いており、養護教諭の声は耳に入っていないように見える。

『……………吉井くん、聞いているの？』

「すみません。連れて帰ります。薬も貰って良いですか？」

養護教諭は明久の様子にため息を吐くと一緒に話を聞いていた雄二が答え、

「明久、帰るぞ。俺もみあを運ぶの手伝うから」

「……」

明久の肩を叩くが、明久の反応は薄い。

「やれやれ」

「……雄二、みあは大丈夫？」

「失礼します」

雄二は明久の様子にため息を吐いた時、保健室に翔子と優子が顔を出す。

「姉上に霧島？ どうしたのじゃ？」

「昼にみあに会った時、調子悪そうだったから、代表とFクラスに行ったら、保健室に行っただって聞いたから」

秀吉は優子に保健室にきた理由を聞くと翔子と優子は深秋の体調が悪い事に気づいていたようで様子を見にきたと言う。

「姉上、みあの調子が悪そうじゃったと言うのは本当なのか？」

「何、秀吉、あんた、気づいてなかったの？ あんなにおかしいものがはみ出たのに？」

「……あれは熱暴走なのですか？」

「って事は昨日から調子が悪かったって事？」

秀吉が優子に聞くと優子は深秋の人外化は調子が悪い証拠だと言つと美春と美波は顔をひきつらせる。

「……みあは頑張り屋さんだから」

「……うん」

翔子はベッドで横になっている深秋の頭を優しく撫でると明久は頷くが深秋の不調に気づけなかった事を後悔しているようである。

「……吉井、そんな顔をしてるとみあが心配する」

「うん。そうだね」

翔子は明久の表情に明久に声をかけると明久は笑顔を見せて頷くがその笑顔には力がなく、

「吉井くん……」

「吉井……」

瑞希と美波は心配そうに明久の名前を呼ぶ。

「……明久」

「何？」

雄二は明久の様子にため息を吐くが明久の反応は薄く、

「参ったのう」

秀吉は眉間にしわを寄せる。

「……吉井、みあは今日は私の家に泊める。雄二、みあを運ぶのを手伝って」

「代表、いきなり何を言い出すんですか？」

「そつだぞ。翔子、いきなり」

翔子は明久の様子を見て深秋を連れて帰ると言つと雄二と翔子は慌てるが、

「……今の吉井にはみあを任せられない。みあから聞いていた吉井とは別人」

翔子はそう言つと深秋を抱えて歩き出そうとする。

「霧島さん、待って!?!」

「……待たない。雄二」

明久は慌てて翔子を止めようとするが翔子は雄二に手伝えと言つ。

「待て。翔子、明久はみあの兄貴なんだ。明久の言う事も聞け」

「……聞かない。今の吉井にはみあを任せられないし、みあの看病で吉井が体調を崩したら、みあは自分を責めるから」

雄二はため息を吐きながら翔子を止めようとするが、翔子は明久の

ためではなく、深秋のためだと言う。

「で、でも」

「……みあが心配なら、吉井もくれば良い。その場合は雄二も強制で私の家にお泊まり」

明久の様子に翔子は妥協案を出すかなぜか雄二も巻き込まれている。

「……おい。翔子、どんな条件だ？」

「……妻を守るのは夫の役目」

「……おかしな事を言うな。だいたい、今の明久にそんな余裕はない」

雄二はため息を吐くが、

「……雄二、お願いできないかな？」

明久は深秋が倒れた事がかなり堪えているようで雄二に頭を下げる。

「……つたくよ。今回だけだ。その代わりに、仮に明日、みあの調子が悪くても腑抜けた事だけはするなよ」

「うん。ありがとう」

雄二は明久の様子にため息を吐きながら頷くと明久は雄二に頭を下げ、

「霧島さん、みあは僕が運ぶよ」

「……わかった。雄二、吉井とみあの鞆」

「ああ。と言う事で俺達は帰るからな」

明久は翔子から深秋を受け取ると4人は保健室を出て行く。

第43問（後書き）

どうも、作者です。

オリジナル展開に突入しておいて今更ですが、つくづく原作に沿えません。（爆笑）

深秋の人外化は風邪の影響でした。

風邪だって気づかねえよ。（爆笑）

でも、それに気づく優子と翔子は深秋と本当に仲が良いんだな。とも思います。

第44問

「おい。明久、みあの看病なら翔子に任せて風呂に入ってこい」

「でも……」

「さつさと行け。いくら何でもお前とみあの2枚落ちで明日は勝てないんだ。少し頭を冷やしてこい」

雄二は先に風呂を借りたようで頭を拭きながら、深秋から離れようとしてない明久に言うが明久の反応は悪いため、雄二は無理やり、明久を部屋の外に放り出す。

「……雄二、吉井の事を心配しすぎ……浮気？」

「……翔子、わけのわからん事を言うな。それでみあの様子はどうか？」

翔子のズレた発言に雄二はため息を吐くと翔子に深秋の様子を聞く。

「……まだ熱は高いけど、薬が効いてきたみたい」

「そうか」

翔子も深秋の事が心配なようで彼女の額を優しく撫でながら言うと雄二は頷くと、

「……みあは私に任せて、雄二は吉井のフォロー」

「……ったく、めんどろだな」

翔子は明久は雄二に任せると笑顔で言うと雄二はため息を吐きながらも部屋を出て行く。

(……僕は何をやってるんだろう？ みあの体調にも気づかないで心配ばかりさせて)

「おい。風呂に入れと言わなかったか？」

明久は雄二から部屋を追い出されたのにもかかわらず、足は進まなかったようで部屋からでた雄二は明久を見つけてため息を吐く。

「っん……」

「……ったくよ。こい」

雄二は今まで見た事のない明久の様子にため息を明久の首をつかみ引きずって行く。

「こころ辺で良いか。明久、話がある座れ」

「……」

雄二は庭の横の縁側で止まると自分は縁側に腰を下ろし、明久にも腰を下ろすように言うと明久は何も言わずに腰を下ろす。

「……おい。お前は何をやってるんだ？」

「何、やってるんだろう？ 僕はみあの兄さんなのにみあの体調が

悪いのに気づけないなんて」

雄二は明久に聞くが明久の口からは後悔しか出てこない。

「おい……」

「おかしいよね。木下さんや霧島さんは気づけたのに……僕は」

「……なあ、明久、みあがお前にバレないようにしてたのはお前に心配かけたくないからじゃないのか？ それなのに、お前がそれでどうするんだよ？」

明久は肩を震わせて言うと雄二はいつものように明久をバカにする事はせずに明久に聞く。

「雄二、わかってるんだよ。僕が落ち込んでたって何も変わらないし、どうにもならないって事も、でも……」

「……なあ、明久、お前はバカだから、絶対に有り得ないんだけど、風邪をひいたら正直にみあに言うか？」

雄二はため息を吐きながら明久に確認するように聞くと、

「……言わないと思う。みあは僕の看病をするって言って、自分の体を壊すから」

「みあも同じだったんだろ。まったく、面倒なくらいに似た兄妹だな」

明久は深秋と同じように自分も風邪をひいたのを隠すと言い、雄二は明久の答えを予測していたようで大きなため息を吐く。

「みあはお前に心配させたくないだけで倒れるまで、隠すか？ 俺が知ってるみあはどこかでお前に甘えようとしたはずだ。それなのに、今回はそんな素振りを見せなかったんだろ。翔子や秀吉の姉貴は気づいたのに、お前は気づかなかつた。お前に心配させたくないだけなら、みあは本当に倒れるまで無理するのか？ 俺が知る限り、お前もみあも自分のためにそこまで無理はしないぞ」

「……………」

雄二は明久の胸ぐらをつかんで言うと明久は雄二から視線を逸らし、

「……………わかってるよ。みあが僕だけを騙しておきたいなら、姫路さんが気づいたはずなんだ。だから、みあが無理をしたのは試召戦争のためだって、姫路さんを心配させたくないためだって」

明久はすでに深秋の考えている事はわかっていると言う。

「なら、どうするかなんてわかってるんだろ。試召戦争を始めたのはお前だ。そのお前がそんな調子でやったら負けるのはバカなお前だってわかるだろ」

「……………わかってるよ。だけど、だからこそ。このままじゃダメなんだよ」

雄二の言葉に明久は唇を噛む。

「……………明久？」

「……………雄二、ゴメン。僕は試召戦争を軽い気持ちで考えてたんだ。」

それも作戦とか面倒な事は雄二に丸投げしようとした。それが崩れたから、みあは無理をしたんだ」

明久の目には後悔以外にも何かを決意したような光が灯る。

「雄二、ゴメン。雄二は学力以外でAクラスに勝ちたいって言うだけど……僕はみあや雄二、姫路さん、秀吉、ムツツリー二、島田さん、みんなで勝ちたいんだ」

「……おい。俺達はFクラスだぞ。策もなしにAクラスまでたどり着けると思ってるのか？」

雄二は明久の言葉に無謀な事を言うなとため息を吐くが、

「わかってるよ。でも、少なくとも僕らに学力ちからがなければ今回みに狙われて終わりだよ。それに僕はみあの兄さんなんだ。みあの誇る兄さんにならないといけないんだ」

「……なんか、結局はみあの手のひらで踊らされてるみたいだな」

明久は真っ直ぐと雄二を見て言い、雄二はため息を吐く。

「やれやれ。そっちは茨の道だぞ」

「覚悟の上だよ」

「まあ、問題は他のヤツらをどう焚き付けるかだな」

「雄二、良いの？」

「仕方ないだろ。お前がそんな事を言い出すと俺の作戦はことごとくつぶされるからな。それに……俺もみあと約束している事があるからな」

雄二は面倒そうに頭を掻くがその口元はこれから起きる事を思い浮かべているのか小さくゆるんでいる。

第44問（後書き）

どうも、作者です。

明久改造計画進行中。（爆笑）

明久軍師化計画もそうですが、うちの明久には強くなつと貰おうと思います。深秋の風邪はその1つのエサです。

明久は誰かのために戦える人間ですから、強くなれる資質は持っていると思つてます。過大評価と言われるかも知れませんが。（苦笑）

後は最近、コラボだけじゃなく、ifに挑戦する小説家さんが増えてきて思いました。

俺にコラボ書いてもいいとか迂闊な事を言う小説家さんがいるから、みんなに悪影響が。（注 自意識過剰）

よそのキャラクターを借りるにしても深秋を使いたいと言うチャレンジャーはいないでしょうから、この暴走娘を使えるもんなら使ってみる！とか挑戦状を叩きつけてみよう。

嘘です。怒らないください。

第45問

「……吉井、みあが話をしたいって」

「みあが？　すぐに行くよ」

「……私は先に戻っている」

明久が雄二と話を終わらせ、風呂からあがってきてバスタオルで頭を拭いていると翔子が明久を呼びにくる。

「きたか？」

「うん。ごめん。みあ、雄二、霧島さん」

明久が深秋の横になっている部屋に入ると雄二も部屋で明久がくるのを待っている。

「みあ、大丈夫？」

「……アキ兄、ごめんなさい」

明久は深秋の顔を覗き込むと深秋の不安を払うように笑顔を見せて深秋の頭を優しく撫でると深秋は明久に謝る。

「謝らないといけないのは僕だよ。みあに無理させちゃってゴメンね」

「……違うよ。アキ兄は悪くないよ」

明久は深秋の体調が悪かった事を気づけなかった事を謝ると深秋は明久は悪くないと言い、

「明日までにしっかりと治すから、少しだけ手を握って貰って良い？」

明久に甘えるような声を出す。

「それくらいなら、いくらでも良いよ」

「……うん。ねえ、アキ兄、ゆうじくん」

明久は深秋の願いを聞き入れて深秋の手を握り締めると深秋は明久と雄二を呼ぶと、

「……みあの手を握るのは私」

「……別に取らねえよ」

翔子は明久が握っている手とは逆の深秋の手を握り締めると雄二は苦笑いを浮かべ、

「みあ、明日は大丈夫そうか？」

「……大丈夫だよ。絶対に行くよ」

深秋に明日は登校できそうか聞くと深秋は心配をかけないようにと笑顔で言うがその笑顔には力はない。

「みあ、無理しなくて良いんだぞ。明日はお前がいなくても何とかなるから、しつかり治して次の戦いに備えて欲しいんだ」

「……ボクはEクラスには負けたく無いんだよ」

雄二は本音を言えば深秋がいなくてきついなとは思っているが、深秋に心配させないためにゆつくりと休めと言っが、深秋はEクラス相手には負けたくないと言う。

「みあ、大丈夫だよ。ちゃんとEクラスにはコスプレをさせるように雄二が戦後処理をするから」

「……吉井、みあがEクラスに負けたくないのは、そんな事じゃない」

明久は深秋の希望通りにするから、ゆつくり休めと言っが翔子は明久が考えている事は間違っっていると説くと、

「……みあがEクラスに負けたくないのはクラスのみみんながバカにされたから、みんなが協力してDクラスに勝ったのに、事実を認めずにFクラスをバカにしたから」

翔子は深秋がEクラスに負けたくない理由を明久に話す。

「……えーと」

「みあ、お前もちゃんとテレるんだな」

「それはボクだっが、女の子だし……」

翔子に自分の考えを言われて視線を逸らすと雄二は珍しいものを見たと言いたげに笑い、深秋は小さく頷く。

「心配するな。お前が抜けたって、俺達は負けない。言っただろ。『俺が勝たせてやる』って、それに昨日は言えなかったけどな。うちのクラスは『最強』だ」

「……………うん」

雄二は深秋の珍しい反応にくすりと笑うと彼女の頭を乱暴に撫でると深秋は頷くと、

「……………雄二、浮気は許さない」

「ちよつと待て!？ 今は違うだろおお!？」

翔子の手が雄二の頭をしっかりとつかみアイアンクローが綺麗にきまる。

「みあ」

「……………アキ兄、明日、ボクが学校にいけなかったらみんなをお願いね」

「わかってるよ。みあがない穴は僕が埋めるから、みあは風邪を治す事を考えて」

深秋の言葉に明久は頷き、深秋を心配するように言うと、

「アキ兄、約束だよ」

「うん。約束するよ。みあがこれなくてもみんなで勝つよ」

明久は深秋にEクラス戦の勝利を約束し、2人は指切りを交わす。

「雄二、霧島さん、悪いけど僕は先に寝かせて貰うね」

「ま、待て。明久、た、助けろおおお!？」

「……みあの看病は私に任せて、吉井はゆっくり休んで」

明久は部屋を寝ると言うと、

「アキ兄、お休みのチュウは？」

「しないから!？」

深秋は明久の背中に向かい言うと明久は声をあげる。

第45問（後書き）

どうも、作者です。

皆さんの目には弱ったどう映ったでしょうか？（苦笑）

萌えましたか？（爆笑）

第46問

「おはよう」

明久と雄二が教室に入ると深秋の体調を心配しているようでクラスメートの視線は2人に集まるが、

「……みあちゃんがない」

「そ、そんな」

深秋の体調は元に戻らず、本日のEクラス戦は深秋を抜かしての戦いになるとクラスメート達は理解したようで、深秋の応援がない事に膝を落とす。

「吉井くん、坂本くん、みあちゃんは？」

「風邪、良くならなかったの？」

「……やはり、無理だったようじゃな」

明久と雄二が席に座ると秀吉、瑞希、美波の3人が2人に声をかけるとき、明久と雄二の次の言葉を待つように教室は静まり返る。

「ここで話すよりはまとめて話した方が早いな。後、何人、教室に来てないんだ？」

「……みあを抜かしてそろっている」

『みあちゃんの体調を聞きたかったからな』

雄二はため息を吐きながら、全員集まっているか確認すると康太が全員いると言くと、教室から深秋の事を心配してみんな早く集まったと言っ声が聞こえる。

「明久、前に行くぞ」

「えっ！？ 僕も？」

「お前が始めないでどうするんだよ」

「……そうだね」

雄二は立ち上がると明久に教壇まで移動すると言つと明久は真剣な表情をして2人で教壇まで歩く。

「おし、福原先生が来るまでに今の状況を説明するぞ。まずはお前らも気づいている通り、今日はみあが不参加だ。熱もだいぶ下がったんだけどな。大事をとって休ませた」

「なら、みあは大丈夫なのじゃな？」

「うん。一昨日と昨日みたく無理をしたら困るし、霧島さんが1日、ついててくれるって」

明久と雄二は深秋を翔子に任せてきたと言つと改めて、Fクラスのムードメーカーであり、攻撃の要でもある深秋の不参加に重い空気になり始める。

「……良いか。みあがいない事は仕方ない事だ。次を獲りに行くのにみあは欠かせないからな。大事をとって休ませたんだ」

『だけど、みあちゃんがないと俺達は……』

雄二はクラスメイト達の不安を追い払おうとするがクラスメイト達の空気は重い。

「大丈夫だよ。一昨日だって、みあがなくてもDクラスの攻撃を防げたんだ。召喚獣の扱い方だってなれてきたんだ。できるよ」

「……とは言ってもね」

明久は重くなっている空気を振り払うように声をあげるが、やり方に多少問題があつたが深秋が戦況を何度も変えてきたため、美波は不安だと口にする。

「……だけど、やらないといけないんだ。僕と雄二はみあと約束してきたんだ。みあがいなくても勝ってくるって」

「負けるとみあは自分を責めるかもな」

明久は真剣な表情で深秋に勝つと約束してきたと言つと雄二はため息を吐きながら言つと、

「そんな事はさせんのじゃ……！」

秀吉は深秋のためにも負けられないと叫ぶ。

『俺達だって、みあちゃんが落ち込む姿なんか見たくないけどな……』

……』

「……お前らは負けた時の言い訳をみあに押し付けるつもりか？」

『……』

秀吉の声に何人かは賛同するが、やはり、指揮はあがらなく、雄二は目つきを鋭くして『深秋に責任を押し付けるな』と言うと、教室は静まり返る。

「……白状させて貰うとな。俺はこのクラスでAクラスに勝つには謀略や策略を張り巡らせて成績を上げなくても勝つ方法を考えてた」
『なら、それで……』

「だけどな。それをするにはこの教室を手に入れちまうと無理なんだ。俺は設備交換免除でいろいろやって貰おうと思ってたんだよな」

雄二は最初の作戦はもう使えないと言うと苦笑いを浮かべて言うと、

「次の作戦を考え付くまで負けるわけにはいかないんだ。この教室を死守すれば今度こそAクラスまでの道筋を立ててやる。俺達の目標はなんだ。死に物狂いで欲しかったのはこんな教室か？ 違うだろ！！」

真面目な表情をして激を飛ばす。

「……ねえ。昨日、みあがEクラスには負けたくないって言ったのみんなは覚えてる？」

「……コスプレをバカにしたってやつでしょ」

雄二が激を飛ばすが指揮はあまりあがらなく、明久は昨日の深秋がEクラスにどうして負けたくないと言ったかを聞くと美波は結果として自分も深秋を怒らせているため、申し訳なさそうに言う。

「……僕も最初はそうだと思ってたんだ。だけどね。昨日、霧島さんに言われたんだ。みあがEクラスに負けたくないのは僕らをバカにしたからだって……僕は負けたくない。確かに僕は妹のみあが体調を崩しているのにも気づけない大バカだよ。だけど、みあの思いまで踏みにじるようにはなりたくない。だから、みんなの力を貸して欲しい」

「吉井くん……」

明久は深秋との約束を守りたいと言うとクラスメート達に向かい頭を下げると明久の言葉に教室内は静まり返る。

「……負けた時に責任取りたくないってのもわかる。だからこそ、代表の俺がいるんだ。負けたら、俺を罵れば良い。だけどな。みあのせいにはするな。今日はみあの応援もないしな。正直、勝っても俺達には得はない。だけど、みあのためにも負けられない勝負だ。気合いを入れるー!!」

『『おおー!!』』

雄二は責任は自分が取ると言う時半ばヤケクソになっているのかクラスメート達は雄二の声に続く。

「良いか。今日はクラスを4つに分ける1つは俺、昨日、言った通

「島田は俺についてきてくれ」

「うん」

「残りの部隊長は明久、秀吉、須川できるな……違うな。意地でもやれ。姫路、お前は明久と一緒にだ」

「はい」

「部隊長の3人は一昨日の話を聞いて俺以外に部隊を動かせると思うから任せるんだ。しくじるなよ」

雄二が部隊編成をした後に福原教諭が教室に入ってきてHRに始まる。

第46問（後書き）

どうも、作者です。

深秋を欠いてのEクラス戦、明久達は無事に勝利をおさめる事ができるんでしょうか？

第47問

「姫路さん、大丈夫？」

「は、はい。大丈夫です」

明久は雄二から任せられた部隊を率いてEクラスとの開戦を待っているなか、試召戦争初参戦の瑞希は不安そうな表情をしている。

「姫路、肩の力を抜くのじゃ。緊張しておると普段の力が出せんじゃ」

「そ、そんな事を言われても、それに木下くんだって、緊張しているじゃないですか？」

「そ、そんな事はないのじゃ」

秀吉はガチガチの瑞希に声をかけるが秀吉も部隊長と言う立場に緊張しているように見える。

「大丈夫だよ。秀吉はDクラスの試召戦争で上手くやってたじゃないか」

「上手くやってたと言われてものう。この間はワシはみあと共に前線で戦っておったのじゃ。指揮をとれるかは不安なのじゃ」

明久は秀吉の様子に落ち着かせようとと言うと秀吉は本音を漏らす。

「大丈夫だよ。秀吉はみあとへ攻撃指示を出してたでしょ。あの攻撃

指示は的確だったし、全体を見る目はあると思うよ」

「う、うむ。そう言われるとできそうな気がするのじゃ」

明久は秀吉なら、問題ないと言うと秀吉は照れくさそうに頷き、

「姫路さんは今日は無理をしなくて良いよ。今日はなるべく、僕達が戦うから、討ち漏らすような事があつたらお願いするよ」

「そ、それで良いんですか？」

明久は瑞希に今日の役割を話すと瑞希はあまり重要な事を言われなかったため、呆気に取られたようできょんとする。

「うん。今日は僕達が召喚獣の扱い方になれるためだからね。姫路さんに見ていて貰いたいのは僕や秀吉、須藤さんの指示の仕方だよ。雄二もそのつもりで、姫路さんを僕達と一緒にしたんだろうしね」

「そうなんですか？」

明久は苦笑いを浮かべながら、雄二が瑞希を前線に配置した意味を話すと瑞希は首を傾げるが、

「うん。たぶん、この先、上を狙うなら、雄二から指示がない時でもみんなに指示を出せる人間がいけないといけないんだ。時間をかければ各自の適性を見てできるけど、僕達はもう戦いを始めてしまった。戻る事ができないなら、戦いながらも適性を見極めないといけないんだ」

明久は苦笑いを浮かべたまま言う。

「それでは、ワシはみなとの戦い方だけではなく、適性も見ないといけんと言っのじゃな。大変な役割を与えられたものじゃ」

「そうだね。でも」

「うむ。みあのためにも負けられんのじゃ」

秀吉は自分に与えられた役割の重要さにため息を吐くが明久の言いたい事もわかるよううで真剣な表情をすると、

「明久、それでワシらは何をすれば良いのじゃ？ 雄二が1部隊を率いておるのにも意味があるのであろう？」

雄二の作戦について聞く。

「えーと、たぶん、何だけど、Eクラスは僕達を舐めてるから作戦とか考えずにごり押しで攻めてくると思うんだ。だから、最初はこちらも力押しで攻めて」

「力押しじゃと？ それなら、部隊を3つに分ける意味など必要ないのではないかい？」

明久の言い始めた作戦に秀吉は声をあげると、

「まったくだ。力押しなら指揮は吉井がとつた方が楽だろ」

もう1人の部隊長である『須川 亮』が秀吉の意見に賛成する。

「だから、適性を見るためもあるんだよ。Dクラス戦は初めての試

召戦争だったし、指揮は1つにした方が良かったけど、さっきも言
ったけどこれからはそうも行かないからね……」

明久は苦笑いを浮かべたまま、もう1度、クラスメート達の適性を
見るためだと言つと、

「最初は力押しで階段を過ぎた場所まで前線を押し進める。そこで
しばらく戦線を維持したのち、Eクラス代表の中林さんがしびれを
切らして前線に出てきたら、戦況を維持したままゆっくりと後退。
教室前まで下がるよ。退き時は僕が指示するから慌てずに対処して
ね」

真面目な表情をして自分達がやるべき事を伝える。

「うむ。上手くできるかはわからんがやって見るのじゃ」

「そうだな」

明久の言葉に秀吉と亮が頷くと、

「それじゃあ、みんな行くよ!!」

「「「おお!!」「」」

明久の言葉でFクラスは前に進み始める。

第47問（後書き）

どうも、作者です。

始まったEクラス戦。

アタッカー深秋の不在に4つに分けられたFクラス。

明久と雄二の作戦は？

まあ、ぶっちゃけ、『釣りのぶせ』のつもりです。

わからない人は戦国時代の島津家を勉強して見てください。

第48問

Eクラスとの試召戦争が始まり、雄二は黒板に書いた学園の見取り図を見て何かを考えているようでじっとしていると、

「ねえ。坂本、ウチらは何をするの？ 吉井達を助けに行くなら早めにしないと瑞希がいると言ってもウチらより、成績は良いわけだし」

「……………まあ、少し待て」

美波は動こうとしない雄二に声をかけると雄二は美波に待つように言った時、

「……………雄二、心配していた伏兵は確認されなかった」

康太が雄二から何か調べるように頼まれていたようで教室に戻ってきて報告する。

「……………そうか。明久達、先行部隊はどこまで進んでいる？」

「……………もう少しで階段を過ぎてEクラスの教室の前に着く。Eクラスが俺達を舐めているせいか、明久、秀吉、須川の指示もあって戦況は徐々にこちらが押している」

「……………やるじゃないか。3人も、明久も詳しく言わなかったはずなのに作戦を理解しているな」

雄二は康太からの報告を聞いて自分の計算より、上手く進んでいる

と思ったようにニヤリと笑うと、

「俺達はこれから教室を捨て、階段前まで移動する。移動後は部隊をさらに2つに分ける。1つは俺、もう1つは島田に指揮を任せる」

「ちょっと、いきなり、何を言うのよ!? ただでさえ兵力が減ってるのを分けてどうするのよ。それにそこまで言ったら、前線と入れ替わって戦うだけでしょ?」

雄二は自分の部隊を2つに分けると言うと美波は意味がわからないと声をあげるが、

「良いんだ。俺達が受け持つのは奇襲だからな。部隊を分けた後、島田の部隊は階段を上がり、踊り場で待機。俺達は階段を下り、ここに出る」

雄二は黒板に書いた見取り図に書き込みながら作戦を書き込みながら説明をして行く。

「……後ろからの奇襲って事?」

「ああ。明久達がEクラスの教室前でEクラスを押さえ込んでいる間に俺達は移動する。移動後、明久達は押されているフリをしながらここまで戻ってくる」

「……でも、待ってよ。代表の居場所って相手のクラスに伝わるのよね? それなら、あんたが移動したら作戦、バレバレじゃないの?」

雄二の説明に美波は首を傾げると、

「まあな。だけど、Eクラス代表の中林は挑発に乗りやすい。これは宣戦布告の時に確認させて貰った。あいつは明久達の攻撃に痺れを切らして前線に現れる。その後は確実に前の敵だけを見て進む。俺の居場所など目に入らないさ。で、島田は俺達が後ろに戻ってきたら合流して明久達とEクラスを挟み撃ちにする」

「そんなもの？」

雄二は宏美は確実に引つかかると言うが美波はまだ納得がいかないようである。

「ああ。本来なら旧校舎側にも階段があるからな。後ろに兵力を配置、または伏兵を置くのがセオリーだが、それに気づく生徒もEクラスにはいない。これをやる上で1番、心配していた事にも誰も気づかないんだからな。仮に俺達が他のところにいると気づいても兵力を分散させる事なく、全員で引き返す。もしくは気づいた生徒だけが俺に群がる。全員で階段を下りた場合は島田は明久達と合流。追撃と待ち伏せに、少数の場合はお前達が後ろから仕留めてくれ」

「へえ、良くできた作戦ね」

雄二の説明に美波はようやく納得したようで頷くと、

「……………雄二、明久から伝言。Eクラス教室前まで移動完了した」

康太が明久達とつなぎをつけてきたようで雄二に戦況を報告する。

「……………よし、出るぞ。間違っても他の階に移動するのを見られるなよ。見られた場合は明久達に合流するんだ。その場合の指示は明久

が出してくれる。島田、この作戦の鍵は俺とお前が兵力を減らす事なく、Eクラスの後ろに回り込めるかだ。間違っても、お前だけは見つかるなよ。ムッツリーニ、島田についててくれ」

「わかったわ」

「……………了解」

雄二はもう1度、教室にいるクラスメート達を見ると、

「行くぞ。野郎ども、今回の決着はEクラス全員の首を獲る事だ。みあが俺達のために怒ってくれた事を思い出せ。あいつら、全員に『鉄人の鬼の補習』を味合わせてやれ!!」

「……………おお!!」

雄二は最後に深秋を引き合いに出して、クラスメート達の指揮をあげると雄二と美波を隠すように教室を出て行く。

第48問（後書き）

どうも、作者です。

主人公、お休み3連続。（爆笑）

雄二と明久により立てられた作戦は上手く行くんでしょうか？

しかし、召喚獣の扱いになれるためとは言え、Eクラス全員を倒せと指示を出す雄二は自分で書いても鬼だと思います。（苦笑）

第49問(前書き)

あとがきに深秋と翔子を登場させます。

第49問

(……雄二と島田さんは上手く移動したみたいだね。後は中林さん次第かな?)

明久は雄二と美波が率いている部隊が階段を使って移動した事を確認すると、Eクラス代表の中林宏美が動くのを待つ。

「明久、中林は動かんのじゃ。どうするのじゃ?」

「待つて。すぐに……きた」

秀吉は動かない宏美の様子に不安になってきたようで明久に声をかけると宏美が動きだしたようで、声を張り上げてFクラスをバカにしながら前にあがってくる。

「秀吉、須川君、作戦は第2段階に移るよ。まずは消耗の激しい生徒から下がらせて、しんがりは僕の部隊が引き受けるから」

「……姫路、ワシの部隊の指揮を頼めるかのう。どうやら、ワシは指揮をとるよりはこっちの方が向いておるのじゃ」

明久は秀吉と亮に下がるように指示を出すと自分はEクラスの追撃を抑えるために自分の部隊を入れ替えようとする。秀吉は明久としんがりをするつもりのもりのようで、瑞希に自分の率いていた部隊を任せると言いつ。

「き、木下くん!?!」

「秀吉、命令違反だよ」

秀吉の言葉に瑞希は驚きオロオロしはじめると明久は秀吉に下がるように言うが、

「……ワシの部隊は消費が激しいのじゃ。全滅をする前に姫路を護衛につけて、回復試験を受けさせる必要があるのじゃ。ワシは後ろにいたからのう。まだ、点数はあるのじゃ」

「吉井、俺も木下の意見に賛成だ。木下に前線を維持するのを手伝って貰え」

秀吉は任せておけと言うと亮から明久に秀吉の提案にのれと言われ、
「……そうだね。今回は総力戦だ。迷ってるヒマはない。姫路さんは秀吉の部隊を率いて回復試験に姫路さんが下がったのを確認したら、須川君の部隊ね」

「はい」

「ああ」

明久は切り替えたように瑞希と亮に指示を出す。

「明久」

「うん。秀吉、こっちでは僕らが作戦の肝だよ。わざとらしい退却じゃバレるからね」

「わかっておるのじゃ。ワシが演技部じゃと言うところを見せてや

るのじゃ」

瑞希が秀吉の部隊を下げ、亮が押されながら撤退して行くのを確認すると明久と秀吉は少しずつ後退をしはじめると、

「やっぱり、Fクラスはバカじゃない。点数が低いのに力押しなんて、みんな良い、Fクラス本陣まで一気に攻める攻めるわよ」

Eクラス代表の中林宏美は明久と秀吉が上手くEクラス生徒から攻撃を喰らわないように下がっているのを自分達が押していると勘違いしているようで味方の得点消費状況など気にする事なく、総攻撃を仕掛ける。

「……上手く、のつてくれたみたいだね」

「うむ。しかしながら、流石に総攻撃じゃ。いくら、点数を削った相手とは言え、この人数差はキツイのう」

明久は宏美からでた総攻撃の指示に苦笑いを浮かべるがさすがに回復試験に人数を割いているFクラスは作戦以上に早いスピードで教室の前に戻されて行く。

「……秀吉、危ない」

「うむ」

「ちょこまかとうるさいわね。バカのクセに……良い。あのちょこまか動く雑魚から片付けなさい」

明久はフィードバックを気にする事なく観察処分者の利点である召

喚獣の操作性を上手く使い秀吉やクラスメート達を助けていると宏美は明久がこの部隊をまとめ上げている事に気づき、明久を狙うように指示を出す、

「よそ見をするとは、ずいぶんとワシらも舐められたようじゃのう」

「まったくだ」

明久に集中したEクラス生徒達の召喚獣を秀吉と先ほどまで部隊を率いていた亮が援護をし、倒せないもののEクラス生徒の召喚獣の得点を削って行く。

「んもう。なんなのよ!! 雑魚のクセにちよろちよると!!」

「ごめんね。中林さん、確かに僕らは1人1人の成績は低いけど、Aクラスの設備を目標に戦っているんだ。棚から……」

「……牡丹餅じゃ」

「牡丹餅狙いの卑怯なEクラスに負けるわけには行かないんだよ」

宏美がヒステリックな声を上げると明久は卑怯なEクラスに負けるわけには行かないと彼女に向かい言った時、

「よく言った。明久」

「まった」

「………作戦は成功」

Eクラスの後ろから雄二、康太、美波の3人が引き連れた部隊が合流する。

第49問（後書き）

「……アキ兄、頑張ってるかな？」

「……心配ない。雄二もついてる」

深秋は布団のなかでEクラスとの試召戦争を気にしていると深秋の看病のために学園を休んだ翔子が深秋の頭をそつと撫でる。

「ごめんね。しょうこちゃん、しょうこちゃんもゆうじくんの活躍を見たかったよね」

「……確かにみたいけど、私は雄二と吉井が勝つって信じてるし、何より、みあを1人にしておけない」

深秋は翔子に謝ると翔子は小さな笑みを浮かべる。表情の少ない彼女だが、その笑顔は深秋を本当に大切だと思っているようである。

「それに、前にみあも私のために無理をしてくれた。そのせいで『観察処分者』なんかに……」

「しょうこちゃん、その話は無しだよ。あれはボクが考えも無しに行動したのが悪いんだから、それにボクはもともと頭が悪いから仕方ないんだよ」

「でも……」

深秋が『観察処分者』になった事に翔子は負い目を感じているようで目を伏せると深秋は翔子は悪くないと笑顔で答えると、

「それに観察処分者と一緒にしようこちゃんとゆうちゃんと仲良くなれたんだもん。ボクとしてはそっちの方が嬉しいよ。それとも、しようこちゃんはボクが友達じゃ、イヤ？」

「……みあ、ありがとう」

深秋は翔子に抱きつき、風邪で少し潤んだ瞳で翔子を見上げると翔子は深秋を抱きしめ返し、深秋の優しさにお礼を言う。

どうも、作者です。

深秋の出番がないため、あとがきでの特別出演です。

以前、書かせていただきましたが、深秋には深秋の観察処分者になった理由があります。それで深秋と翔子は友達になり、優子との距離も縮まりました。

まあ、話はまだ考えていませんが、いつか書きたいと思います。

第50問

「な、何で、後ろから!？」

宏美は後ろから現れたFクラスに驚きの声をあげると、

「熱くなりすぎなんだよ。お互いに代表の位置は確認できるはずなのに何も考えずに突撃したパツキンの代表さん」

「パツキン? 何を言ってるのよ?」

雄二は宏美をバカにするが宏美は雄二の言葉の意味がわからない。

「ああ、パツキンってのはな。髪の毛の筋肉って書くんだよ」

「なるほど、髪の毛の先まで筋肉って事だね」

「ああ。髪まで筋肉だから脳みそも筋肉で作戦なんか考えられないバカが、代表だからやりやすいと明久が言っていた」

「……吉井、あんたを殺すわ」

雄二は宏美をバカにした後、罪を全て明久になすりつけると宏美は明久に敵意を通り越して殺意の視線を送り、

「ちょっと、雄二!？ 何で僕のせいにするんだよ!? 落ち着いて髪筋の中林さん、髪筋って言い出したのは雄二であって僕じゃないよ」

「髪筋、髪筋、言うんじゃないわよ!!」

明久は自分は悪くないと言うが、その度に宏美を『髪筋』と呼ぶため、宏美の攻撃対象は明久1人に絞られ、

「Eクラス代表は明久に任せて、俺達はEクラス生徒をやるぞ。1人も逃すな!!」

宏美はクラスメートに指示を出さずに明久を追い回しだしたため、宏美の勢いだけの指示で動いていたEクラスは次の行動に移る事も出来ずに次々と数を減らして行く。

「坂本、順調みたいね」

「今のところはな。島田、そろそろ、Eクラスも別の行動に出るヤツらも出てくる油断するなよ」

「油断も何も!?!」

美波は散り散りになり、戦っているEクラスの様子を見て勝負は決まったと考えて雄二に言う。雄二は油断しないように言うが、美波だけではなくFクラスの多くの生徒が油断した時、それは起こる。

『代表は放っておけ。代表らしい事もしないで自滅するヤツに付き合うよりは、俺達の手でFクラス代表の首を穫るんだ!!』

『回復試験を受けられない後方の方が人数も少ないし、逃げられる可能性があるはずだ。教室に戻るぞ!!』

『あんなヤツのために鉄人の鬼の補習なんてやってられるか!!』

散り散りになっていたEクラスをまとめあげて、代表を見捨てても補習を逃れようと雄二、美波、康太の部隊に向かってくる生徒が現れる。

「ちよつと、坂本、どうするのよ!？」

「だから、油断するなよ。って言ったんだよ。本来なら戦力の配置が得意な明久をこつちにおきたかつたんだが、誘導役は明久に任せだから、数学で姫路に続いて強力なお前を連れてきたんだ。引くなよ」

美波はこちらに向かい一直線に向かってくるEクラス生徒に驚きの声をあげるが、雄二は想定内と言いたげにため息を吐くと、

「左を島田、右はムツツリー二に任せる。中央は俺が守る。少し持ちこたえれば秀吉と須川が援護してくれる。良いか!! 1人も討ち漏らすな!!」

「……………雄二が負けたら終わりだ。雄二は下がれ」

雄二は美波と康太に指示を出すと康太は雄二に下がるように言うが、

「良いんだよ。俺は前回、戦ってないんだ。上を狙うために召喚獣になれないといけないんだからな」

雄二は不敵な笑みを浮かべ、1歩前が出る。

『坂本が出てきたぞ!!』

『あいつを倒せば俺達の勝ちだ!!』

『Fクラス代表、坂本雄二。その首、貰った!!』

雄二が前に出た事でEクラス生徒3人が雄二に飛びかかるが、

「悪いな。明久^{バカ}が補習室送りになってないのに、代表の俺が負けるわけにはいかねえんだよ!!」

雄二は召喚獣を召喚し、その3人を蹴散らし、

「坂本、その点数って!?!」

「さすがに一夜漬けじゃ、島田には追いつけなかったな」

美波が驚きの声をあげると雄二の召喚獣の数学での点数は美波には追いつかないまでも200点を越えている。

「説明は後だ!! 島田、康太、気を抜くなよ」

「……………了解」

「わ、わかったわ」

代表である雄二の点数にEクラスは戦意を失い、Fクラスは更に活気づいて行き、

「何で、何でよ!?!」

明久に攻撃が当たらずに1人、苛立っている宏美が明久に向けて大

振りな攻撃を放った時、

「いい加減にせぬか。見苦しいのじゃ」

横から秀吉が宏美の攻撃を跳ね上げた後、長刀を宏美の召喚獣の頭に振り下ろし、

「……お主の負けじゃ」

「う、嘘よ。何で、Fクラスなんかに？」

明久に細かく削られていた宏美の召喚獣は秀吉の攻撃を受けきる事は出来ずに得点は『0』となり、宏美は認めたくない現実に膝を付く。

第51問

「何で？ さつきも言っただろ。頭に血が上りすぎなんだよ」

雄二は膝を付く宏美を見て、ため息を吐くと、

「さあ、楽しい。戦後処理の時間だ」

「……戦後処理も何も私達は上位クラスに負けたのよ。Fクラスの設備に落ちるだけでしょ」

楽しそうに宏美を見て笑うが、宏美は戦後処理をするまでもないと自虐的な笑みを浮かべる。

「そうだな。だけど、Eクラスの態度次第で、今回は和平交渉での平和的解決にしてやっても良い」

「ちよつと、坂本、どう言う事よ？」

雄二は宏美に向かい和平交渉を提示すると美波は驚きの声を上げ、雄二の提案の意味がわからずにEクラス、Fクラスともに声をあげるよ、

「……本当に誰もわからないのか？ 明久、お前もか？」

雄二は周りの反応に苦笑いを浮かべて、明久に質問する。

「……いや、雄二がどこまで考えているかわからないけど、雄二が昨日、言っていた通り、僕らはEクラスに勝っても得がないからか

な？」

「……そうね。上位クラスが私達と設備交換したって仕方ないものね」

明久は今のFクラスはEクラスから得るものはないと言うと宏美は負けを認めたのか苦笑いを浮かべて頷く。

「ああ。第1はそれだ」

「他にも何かあるのかのう？」

雄二は明久の回答と宏美の様子にくすりと笑うと秀吉は首を傾げると、

「簡単に言えば、俺達に得はないんだ。クラスの設備を落として貰うより、Eクラスに恩を売って上位クラスを攻める手伝いをして貰えば良い」

雄二は上を狙うためにEクラスと不可侵条約を結びたいと言う。

「ちょっと待ってよ！？ それだとみあの気持ちは？」

「明久、考えろよ。別に今更、みあはこいつらに土下座をして謝れみたいな事は言わないだろ」

「確かにそうじゃのう。少なくとも、中林は今、素直に負けを認めておる。みあは追い討ちをかけるような事はせんのだ」

明久は深秋が納得しないと言うが雄二と秀吉は深秋なら大丈夫だと

言つと、

「こちらからの条件は3ヶ月間のFクラスへの宣戦布告の禁止と俺はBクラスに宣戦布告をしようと思っっているんだが、Eクラスには俺達がBクラスと戦う前にCクラスと戦って貰いたい」

「ちょっと、待ちなさいよ。宣戦布告の禁止はわかるわ。でも、Cクラスへの宣戦布告って、あなた達にも勝てなかった私達がCクラスに勝てるわけないでしょ!!!」

雄二は宏美に条件を出すか宏美は雄二の条件に納得できないと声をあげるが、

「今、お前達、Eクラスは断れる立場か？ 今、断ればお前達は畳と座布団、卓袱台の設備になる事は決定だ。けどな。Cクラスを狙うって事は上の設備を穫れる可能性が出てくるわけだ」

雄二はEクラスは断れないと笑う。

「……確かにそうね。けどな。今、私達の力を見たでしょ」

「ああ。見させて貰った。だからこそその提案だ」

しかし、宏美は雄二の提案は無謀だと言つが雄二は勝算があるのかニヤリと笑い、

「部活をやっているだけあって、突進力と1度、繋がった時の連携は見事だった。Eクラスに足りないのは作戦を立てる力だ。それは俺達がやってやる。悪い提案じゃないだろ？」

Eクラス対CクラスでのEクラス勝利のために全力で力を貸すと言う。

「……確かにそうかも知れないけど、考えても見なさいよ。あなたが作戦を立ててくれたとしても、私はそれを扱いきれるかはわからないわよ。今日の試召戦争で代表としての立場も無くしたしね」

「ああ。それなら、大丈夫だ。お前にはお前の責任の取り方がある……なあ、明久」

宏美は自分の指示ではEクラスの生徒はついてこないとため息を吐くが、雄二はニヤリと笑い明久を呼ぶと、

「……中林さん、頑張っつてね」

「何！？ 何があるのよ!？」

明久は苦笑いを浮かべて宏美の肩を叩くとFクラスの男子生徒は宏美に何が起こるか理解したようで歓喜の声をあげ、宏美はわけがわからずに声をあげる。

第51問（後書き）

どうも、作者です。

雄二の提案で始まる？Eクラス対Cクラス。
つくづく原作に沿えません。（苦笑）

代表の責任として深秋に売られる宏美。信者が増えるかも知れませ
ん。（爆笑）

本題

Eクラス対Cクラスを始めるにあたり、ぶっちゃけキャラが足りま
せん。

それで投稿キャラを募集しようと思ってます。

募集事項

名前

性別：Fクラスの場合は男のみ

所属クラス：E or Cクラス、面白ければFでも可。

得意教科：1教科 or 2教科（150～300点）

苦手教科

総合得点

Fクラス1000点以下

Eクラス1001～1200点

Cクラス1451～1600点

くらいで考えてます。

タイプ

特化型（深秋、康太、美波）

バランス型（瑞希、秀吉）

隊長型（明久、雄二）
備考

禁止事項

本当はAクラスの成績。

原作キャラの兄弟。

観察処分者。

割と面倒な募集事項ですが、興味が湧いたら投稿してみてください。
募集期間は決めてません。

作者の活動報告では深秋を使って例をあげています。参考にしてみてください。

第52問

「大丈夫だ。少なくとも素直に従えば身の安全は約束する……」

「そうじゃのう……」

「……………その先はみあしだい」

声をあげている宏美の様子に雄二、秀吉は目を逸らして言い、康太はその時の事を考えているようで宏美を被写体としてどう写すか考えているようである。

「……事で、今回の敗戦の責任は中林が取ってくれると言う事でEクラスも納得してくれるな？」

『『『……………』』』

雄二は戦後処理が終わるまで補習室に連れて行かれずにこの場に残っているEクラス生徒に声をかけるがEクラスの生徒は納得できていないようで何も答えない。

「……………別に納得しないなら、設備を落として貰うだけだ。俺達的にはどっちでも良い」

『……………俺達は考えも無しに突っ込んだ代表のせいで負けたんだぜ。はい。そうですかと頷けると思うか？』

「……………」

雄二はEクラスの様子にため息を吐くとEクラスの1人はまだ宏美を許せないようで宏美を睨みつけたまま言っと、

「なら、聞かせて貰う。俺達に試召戦争を仕掛けるように提案したのは、こいつか？」

『……違うけどよ』

「中林も俺達を舐めていただろうが先導したヤツは他にいるんだろ。本来なら、責められのはそいつじゃないのか？」

『……』

雄二は宏美を睨みつけた生徒に聞くとその生徒は黙ってしまふ。

「なら、戦犯が必要なら、俺達が捕まえて見せ物にしてやっても良いぜ。俺達が同盟を組むためにも俺達を先頭を切ってバカにしたヤツには挨拶をしときたいしな」

「……確かにそうだね」

「そうじゃのう。ここまで言われて名乗りでぬ。卑怯者の顔は拝んで起きたいものじゃ」

雄二はEクラス生徒の1人を見せ物にするつもりなのか目つきを鋭くして言々と明久と秀吉までが頷く。

「ちょっと、何を言ってるのよ!？」

「そ、そうです。そんな事する必要はないはずです」

瑞希と美波が明久達を止めようとした時、

「止めて！！ 開戦に踏み切ったのは私よ。責任なら、私がとるわ」

宏美は自分の責任だと言うと床に膝を付き頭を下げようとする。

『……代表、止めてくれ』

『……坂本、さっきの言葉を訂正させてくれ。このまま、代表に罪をなすりつけたら、昨日、お前が言った卑怯者に成り下がっちゃう』

宏美の代表としての行動にEクラスは宏美を代表と認めたようで宏美1人に責任はとらせないと言う。

「……中林さんの指示に従うって事で良いのかな？」

『ああ』

明久はEクラスの生徒の出した答えに安心したようで笑顔を見せるとEクラスの生徒の何人かは雄二と明久の行動の意味を理解したようで苦笑いを浮かべる。

「中林、土下座をする必要はないぞ」

「……ちょ、ちょっと、どう言う事よ!？」

雄二は宏美の土下座を止めると宏美はわけがわからないようで慌てるし、

「雄二と明久はお主が代表の資質があるか見極めようとしたのじゃ」
秀吉は雄二と明久の行動の意味を苦笑いを浮かべながら、宏美に説明する。

「な、何よ。それ!？」

「お、落ち着け。中林」

『そうそう』

宏美は雄二と明久の行動に踊らされた事に声を上げると雄二は苦笑いを浮かべながら、宏美をなだめようとし、そんな宏美の様子にEクラスの生徒は苦笑いを浮かべ、宏美を止めに入る。

「それじゃあ、改めて、俺達FクラスはEクラスに和平交渉での平和的な決着を提案する」

「……Eクラス代表、中林宏美。Fクラス代表の提案に乗るわ」

「それじゃあ、同盟成立って事で」

「同盟って割には私達は不利だけどね」

雄二と宏美は握手を交わし、FクラスとEクラスの同盟が正式に成立し、

「終わったわね」

「う、うん」

明久は深秋に勝利報告しようとして慌てて携帯電話を取り出すが、

「……吉井、没収だ」

西村教諭に携帯電話が取り上げられる。

「鉄人!？」

「西村先生と呼べ、授業中及び試召戦争中の携帯電話のしよつは校則違反だ。携帯電話は預かるぞ」

西村教諭は明久の携帯電話を持って行こうとすると、

「待つてください。携帯電話を没収されるのは僕が悪いんです。だけど、お願いします。みあにみあに勝ったって伝えたいんです」

「ワシからもお願いなのじゃ」

「西村先生、お願いします」

明久は西村教諭に深秋に勝利報告をしたいと言うと秀吉、瑞希が明久に続き、Fクラスの生徒全員が西村教諭に頭を下げる。

「……今回ただぞ。吉井妹に連絡を入れたら、放課後までお前の携帯は預かる。それと後で観察処分者の仕事もある。放課後に職員室に必ずこい。忘れるなよ」

「はい。ありがとうございます」

西村教諭はため息を吐くと明久に1度、携帯電話を返し、明久は西村教諭に頭を下げ、

「みあ、勝ったよ」

携帯電話を受け取ると深秋に勝利を報告する。

第52問（後書き）

どうも、作者です。

ようやく決着です。

Fクラス優位の同盟が組まれました。

雄二と明久はEクラスを見捨てるのかはまだ決めてません。（悪笑）

投稿キヤラ

作者の活動報告に例を書きました。参考にしてください。

第53問

(遅くなっちゃったな。急がないと)

「あれ？ 吉井くん、こんな時間に何してるの？」

明久は西村教諭から言い渡された観察処分者の仕事を終えて急いで深秋を迎えに行こうとすると明久を見つけた優子が声をかける。

「木下さん、ちょっとね……観察処分者の仕事を」

「今日？ みあが休みなんだし、先生方も今日くらい見逃してくれても良いのにね」

明久は少しだけ気まずそうに笑うと優子は深秋の事を考えてため息を吐くが、

「まあ、いつか。吉井くんがここにいるって事はみあはまだ代表の家だし、すれ違いにならなくて良かったわ。急ぎましょう」

「う、うん」

優子も深秋が心配なようで翔子の家に一緒に行くと言つと明久は優子と並び、翔子の家に歩き出す。

「吉井くん、どうかした？」

「いや、木下さんと2人ってあまりないから、ちょっと緊張を……」

優子は深秋がいる時とは違う明久の印象に首を傾げると明久は優子と2人つきりと言う状況になれていないため、苦笑いを浮かべると

「確かにそうね。いつもはみあか秀吉と一緒にいるし、吉井くと2人ってあまりないわよね……」

優子も明久と同じようにめったにない状況に少し考え込み、

「みあから結構、話を聞いてるから、吉井くんの事は知ってるつもりだけど……」

「ちよつと、木下さん!? 何!? 何で、僕の顔を見て笑うの!? みあは普段、何を言ってるの!?!」

明久の顔を見てくすくすと笑うと明久は深秋が優子に伝えている印象に寒気を感じたのかしどろもどろになりながら優子に聞くが、

「別にそこまでおかしな事は言っていないわよ。ただ、みあが言ってる通りだな。とって」

「木下さん、そんなに笑って、信じないで、みあが言っているのはウソなんだ!?!」

優子は明久の様子がツボに入ったのか明久の顔から視線を逸らして笑い、明久は深秋が優子に話している自分の姿はウソだと言う。

「だから、みあはおかしな事は言っていないわよ。ただ、そうやってすぐに慌てたりね。だいたい、みあが吉井くんの事を悪く言うわけないでしょ」

「そ、そうかな？」

優子は明久に落ち着くように言うと明久は少しだけ落ち着いたようである。

「そうよ。吉井くん、急ぎましょう。あんまり遅くなると代表にも迷惑がかかるし」

「そうだね」

優子は明久に急ごうと言うと明久は頷き、先を進み始める。

「そう言えば、今日の試召戦争Fクラスが勝ったみたいだけど和平交渉になったって聞いたけど、何があつたの？」

「別にEクラスに勝つても僕らに得になる事はないからね。Fクラスに宣戦布告をしないって条件でね……」

「ふーん、そうなんだ……吉井くん、何かあつた？」

明久は当たり障りのない答えを優子に言うが途中で何かを考えだしたようで優子は明久の様子に声をかけると、

「木下さん、ちょっとお願いがあるんだけど」

「吉井くんがあたしにお願い？　どんな事？」

明久は優子に頼みたい事があると言い、優子は意味がわからないように首を傾げる。

「僕に勉強を教えて欲しいんだ」

「へ？」

明久は何を思ったか優子に勉強を教えて欲しいと言い、優子は意味がわからないようでハトが豆鉄砲を喰らったような表情をするが、

「……吉井くんも」

すぐに表情を戻してため息を吐く。

「僕も？」

「昨日の夜、秀吉も同じ事を言ってきたのよ。『みあに無理をさせたのはワシのせいじゃ』とか言ってるね。まったく、自意識過剰も良いところよね。吉井くんも似たような事でしょ？」

「う、うん」

優子は昨日は秀吉に同じ事を言われたと言うと明久の考えている事を言い当て、明久は気まずそうに視線を逸らす。

「でも、Fクラスには姫路さんもいるでしょ。悔しいけど、振り分け試験退席がなければ姫路さんの方が成績が良いわよ。吉井くんは姫路さんとも仲が良いんだから……ふーん。好きな娘にカツコ悪いところを見せたくないってヤツか？」

「き、木下さん、な、何を言ってるの!？」

優子は深秋から聞いた事があるようで明久を見てニヤニヤと笑うと

明久は慌て、

「でも、常識で考えたら、Aクラスのあたしに勉強を教わるのはどうなの？ Fクラスが上を狙うならおかしいでしょ。」

「そ、そうだよな。わ、忘れて」

優子は明久の頼みはおかしいと言うと、明久は今はなしと言うが、

「良いの。毎日じゃなければ、放課後、1時間くらいなら見てあげても良いわよ」

「ほんと!？」

「みあのため何でしょ。なら、あたしだって協力したいわよ。まあ、Fクラスに負けるわけないしね」

「あ、ありがとう。木下さん」

明久は優子の手をとりお礼を言うと、

「だけど、吉井くんもあたしもあれよね。みあや秀吉にしてやられてる気もするのよね」

「そうかも」

優子は自分と明久は弟と妹にのせられている気がするとため息を吐き、明久は苦笑いを浮かべる。

第53問（後書き）

どうも、作者です。

明久が勉強をする気にさせました。

深秋のために。

優子が原作より柔らかいのは深秋のおかげです。

そして、深秋経由で明久の想いは優子にバレてる。

きつと、翔子にも。（爆笑）

第54問

「復活」

『みあちゃん』

『みあ、みあ』

Eクラスとの試召戦争の翌日、風邪の治った深秋が登校してくると教室には深秋コールが響く。

「みあ、まだ治りかけなんだから、少し落ち着いてよ」

「まったくだ」

深秋の様子に明久と雄二はため息を吐くと、

「明久、雄二、昨日も霧島の家泊まったそうじゃのう」

「うん。昨日はまだ、みあは微熱があったから、霧島さんがもう一日泊まるように言ってくれたから、甘えちゃった」

「……そのせいで、こっちは大変だったけどな」

秀吉が明久と雄二に声をかけると明久と雄二は昨日も翔子の家に泊まったと言っ。

「秀吉は木下さんから聞いたの？」

「うむ。昨日、姉上から聞いたのじゃ……お主の話も」

「そっか」

秀吉は明久が優子に勉強を教えて欲しいと頼んだ事も聞いたと言っていると、明久は少し困ったように笑う。

「おい。何の話だ？」

「うむ。明久が……」

雄二は明久と秀吉の話が気になったようで秀吉に聞くと秀吉は昨日、優子から聞いた事を雄二に話す。

「明久が自分から勉強か？ 世も末だな」

「そうかもね。自分でもそう思うよ」

雄二が驚きの声をあげると明久は自分でもらしくないと苦笑いを浮かべるが、

「少なくとも僕らがAクラスを狙うには戦力が少ないからね。今、僕らでAクラスと戦うのにまともに戦えるのは姫路さん、みあの家庭科、ムツツリー二の保健体育だけ、数学はDクラスとの戦いで補習室送りになった人もいるから少しは点数があがったけど、全然、足りない。これじゃあ、作戦の立てようがないよ。雄二だってわかってるんでしょ」

今のFクラスではAクラスには手が届かないと言う。

「……まあな。ぶつちやけるとBクラスは倒せると思うがAクラスには太刀打ちできない。昨日まではそれでも何とかなると思ってたんだけどな」

「雄二、どうかしたのじゃ？」

雄二は自分の考えていた計画が修正できないところまでズレてきていると思っているようであらうため息を吐くと秀吉は雄二に聞く。

「ああ。予想以上にお前の姉貴が厄介だな」

「そうだね」

雄二は秀吉を見て優子が厄介だと言うと明久は雄二と同じ意見なように苦笑いを浮かべる。

「……まったく、俺が知ってるお前の姉貴とこの間からのお前の姉貴の印象が違うんだよ。昔は挑発すればそれなりにのってくれそうだったんだけどな」

雄二は苦笑いを浮かべながら、頭を掻くと、

「うむ。確かに姉上はみあと友人になつてからは少し柔らかく笑うようになったのじゃ」

「……まったく、みあとに巻き込まれると良い方にも悪い方にも人間は変わるな」

秀吉は苦笑いを浮かべると雄二はため息を吐く。

「うん。だからこそ。僕は変わらないといけないと思うんだ。みあに誇れるように」

「……うむ」

明久は少しだけ照れくさそうに笑うと秀吉は頷き、

「……ったくよ。明久。人を巻き込むのはみあだけじゃないぞ」

「え？ どういう事？」

雄二はため息を吐くと、明久は意味がわからずに首を傾げる。

「気にするな。それより、明久、重点的にやる教科は決めたのか？」

「一応は全体的に底上げしようと思ってるけど」

雄二は明久にどの教科を勉強するつもりかと聞くと明久はただ勉強するとしか考えてなく、

「重点的にやる教科を決めるぞ。お前が全体的に点数上げたってたかが知れてるんだ。底上げも確かに必要だけどな。お前は観察処分者だからな。点数が低くても簡単に補習室送りにはならないだろ。それなら、最初は1教科に絞って、土台ができた後に関連教科を徐々に上げてった方が効率が良さそうだ」

「雄二、ワシにも意見を頼むのじゃ」

雄二はため息を吐くと明久の得意教科を探すと言い、秀吉も雄二にどの教科を伸ばすべきかアドバイスを求める。

第54問（後書き）

どうも、作者です。

明久が勉強を開始します。試召戦争前に努力していた明久はそれなりに見ますがこの辺りから努力し始めたのはあまりない気がしますね。

深秋復活と雄二の弱気発言。

無事にAクラスまで駆け上がれるか？

何も考えてはいませんよ。（悪笑）

第55問(前書き)

今回から、GAUさんから投稿いただいた『原口 薫』に参加していただきます。

第55問

「坂本くん、いる？」

「ん？ きたか」

昼休みになるとEクラスの代表の宏美が同盟の話をするために雄二を訪ねてくる。

「えーと、中林さん、こっちの人は？」

「えーとね。私だけじゃ、クラスをまとめられないから手伝ってもらおうと思っただけ。薫」

明久は宏美の後ろに1人の男子生徒が付いてきている事に気づき、宏美に聞くと宏美は男子生徒を『薫』と呼ぶと、

「あつ、かおるちゃんだ」

「みあ、知り合い？」

深秋は男子生徒の事を知っているようで駆け寄ってくると明久は首を傾げる。

「うん。ボクが観察処分者の仕事で、図書室の本の整理をした時に、お仕事を手伝って貰っちゃった」

「……ぼくは図書委員なので」

深秋は男子生徒と知り合った経緯を話すと男子生徒は宏美の後ろに隠れながら頭を下げると、

「ちょっと、薫、隠れないで前に出なさいよ。話を進められないでしょ」

「う、うん。ごめんなさい。ひろみちゃん」

「薫、その呼び方は止めてって言うてるでしょ。カッコもつかないし、代表かせめて名字で呼びなさい」

宏美は男子生徒とは親しいようであまり息を吐き、

「う、ごめんなさい。ひろみちゃん」

「だから」

薫は宏美の様子に慌てて謝ると宏美はため息を吐くが、

「まあ、中林も落ち着くのじゃ。それで」

「『原口 薫』です。ひろみちゃんとは幼なじみで」

「薫!! 代表って呼んでって言うてるでしょ!!」

「う、ごめんなさい」

秀吉が割って入ると薫は名前を名乗るが宏美が声をあげ、薫は宏美に謝っている。

「……話が進まない」

「そうだね」

雄二はため息を吐くと明久は苦笑いを浮かべ、

「とりあえず、落ち着いたら」

「そうですね」

瑞希と美波は苦笑いを浮かべながら宏美と薫に落ち着くように言う。

「そ、そうね。それで」

「ああ。まずは中林にとって貰う責任はすべてみあに一任する」

「うん。ヒロちゃんなら、これとかこれなんかも良いかも」

雄二は宏美が受ける罰は深秋に任せると言うと言つと深秋は楽しそうにいろいろなコスプレ衣装を取り出し、

「ちょ、ちょっと待って。無理、無理よ。私にそんなものが似合うわけがないでしょ!？」

宏美は深秋が取り出したコスプレ衣装を見て顔を引きつらせて後ずさりするが、

「大丈夫。ヒロちゃん、可愛いから似合うよ。ね。かおるちゃん」

「う、うん。似合うと思っよ」

深秋は笑顔で宏美なら似合つと言いながら、薫に同意を求めると薫は顔を赤くして頷き、

「ほづ。これはこれで面白い事になりそうだな」

雄二は宏美と薫の様子を見て何か理解したようでニヤリと笑つ。

「じつくん」

「……………任せる」

「い、いやああ!!??」

深秋は笑顔で宏美の服を変えて行き、康太はシャツターが擦り切れる勢いで宏美の写真を撮って行き、

「……………吉井、ウチもあれ、させられるのかしら」

「た、たぶんね」

「……………もしかしたら、暴走してるより、そのままの方が厄介なんじゃないか？」

「そつかもね」

深秋と宏美の様子を見て、明久達は顔を引きつらせる。

第55問（後書き）

どうも、作者です。

宏美の幼なじみくんの薫くんの登場に、久しぶりの深秋の暴走。

風邪での暴走と通常暴走。どっちが質が悪いかはわかりません。
（爆笑）

第56問(前書き)

今回はリザクさんから投稿いただいた『有栖恋華』が名前だけが登場です。

データは投稿キャラクターデータで確認してください。

第56問

「……なんで、私が」

「責任を取るって言ったのはお前だろ」

宏美は深秋に着替えさせられた婦警さんの衣装で肩を落としていると雄二は苦笑いを浮かべて言うと、

「さて、少し遅れたが、打ち合わせでもするか。中林は……原口、良いか？」

「は、はい!？」

雄二は撮影会の途中の宏美では話にならない。何より、深秋の邪魔をしない方が良くと判断したように薫に声をかけると薫はいきなりの事に驚いたように声を裏返す。

「まあ、そんなに身構えないでくれ。昨日、言っておいた事はやってくれたか？」

「は、はい。これです」

雄二は薫に試召戦争の後に何かを頼んでいたように、薫に聞くと薫は慌てて資料を取り出し、

「……おいおい。姫路クラスは流石にいないが、Eクラスにもみあやムツツリーニクラスがいるじゃねえか。数学に絞って正解だったぜ」

「そうなの？　って、原口くん、君、凄じじゃないか！？」

雄二は薫から見せられた資料を見てため息を吐くと、明久は後ろから雄二の見ている資料を覗き込み驚きの声をあげる。

「そ、そんな事ないです」

「いや、世界史と日本史はAクラスレベルだ。数学以外で仕掛けなくて本当に良かったぜ」

薫は照れたように笑うと雄二は選択教科を間違えなくて良かったと苦笑いを浮かべると、

「そうだな。これだけの点数があるなら、日本史か世界史でCクラスに仕掛ければ」

「ダ、ダメです。Cクラスには『有栖恋華』さんがいますから」

雄二は日本史と世界史を軸にして薫を主力に戦おうとするが薫はCクラスにもその2教科では自分と対等に戦える『有栖恋華』と言う人間がいると言う。

「有栖さん？」

「れんちゃん？」

明久は首を傾げると明久の隣で深秋も同じように首を傾げており、

「みあちゃん、お友達ですか？」

「ううう。ボクはお友達だと思ってるんだけど、れんちゃんはボクの事を友達じゃないって言うんだよ」

瑞希が深秋に聞くと深秋は少しだけ寂しそうに言う。

「……明久、今更ながら、みあの交友関係が広すぎると思うのは俺だけか？」

「……僕もそう思う」

明久と雄二は深秋の交友関係の広さに苦笑いを浮かべるが、

「れんちゃんがいるなら、その2教科は避けた方が良いと思うよ。れんちゃん、調子が良い時はその2教科は400点オーバーだよ。1年生の時はその2教科は学年トップも取ってるし」

「ぼくは今まで400点を超えた事はありませんから」

深秋と薫は日本史と世界史の勝負は避けた方が良いと言い、

「マジかよ。何で、そんなのがCクラスにいるんだよ」

「いや、ムツツリーニやみあがいる僕らにはそれを言う権利はないと思うよ」

雄二はため息を吐き、明久は苦笑いを浮かべる。

「確かにな。後は1度、試召戦争を体験していると言う経験の差が出てくるが……」

「1度だけじゃ、有利って言えないわよね」

雄二は少し考え込むような態度をすると美波は苦笑いを浮かべて言う。

「あの……1つ提案したい事があるんですけど」

「何だ？」

薫が遠慮がちに提案があると言う。

「えーとね。もし良かったら何だけど、希望者だけでも良いから『模擬試召戦争』はできないかな？」

「……模擬試召戦争か？ そうだな。悪くない提案だが、模擬試召戦争でも負ければ鉄人の補習室送りだぜ。希望者が出るかはわからないぞ」

薫は『模擬試召戦争』を提案すると雄二は参加する人間はいないかも知れないと言うと、

「雄二、希望者で良いなら僕はやりたい」

「私もやりたいです。私は1度も試召戦争に参加してないですし」

「……そうだな。原口なら2教科に絞れば姫路と対等に戦えるだろうからな。わかった。うちのクラスに希望者がいるか聞いてみる」

明久と瑞希は模擬試召戦争をやりたいと言い、雄二は参加者を聞い

てみると言う。

「しかし、Eクラスにも良い人材がいるじゃないか。原口、お前がEクラスの指揮を執ってたら、不味かつたな」

「そ、そんな事ないです。それにぼくは人に指示を出すのは苦手ですし」

雄二は薫を見て笑うと薫は慌てて雄二から視線を逸らす。

第56問（後書き）

どうも、作者です。

薫から提案された『模擬試召戦争』。

先に進みません。（爆笑）

そして、無駄に顔の広い深秋と深秋に流されない恋華。

無駄なところでライバルフラグも立ててみたりしていますが、いつになったらEクラス対Cクラスが始まるかは全くわかりません。

第57問

「それじゃあ、Eクラスが何人出てくるかはわからないけど、Fからは少なくとも俺、明久、姫路は参加する」

「ワシも参加するのじゃ」

「ウチもね」

雄二は自分も薫の提案にのると言つと秀吉と美波も参加を表明する。

「そう。良かった」

「しかし、良く模擬試召戦争なんて考え付いたな。原口の考えか？」
Fクラスの主力が参加してくれる事に薫は安心したようにため息を吐くと、雄二は苦笑いを浮かべると、

「ち、違います。えーと、名前は伏せて欲しいって言われたんで言えないんですけど……」

薫は申し訳なさそうに言う。

「そうか。そいつは模擬試召戦争には」

「でてこないと思います。昨日の試召戦争も面倒だつて行って参加しませんでしたし」

「……………俺の目から逃れた奴がいるのか？」

雄二は模擬試召戦争を提案した人間に興味を持つが薫は申し訳なさそうに言つと康太の目つきが鋭く光るが、宏美を写す手は止まる事はない。

「はい。土屋くんは注意しないとイケないし、関わるのは面倒だからパスとか言つて……」

「ムツツリー二を警戒するのに試召戦争は不参加かよ。よくわからない奴だな」

「す、すみません」

薫は申し訳ないと言つ表情で続けると雄二はため息を吐き、薫は慌てて謝ると、

「まあ、原口くん、謝らないですよ。それじゃあ、Eクラスはどれくらいの人が出てくれそうなの？」

「えーと、ぼくとひろみちゃんは出ます。けど、他のみんなは部活もあるからあまり多くはないと思います」

「だろうな。Eクラスは部活をしてる奴も多いし、点数の底上げはきついか」

明久は先ほどから謝つてばかりの薫と見て苦笑いを浮かべると薫は深呼吸をして、落ち着いたようでEクラスはあまり参加できないかも知れないと言つと雄二は少し考え込み。

「まあ、それなりに人数が集まれば2つにメンバーを分ければ良い

わけだからな」

「はい。Fクラスとの戦いで指揮の重要さを知りました。Eクラスにだって数学は点数が高い人がいたのに吉井くんの指揮のもとで少しずつ点数を削られて最後には負けてしまいましたから、だから、ぼく達は吉井くんに指揮の仕方を教えて貰いたいです」

「ぼ、僕!？」

薫は明久の指揮能力を誉めると明久は誉められ慣れてないせいか慌てる。

「はい。よろしく願います」

「ぼ、僕なんかで良いのかな？」

「そうだな。兵力の配置に補充はFクラスで1番は明久か、後は須川だな」

明久は自分が評価されている事が信じられないようで慌て言つと雄二は明久を珍しく評価した後、

「その件は了解した。その代わり、原口、お前にも俺達から頼みたい事があるんだ」

雄二は薫に頼みたい事があると言つと、

「かおるちゃんにもこれだね」

コスプレ衣装を手にした深秋が薫との距離を縮め始める。

「……違う。原口、明久に日本史と世界史を教えてやってくれ」

「ぼ、ぼくがですか？」

「ああ。明久の成績を上げないと俺達は上を狙えそうもなくなてな。こいつは歴史物のゲームをするし、身近なものからの方が良いかと思ってな」

雄二は深秋を止めた後、薫に明久に日本史と世界史を教えて欲しいと言う。

第57問（後書き）

どうも、作者です。

Eクラスに明久は人気？（苦笑）

明久のように指示を出せる人間がいる、いないで戦況はだいぶ変わってきますからね。

深秋は雄二に止められました。薫を虎視眈々と狙っています。薫は逃げ切れるんでしょうか？（爆笑）

投稿キャラの件

多くの方に投稿していただき、うれしい限りです。

引き続き、募集しますが1つ書き忘れた事があります。

投稿されたキャラクターをすべて使うわけではないです。キャラの特徴や話の構成を考えて『適切なキャラ』をおおうと思っています。

そのため、投稿されても使用しない事もありますのでご了承ください。

第58問

「そ、それなら、私が」

「みずきちゃんはダメだよ」

雄二が薫に明久の事を頼むと瑞希は明久には自分が勉強を教えると言うが、深秋が瑞希を静止する。

「ど、どうしてですか!？」

「うーん。みずきちゃんと2人で勉強なんかしたら、アキ兄の理性が持たないから」

「そうじゃのう」

瑞希は深秋の言葉に不満そうに言うが、深秋は明久が集中できないと言うと秀吉が頷く。

「そうだな。みあの言うとおりだ。それで、原口、問題ないか？」

「えーと、ぼくで良ければ」

「それじゃあ、決まりだな」

雄二が薫に明久の事を改めて聞くと薫は自信なさげに頷き、

「よろしくね。原口くん」

明久はなぜか顔を赤くする。

「……明久、どうして顔を赤くするんだ？」

「そ、それは」

「かおるちゃんが美少女だからだよ」

「あのね。吉井さん、ぼくは男の子ですよ」

雄二は明久が顔を赤くしているのを見てため息を吐き、明久は薫から視線を逸らすと深秋は明久が薫を女の子と勘違いしていると言っていると薫は間違われなれているのか肩を落とすと、

「原口、お主もか。その辛さ、よくわかるのじゃ」

「木下くんも？ ……辛いよね」

「うむ。なぜか、ワシが男じゃと言つても信じてくれんのじゃ」

秀吉は薫の手を取り、妙な親近感が生まれている。

「……どうして、ここの学園は男を男と思わない奴が多いんだ？」

「ゆうじくん、違うよ。『男の娘』は人類の至宝なんだよ。だから、もっと大切にすべきなんだよ。こつ言つのか、こつ言つのか」

「吉井さん、何これ？ ……薫。あなた、確かに線は細いし、もしかしたらとは思ったこともあるけど」

雄二は秀吉は薫を異性扱いする男子生徒が多いと理解してため息を吐くと深秋は懐から『秀吉×薫本』と受け攻めが反転した『薫×秀吉本』を懐から取り出し、宏美に手渡すと宏美はその本の意味がわからずに開くと薫から距離を取る。

「み、みあ、それはなんなのじゃ!？」

「ひ、ひろみちゃん、待って!？ ちがつ、違うから、ぼくはそんな趣味ないから、よ、吉井さんもどうしてそんなものを持つてるの!？」

秀吉と薫は深秋の取り出した同人誌に声を上げ、薫は宏美に誤解だと言うとなぜ、深秋がこんなものを持ち歩いているかと聞くと、

「えーと、さつき、みきちゃんが復帰祝いって言うてくれたから、他にもこんなものとか、こんなものも」

深秋は薫の質問に笑顔で答え他にも数冊のBL本を取り出す。

「み、みあ、こんなものを学園で広げないで!？」

「それなら、こっち?」

「……みあ、今日は見逃すけど、次は気をつけるんだよ」

「……おい。明久、懐柔されるな」

明久は次から次と出てくるBL本に深秋を止めようとするると深秋は明久に『保険体育の参考書』を渡すと明久はしばらくそれを眺めた後、懐にしまいながら深秋に注意し、雄二は明久の様子にため息を

吐くと、

「かおるちゃんはこう言うのが良いかな？」

深秋は薫にも何か賄賂をとテニス部の保険体育の参考書を取り出す。

「よ、吉井さん、何を言ってるですか!？」

「……そして、みあのペースに全てが巻き込まれるか」

深秋のペースに巻き込まれている薫を見て雄二がため息を吐いた時、
昼休み終了の鐘が鳴る。

第58問（後書き）

どうも、作者です。

毎回のことですが、GAUさんに怒られるかな？と考えます。
だって、GAUさんの作るキャラは受けっぱいから、うちのは攻め
しかないしね……（苦笑）

秀吉と薫の中に生まれた友情は文月学園でどんな波乱を起こすんで
しょうか？

第59問

「うーん。明久は原口にも頼んだが、一先ず、日本史、世界史に絞るとして、問題は秀吉だな。これと違って得意科目も不得意科目もないんだよな」

「……すまぬのじゃ」

雄二は秀吉の科目別の点数を見比べてため息を吐くと秀吉は申し訳なさそうに謝る。

「いや、別に責めてるわけじゃないんだ。秀吉はみあと組む事が多かっただろ。ってなるとみあとと同じ教科を伸ばして攻撃の要になって貰った方が良いか」

「みあと組むならみあの不得意教科を重点的にやって貰って、みあを守って貰う事も考えないといけないって事だよ」

雄二は秀吉の様子に苦笑いを浮かべると明久も雄二と同じように考えているようで秀吉を励ます。

「ああ。2戦してわかった事は指揮を執る人間やみあみたいなムードメーカーが負けると予想以上に指揮が下がるって事だ。うちの場合、負けると指揮が下がるのは、明久、みあ、姫路、島田、須川、そして、秀吉だろうな」

「ワシもか？」

「そうだよ。Dクラス戦もEクラス戦も秀吉の活躍がなければ勝て

なかったんだからね」

「う、うむ。そう言われると照れるのう」

雄二はFクラスの主要戦力を上げ、明久は秀吉の重要性を話すと秀吉は恥ずかしそうに目を逸らす。

「うちのクラスはムツツリーニやみあ、島田さんとか特化した人間が多いから、秀吉はバランスが良いからこのまま平均的に伸ばして欲しい気もするんだよね」

「だけど、バランス良くあげるとなると秀吉にかかる負担が大きいらな。1教科か2教科に絞った方が効率が良い気がするんだ」

明久と雄二は秀吉の負担を考えると無理はさせられないと言つと、

「確かにのう。ワシも全教科は無理なのじゃ」

秀吉は流石にそこまではまわらないと言つ。

「だろ。となると……」

「あんた達、何してるの？」

「島田か。ちょっとな。秀吉に何か重点的に勉強して貰いたいんだが、何を伸ばすべきか、考えてるんだ」

3人で首をひねっていると深秋、瑞希、美波が首を突っ込んできて、雄二は簡単に説明すると、

「ヒデくんが勉強するなら、古典や現代文とか文系が良いと思うよ。演劇の役に立つと思うし、後は美術や音楽とか舞台で使うものならヒデくんもやる気が出るんじゃないかな？」

「音楽に美術？ あまり重要視してる教科じゃないから、目立った人間はいないしな。確かに点数を取れば戦力にはなるが……」

「あまり使えるとは思えないんだよね」

深秋が秀吉に合いそうな教科を言うが、明久と雄二はあまり使えないと言う。

「そうじゃのう。やはり、演劇にも役に立ちそうな文系を中心にするのが無難じゃのう」

「残念。美術なら、裸婦画とか女の人が裸の絵や彫刻もあるし、男の子は興味が出るかなと思ったのに」

秀吉は文系に絞ると言うが深秋は笑いながら言うと、教室が深秋の言葉にざわつき、

「……こんな理由でクラスの美術の成績が上がらないよな？」

「……流石にそれはないんじゃないですか」

雄二がため息を吐くと瑞希は苦笑いを浮かべるが、

「ムツツリーニ！？ 寝ちゃダメだ！？」

「……………すまない。明久、先に逝く」

『『『『ミロのヴィーナス、サイコー!!!!!!』』』』

明久と康太は急いで美術の資料集を開き、教室からは歓声が上がリ、

「……まあ、少しでも点数が上がれば良いか」

「そうじゃのう」

雄一と秀吉はクラスメートの様子にため息を吐く。

第59問（後書き）

どうも、作者です。

Fクラス、美術の成績が上がる。（爆笑）

総合得点对決の時に少しだけ上乘せされるのかな？

そして、文系を勉強すると決めた秀吉は深秋と上手く連携をとれる
んでしょうか？

第60問(前書き)

今回から、レフェルさんから投稿いただいた『加賀谷 真子』に参
加していただきます。

第60問

「へえ、結構、集まったな」

「そうだね」

「きたわね」

Fクラスの模擬試召戦争参加者がEクラスに顔を出すとEクラスは半数位の人数が残っている。

「ヒロちゃん、はい。プレゼント」

「ちょ、ちょっと、こんなところで広げないでよ!? って言うか、何でもうできてるのよ!?!」

「……………俺の実力を甘く見るな」

深秋は宏美を見つけるなり、昼休みに写した宏美のコスプレ写真を康太が製本したものを広げると宏美は慌ててその本を深秋から取り上げる。

「……………原口、Eクラスも半数位残ってくれたんだな」

「うん。やっぱり、Fクラスの教室になるには少し抵抗があったみたい。それに」

「……………FがDに勝ったんだから、私達だってできない事はない」

雄二は深秋に宏美が捕まっているため、面識のある薫に声をかけると雄二と薫にポニーテールと釣り目で立ち姿は凜とした落ち着いた様子の少女が声をかけてくる。

「加賀谷真子です。よろしくお願いします」

「ん？ ああ、Fクラス代表の坂本だ」

少女は雄二に向かい『加賀谷真子』と名乗ると雄二は真子に向かい名乗ると、

「今日はいきなりだったから、部活に入っていない人が中心だけど、Eクラスは明日からは全員で出れると思うよ」

薫は今日は少ない方だと言う。

「……せっかく、暴れられる機会です。昨日は負けましたが今日は負けません」

「か、加賀谷さん、抑えて!? まだ、早いよ」

「おいおい。Eクラスもやる気だな」

今から始まる模擬試召戦争が楽しみなのか真子は先ほどとは真逆に好戦的に口元を緩ませていると薫は慌てて真子に抑えるように言うと雄二は真子の様子に苦笑いを浮かべる。

「……原口くん、坂本くん、すみません。少し取り乱しました」

「まあ、気にするな。一癖や二癖あった方が面白いしな。それに俺

はEクラスがCクラスに攻める作戦も考えないといけないんだ。何も見えないで作戦を立てるよりはやりやすい」

真子は薫に止められて正気に戻ってようで雄二と薫に頭を下げると雄二は苦笑いを浮かべて問題ないと言つと、

「そう言えば、Fクラスはほとんどが参加するみたいですね」

「……ああ。最初は渋ってたんだけどな。みあが『Eクラスの女の子と仲良くなるチャンス』と呟いた瞬間に全員が参加すると言つてな」

「……吉井さん、凄いですね」

薫はFクラスの集まり方に疑問を持ったようで雄二に聞くと雄二は深秋がFクラスの生徒をまた手玉に取つたため息を吐き、薫はその光景が目には浮かんだようです苦笑いを浮かべる。

「雄二、そろそろ、始めようよ。Eクラスは部活に行く人も多いみたいだし」

「ワシも遅れるとは連絡してきたが、今日はいきなりじゃつたのでのう。今日は早めに終わらせたいのじゃ」

明久と秀吉が打ち合わせをしている雄二と薫に声をかけると、

「……吉井明久」

「えっ！？ き、君は、昨日の！？」

真子は明久を見て、獲物を見つけた捕食者のような目で明久を見て、明久は真子の顔を見て顔を引きつらせる。

「秀吉、原口、あの2人は何かあったのか？」

「えーと、加賀谷さん、数学は得意なんですけど、昨日は吉井くんの指揮する部隊に上手くあしらわれたみたいで、必ず、吉井くんを倒すって張り切ってるんです」

「おお。昨日の大剣を振りまわして暴れておった召喚獣の」

雄二は真子の様子に怯えている明久の様子を見て、秀吉と薫に聞くと薫は苦笑いを浮かべながら答え、秀吉は昨日の試召戦争で真子の戦い方は印象に残っていたようでポンと手を叩く。

第60問（後書き）

どうも、作者です。

2人目の投稿キャラの登場です。

数学の得意な真子対美波。

今の状況では真子の方が点数が上ですが、美波は彼女とどう戦うのでしょうか？

そして、真子から敵意を向けられる明久の運命は？（爆笑）

第61問

「へえ。それじゃあ、加賀谷の数学の点数は高いのか？」

「うむ。昨日は300点くらいじゃったのじゃ」

雄二は秀吉に真子の数学の点数を聞くと秀吉は頷き、

「……明久の奴、良く勝ったな」

雄二は秀吉から聞いた真子の数学の点数に苦笑いを浮かべた後、

「よし、面白そうだから、一戦目は明久対加賀谷ってのはどうだ？」

何かを思いついたようで楽しそうに笑う。

「ちよつと、雄二！？ 何で、僕が！？ 無理だよ。僕1人じゃ、加賀谷さんに勝てるわけないよ！？」

「当たり前だ。それにお前の戦い方は1対1じゃないだろ？ そうだよな。原口」

「そうですね。ぼく達が見たい吉井くんの戦い方は1対1じゃないです」

明久は雄二の言葉に声をあげると雄二は明久が思っている事じゃないと言つと薫は雄二の考えがわかったようで頷くと、

「アキ兄、ボクとヒデくんが手伝うよ」

「み、みあ!？」

深秋が明久の戦いを秀吉を手伝うと言って明久に抱きつき、明久はバランスを崩して床に腰を落とす。

「みあ、ワシもか？」

「うん」

「しかし、加賀谷と戦うなら、ワシよりは姫路や島田の方が良いのではないかのう?」

秀吉は深秋が自分を呼んだ理由がわからず、真子が相手では自分では役不足じゃないかと首を傾げると、

「違うよ。ぼく達は点数の高い相手でも戦って行かないといけないんだからね」

深秋は雄二の考えを理解しているようで笑顔で点数の低い人間が真子のような点数の高い相手を倒さないといけないと言う。

「まあ、そう言う事だな。3対1だが、加賀谷、問題ないな」

「私は構わないです。それより、早く始めましょう」

雄二はこっちは3人で相手をするといい、真子に確認を取ろうとすると真子は待ちきれないのか口元を緩ませ、楽しそうに笑っており、

「……みあ、僕達は本当に加賀谷さんと戦わないと行けないの？」

ほら、僕とみあはフィードバックもあるわけだし」

明久は顔をききつらせて痛い思いはしたくないと言っが、

「大丈夫。大丈夫。ボクとアキ兄とヒデくんの3人ならいけるよ。それじゃあ、アキ兄、ヒデくん、いっくよ」

「うむ」

深秋は明久に問題ないと笑顔で言い切ると深秋と秀吉は真子と向き合うように立つ。

「明久、腹をくくれよ。フィードバックがあるのはみあも一緒だろ。お前はみあがやる気なのに逃げるのか？」

「……わ、わかってるよ。加賀谷さん、できればお手柔らかになってわけにはいかないよね？」

雄二は明久に深秋を引き合いにしてさっさと始めると言っくと明久は顔をききつらせて真子に手加減して欲しいと言っが、

「……」

真子は明久をぶっ飛ばす事しか考えていないようっで楽しそうに笑っている。

「それじゃあ、始めるぞ。4人とも良いな」

雄二はそんな明久の様子に楽しそうに笑っくと、模擬試召戦争のために来て貰っっていた数学教師にフィールドを張って貰っくと、

「「「「^{サモン}試獣召喚!!」」」」

4人は召喚獣を呼び出すワードを唱えると床には機械的な魔法陣が浮かび、4人の召喚獣が召喚される。

第62問

「みあ、援護よろしく。秀吉、行くよ」

「うむ」

明久と秀吉は真子の召喚獣の前に立つと、

「……3人の点数を足しても加賀谷の点数には勝てないか」

雄二は4人の召喚獣の点数を見て唸り声をあげる。

「昨日の借りを返して貰います」

「いや、できれば、お手柔らかにお願いしたいんだけどおっ!？」

「避けるな。男なら、私と剣を交えなさい!!」

真子は楽しそうに明久に向かい言うと明久は真子の笑顔に冷たいものが背中を伝っているようで顔を引きつらせながら手加減してと言いかけた時、真子の召喚獣の大剣が明久の召喚獣を薙ぎ払うが明久の召喚獣は大剣の切っ先ギリギリの距離でそれを交わすと、真子は大剣に振り回される事なく、その大剣を明久の召喚獣に振り下そうとするが、

「そんな大ぶりじゃ、アキ兄にはあたらないよ」

「……弓なんて、そんなもので邪魔をしないでくれますか？」

深秋は真子の召喚獣に向かい矢を放ち、真子は明久に振り下ろすはずだった大剣で深秋の矢を払う。

「邪魔？ まこちゃんにアキ兄を倒させるわけにはいかないよ」

「そうですか？ それなら、五月蠅いあなたから始末してあげます」

「みあの前には行かせんのじゃ！！」

「……ちつ、ザコが私の邪魔をするな！！」

深秋は真子に弓を引きながら明久を倒させる訳にはいかないと言うと真子は深秋に向かい突進して行くが秀吉の薙刀が横から真子の足を払うと真子はバランスを崩され、イラついているようで秀吉に向かい叫ぶと、

「うるさいよ。ヒデくんはザコじゃないよ」

「点数だけで見ないで欲しいかな」

深秋はそのタイミングを最初から狙っていたと言いたげに弓を放ち、明久は真子の召喚獣に刺さった深秋の矢を木刀で打ち付けさらに奥深くまで突き刺すと真子の召喚獣の点数は大きく削られる。

「……やっぱり、あいつらは召喚獣の扱いは桁違いだな」

「……刺さった矢をより深く突き刺すために木刀で叩くって、あり得ないわよ」

雄二は明久と深秋の息の合った攻撃に感心したように言う隣で、深

秋から解放された宏美は明久と深秋のあり得ない連携にため息を吐くと、

「……ちつ、ちよこまかと逃げるな」

「いやだよ。僕はそんな攻撃に当たったら死んじゃうよ!？」

真子は怒りに任せて大剣を振りまわし、明久はそれを大声を上げながら交わしているのを見て、

「吉井くん、頑張ってください」

瑞希が明久を応援する。

『吉井、死ね!!』

『真子さんの言う通りにしろ!!』

「ちよつと!？ 誰も僕を応援してくれないの!？」

そんな瑞希の様子を見てFクラスの生徒は嫉妬の念に駆られ、明久はFクラスの生徒達の仕打ちに声をあげた時、

「……吉井明久、覚悟は良いですね？」

「……あ？」

明久の逃げ道は真子に完全に潰されているが、

「……そこまでのじゃ」

「決まりだな。お前ら、ここまでだ」

秀吉の薙刀が真子の大剣を弾き飛ばし、真子の点数はすでに後、
1
撃喰らうと補習室送りになるところで雄二が割って入る。

第62問（後書き）

どうも、作者です。

明久の指揮をと言いながら、3人は自分の思う通りに戦います。（爆笑）

そして、当たらない攻撃に苛立つ真子とそれを応援するFクラス。

真子対アキちゃんなら応援も変わっていたのでしょうか？

そして、いいところ取りの秀吉はすでにFクラスのエースです。

そして、戦いを止めた雄二は何をするつもりなんでしょうか？（悪笑）

第63問(前書き)

今回から黒丸さんから投稿頂いた「米倉 巧」に参加していただきます。

データは投稿キャラクターデータに更新しました。

第63問

「坂本、どうして止めるの？」

「まあ、俺にも考えがあつてな。加賀谷、一旦終わりだ」

「なぜですか！！ 私はまだ戦えます」

美波は雄二の行動に意味がわからずに首を傾げると雄二は苦笑いを浮かべるが真子は納得がいかないと雄二に詰め寄ると、

「……加賀谷、わざわざ、補習室送りになりたいのか。殊勝なヤツだな」

けだるそうな声が真子を止める。

「……気づく奴がいるか」

「米倉くん、来てくれたんだ」

雄二は真子を止めた声にわざとらしく驚いたような表情をすると薫は声の主に駆け寄ると、

「……流石にFの設備になるのは避けたかったからな」

そこにはけだるそうに欠伸をしている男子生徒が座っており、

「……お前が、模擬試召戦争を提案したって奴か？」

「……ああ。噂は聞いているよ。悪鬼羅刹」

雄二は直ぐにその男子生徒がFクラスとEクラスの模擬試召戦争を提案した人間だと気づいたようで目つきを鋭くして言うが、男子生徒はめんどくさそうに欠伸をしている。

「米倉、きてるなら、きてるって言いなさい」

「……悪かったね。代表様。挨拶くらいした方が良くない？」

宏美はけだるそうに欠伸をしている男子生徒の様子にため息を吐くと男子生徒は立ち上がり、雄二の前まで移動すると、

「……米倉 巧。化学と物理は割とできる方かな」

やる気がなさそうに雄二に挨拶をする。

「そうか」

「雄二に米倉くん、それで、模擬試召戦争を止めた理由って何？」

「……パス。坂本、任せた」

「やれやれ」

雄二は巧の自己紹介に楽しそうに笑っていると明久は2人の言う模擬試召戦争を止める意味がわからないようで2人に聞くと巧は面倒だと言うと雄二に説明を任せて先ほど座っていた席まで戻り、雄二はそんな巧の様子に苦笑いを浮かべる。

「簡単な事だ、俺達は実戦で召喚獣の操作方法だろ。わざわざ、補習を受けてその時間を無駄にする必要はないだろ?」

「……回復試験を受けさえすれば、また、直ぐに戦えるって事?」

「……他にも回復試験を受けなくても戦死していなければ、他の教科ではやれるだろ」

雄二の説明に明久は雄二と巧の考えていた事を理解したようで雄二に聞き返すと巧は回復試験を受けなくても模擬試召戦争はできると言いつつ、

「だけど、ボロボロまで戦って本番の試召戦争を仕掛けられたらどうするのよ」

「そうよ。全員が点数のない状態で攻め込まれたら」

宏美と美波は闇雲に点数を減らせないと云うが、

「どのクラスが俺達に試召戦争を仕掛けてくるんだ?」

「それはDクラス?」

「3カ月試召戦争禁止だな」

「上位クラスだって」

「……なんの得がある?」

雄二と巧は今では試召戦争が起きる状況ではないと言い切る。

「……でも、ゆうじくんにたつくん。Bクラスの代表は『クズ』って話だよ」

「みあちゃん、あのクズってどうかしたんですか？」

しかし、深秋は雄二と巧の考えには納得はできるようだが、それはBクラス代表に何かあるのか彼女にしては珍しく不機嫌そうな表情をすると瑞希は深秋に声をかける。

「ああ。みあの言いたい事もわかる。根本は確かにクズだ。俺達が模擬試召戦争をやっているのを知れば、あちらから仕掛けてくる可能性もあるけどな。そこはルールを上手く使わせて貰えば良い。ルールと言つか慣習を使えば良い。『上位クラスは下位クラスに試召戦争を仕掛けられたら断る事ができない』ってルールをな」

「……上位クラスから下位クラスへの宣戦布告は受け入れないって跳ねのけるって事だね」

「ああ。だから、中林、間違ってもBクラスやCクラスの挑発に乗るんじゃないぞ。原口、お前も中林が暴走しないように見張ってるよ」

「……わかったわよ」

「う、うん」

雄二は深秋の言いたい事は試召戦争のルールでどうにかなると言うのと明久は雄二の言いたい事を理解して頷くと雄二は簡単に挑発に乗りそうな宏美と宏美の良心的な部分である薫に声をかける。

第63問（後書き）

どうも、作者です。

新たな投稿キャラの登場です。

そして、恭二に嫌悪感を示す。深秋。

2人のなかに何があったんでしょうか？（悪笑）

第64問（前書き）

今回から光闇雪さんから投稿頂いた『水鏡 陽菜』に参加していただきます。

データは投稿キャラクターデータに更新しました。

第64問

「しかし、米倉がいれば、俺達が作戦を立てる意味がないんじゃないのか？」

「確かにそうね」

雄二は自分と同じ事を考えている巧を見てため息を吐くと宏美は頷くが、

「……遠慮する。俺は作戦とは別で動く。代表様の警護は原口がやれば良いし、前は加賀谷にやらせれば良いからな」

巧は自分はやりたいうように動くと言う。

「なるほど、美味しいところを持ってきたいって事か？」

「……さあな。まあ、1つ言うなら、俺は体育会系とは色が合わない」

「確かにな。まあ、合う、合わないで戦況が悪くなる時もあるからな。わかってるなら別れた方が良いか」

巧は面倒そうに言うと雄二は納得が言ったようでも頷き、

「それじゃあ、模擬試召戦争の続きでもやるか？ 姫路、やってみるか？」

「は、はい」

模擬試召戦争に戻ろうと言つと瑞希に声をかけ、瑞希は慌てて返事をする。

「姫路さんの相手となると、やっぱり、薫が相手？」

「だろうな。破壊兵器同士の戦いだし、姫路は試召戦争初参加だからお手柔らかに頼むぜ」

「お手柔らかにつて、姫路さん相手じゃ、余裕なんてないですよ」

宏美は瑞希が出てくるため、薫が相手かと聞くと雄二はニヤリと笑うが薫は瑞希相手に手加減できるわけがないと言つと、

「とりあえず、やってみようよ」

「おい。みあ、何でお前が出る気なんだ？」

「だって、みずきちゃんは初めての試召戦争なんだよ。補佐くらいいるでしょ」

深秋は瑞希の補佐をやると言つ。

「しかし、姫路とみあか？ 中林、原口のペアになりそうな人間はいるか？」

「日本史か世界史よね？ 薫以外に得意な人つて……」

雄二は深秋と瑞希がペアを組むとなるとそれなりの人間を薫のパートナーにしないといけないと思つたようで宏美に声をかけると宏美

は適任者がいないかと周りを見回すと、

「……水鏡、出る」

「わたしですか？」

巧が1人の女生徒に声をかけ、髪をお団子と三つ編みにまとめた眼鏡の女生徒が返事をする。

「水鏡さん？」

「米倉、こいつは？」

「……俺が説明する必要ないだろ」

雄二は巧に女生徒の事を聞くと巧は本人に聞けと言うと、

「『水鏡 陽菜』です。よろしくお願いします」

「はるなちゃん？ ……アキ兄、どうしよう？ はるちゃん以外にはるちゃんがいるよ!？」

「……みあ、そこに食いつくのはどうなの？」

女生徒は自分の名前を『水鏡 陽菜』と名乗ると深秋は陽菜の名前に陽菜をなんて呼ぼうかと明久に聞き、明久はため息を吐くが、

「そうなんですか？ 困りましたね」

「うん。大問題だよ」

陽菜は深秋の言葉におっとりとうとうしようかと聞くと深秋は腕を胸の前に組み、首を傾げる。

「……激しく、どうでもいい事なんだが」

「本当ね」

雄二は深秋と陽菜の様子にため息を吐くと宏美はこの2人の少し外れた空気に頭を押さえると、

「みあ、一先ず、水鏡の呼び方は後にせぬか？ 時間も無いしもう」

「うん。そうだね。それじゃあ、せんせ、お願いします」

秀吉が深秋に言い聞かせるように言うと深秋は先生に許可を頼み、世界史のフィールドが展開され、

「……試サモン獣召喚！」「」「」

4人は召喚獣を呼び出すワードを唱えると床には機械的な魔法陣が浮かび、4人の召喚獣が召喚されるが、

「みあ、お前は何を考えてるんだ！！」

「……そう言えば、みあって世界史1桁だよね」

「みあ、あんた、何がしたいのよ？」

瑞希、薫、陽菜の3人が高得点を叩きだしているなか、深秋の点数

は1桁である。

第64問（後書き）

どうも、作者です。

高得点者3人の中で深秋は何がしたいのか？

そして、深秋と陽菜の天然空気のなかでペースはまったり？ ……
瑞希も天然だし、薫は自分のペースを守れるのか？

そして、真子は今、明久を血祭りに上げるために回復試験中？

第65問

「……あの、吉井さん、本当に大丈夫？」

「うん。大丈夫だよ」

薫は深秋の点数を見て心配そうに言うが、当の深秋は特に気にした様子も見せずに笑顔で頷くと、

「それじゃあ、始めよ」

「はい」

「そうですね」

深秋は始めようと言って自分の召喚獣の武器を生かす事ができる後方に下がり、深秋の言葉を聞いた瑞希と陽菜は1歩前に出るが、

「良いのかなあ？」

「かおるちゃん、細かい事は気にしないの。その代わりに、ボクへの攻撃は手加減して欲しいかな」

薫は流石に点数差がありすぎるせいか苦笑いを浮かべると深秋は薫に気にするなと言う。

「原口、みあの考えは始めて見ればわかるだろ」

「ですけど」

「薫、始めなさい。時間だって限られてるんだから、それに私達は召喚獣の扱いになれるのが目的なのよ。扱いの上手な吉井さんが相手をしてくれるなら得られる事もあるはずよ」

雄二は納得がいかなさそうな薫をなだめると宏美は薫に始めるように言つと、

「……髪筋代表がまともな事を言つたぞ」

「雄二、だから、髪筋なんて言つたらダメだよ。中林さんだって傷つくでしょ」

雄二は宏美の言葉に珍しいものを聞いたと言いたげに言い、明久は苦笑いを浮かべて雄二を止めようとするが、

「坂本くん、吉井くん、私にケンカを売ってるわけ？」

「ちょっと、待ってよ。中林さん、ボクは雄二が中林さんを髪筋つて言ってるのを止めようとしてるんだよ！？ ボクは悪くないよ。ボクは中林さんの事を髪の毛の先まで筋肉だなんて思っでないから」

宏美は額に青筋を浮かべて明久と雄二を睨みつけ、明久は宏美に向かい、自分は睨みつけられる意味がわからないと言うが、その話し方は宏美にとってはケンカを売っているようにしか聞こえず、

「吉井くん、ちょっと、私にも召喚獣の扱い方を教えてくれないかな？」

「……………個人レッスン」

宏美は額に青筋を浮かべて笑顔で明久の肩をつかむと康太は妄想で鼻血を吹きだし、

「ム、ムツツリーニ!? いきなりどうしたのじゃ!？」

「……………すまない。先に逝く」

「ム、ムツツリーニ!!!????」

秀吉は康太を抱きかかえるが康太は秀吉に言う事切れ、秀吉は康太を抱きかかえて叫ぶがその行為で康太の鼻血の量は量を増している。

「……………なんで、吉井だけだ」

「俺達だってやれるはずだ」

「そうだ。せっかく、Eクラスの女子と仲良くなれるチャンスなんだ」

明久が宏美から敵意を込められた視線を受けている様子を、Fクラスの生徒達は自分の良いように勘違いし、自分達も召喚を始めだし、Eクラスの女生徒に襲い掛かり始め、Eクラスの生徒達は自分とクラスメート達を守るために自分達も召喚しはじめ、

「坂本、これ、どうにかしなさいよ!？」

「し、知るか」

美波は混沌と化した状況をどうにかしろと雄二に言うが雄二は首をため息を吐き、

「な、中林さん、落ち着いて!?! クラス代表の君がそんな風に熱くなってるって収集が付かないから!?!」

「まあ、良いじゃない? 今日個人の練習だし、私が負けてもクラスの負けじゃないしね。まあ、今日は地面に這いつくばるのは吉井くんだけだね」

明久はいつの間にか宏美に模擬試召戦争を仕掛けられており、全力で逃げている。

「……おい。みあ、これがお前の狙っていた事か?」

「どうかな? それより、ゆうじくん、指揮を執って、Fクラスのみんなを蹴散らすよ ヒデくん、みずきちゃん、かおるちゃん、はるなちゃんも行くよ」

「は、はい」

「わかりました」

深秋はまるで最初からこうなる事を理解していたようで雄二に暴走したFクラス男子を鎮圧するように指揮を頼み、瑞希は意味もわからずに返事をし、陽菜は深く考える事なく頷く。

第65問（後書き）

どうも、作者です。

Fクラス暴走。（爆笑）

雄二指揮の元で深秋、秀吉、瑞希、薫、陽菜はどう戦うんでしょうか？

そして、美波は忘れ去られる。（苦笑）

E、F合同クラスで最強の猛者どもで殲滅線。

第66問

「おい。みあ、姫路や原口を他の奴らに当てたら直ぐに補習室行きだぞ!!」

「何か問題ある?」

「お前、俺と米倉の話聞いてたのか?」

雄二は自分と巧が説明した模擬試召戦争の意味を理解しているか深秋に聞くと、

「うん。ゆうじくんとたつくんの言ってる事は難しくてよくわからなかった」

「あんなあ」

笑顔で理解していないと言い切り、雄二がため息を吐いた時、

『みあちゃん、好きだ!!』

『姫路さん、付き合ってください!!』

深秋と瑞希に向かいFクラスの生徒だけでなく、Fクラスのノリに引っ張られているのかEクラスの男子生徒まで飛びかかってくる。

「みずきちゃん、攻撃しないで避ける事にだけ集中して、はるなちやんも」

「は、はい!？」

「避けるだけですか？ わかりました」

深秋は瑞希と陽菜に攻撃をするなどと言うと瑞希は意味がわからないようではあるが、深秋の指示に従い、陽菜も攻撃をせずに群がる男子生徒の攻撃をかわそうとするが扱いになれていない2人は攻撃をくらはするものの圧倒的な点数差があるためダメージはあまりない。

「……そう言う事かよ。原口、お前は追い詰められているEクラス
の女子生徒を守りに行け、理性を失ってる奴らは蹴散らしてかまわ
ん」

「で、でも、それだとさっきの話と違いますか?」

「今日は良いんだよ」

雄二はこの状況での最良の策に変えたようで薫にEクラスの女子生徒を守るように言うと薫は慌てているが、雄二は苦笑いを浮かべると、

「……つたく、吉井深秋か？ 俺や坂本とは相性が悪いな。本能か
ノリかわからないが、やってくれる。原口、坂本の指示に従え」

「で、でも、米倉くん」

巧は雄二が考えた事を読み切ったようで、薫に雄二の指示に従うように言うが、薫は納得がいかなさそうに言う。

「……今日はFクラスで言う吉井兄妹や姫路、俺達Eクラスで中核になれる奴を見つけて事だ。後はお前がEクラスで信頼を勝ち得る事。うちの髪筋代表様の指示じゃ、神輿にはなっても勝てやしないからな」

「……米倉、あんたまで私を髪筋って言うのね」

巧は納得がいかなさそうな薫に向かいけだるそうに言った時、巧の肩を額に青筋を浮かべた宏美が叩くが、

「事実だろ。違っつて言うなら、見せてみるよ」

巧は宏美の怒りの様子など気にする事なく立ち上がると、

「今日は俺の出番はなさそうだから、上がるぞ」

「ちょっと、米倉、私の話は終わってないわよ!」

「ひ、宏美ちゃん、抑えて!」

巧は今日はこれ以上、自分がやる事はないと判断したようで教室を出て行き、宏美は額に青筋を浮かべて巧を追いかけてしようと、薫は宏美に抱きついて宏美を止めようとす。

「さてと、俺もやるか？ 明久、秀吉、島田……須川の首を獲るぞ」

「そつね」

「……須川くん、前の試召戦争より、上手く指揮してるよね」

雄二は薫と宏美の様子に苦笑いを浮かべると暴走している男子生徒をまとめている須川を見て言うと暴走せずに女子生徒を守り、女子生徒からお礼を言われて評価を上げている男子生徒を次々と狩って行っている。

第66問（後書き）

どうも、作者です。

FFF団結成？（爆笑）

深秋は雄二や巧の作戦などお構いなしです。

雄二の指揮のもと明久達はFFF団を狩ることができるんでしょうか？

第67問

「一先ずは、須川の周りの奴らを蹴散らさないといけないが、今は世界史か？」

「うん。正直、今の僕らじゃ、勝てないよ」

「悪かったわね」

雄二は亮を討つためにどう戦うか考え始めるが、世界史のフィールドでは人数差が埋められずに頭を傾げ、明久は苦笑いを浮かべて美波を見ると美波は明久を睨みつけ、

「まあ、須川は原口に討ち取って貰うのがベストだけどな……やっぱり、髪筋じゃねえかよ」

「今は無理そうじゃのう」

雄二は巧が言った通り、Eクラスの指揮は薫に執って貰いたいと思っっているようだが、当の薫は宏美に引きずられており、今は戦力になりそうもない。

「とりあえずは考えておっても仕方ないのじゃ。少しずつでも須川の戦力を削いでいくのが先決じゃ」

「そうね」

「まあ、そう言う事だ。みあ、遊んでないでやるぞ」

秀吉は2人の様子に苦笑いを浮かべると美波はため息を吐き、雄二が深秋に声をかけて時、

『木下、好きだああああ!!!』

「ワ、ワシは男なのじゃ!？」

Fクラスの男子生徒の1人の召喚獣が秀吉の召喚獣に愛の告白をしながら襲い掛かり、秀吉はとっさの事に身動きが取れなくなるが、

「……ヒデくんはボクのだよ」

深秋の召喚獣の弓がその男子生徒の召喚獣の心臓を撃ち抜くと、

「戦死者は補習!!!!!!」

『いやだ!?! 鬼の補習はいやだああ!!!???』

西村教諭が現れ、男子生徒を捕まえて行く。

「お、おい。みあ、今、点数差が大部、有ったよな。何で、1発で倒せるんだよ?」

「え? Dクラス戦で気付いたんだけど、召喚獣のどこを狙うかで削れる点数って違うんだよね。ボクの武器は弓だから上手く当たれば倒せるみたいだよ。まあ、防御力が高そうな鎧を着ている人には跳ね返されちゃうだろうけど」

「……なるほどな。確かにそれなら、さっきの加賀谷との戦いでお前達2人がやった連携にも納得がいく。本来、明久とみあの攻撃力

じゃ、加賀谷にダメージを与えられないはずだったのにな。これは明久とみあは俺が思ってたより、役に立ちそうだ」

雄二は深秋が1発で深秋より点数の高い男子生徒を補習室送りにしたのを見て深秋に聞くと、深秋はDクラスとの試召戦争で自分の武器の長所をあげると雄二は何か納得が言ったようでニヤリと笑うと、

「とりあえずは、姫路と水鏡を助けるぞ。そろそろ、練習には丁度いい点数だ」

「ひ、姫路さん!?!」

深秋の言葉通りに攻撃を一切せずにただ防御に徹している瑞希と陽菜を助けると言う。

「大部、点数が減っておるのう」

「みあが気づいているかはわからんが、それが狙いだからな。まずは水鏡を助けるぞ。明久、秀吉、行くぞ。みあは島田が補習室に送られないように援護しろ」

「うん」

召喚獣で攻撃をかわす事はかなり難しいよう瑞希と陽菜の得点は見ると影もなくなってきており、雄二は明久と秀吉について来いと言いながも深秋と美波に指示を出すと陽菜を助け出しに進んで行き、

「みなみちゃん、行くよ」

「う、うん。みあ、後ろは任せるわよ」

深秋は美波に言うが、美波は深秋の人外化に苦手意識があるようで
背後から飛んでくる深秋の矢に背中に冷たいものが伝って行く。

第68問（前書き）

バカテスト？日本史

問題 1582年に起きた織田信長が明智光秀に討たれた事件を答えなさい。

姫路瑞希、原口薫の答え

『本能寺の変』

教師コメント

『正解です。2人には簡単すぎましたね』

水鏡陽菜、有栖恋華の答え

『本能寺の変 天正10年（1582）6月2日早朝、本能寺の変が起き、織田信長は天下統一の志半ばにして倒れました。長篠の戦に破れた武田勝頼はその後甲斐に戻り体制を整え直そうとしますが、父信玄ほどのカリスマのない彼の元を去る武将も多く国内はガタガタになっていきます。この年の正月にはとうとう姉婿の穴山梅雪が徳川家康のもとに走り2月には徳川と固い同盟関係にある織田信長の軍も信州に侵入してきました。勝頼は郡内に移ろうとしますがこの時彼に従ったのは女性や子供まで入れてもわずか300人であったと伝えられます。しかし目指す郡内へは結局またまた離反により入れず、栖雲寺の近くで敵勢に囲まれる中自刃して果てました。これを栖雲寺の山号をとって天目山の合戦といいます。これにより武田家はあっけなく滅亡し、その所領の大半が徳川家康に帰しました。この戦勝の祝いと協力へのお礼を兼ねて、家康は5月15日、その穴山梅雪をともなつて安土城に信長に会いに来ます。信長は各地に部下を派遣して厳しい戦闘をやっている最中でしたので祝いの気分ではありませんでしたが、徳川は織田にとって重要な同盟相手、仕

方なく取り敢えず手の空いていた明智光秀に家康たちの饗応を命じました。

信長はこの時非常にイライラしていたといえます。数日後家康と一緒に踊りを見に行った時にも突然怒りだして舞手をどなりつけたというエピソードも伝えられていますが、恐らく16日には光秀の館に家康を訪問した信長が魚が傷んでいると行って怒り、光秀に饗応役の御免を申しつけるという一幕もあったとのことです……以下裏面までびっしりと』

教師コメント

『2人が日本史が好きな事はわかりましたが、そこまでは求めていません』

吉井明久の答え

『下克上?』

教師コメント

『確かにその1つですが、今回の答えには足りませんが、吉井くんにしては頑張りましたね』

吉井深秋の答え

『ヤンデレ事件 光ちゃんがノブくんを自分のものにした』

教師コメント

『……確かに戦国時代は男色や衆道と言うものがありましたけど違います』

木下優子の答え

『受け攻め反転 信長×光秀が光秀×信長になった』

教師コメント

『……木下さん、吉井さんに引っ張られ過ぎです』

第68問

「秀吉、薙刀で足元を薙ぎ払え。距離を見誤るなよ」

「うむ。わかっているのじゃ。明久、雄二」

「うん」

雄二は陽菜を助けるために陽菜の召喚獣に群がっている男子生徒の召喚獣の足元を狙うように言々と秀吉は上手く薙刀を使い、男子生徒の召喚獣の足元をすくい、召喚獣達がバランスを崩したのを見て、明久と雄二が召喚獣に襲い掛かり、

「戦死者は補習！！」

『いやだ！！ 鬼の補習はいやだああ！！！？！？』

『放せ！！ 俺は陽菜ちゃんと仲良くなるんだ！！！？！？』

持ち点が0になった男子生徒達は西村教諭に連れて行かれる。

「へえ、雄二も上手く扱っじゃないか？」

「お前に劣ると思われるのはしゃくだからな」

明久と雄二は陽菜の前にいた男子生徒を蹴散らすと憎まれ口を叩きながらも拳を合わせ、

「水鏡、攻撃解禁だ。少し点数が下がったが、これで少しはマシな

練習になるだろ」

「私の最初の点数じゃ、練習にならないんですか？」

「ああ。見ての通り、バカばかりだからな」

雄二は陽菜に攻撃解禁だと言うが、陽菜は今まで、どうして攻撃が禁止だったか理解していないようで首を傾げると雄二はそんな陽菜の様子に苦笑いを浮かべた時、

『陽菜ちゃん、お付き合いしてください！！』

「すみません。おことわりさせていただきます」

「水鏡、ゆっくり答えてないで、攻撃をしろ！！」

陽菜の前が開いたのを見て、男子生徒数名が陽菜に告白をしながら襲いかかってくると陽菜はゆっくりと頭を下げた告白を断り、雄二は頭を下げて無防備になった陽菜を守るように男子生徒の召喚獣を殴り飛ばすと語尾を強めて言う。

「……水鏡さんと雄二じゃ、連携は無理そうだね」

「確かにそのようじゃのう」

明久と秀吉は雄二と陽菜の様子に苦笑いを浮かべると、

「秀吉、次は姫路さんだよ」

「うむ。明久、行くのじゃ」

明久と秀吉は瑞希を助けに向かおうとするが、

「みずきちゃん、攻撃して良いよ」

「はい。わかりました」

深秋が瑞希に声をかけ、瑞希は頷くと彼女の召喚獣の大剣が目の前の男子生徒の召喚獣達を薙ぎ払い、

「……姫路さん、やっぱり凄いね」

「うむ。ワシらが出るまでもなかったのじゃ」

明久と秀吉は攻撃を受け続けながらも未だに高得点の瑞希の点数を見て顔を引きつらせる。

「アキ兄、ヒデくん、遊んでないで助けて」

「そうよ。ウチとみあの点数じゃどうにもならないのよ!？」

深秋と美波は瑞希と陽菜のように高得点ではないため、深秋の援護があるものの美波の点数はさらに削られており、2人は明久と秀吉に助けを求めると、

「雄二、僕と秀吉はみあと島田さんの前を蹴散らしたら2人いるフィールドを数学に替えるよ」

「ああ、姫路、水鏡は数学のフィールドに入らないようにしろ。練習にならないし、俺達はまだ扱いには慣れてないから、点数が優位

にして戦いたい」

「はい」

「わかりました」

明久は雄二に深秋と美波の不利な状況を変えるために教科フィールドを変更すると言うと雄二は瑞希と陽菜を呼び寄せ、

「俺と姫路、水鏡はみあの後方を守るぞ。明久、秀吉」

「うむ」

「わかってるよ」

雄二は明久と秀吉に指示を出そうとすると、2人は雄二の考えを読み取っているようで明久は美波を援護するために美波の隣に進み、秀吉は深秋と美波の中間に立ち、深秋に近づく男子生徒を防ぐように移動すると、

「……ずいぶんと頭がまわるじゃないか」

雄二は自分が出そうとした指示を読み取り、動いた2人を見て、楽しそうに口元を緩ませる。

第68問（後書き）

どうも、作者です。

何となく、バカテストをやってみました。他の作品と違って深秋は珍回答ができるから気が向いたらまた挑戦しようと思います。

雄二、明久、秀吉の連携もそれなりに機能しているのかな？
とか思いながら、次は掃討戦でしょうか？

薫と宏美は戦線に復帰するのか？

そして、フィールドが数学に戻ることで真子は明久に襲いかかるのか？
バトルマニア

第69問

「数学、これでウチもまともに戦えるわ」

明久と秀吉が深秋と美波を援護に入り自分達の周りの男子生徒を蹴散らし、自分達の周りのフィールドを数学に切り替え、

「雄二、僕達はこのまま須川くんの戦力を!？」

「吉井、危ない!!」

「……ちっ。邪魔をするな」

明久が雄二に自分達は他を攻めると言おうとした時、明久の召喚獣に大剣が振り降ろされ美波の召喚獣のサーベルが大剣を防ぐと召喚獣の主の真子は舌打ちをする。

「加賀谷さん!？」

「この時を待っていたんだ。さあ、吉井明久。武器を抜け、私と勝負だ!!」

明久は真子の登場に驚きの声を上げると真子はこの騒ぎの間に回復試験を受けていたようで点数は途中で抜けてきたのか元通りまでとはいかないが点数は回復しており、明久の召喚獣に向けて大剣の切っ先を向けて言うが、

「島田さん、後は任せたよ」

「ちょっと、吉井!？」

明久は真子と戦いたくないように真子を美波に押し付けて逃げ出す。

「逃げるな。こんなザコじゃなく、私はお前に用があるんだ!！」

「ウチがザコ? 聞き捨てならないわね。ウチも数学は得意なのよ
ね」

真子は逃げる明久を追おうとするがその言葉は美波にケンカを売って
おり、真子の言葉に美波は真子に向かいサーベルを構え、

「ふ、面白い。まずはお前から血祭りに上げてやる」

真子は準備運動だと言いたげに美波の召喚獣に向き直し、

「……あそこは凄い事になっておるのう」

「でも、今のまこちゃんとみなみちゃんの成績は五分五分だから良
い勝負になるんじゃないの」

秀吉と深秋は美波と真子の様子に苦笑いを浮かべると、

「吉井深秋、木下秀吉、次はお前達だ。首を洗って待ってなさい!
!」

真子は深秋と秀吉にも敵意の視線を向けるが、

「まこちゃん、みなみちゃんを甘く見ない方がよいよ。少なくとも、
Fクラスじゃ、1、2位のアタッカーだからね」

「ふ、面白い。なら、その実力をを見せて貰います。Eクラス、加賀谷真子が数学勝負を挑みます」

「望むところよ。Fクラス、島田美波、受けます」

深秋は真子に美波相手に油断しない方が良いと言うと真子は美波を対戦相手と認めたようで楽しそうに口元を緩ませる。

「うむ。加賀谷は島田に任せてもよさそうじゃのう」

「そうだね。ボク達はアキ兄を援護に行くよ」

「うむ」

始まった美波と真子の勝負に深秋と秀吉は先に進むと言い、

「喰らえ!!」

「甘いわね。力任せじゃ、ウチは倒せないわよ」

真子の召喚獣は力任せに美波の召喚獣に向かい大剣を振り下ろすが、美波の召喚獣はサーベルでそれを受け止め、

「……なるほど、確かに簡単にはいかないみたいですね」

「ウチだって、2戦もしてきたのよ。吉井やみあには敵わないけど、少しくらいは上達してるわよ」

美波と真子の対決は互角であり、

「……あそこは盛り上がってるな」

「ほんとうですね。加賀谷さんも島田さんも頑張ってください」

雄二は陽菜に襲い掛かる男子生徒達をあしらいながらも感心したように言うと陽菜は美波と真子を応援しはじめ、

「水鏡、応援なんかしてるヒマはないぞ！？　きちんと自分の身くらい守れ！？」

無防備になった陽菜に向かい男子生徒が襲いかかるため、雄二は休まる時はなく、

「坂本くん、援護します」

「……姫路、助かる」

瑞希が雄二と陽菜を援護して男子生徒を蹴散らす。

第70問

「アキ兄、どこから攻めるの？」

「うん。まずはこっちの戦力を増やしたいんだよ。それにやっぱり当初の目的があるから」

深秋は明久にF、Eクラスの男子生徒のどこから攻めるかと聞くと明久は当初の目的である薫の操作性の事もあるため、薫と宏美と合流したいと言った時、

「そこでいちやつきやがって、見せつけているのか！！」

「須川、指示をくれ。俺達はあの幼なじみカップルの中を引き裂くと言っ使命が！！」

「男女の幼なじみだ！！ そんな最初から好感度が高い奴らは引き離せ！！」

男子生徒達は出て行った巧を追いかけようとしている宏美を抱きつき必死に止めようとしている薫の姿に敵意をこめた視線を放ち始める。

「さ、殺気だっっておるのう」

「ま、まあ。中林さんもちよっと熱くなりやすいけど人気はありそうだからね」

明久と秀吉は男子生徒達の様子に顔を引きつらせると、

「アキ兄、ヒデくん、一先ずはかおるちゃんとヒロちゃんを助けよう。ここは数学のフィールドが展開されているから、かおるちゃん、攻められたら直ぐに落ちちゃおうよ」

「う、うん。原口君、中林さん、前を見て!! くるよ!!」

「えっ!?! な、何よ。これ!?!」

深秋は2人を助けるべきだと言い、明久は頷くと薫と宏美に向かい叫び、宏美は明久の声に正気に戻ると自分と薫の周りは男子生徒達が殺気だつて2人を囲んでおり、

『『『試獣召喚!!!』』』』

「宏美ちゃん、構えて!?!」

「わ、わかつてるわよ!?!」

「『試獣召喚!!!』」

男子生徒達が2人に向けている殺気に薫と宏美は慌てて召喚獣を呼び出すが、宏美は代表だけあつてそれなりの点数を取っているが薫は世界史と日本史以外は全くダメなようで戦況は圧倒的に不利のため、

「薫、あんたは後ろにいなさい。私が戦うから」

宏美は薫を守るために前に出るが、男子生徒達にはその行為は逆効果である。

『男の娘を守る体育会系女子だと!!』

『そんなもんは実際じゃあり得ない!!』

『殺す。殺す。殺す!!』

宏美の行為で守られている薫への殺意は跳ね上がり、

「な、何なのよ!?!」

男子生徒3人が一齐に宏美に襲いかかり、宏美は何とかその攻撃を防ごうとするが3対1では全てを防ぎきれぬわけはなく、点数が削られる。

「宏美ちゃん、頑張つて!!」

「わかってるわよ。大声出さな……」

「中林、冷静になるのじゃ」

男子生徒達の攻撃は止まらず、宏美の点数が徐々に削られている姿に薫は普段の彼からは信じられない大きな声で宏美を応援すると宏美は余裕がなくなってきたようで薫を怒鳴りつけようとした時、宏美に襲いかかるうとした召喚獣が秀吉の薙刀で叩き落とされ、

「秀吉、中林さんのフォローを任せるよ。原口君、僕とみあが援護するから前に出て」

「うむ」

「よ、吉井くん!？」

仲間の召喚獣が叩き落とされた様子に行動が一瞬、遅れた男子生徒達の動きが止まり、そのスキに明久は素早くもう2体の召喚獣を木刀で叩きつけると宏美の隣に並ぶ。

「2人とも、ボク達が削るから、間違っても補習室送りになったらダメだよ」

「2人ともみあが言った通り、僕達が点数を削るから点数が減ってきた人と優先的に戦って」

「う、うん」

「わかったわ」

深秋は自分に向けた攻撃を上手く交わしながら、薫と宏美を囲んでいる男子生徒達を弓で撃ち抜いて行き、少しずつ点数を下げており、明久だ2人に指示を出すと薫と宏美は戸惑いながらも返事をする。

第71問

「かおるちゃん、次はどうしたら良いの？」

「は、はい。吉井さんは」

「原口くん、落ち着いて、ゆっくりで良いよ。その間は僕がフォローするから」

深秋と明久は薫に指示を出す練習をさせるために薫に指示を仰ぎながら自分達を囲んでいる男子生徒の戦力を削っている。

「……あちらはつまらない戦いをしていますね」

「指揮する人間がいるとどれだけ心強いかわからないなんてね」

そんな深秋達の戦い方は面白くないと言いたげに真子は舌打ちをし、美波は真子を少し可愛そうな人間を見るように言つと、

「その考え、改めさせてあげるわ。みあや吉井達が前の2戦でどれだけのものを見せてくれたかをね」

「面白い。あなたが私に勝てたら、少し考えを変えてあげても良いですわ」

美波は真子の性根を叩き直すと言いたげにサーベルを構え、真子は美波の言葉を鼻で笑うと美波に向かい大剣を振り下ろすが、

「大振りなのよ。そんな攻撃はあたらないわ!!」

美波はサーベルでその大剣を受け止め、武器同士がぶつかり合う音が響く。

「やりますわね。Fクラスのくせに」

「成績は今は互角みたいよ。あなたはさっき、Fクラスのみあ達に良いようにあしらわれたでしょ。回復試験を受けたとは言え、そのせいで最初よりはずいぶんと点数が落ちてるしね」

真子は美波が自分の攻撃を受け止めた事に楽しそうな笑みを浮かべると美波は深秋達の行動には意味があると言うと、

「ただ、武器を振りまわすのが戦いじゃないのよ!!」

「何を言ってるんですか？ 攻撃に勝るものではありません!!」

美波の召喚獣は真子の召喚獣に向かい駆け出し、真子は大剣で美波の召喚獣を薙ぎ払うが、

「だから、大振りよ!!」

美波の召喚獣は地面を蹴り、薙ぎ払った真子の召喚獣の大剣を飛び越え、真子の召喚獣を斬りつける。

「……ちっ」

「どっ？ 少しはFクラスもやるでしょ？」

「そうですね」

真子は美波の攻撃に自分の召喚獣の点数が削れるのを見て舌打ちを
すると美波はくすりと笑い考えを改めるように聞くと真子は美波と
の模擬召喚戦争は楽しいようで口元を緩ませ、

「あなたと言い、吉井明久、吉井深秋兄妹、姫路瑞希、Fクラスは
私を楽しませてくれる人達がいますね」

「ウチはあなたみたいなバトルマニアを楽しませる趣味はないわよ」
真子は美波の召喚獣を斬りつけるが、今までの大振りとは違い、そ
の大剣の振りは鋭く、美波は何とかその攻撃を交わすため息を吐
く。

「……あそこは何か凄い事になってるわね」

「そうじゃのう」

宏美は秀吉と背中を合わせながら、自分達に群がる男子生徒達を追
い払いながら、美波と真子の戦いのため息を吐くと秀吉は苦笑いを
浮かべて同意する。

「ねえ。木下くん、私はこんな消極的に戦っていて良いの？」

「問題ないのじゃ。お主は代表じゃ、迂闊に戦いに行つて負けると
それで試召戦争は終わり、代表にとって模擬試召戦争に必要な事は
負けぬ事じゃ」

宏美はやはり体育会系なのか、消極的な戦い方に不満そうに言うが
秀吉は今のままで良いと言うが、

「……模擬試召戦争なんだから、加賀谷さんまでとは言わないけど、私ももつと戦いたいわ」

「それは個人での練習の時にしてくれんかのう」

「わかってるわよ」

宏美は不満そうにしている。

第72問

「……武器の差かな？ ぶつかり合いはきついわ」

「さっきまでの威勢はどうしたんですか？」

美波は真子との何度も剣を交えているが、点数は互角ではあるが武器の特性なのか1撃の重さは真子に分があるようで武器がぶつかる度に少しずつ点数が削られて行き、真子は美波の点数が削れて行く様子に口元を緩めると、

「これで終わりです！！」

真子は美波の向かい大剣を振り下ろした時、

『真子さん、付き合ってください！！』

『島田のびつたんこは俺のものだ！！』

美波と真子に向かい男子生徒が飛びかかり、

「……ちっ、邪魔をするな！！」

真子は大剣の軌道が無理やり変え、襲いかかってきた男子生徒を一
刀両断するが、

『バランスを崩したぞ。今がチャンスだ！！』

「……ここまでみたいですね」

真子の召喚獣は大剣の軌道を無理やり変えた影響でバランスを崩し、男子生徒達は今がチャンスだと真子に飛びかかり、真子はバランスの崩れた状態では交わしきれないと判断したようで悔しそうに諦めの言葉を吐く。

「何を諦めてるのよ。ウチと決着をつけるんじゃないの?」

「島田さん?」

諦めかけた真子の召喚獣に飛びかかった男子生徒の召喚獣を美波が斬りつけ、真子に声をかけると美波の行動に真子は何があったかわからないと言つ表情をするが、

「そうですね。なら、先に邪魔者を蹴散らしましょう」

「そう言う事よ」

表情を引き締めると真子の召喚獣は美波の召喚獣と背中を合わせ、向かってくる男子生徒を蹴散らし始める。

「美波ちゃんと加賀谷さんは大丈夫そうですね」

「ああ……明久とみあが原口、島田と加賀谷、秀吉と中林か? 良い感じに組んだな。後はこっちか?」

雄二と瑞希は群がる男子生徒をはじき返しながら、上手く組んでいるFクラスの主力とEクラスの中核を見て言うが、

「危ないですよ。落ち着いてください」

こちらの連携は陽菜のゆつたりとしたペースに巻き込まれて徐々に押され始めている。

「……明久やみあを見ていて試召戦争は点数だけじゃないと確信していたが、こつ言つのもあるとはな」

「そうですね。でも、きっと大丈夫ですよ」

「……そう願いたいな」

雄二は点数の割にあまり役に立たない陽菜に舌打ちをすると瑞希は苦笑いを浮かべると雄二はため息を吐くが、

「一先ずはそれなりに戦力もまとまりだしたからな。まずは島田と加賀谷と合流するぞ。そろそろ、決めないと時間も時間だしな」

「はい」

「わかりました。加賀谷さんのところに行けばいいんですね？」

直ぐに表情を引き締めると作戦は次の段階に移ると言い、瑞希と陽菜は頷く。

「すみません。ちょっと避けて貰えませんか？」

「「えっ!?!」」

「加賀谷さんと島田さんのところに行かないんですか？」

雄二の指示に頷いた陽菜は今まで抜く事のなかった召喚獣の武器である刀を素早く抜くと陽菜の前にいた男子生徒達の召喚獣が吹き飛び、いきなり目の前で起きた事に雄二と瑞希は目を丸くするが、男子生徒達の召喚獣を簡単に吹き飛ばした陽菜本人は2人が驚いている意味がわからないように首を傾げる。

「み、水鏡、お前、今、何をした？」

「えーと、ですね。抜刀術って言うんですけど、わたしの武器は刀に鞘も付いていましたので、やってみたらできちゃいました」

「そうなんですか？ 凄いです」

雄二は顔を引きつらせながら陽菜に聞くと陽菜はにっこりとほほ笑んで答え、瑞希は陽菜のペースに巻き込まれ始めたように笑顔で陽菜に言い、

「……今更だが、この2人は組ませるべきじゃないな」

陽菜が吹き飛ばし、空いたはずのスペースは瑞希と陽菜が話し始めたうちに新たな男子生徒で埋まり、雄二は目の前にいる2人の天然の姿にため息を吐く。

第73問

「……流石にきつくなってきたね」

「圧倒的に人数差がありますからね」

「そうだね」

明久と深秋は薫をフォローしながら男子生徒達と戦っていたが、3人とも特に点数も高いわけではないため、決め手に欠け徐々に押されはじめ出すと、

「みあちゃん、俺達が勝つたら付き合ってください」

『みあちゃんに勝てばみあちゃんと付き合える！？』

『みあちゃんとお付き合いするのは俺だ！！』

男子生徒の指示を出していた亮が深秋に勝つたら付き合っ欲しいと厚かましい事を言い、その言葉に男子生徒達は自分達の都合の良ように受け取り、次々と深秋自身に襲い掛かる。

「さ、流石に交わしきれないかな？」

「みあ、こっちだ」

「アキ兄」

深秋は流石に召喚獣ではなく、自分に襲い掛かってくるのに顔を引

きつらせると明久が深秋の手を引っ張り、深秋を抱きよせると深秋は安心したようでほっとしたようで安堵のため息を漏らす、

「……吉井、俺とみあちゃんの邪魔をするな！！　まずは吉井から血祭りに上げるんだ！！」

『お兄様、覚悟！！』

『吉井、お前が死んでもみあちゃんは俺が一生守り続けるから安心して死ね！！』

亮は深秋を手に入れるために明久は邪魔な存在だと言い切り、男子生徒全てに明久抹殺命令を出すと男子生徒は明久に向かい襲いかかる。

「ちょ、ちよつと、みんな落ち着いて!？」

「アキ兄、これはあれだよ。もう、ボクと愛の逃避行しかないね」

「しないから!？　みあ、それも違うから!？」

明久は自分に向けられる殺意に顔を引きつらせながら落ち着くように言うが、深秋は明久の顔を見上げながらまたおかしな事を言い始め、明久は深秋の言葉を全力で否定するが、

「それじゃあ、この世で結ばれない2人は責めてあつちの世界で？」

「……みあ、それは何の冗談？」

「アキ兄、知ってる？　世の中にはヤンデレって言うのも流行って

るらしくて、ボクとしては近親相姦も押さえないといけないと思うけどこっちも押さえないといけないと思うんだよね」

深秋は首を傾げながら明久の召喚獣の胸に弓矢を押し当てて聞き、明久は頭が状況について行けないように顔を引きつらせて聞き返すと演技なのか深秋の目は焦点が合う事なく、彼女はくすくすと笑い、

「みあ、怖いから!？ それは怖いから!？」

「大丈夫だよ。すぐにボクも後を追うから」

明久は深秋の迫真とも言える演技に顔を引きつらせたまま深秋に落ち着くように言うが、深秋は優しげな笑みを浮かべて言い、その笑みがより一層の怖さを引き出しており、深秋と明久に襲いかかるうとしていた男子生徒達は息を飲んでいる。

「……こ、これはまさか実の兄妹での悲恋話？」

「か、加賀谷さん、どうかしたの？ 早く、みあ達を助けるわよ」

「わ、わかってます」

真子は深秋と明久の空気に何かを感じ取ったようで一瞬、呆気に取られると美波は真子の様子に何かあったかわからないようだが、深秋が自分達に助けを求めていると思ったように真子に声をかけると深秋と明久を囲んでいる男子生徒達の召喚獣を蹴散らし始め、真子は少しだけ残念そうな表情をした後、美波の後に続く。

第73問（後書き）

どうも、作者です。

女性は生まれながらの女優。（爆笑）

深秋の迫真の演技に飲み込まれる生徒たち、しかし、美波は気にしません。

深秋は秀吉とは違う演技を得意としていますね。（苦笑）

第74問

「みあ、吉井、いつまでバカな事をしてるのよ!」

「島田さんに加賀谷さん!? み、みあ、こ、これで反撃ができるよ」

「みなみちゃん、邪魔をするの? あげない。アキ兄をみなみちゃんに取られるくらいなら……」

「……これは凄いです」

美波と真子は深秋と明久のところまで行くと明久は安心したようなため息を吐くが、深秋が暴走のスピードを緩める気はなく迫真の演技を続けており、真子は深秋の様子に息を飲む。

「ちよつと、みあ!? もう良いから!? 僕達の目的は違うから!?」

「大丈夫だよ。アキ兄、痛いのは最初だけだから、直ぐに楽にしてあげるよ。それにボクも直ぐに後を追うから」

「みあ、あんたは何をしてるのよ!」

明久は深秋が止まらない事に声を上げるが、深秋はくすくすと笑うと明久の召喚獣に向かい矢を放ち、美波は驚きの声を上げるが、

「……お主らはいつまで遊んでおるのじゃ?」

「……いや、まったく遊んでいるように見えなかつたんですけど」

「……ホントよ」

矢は明久の召喚獣のわきの下を通り、先ほどまで騒ぎたてていた男子生徒の召喚獣に突き刺さり、秀吉はその男子生徒の召喚獣とその周りの男子生徒達の召喚獣を薙ぎ払いたため息を吐くが薫と宏美は深秋は本気だと思っていたようで顔を引きつらせている。

「く、くそ。せっかく、みあちゃんを周りから分断して、ここまで持ってきたのに」

「須川、お前らはみあのペースに巻き込まれたただけだったみたいだな」

亮は秀吉達が合流した事に舌打ちをするとバラバラで襲われていた生徒達を雄二、瑞希、陽菜は助け、まとめ上げたようで深秋と明久の周りを囲んでいた男子生徒達を取り囲んでおり、圧倒的に有利になった雄二はニヤリと笑い、男子生徒をまとめあげていた亮に向かい言つと、

「くつ、坂本、貴様、俺達を裏切つたな!!!」

「……いや、全然、意味がわからんぞ」

亮は雄二を裏切り者と言うが雄二は意味がわからないとため息を吐き、

「い、言つただろ。参加すれば女子の評価も上がる。仲良くなれるチャンスだ!!!」

「……まあ、そういう話になった事は事実だけだな。お前らは、真面目に練習するならまだしも勝手に暴走して評価を下げるのはお前らの自業自得だ」

亮は内と外からまとめ上げた男子生徒達が逃げ場もなく補習室送りにされているのを見て雄二に向かい叫ぶが、雄二は呆れたように暴走した奴らが悪いと言い切る。

「く、くそ。こうなったら、やるべき事はただ1つだ。み、みあちやん、お付き合いしてください!!」

「断る　顔も性格もタイプじゃない」

亮は今の状況では他の女子生徒から評価が上がるわけないと判断し、勝手に決めた深秋に勝ったら付き合えると言う条件を強行しようと深秋に襲い掛かるが深秋はその突撃を交わすと笑顔で亮に精神的な攻撃を喰らわせると、

「そ、そんな」

亮は流石にドストレートを喰らった事で膝を付き、

「ここだよ。かおるちゃん」

「う、うん。Eクラス、原口薫がFクラス須川亮に日本史勝負を挑みます。試獣召喚^{サモン}!!」

深秋は薫に亮に止めを刺すように言つと薫はすでに戦意のない亮に召喚戦争を仕掛け、亮の召喚獣の頭を彼の召喚獣の武器である赤い

ファイルの角で引つ叩き、亮を補習室送りにする姿を、

「……須川くん、フィードバックなくて良かったね」

「……うん。ファイルの角は痛いよね。他の武器と違って現実味がある分、リアルに感じるから」

フィードバックのある明久と深秋は複雑な表情で見ていた。

第74問（後書き）

どうも、作者です。

薫の武器は赤いファイル。色は血で染まったかは定かではありません。

薫の武器だと前に深秋と明久でやった矢を深く突き刺す攻撃はやりやすいかな？とか思いながらも今回はネタに使わせていただきました。

剣で切られるよりはファイルでしばき倒される方がダメージがでかそうなお観察処分者。たぶん、足の小指を角にぶつけるのが1番ダメージがあるかも知れない。

須川くんの退場でひとまず終わりかな？

第75問

「終了」

「……疲れたわね」

「本当よ」

亮を薫が討ち取った事で男子生徒達の暴走は鎮圧に向かい白旗を上げた男子生徒達をまとめると深秋は勝利宣言をし、美波と宏美はため息を吐く。

「結局、総力戦になっちまったな。回復試験の申請はしてあるが模擬試召戦争を続けるなら1日に模擬試召戦争で使う教科を2、3教科に絞るべきだな。失った点数を回復させるのは時間がかかるからな」

「そうですね」

雄二は模擬試召戦争が終わり、自分や生き残った生徒達の点数を見て考え込むと薫は雄二の意見に頷くと、

「みんな、家庭科で召喚してボクの腕輪の能力で生き残ってる人達だけでも点数を回復させよう」

「そうだね。みあの腕輪は治癒だからこう言う時に役に立つよね」

深秋は自分の腕輪の能力を使うと言うと明久は頷き、生き残った生徒は深秋の腕輪を使い点数を回復させ、

「腕輪ですか？ やっぱり、凄いですね」

「みあ、全員の点数を回復できたけど、対象は全員にできるの？」

陽菜は深秋の腕輪の能力を見て感心したように言うが美波は深秋の味方として召喚した生徒以外にも回復している事に首を傾げる。

「対象者はボク以外で範囲や対象は選べるみたいだけど、実際はわからない。Dクラス戦の時はFクラスのみみんなを回復させようと思ったら、光の矢がFクラスの生徒に向かったけど、今は全員って考えたらみんなの回復ができたから」

「うーん。せっかく、模擬試召戦争で腕輪の能力を試せるんだ。みあの腕輪は調べてみる価値はあるな」

深秋は自分の腕輪の能力の範囲がわからないと言うと雄二は模擬試召戦争の間で深秋の腕輪の能力を見極めようと言い、

「とりあえず、みあの腕輪で回復はしたがクラスで回復試験は申請するからFクラスで回復試験を受けたい教科がある奴は俺に報告しろ」

「Eクラスはぼくに言ってください」

雄二と薫は回復試験の事もあるため、まとめに入りだす。

「みあ、身体は大丈夫？ そろそろ、帰る準備しようか？ 今日バイトなかったよね」

「うん。店長さんに今日から出ます。って、連絡したんだけど、もう1日休みなさいって言われちゃった」

「ちょっと、みあ!？」

明久はまともに入っている雄二と薫を眺めながらも昨日まで体調を崩していた深秋を心配するように声をかけると深秋は明久に抱きつきながらバイトが休みになってしまった事を告げ、

「それじゃあ。夕飯の材料を買って帰らないとね。昨日と一昨日は霧島さんの家に泊まらせて貰ったから、食材もダメになってるものもあるだろうし」

「うん。そうだね……アキ兄、今日はボク、アキ兄のパエリアが食べたい」

「そうだね。そうしようか」

深秋と明久はまるで付き合っているカップルのように自然に夕飯の会話になっており、

「……」

秀吉、瑞希、美波は2人の様子を少し複雑そうな表情で見ているなか、

「……吉井明久、吉井深秋」

「な、何？ 加賀谷さん」

真子が深秋と明久の名前を呼び、明久は真子を苦手に行っているように声を裏返すと、

「そ、その、あ、あなた達、兄妹はそう言う関係なんですか？」

「そう言う関係？ ……違うから！？ 加賀谷さんもおかしな事を考えないで！？」

真子は深秋と明久を実の兄妹での禁断の関係だと思っているように頬を赤く染めながら聞き、明久はしばらく考えた後、全力で否定する。

「……加賀谷も姉上やみあと同じような趣味があるのかのう」

「そうみたい」

秀吉は真子の様子に顔を引きつらせると深秋は仲間を見つけた事で楽しそうな笑顔を見せ、

「まこちゃん、まこちゃん、まこちゃんはどんな本を読んでいるの？
ボクはこんなのかあんなのか」

「わ、私はこう言うのが……」

「み、みあ、教室でおかしな本を広げないで！？ 加賀谷さんもだよ！？」

懐からBL本を取り出すと真子に良く読むジャンルを聞きはじめ、明久は2人を止めようと声を張り上げる。

第75問（後書き）

どうも、作者です。

一先ず、1回目の模擬試召戦争は終了ですね。あとはすいませんがEクラスの投稿キャラはここで打ち切らせていただきます。

Cクラスの投稿キャラは今選んでいる途中です。どうなるかはわかりません。

1つ企んでいる事、深秋がいる事で、明久×瑞希ルートと言う事は皆さんにもご理解いただけていると思いますが……美波をどうしよう？

割と美波が好きなんですけど、深秋がいると明久への暴力もある程度は止めに入る部分もあるので、彼女が浮いてしまっんですよね。現に今も呼び方は島田さんと吉井ですし。

オリキャラを追加しようかと思いますが皆さんはどう思いますかね？

- 1．オリキャラ追加で美波にも幸せを。
- 2．女友達として、割切ってしまう。

ご意見をいただけると幸いです。

第76問

「……疲れた」

「吉井くん、大丈夫ですか？」

下校途中に深秋、明久、瑞希の3人は商店街に向かって歩いていくと、明久は深秋と真子を止めるために全力を尽くしたのだが真子以外にもEクラス的女子には隠れ腐女子が潜んでいたようで明久の行動は徒労に終わり、明久が大きなため息を吐くと瑞希は苦笑いを浮かべながら明久を心配する。

「……うん。大丈夫だよ。ありがとう。姫路さん」

「ヒロちゃんにまこちゃん、はるなちゃん、他にもたっくさん、お友達が増えた」

明久は瑞希の心配に礼を言う隣で深秋は真子や陽菜と友達になったのが嬉しいようで楽しそうにしていると、

「す、すいません」

「気にしないで良いよ。それより、早く電話にでないと」

「はい。お母さん、わかりました」

瑞希の携帯電話が鳴り、瑞希は明久に謝ると慌てて携帯電話を取り出すと彼女の母親からの電話のようで瑞希は少しの間、会話をした後、電話を切る。

「みずきちゃん、どうかしたの？」

「お父さんとお母さん、ちょっと用事ができたらしくて、夕飯を作
って行く時間もないみたいなんです。それで、夕飯は何か買ってきて
食べてって」

「そうなの？ それなら、家で夕飯、食べてく？」

深秋は瑞希に電話の内容を聞くと瑞希は今日は家で1人だと言い、
明久は瑞希に家に夕飯を食べにくるかと聞き、

「良いんですか？」

「うん。別にかまわないよ。みあも良いよね？」

「うん。ボクも問題ないよ」

瑞希は遠慮がちに聞き返すが深秋と明久は瑞希が家に来る事など昔
からある事のため、気にする素振りはないが、

「そ、それなら、何もしないのは心苦しいので、私も夕飯を作るの
をお手伝いします!!」

「しなくて良いから!!」

「……そんな」

瑞希はただ夕飯をこちそうになるのは心苦しいと言い、夕飯を作る
のを手伝うと言うと深秋と明久は全力で遠慮すると瑞希は肩を落と

し落ち込む。

「それじゃあ、早く買い物を買って帰るのか？」

「そうだね……そうだ。みずきちゃん、帰りにみずきちゃんのお家によって着替え持ってきてお泊りにしない？」

「ちょ、ちょっと、みあ、いきなり何を言うの!？」

深秋と明久は自分達の命にかかわるため、落ち込んでいる瑞希をフオローする気はなく、早く買い物を買って帰らせようとする。深秋は何かを思いついたようで瑞希に今日は家に泊まって行かないかと提案すると明久は驚きの声をあげるが、

「い、良いんですか？」

「うん。アキ兄、良いよね？」

瑞希は深秋の提案に笑顔になり嬉しそうに返事をする。深秋は笑顔で明久に聞くと、

「うっ!？ だ、だけどさ。いきなりすぎるし、家だってしばらく開けたんだから、片づけもしてないんだからさ」

「大丈夫だよ。アキ兄のエッチな保険体育の参考書は巨乳の子が多いってボクもみずきちゃんも知ってるから」

「……は、はい」

明久は家には瑞希に見せられないものも多くあるため、何とか瑞希

のお泊りを回避しようとするが深秋はすでに瑞希は明久の趣味を知っていると言いつつと瑞希は頬を赤く染めて明久から視線を逸らし、

「さ、最悪だああつつつ!!!????」

明久の叫び声が商店街に響き渡る。

第76問（後書き）

どうも、作者です。

幼なじみの会話です。

明久の趣味は瑞希にばればね。（爆笑）

原作で瑞希は玲を知らなかったけど、深秋がいると知っててもおかしくないのかな？ とふと思いました。えっ？ いきなり、お泊まり会の前に玲の話ってナニヲイツテルンデスカ？ ナニモタ克蘭 デイマセンヨ。

そして、期限を決めていませんでしたが、美波の幸せを願う声もいだけ嬉しい限りです。クラスはやっぱり、Fクラスかな？ それとも他のクラスにしようかな？

妄想は膨らむばかりです。（爆笑）

第77問（前書き）

今回からオリキャラの『大河 咲耶』が登場します。

データは作者の作ったオリキャラのため『オリキャラデータ』に追加してあります。

第77問

「……みあ、明久は何をしてるんだ？」

「あつ、さつくん」

明久が叫び声を上げているのを見て、商店街には明久を避けるように小さな空間ができる。明久の周りに立っている深秋の姿を見つけて、1人の少年が声を深秋に声をかけてくると深秋は笑顔で少年を『さつくん』と呼ぶ。

「あの、みあちゃん」

「みずきちちゃん、紹介するね。ボクがバイトしている喫茶店のバイト仲間のさつくん」

「えーと、『大河 咲耶』だ。Aクラス所属、噂は聞いてるよ。姫路さん」

「は、はい。姫路瑞希です。よろしくお願いします。大河くん」

瑞希はさつくんと呼ばれた少年と面識がないために首を傾げると咲耶は瑞希に自分の名前を名乗り、柔和な笑みを浮かべ、瑞希は慌てて頭を下げる。

「さつくん、こんなところで何をしてるの？ 今日シフトじゃないの？」

「ああ。みあが2日休んだら。それで厨房の人手が不足して代わ

りに出てただけけど、その分、今日は休めって言われてな。それよ
り、みあ、明久は何してるんだ？」

深秋は咲耶がバイトに行っている時間なのに商店街を歩いているの
を疑問に思い首を傾げると咲耶は苦笑いを浮かべて今日はバイトが
休みになった事を告げた後、再び、明久が何故、叫んでいるのか聞
くと、

「えーと、アキ兄の保険体育の参考書の趣味をみずきちゃんが知っ
てるって話をしたただけだよ」

「……それはずいぶん、酷な事をしたな」

深秋はまったく明久に悪い事をしたと言う気はないためか笑顔で言
い切ると咲耶は明久の味方をしたいようぐため息を吐く。

「そうかな？」

「普通の男はみあや姫路さんみたいに可愛い子にそう言うのは知ら
れたくないだろ」

深秋は咲耶のため息の意味がわからずに首を傾げると咲耶はもう1
度、ため息を吐き、

「明久、そろそろ、落ち着け」

「えっ！？ サク！？ どうしたの？」

「……商店街で真ん中で知り合いが叫んでたら気になるだろ」

明久の肩を揺ると明久は咲耶の登場に驚きの声を上げ、咲耶は3度目のため息を吐くと、

「さっくん、今、さりげなく、アキ兄を友達から知り合いに落としたね」

「みあ、勘違いしないでくれ。俺は明久とは友人じゃない。過去の人だ」

「サク、それって酷くない!？」

深秋は咲耶の言葉にツツコミを入れると咲耶は明久とは縁を切ったと言い、明久は声をあげる。

「冗談だ。冗談に決まってるだろ。だいたい、過去に関わりがあった事を否定したいんだからな」

「……サク、僕の事、嫌い？」

咲耶は明久の様子にさらに追い打ちをかけると明久は涙目になり、咲耶にとの距離を縮めるが、

「……明久、泣くな。お前がここで泣くとみあがおかしな妄想を始めるから」

「……そうだね」

「……ちっ」

咲耶は右手を前に出して明久を静止すると深秋は舌打ちをする。

「みあ、おかしな事を考えないで!？」

「大丈夫だよ。ボクの頭の中ではさつくん×アキ兄の絵が出来上がってるから、ね。みずきちゃん」

「よ、吉井くんはもっと女の子に興味を持った方が良いと思います」

「えっ!？　ちょ、ちよっと、姫路さん、こんなところで何を言出すの?」

深秋の舌打ちに明久が声をあげると深秋は瑞希に話を振り、瑞希は完全に勘違いしているようで頬を赤く染めながら明久に言つと、

「……悪いな。明久、俺はこの辺で帰らせて貰う」

「待って!？　サク、僕を見捨てないで!！」

咲耶はこれ以上、巻き込まれたくないと思ふと明久を見捨てて逃げ出し、明久は咲耶を引き留めようとするがその声は虚しく響くだけである。

第78問

「……さて、どこに片付けよう？ ベッドの下はベタすぎる。前に雄二は机の1番下の引出しを二重底にしてと……無理だ。そこまでの時間はない。なら、いつそ捨ててしまおう？ ダメだ。捨てるなんて、こんなにも素晴らしいものを捨てるわけにはいかない」

明久は商店街で買い物が終わらせると深秋は瑞希が着替えを取りに行くのに付いて行ったため1人で先に家に帰り、自分の部屋にある『保険体育の参考書』をどこに隠すか悩んでいると、

「う、嘘！？ こんなに早く帰ってきた？ ど、どうしよう!？ こ、このままじゃ……あれ？ みあは家のカギを持つてるからインターホンは鳴らないよね？ それなら、誰だろう?」

家のインターホンが鳴り、明久は手に保険体育の参考書を持ったまま慌てるが、明久は深秋と瑞希ならインターホンが鳴るわけがない事に気づき、一先ず手に持った保険体育の参考書をベッドの上に置き、玄関に向かう。

「えーと、みあ宛の小包か？ また、コスプレ衣装の生地かな？ まあ、良いや。一先ずはこれはどうにかしないと」

来客は宅配便であり、明久は受け取った小包を居間のテーブルに置くのと部屋に戻り、保険体育の参考書を手にベッドに腰かけどうするか考え始めると、

「……さっきは慌てたからかな。一先ず、ティッシュで拭こう」

自分の額に汗が伝っている事に気づき、枕元にあるティッシュの箱に手を伸ばした時、

「アキ兄、ただいま …… 事前？ 事後？」

「吉井くん、お邪魔します。ご、ごめんなさい!？」

深秋が瑞希を連れて帰ってきたようで明久の部屋のドアを開けるとベッドに腰を下ろし、保険体育の参考書を片手にティッシュの箱に手を伸ばす明久の姿が目に入り、深秋は首を傾げるが瑞希は慌てて深秋の後ろに隠れ、

「待つて!？ みあも姫路さんも勘違いしないで!？」

明久は慌てて今の状況を説明しようとするが、

「ベットに腰をかけエッチな本を片手にティッシュに手を伸ばす男 …… 弁明のしようがない!？」

誰の目から見ても明久は『自家発電中』であり、

「アキ兄、ボクとみずきちゃんは一先ず、ボクの部屋にいるね。そうだよ。みずきちゃんがお泊りするんだから、先に熱いパトスを何かで発散しとかないと危険だよね」

「 …… あ、あの。吉井くん、すいません。吉井くんも年頃の男の子ですから、もう少し、私も気を利かせるべきでした」

深秋は明久の様子に現在の状況を完璧に理解したようで明久遊びに移行し、瑞希は普通に勘違いしているようで頬を赤くしたまま、ち

らちらと明久の顔を見ている。

「ま、待って。姫路さん、勘違いなんだ!! ボクは!!」

「その参考書でボクとみずきちゃんをどのように手籠めにするか考えてたんだね」

「わ、私は吉井くんが望むのなら」

明久は瑞希の様子に嫌われると思ったようで保険体育の参考書を投げ出し、床に下りて土下座をしようとするが深秋が明久に抱きつき明久の行動を止め、瑞希は顔を真っ赤にしたまま、明久のためならどんな事でもしても良いと言うが、

「み、みあ、止めて!? スポンを下ろさないで!？」

「ここまでボクとみずきちゃんを待っていてくれるなんて思わなかったよ。アキ兄、今日はみずきちゃんと一緒だけど、どっちかをひいきするよつな事はいやだよ」

明久は深秋に襲われているため、瑞希の言葉は耳には入っていない。

第78問（後書き）

どうも、作者です。

今回は明久に合掌で閉めます。（爆笑）

第79問

「……みあ、僕は夕飯を作るから、これ以上、邪魔をしないで」

「仕方ないなあ。みずきちゃんをキッチンに入れるわけにもいかな
いから、今は引くよ」

「……」

明久は深秋を何とか引き剥がすとすでに疲れきっているが、夕飯を
作るために殺人料理人の瑞希を深秋に任せると言うとき深秋は明久の
言葉に頷き、瑞希は軽く落ち込みに入っており、

「みずきちゃん、良いんだよ。みずきちゃんがお料理をできなくな
って、アキ兄にずっと作って貰えば良いんだから、ね。おねえちゃ
ん」

「み、みあちゃん!？」

深秋は瑞希の様子にくすりと笑うと彼女の耳元で瑞希に向かい『お
姉ちゃん』とささやくと瑞希の顔は一気に真っ赤に染まり、驚きの
声をあげるが、

「アキ兄、ボクとみずきちゃんはボクの部屋に行ってるからね」

「うん。夕飯ができたら呼ぶよ」

深秋は瑞希の反応に優しげな笑みを浮かべると明久に自分の部屋に
戻ると言い、瑞希の手を引いて行く。

「み、みあちゃん」

「どうかしたの？」

深秋の部屋に移動すると瑞希は深秋の言葉の意味を聞きたいようで、深秋は制服から私服に着替えながら振り返ると、

「あ、あの。さ、さっきのお姉ちゃんって言うのは？」

「なあに？ アキ兄が相手じゃ、いや？」

「そ、そんなことはないです！！ …… あっ！？」

瑞希は顔を真っ赤にしたまま、先ほどの『お姉ちゃん』と言う言葉の真意を聞こうとすると深秋はくすりと笑つと瑞希の気持は何年も見てきたため知ってはいるが瑞希をからかうように明久の事が嫌いかと聞くと瑞希は全力で明久が好きと言った後、顔を真っ赤にして目を伏せてしまう。

「みずきちゃん、かわいい」

「み、みあちゃん！？」

深秋は瑞希の反応に勢いそのまま瑞希に飛びつくつと瑞希は深秋のベツトの上に押し倒され、瑞希が驚きの声をあげた時、

「みずきちゃん、前に聞いた事がある話なんだけどね。一生で『親友』って呼べる友達って2、3人しかできないんだって、ボクはね。迷惑かも知れないけど、みずきちゃん、しょうこちゃん、ゆうちゃ

んの3人だと思ってるんだ。ちょっと、みなみちゃんには悪いんだけどみずきちゃんを応援してるよ」

「み、みあちゃん。ありがとうございます。私もみあちゃんの事を親友だと思ってますよ。でも……」

深秋は今まで、瑞希には言った事はなかったように瑞希は深秋が自分の事を親友だと言ってくれた事が嬉しいように笑顔を見せるが、瑞希は自分に自信がないように目を伏せてしまうが、

「……みずきちゃん、自信を持って。少し、反則かも知れないけどね。いくら、みずきちゃんが親友だと言っててもボクはアキ兄も大切だから、アキ兄がみずきちゃんを嫌いだったら、2人の背中は押さないよ」

「そ、それって!?!? ……」

「……口には出したらダメ。ボクはみずきちゃんとアキ兄の背中を押してるの」

深秋は瑞希の背中を押すために明久の想いを教えると瑞希は顔を真っ赤にして明久と自分が両想いだと言口に出そうとすると深秋は瑞希の唇に人差し指を当てて彼女の言葉を静止し、

「アキ兄はみずきちゃんを高嶺の花だと思っ込んでるんだよ。アキ兄は自分に自信がないから、もう少し時間がかかるんだって、男子のプライドなのかも知れないけど、女の子から見るとそんな事より、もっと大切にして欲しい想いってあるのにね」

「そうですね」

明久の気持ちも知っているためか苦笑いを浮かべると瑞希は自分のために頑張っている明久の気持ちが嬉しいようで笑顔を見せた時、

「みあ、姫路さん、夕飯できたよ……ご、ごめん!？」

「アキ兄、ちょっと待って!？」

「よ、吉井くん、勘違いしないでください!？」

明久は深秋の部屋のドアを開けると制服を脱ぎかけた深秋が瑞希をベットに押し倒しており明久は慌ててドアを閉める。

第79問（後書き）

どうも、作者です。

深秋、明久の気持ちを瑞希にばらす。（爆笑）
深秋は完全に瑞希派ですね。美波も仲の良い友達なのかも知れませんが小さなころからずっとそばにいる瑞希の方が大切なんだと思います。

そして、勘違いは続く。（爆笑）

一先ず、お泊まりでやりたい事は終わりました。
玲の登場はもう少し後です。

第80問

「アキ兄、ボクはお風呂入ってくるから、湯上りのみずきちゃんに欲情したからって言っても、1人でみずきちゃんを襲っちゃダメだよ。その時はボクも一緒だからね」

「……襲わないから」

「みあちゃん、何を言っているんですか!？」

夕飯を終えて入浴タイムに入っているようでお客様である瑞希が上がつてきたため、深秋は浴室に向かって行くと、

「……」

2人つきりになった明久と瑞希は深秋の言葉もあるため、何となく気不味い空気になる。

「えーと、姫路さん？」

「は、はい!？ な、何かありましたか？」

明久はこの空気に耐え切れなくなったようで瑞希と何かを話そうと彼女を呼ぶと瑞希は先ほど深秋から自分と明久が両想いだと言う事を聞かされているためか緊張しているようで声は裏返し、

「あ、あのね。姫路さん」

「だ、大丈夫です。私は吉井くんになら何をされても!！」

「しないからね!? みあから何を吹き込まれたかは知らないけど、ボクはそんな事はしないからね!？」

明久は瑞希が自分を警戒していると思い、深秋の言葉を否定しようとする。瑞希は顔を真っ赤にして大胆発言をするが、明久は瑞希の大胆発言を頭が処理しきれないよう、全力で襲わないと言う。

「……そ、そうですね」

「何で、残念そうな顔をするの？」

瑞希は明久の言葉に気分は複雑なようで、少し残念そうな表情をする。明久は意味がわからないよう、首を傾げ、

「な、何でもありません!？」

「そう。そうなら良いんだけど」

瑞希は慌てて何でもないと言う。明久は一先ず、これ以上、この話は伸ばしてはいけないと判断したよう、頷くと、

「そ、そう言えば、姫路さんが家に泊まりにくるのって久しぶりだよ、ね」

話をすり替える。

「そうですね。小学生の時はよくきていたはずですけど、流石にこの年になると吉井くんもいますし」

「そうだよ。流石に同じ年の男がいる家には簡単にはこれないよ
ね」

「あっ!？」

瑞希は昔を懐かしむように笑うと明久は瑞希の笑顔につられて自分
も笑顔を見せると明久の表情に瑞希は目を奪われるが、

「ん？ 姫路さん、どうかしたの？」

「な、何でもないです」

明久は首を傾げると瑞希は慌てて何でもないと言つと、

「そう？ ごめん、姫路さん、みあが上がってくるまでテレビでも
見てて、僕は少しやる事があるから」

「そうなんですか？」

「うん。ちょっと、秀吉のお姉さんに頼んでたい事があつて、そ
の件で1つ宿題を出されちゃったんだ」

明久は優子に頼んだ勉強を教えて欲しいと頼んだ事で優子に宿題を
出されたようでそれを終わらせないといけないと言つ。

「木下さんにですか？」

「な、何、姫路さん、何があつたの？」

瑞希は明久から優子の名前が出てきた事にこめかみに青筋が浮かび、

明久は先ほどまでの瑞希との変化に顔を引きつらせると、

「木下さんと何があつたんですか？」

「えーと、試召戦争の事があるから勉強を教えて貰おうと思つただけで、まずはどんな手を使つても良いから中学生のドリルを終わらせてこいって」

瑞希は背後に黒いものをまといながら明久に優子と何を約束したかと聞き、明久は身の危険を感じたようので正直に話す。

「中学生のドリル？ ですか？」

「う、うん。恥ずかしいけど、基礎ができてないだろうから、それを完璧にしないと応用や難しくなつた高校の勉強は付いて行けないって言うから、中学生のドリルができなかつたら、小学1年生からやらせるって言われちゃつたよ」

瑞希は明久が勉強する事に驚いたような表情をすると明久は出された宿題のレベルの低さが恥ずかしいようで苦笑いを浮かべるが、

「吉井くん、どんな方法でも良いんですよ？」

「うん。ドリルをするにしても答えや解き方は教科書にのってるから教科書を片手にやつた方が良いとは教わつただけ」

「それなら、私が見あちゃんがお風呂からあがってくるまで協力します」

「う、うん。それじゃあ。お願いできるかな」

「はい」

瑞希は笑顔で明久に協力すると言つと明久は照れ臭そうに瑞希の提案に頷く。

第80問（後書き）

どうも、作者です。

明久、家でドリルをやらされる。これは作者の体験談です。まあ、教える側ですが、後輩に基本的な仕事を教える上で「あれ？ こいつ、明久級じゃねえ？」と思いき算数のドリルを渡したことがあります。答えを取ってそして『明久以上に笑えないバカ』がいる事を思い知らされました。

第81問

「学園長先生からの呼び出しって何かな？」

「さあな。行ってみればわかるだろ」

Eクラスとの模擬試召戦争を始めて数日が経った日、朝のHRで担任の福原教諭にFクラス代表の雄二と数名の代表者に昼休みに学園長室に行くように指示があり、深秋、明久、雄二の3人は学園長室に向かい歩いていると、

「あれ？ みあ、そっちも呼び出し」

「ヒロちゃん達も？」

学園長室の手前で宏美、薫、巧の3人が深秋達に声をかけてくる。

「Eクラスもか？ 模擬試召戦争も潮時か？」

「かもな」

雄二はFクラスだけではなくEクラスも呼び出しを受けている事に模擬試召戦争の事と判断し、巧も雄二と同意見のようで気だるそうに頷くと、

「あ、あの。学園長先生の呼び出しなんですから、坂本くんも米倉くんも急いで」

「そつね。ほら、急ぐわよ」

薫は学園長に呼ばれた事に悪い事しか頭に浮かんでこないのか急ぐように言い、宏美も薫の意見に全面的に賛成のようで2人に急ぐように言うが、

「……なら、俺を選ぶな。何で学園長からの呼び出しに俺が答えな
いといけないんだ。水鏡で良かっただろ」

「良いからきなさい」

巧は自分がメンバーに選ばれた事が不満なようであまりため息を吐き、宏美は巧が逃げないように彼の首をつかむ。

「それじゃあ、ノックしますよ」

「うん」

学園長室のドアの前に6人がそろったのを確認して薫は学園長室のドアをノックすると、

「誰だい？」

ドアの向こうからはこの部屋の主の声が聞こえ、

「2年Fクラス代表坂本雄二です」

「2年Eクラス代表中林宏美です」

「……ようやくきたかい。ウスノ口ども、入ってきな」

雄二と宏美は自分の名前を名乗り、学園長は2人の名前を聞いてなかに入って来るように言い、6人は学園長室に入って行く。

「アキ兄、学園長室には妖怪のコスプレをした人がいるんだね。これってどこで買ったんですか？ それとも手作りですか？」

「み、みあ、何を言ってるのよ！？ その人は確かに妖怪に見えなくはないけどうちの学園の学園長先生よ！？」

「うそ！？ あんな妖怪が！？ 学え……」

「よ、吉井くんまで何を言ってるんですか！？ ヒロちゃんも何を言ってるんですか！？」

深秋は学園長室に入り、この部屋の主である『藤堂カヲル』学園長の姿を見るなり、妖怪のコスプレをしていると判断し、目を輝かせてカヲルに駆け寄ろうとするが宏美は慌てて深秋の腕をつかみ、深秋を引き留めると明久は目の前にいる妖怪が学園長だと言う事に驚きの声を上げると薫が慌てて明久の口を塞ぐ。

「……ずいぶんと失礼なガキどもだね」

「それで学園……ばばあ長、わざわざ、俺達を呼び出して何か御用ですか？」

「……坂本、敬語の使い方を間違えているぞ」

「そうだな。妖怪ばあ長、何のようだ？ 俺達も暇じゃないんだ。さっさと話せ」

カヲルは目の前で学園の最高権力者の自分を目の前にして、失礼な事を言い放つ深秋、明久、宏美の様子に眉間にしわを寄せて言うと、雄二は敬語を使う気はないのかカヲルに用件を言えと言うと、

「…………口の減らないガキどもだ。まあ、話も長くなるからね。一先ず、座りな。ウスノ口ども」

カヲルは雄二の言葉に眉間に青筋が浮かんでいるが怒鳴り散らしても話が進まないと理解しているのか6人に学園長室の中央にある来客用のソファ―に座るように言う。

第82問

「それで、妖怪ばばあ長、俺達を呼びつけた理由はなんだ？」

「……失礼なガキだね。まずは付いて来た人間の紹介くらいしな」

雄二はソファアーに腰を下ろすとカヲルに向かい自分達を呼びつけた理由を聞くとカヲルは代表以外の名前を教えろと言い、

「Eクラス所属、原口薫です」

「……同じく、米倉巧」

薫はカヲルの言葉に慌てて自分の名前を名乗ると巧は気だるそうに続くと、

「Fクラスよ……」

「学園を代表するバカ兄妹だ」

「そうかい、あんた達が吉井兄妹かい」

明久は2人に続いて名乗ろうとするが雄二が明久の言葉を遮り言う
とカヲルは深秋と明久を見て頷く。

「ちょっと待て。妖怪ばばあ。僕とみあも名乗ってないのに、何だ。
その反応は……！」

「……みあ、ちょっと？」

明久はカヲルの反応に大声をあげると宏美は深秋が何も言わない事に何か感じたのか深秋の名前を呼ぶと、

「……ゆうじくん」

「何だ？」

深秋は雄二の名前を呼び、雄二は深秋が何故、自分を呼んだかわからずに首を傾げた時、

「アキ兄とまとめてくれてありがとう」

「おう」

深秋は雄二に笑顔で礼を言うと雄二は気にするなと返事をし、学園長室は微妙な空気になるが、

「アキ兄、やっぱり、ボクとアキ兄は1つになるべきなんだよ」

「ちょっと、みあ！？ 何で、抱きつくの！？ ダメだって！？ ベルトに手を伸ばさないで！？」

深秋は何かおかしなスイッチが入ったようで全力で明久に飛びつき、明久のベルトに手をかけ始め、

「ちょっと、みあ、何で、そんな行動になるのよ！？ 止めなさい！？ こんなところで何をするつもりよ！？」

「み、みあちゃん、落ち着いて！？」

「……妖怪ばあ長、訂正する。文月を代表するブラコンとその兄だ」

宏美と薫は深秋の行動の意味がわからないように慌てて、深秋を明久から引き離そうとする隣で、巧は欠伸をしながら言つと、

「……そうみたいだね」

カヲルはため息を吐き、

「一先ずは坂本と米倉って言ったね。あたしがあなた達を呼びつけたのは模擬試召戦争の件だよ」

「だろうな」

「……学園長自ら禁止命令か？」

深秋の行動を気にする事なく、雄二と巧に学園長室に呼び出した件を話し始めると雄二と巧は模擬試召戦争を禁止にされるのかと聞き返す。

「……なるほどね。それなりに頭の回転は速いようだね」

「……2年のEとFの代表を呼び出しているんだ。誰だって気づくだろ」

「まっただ」

カヲルは雄二と巧の反応に楽しそうに口元を緩ませると雄二と巧は

ため息を吐き、

「禁止命令ってわけじゃないさね。ただ、あんた達の模擬試召戦争や回復試験に教師陣を毎日取られるわけにはいなくてね」

「……止める。もしくは回数を減らせと言ったところか？」

「慌てるんじゃないよ。年長者の話は最後まで聞きな」

カヲルは模擬試召戦争で教師陣の時間が取られていて困っていると言うと雄二は模擬試召戦争の時間が減らされるのは困るようで眉間にしわを寄せるとカヲルは話はまだ終わっていないと言う。

「……何を企んでいるんだ？」

「たいした事じゃないよ。模擬試召戦争をするなら、これでやって貰おうと思ってるね」

巧はカヲルの言葉に視線を鋭くして聞き返すとカヲルはニヤリと笑い、雄二と巧の前に2つの腕輪を置く。

第82問（後書き）

どうも、作者です。

ばばあ長、深秋の行動を見ないふり。（爆笑）

今更だけどFクラスは何で深秋を連れてきたんでしょう。

まあ、代表の雄二に軍吏兼軍師の明久、もう1人くらい…… 『アキ兄が行くなら、ボクも』と言った流れでしょう。

そして、雄二と巧の前に出せれた腕輪。

ぶつちやけ、『白金の腕輪』の試作品です。この話を書く上でEとFの同盟、模擬試召戦争を最初から考えていたんですが毎回教師陣を付き合わせるなら、ばばあ長は試作品のデータ収集に使うだろうな？と思っていました。

まあ、試作品を生徒に渡すというのはrocklessさんが先にやってしまったので完全に2番煎じですが。（爆笑）

ここでデータを取ること、『白金の腕輪』は清涼祭では完全なものになるでしょう。

『白金の腕輪』はね。（悪笑）

第83問

「これは？」

「清涼祭の召喚大会の賞品予定の『白金の腕輪』の試作品さ」

「白金の腕輪？」

カラルは2つの腕輪を試作品の腕輪だと言っと、

「1つは召喚フィールドを張る。注意点としては『使用者は召喚はできない』、『召喚フィールドを張っている間は使用者の点数は徐々に下がって行く』。起動ワードは『起動』^{アウェイクン}」

「……なるほど、これを使って模擬試召戦争をやれと言っわけだな」

「ああ。教師のフィールドとは違って教科はランダムに設定されるんだけどね。特に模擬試召戦争をする教科はあんたらバカじゃ50歩100歩なんだ、ランダムでも問題はないだろ」

カラルは悪態を吐きながら、1つ目の腕輪の能力を説明し始め、

「……確かにな。1教科でも高得点を出している奴ら以外はあまり点数は変わらないしな」

雄二はこの腕輪は使えろと判断したようだが、

「……妖怪ばあ。この2つの腕輪にはどんな欠陥品があるんだ？」

「……本当に頭の回転が速いね。イヤになるよ」

「欠陥品？ どう言う事だ？ ばばあ」

巧は試作品とは言え、特殊な腕輪を貸し出すわけではないと思ったように裏があると判断してカヲルに聞くとカヲルはため息を吐き、雄二の眉間にしわが寄る。

「まだ、試作品なんだ。欠陥の1つや2つあるさね。まあ、欠陥の内容としては平均点くらいで暴走するんだよ。あんた達なら問題なんてありゃしないだろ」

「……確かに現状で言えば姫路以外では暴走する奴はいない。まあ、お前が点数を押さえていなければな」

「……そうだな」

カヲルは隠す事なく『白金の腕輪の欠陥』を話すと雄二は巧は点数をセーブしている事を見抜いているようで巧を挑発するように言うが巧は気だるそうに頷き、

「もう1つは召喚獣を2体に分ける。注意点は『召喚獣を2体に分ける事で点数が半分になる』、『2体を同時に動かすから、高い操作技術が要求される』。起動ワードは『^{ダブル}二重召喚』」

カヲルは雄二と巧の様子など気にする事なく、もう1つの腕輪の説明をすると、

「……高い操作技術か？ これは明久かみあようだな」

「妖怪ばばあ。この腕輪は使用者は登録しないとイケないのか？」

雄二は『二重召喚の腕輪』は観察処分者でもあり、今のEとFでもっとも召喚獣の扱いに長けている明久と深秋に持たせると考え始めるが巧は腕輪を使う人間は固定するのかとカヲルに聞く。

「そうさね。固定した方がデータを取りやすいね」

「なら、こっちは坂本、お前が持て」

「お、俺か？」

「ああ。現状で言えば姫路の次はお前だろ。すでに俺達の成績は抜いてるんだろ。元神童」

「……………ああ」

カヲルは腕輪の使用者を固定するように言うと巧は雄二に『フィールド展開の腕輪』を投げると雄二は首を傾げるが巧は先ほどの仕返しなのか、雄二の今の成績を言い当てると雄二は秘密裏に成績を上げていたはずなのに巧にばれていてるため、苦虫を噛み潰したような表情をするが、

「妖怪ばばあ。召喚フィールドを展開するたびに回復試験を受けるのは無駄だ。それくらいは免除しろよ」

「そうさね。その腕輪で『0点』になったなら、1度、フィールドを閉じたら元の点数になるように調節してやるよ。だから、あたしの研究のためにしっかりとデータを集めなくそじゃりども。あたしの用件は終わりだよ。ほら、さっさと出て行きな」

直ぐに冷静になり、カヲルに向けて言うとカヲルはそれくらいなら
どうにかしてやるから、しっかりとデータを集めるように言うと用
は終わったから、学園長室から出て行けと言い、雄二達を追い出す。

第84問

「……白金の腕輪ですか？」

「2つともFに渡すが問題はないな」

学園長室から追い出されて6人はFクラスの教室にEとFの首脳陣を呼び、カヲルから預かった白金の腕輪の説明をすると巧は改めてFクラスに2つの腕輪を預ける事をEクラスの首脳陣に話をする、

「……そうね。私達は上手く使えるとは思えないしね。米倉は他の使い方を考えるつもりもなさそうだしね」

「そうだな。二重召喚はみあの低すぎる点数が半分になっても使いやすいがないから明久が持った方が良いよな……ん？ 明久、どうかしたか？」

「……サク、どうして、話し合いに混じってるの？」

宏美は自分では白金の腕輪の有効利用が思いつかないため、巧に考えさせようとするが巧は自分からそんな事をしない事を理解してきてようでため息を吐くとなぜかFクラスの教室に紛れこんでいる咲耶が二重召喚の腕輪は明久が使った方が良いと言う。

「ん？ みあに貸してるマンガの新刊を持ってきたんだ。バイト先で渡しても良かったんだけど、後にすると忘れそうだからな」

「さっくん、ありがとう」

咲耶はFクラスを訪れた理由を話すと深秋にマンガの本を渡すと深秋は嬉しそうに咲耶からマンガを受け取り、

「成績で暴走するの？ 二重召喚の腕輪は使ってみたいんだけどな」

「……明久、みあ、こいつは誰だ？」

咲耶は二重召喚の腕輪を手に持ち、使ってみたいと言うと雄二は他のクラスの人間にあまり知られたくない会議のために眉間にしわを寄せるが、

「ああ。名乗るのが遅れたね。大河咲耶。Aクラス所属。みあとはバイト仲間ね。みあから君達の事はいろいろと聞いているよ。霧島雄二代表。後、奥さんにはクラスでお世話になってます」

咲耶は雄二の様子を気にする事なく自分の名前を名乗ると雄二の名字を『霧島』と呼ぶ。

「み、みあ、お前、またわけのわかんねえ事を言って回るな！！」

「え？ 事実でしょ」

「まったくだ。こんなに仲良く夫婦で歩いているんだから問題はないだろ。みあ、霧島旦那は『シンデレ』だな」

「うん。困ったもんだよね」

雄二は咲耶の言葉に原因を作ったであろう深秋に向かい叫ぶが深秋と咲耶は雄二を『シンデレ』の一言で斬り捨て、咲耶にいたっては

街で雄二が翔子に捕まってデートしている写真をちらつかせており、

「何でそんなもんを持つてるんだよ!？」

「昨日、商店街で見かけたからみあに報告するために写しておいた。2人の時はずいぶん優しいようだね」

「2人はとてもお似合いですね」

雄二は咲耶を怒鳴りつけるが咲耶はニヤニヤと笑うと陽菜は咲耶の持つ写真を見て心からそう思っているようで笑顔で言う。

「サク、何かあった？」

「ん？ 何がだ？」

「いや、何か、サクらしくないかな？ と思って」

明久は普段の咲耶は今のような事をしないと思っているようで咲耶にらしくないと言うと、

「そりゃな。俺も健全な男の子なんでな。文月学園2学年が誇る2大才女の想い人がFクラスにいるとやさぐれたくもなる」

「な、何をい、言ってるんですか!？ 大河君!？」

咲耶は瑞希を見てニヤニヤと笑うと瑞希は声を上げ、

「まあ、噂でそれなりに話を聞いているから、別に何も言つつもりはないけどな。それでも男としては悔しいだろ。そっちの奴らもそ

「思わないか？」

「……別に」

「そ、そうですね」

「う、うむ」

咲耶は瑞希の様子を軽く無視して集まっている首脳陣の男子生徒に聞くと巧は興味無さそうに欠伸をするが薫は宏美をちらちらと見ながら頷き、秀吉は深秋から視線を逸らすなか、康太と亮は殺意を込めた視線を明久と雄二に向けている。

第84問（後書き）

どうも、作者です。

咲耶、乱入で荒れる教室。（爆笑）

咲耶と深秋は仲良しです。現状で言えば恋愛感情は全くなしですが、秀吉を煽るために近づけてみる？ まあ、当人たちはその気はないけど秀吉が勘違いする感じでしょうか？

咲耶は現在フリー、一応は美波用に作ったキャラだけど陽菜も面白いかな？と思っていたりします。まあ、着地点はまだ決まっていますんが。（悪笑）

第85問

「……サク、悔しいって言うけど、サクの方がもてるよね？」

「うん。さっくん、もてるよ。ほら……」

明久は咲耶が誰を羨ましがっているかわからないようだが、咲耶が女の子から人気があると言う事は知っているため、ため息を吐くと深秋は懐から新聞部の原稿を取り出し、

「何々……『校内女装が似合いそうな男子ベスト10』」

「第1位、吉井明久アキちゃんですか？」

「間違えた。こっちだね」

美波と陽菜がそれを読み上げると深秋は間違えたと言い、その原稿を懐にしまつと、

「ちよつと、今のは何！？ 何で、秀吉が1位じゃないの!？」

「明久、そこではないのじゃ!？」

明久は読み上げられた原稿に自分が1位と言う事より、秀吉が1位ではない事に声をあげ、秀吉は明久の言葉に大声を上げるが、

「木下と原口は去年1年、年間でぶつちぎりで1位と2位だったから、卑怯って意見が多くてな。2人は外したんだよ。だから、新たに『校内女装が似合いそうな男の娘ランキング』で木下が1位、2

票差で原口が2位だ」

「な、何で、ぼくも木下くんと一緒に外されてるんですか!?!」

「そうそう。2人の勝負は熱いよね。目的のものはこっち」

深秋と咲耶は明久と秀吉の事を気にする事なく、秀吉と薫は除外されていると言うと薫は驚きの声を上げるが、2人は気にする事なく新たな原稿を取り出し、

「……『文月学園文芸部BL本今月の売り上げトップ10』?」

「第1位、坂本雄二×吉井明久、第2位、吉井明久×木下秀吉、第3位、大河咲耶×吉井明久……確かにどれも素晴らしかったです」

瑞希は原稿の内容がわからないように首を傾げるが真子はその原稿に書かれているものをすべて読んでいるように顔を赤らめる。

「ちよつと待て!! それはなんだ!!」

「良かったな。明久、お前、1部に大人気だぞ」

「嬉しくないから!! さっきもそうだけど、そんなもの選ばれたって嬉しくないか!!」

雄二は2回目にでた原稿に声をあげ、咲耶は既にこの原稿にもなれているように苦笑いを浮かべて明久の肩を叩くと明久は声を張り上げるが、

「ボク的にはここにヒデくん×かおるちゃん、もしくは受け攻め反

「転タイプが欲しかったんだけどね」

「男の娘同士は微妙だろ」

「……あの。大河君って、そっちに興味があるの？」

深秋と咲耶は気にする事なく話し出すと一見、まともに見えていた咲耶の変りように宏美は顔を引きつらせて聞く。

「ん？ 俺は女の子が好きだよ。男は女の子同士のものだって好きだろ。腐女子ってその逆だろ。個人の趣味を責める事はできないからね。実際は実害ってないだろ。女の子達のほとんども妄想で書いてるってのは知ってるんだから、それに文芸部は男子生徒向けも書いてるぞ」

「……そう言う問題か？」

咲耶は他人の趣味は気にしないと雄二は顔を引きつらせるが、

「木下美人姉妹本とか美波×美春本が最近の売れ筋と」

「………どれも売り上げは好調」

「姉妹ではないのじゃ!？」

「な、何よ。それは!？」

咲耶は男子生徒に売れている本を例にあげるとムツツリ商会で販売取扱を行っているため、康太は頷き、知らされた事実には秀吉と美波は声をあげる。

第85問（後書き）

どうも、作者です。

深秋&咲耶の暴走コンビは誰も止められない？（爆笑）

深秋「爆笑じゃないですよ」

咲耶「まったくだね」

ん？ 何しに来たんですか？

深秋「何となく、ボクとさつくんの話をした方がいいかな？ と思つて、今はバイト仲間としか出てないからね。ちなみにボクのバイト先は喫茶店だよ。ちよつと衣裳が『かわいい』ね」

咲耶「俺とみあはバイト先が一緒なんだけど、俺はおたくつてわけじゃないぞ。他人の趣味は趣味だからな。ウェイターもキッチンも担当する。基本はキッチン。みあの趣味にはたまに付き合わされることもある」

深秋「バイトが遅くなると家まで送ってもらったりもしてます。下心があるかどうかは不明？」

咲耶「みあ、俺は健全な男の子だから、もちろん、下心はある」

深秋「そんな風に冗談ばかり言ってる仲です」

と言つ事らしいです。

先日、あづまさんに咲耶は深秋の取扱責任者ともいわれましたが、深秋と咲耶は同種の取扱資格が要ります。たとえば咲耶がどんな人間かわかってもらえると思います。(爆笑)

第86問

「本来なら、美春を攻めに持つてくるところだが、受け攻め反転と言うのが趣が有って良いだろ」

「そつだよね」

「……一先ずは、大河がみあと同じ人種だと言う事がわかったのじや」

「……秀吉、説明、ありがとう」

深秋と咲耶は周りの様子など気にする事なく話し続けているのを見て秀吉はため息を吐き、明久は弄られ疲れたように肩を落とすと、

「それで、サクは本当に何しにきたの？」

「アキ、言わなくてもわかってるだろ。みあとに告白しに」

「な、何じゃと!?!」

明久は再び、咲耶に何しにきたかと聞くときと咲耶は深秋に告白しにきたと真顔で言い、その言葉に秀吉は驚きの声をあげ、Fクラスの生徒達は殺気立つが、

「……サク、その冗談は聞き飽きてるから」

「いや、初対面も多いし、もう一ボケしないといけないと思ってな」

「うちのクラスでそのポケは下手したら命を落とすよ」

「何を言ってる。この程度の冗談を軽く出てこないような人間にみあを落とす事なんてできないぞ」

明久は咲耶が冗談を言っている事を知っているようで咲耶にこの教室でその冗談は言わない方が良くと言うと咲耶はこのくらいのノリができない奴は深秋の彼氏になどなれないと言い切り、

「そうだね。その点で言えば、さっくんは良いところまで言ってるよ。 فقط」

「みあを落とすには『女装』が似合うのが必須項目だから、俺には向かない」

深秋は咲耶はまだ物足りないと言うと咲耶は深秋の彼氏は『女装』が必須項目だと言うとFクラスの生徒達は何かを考え始めたようぶつぶつと言い始める。

「みあ、改めて、お前、人気あるんだな」

「さっくんには敵わないよ」

咲耶は深秋の彼氏の条件を聞き、色々と葛藤しているFクラスの生徒達を見て深秋に言うた深秋は咲耶には敵わないと言い、

「……本当に人気あるのね」

「まあ、それなりにな」

深秋が新しく『文月学園彼氏にしたい男子生徒』と言う原稿を取り出すと咲耶は上位にランクインされており、美波は信じられないような視線を咲耶に向けると咲耶は苦笑いを浮かべ、

「まあ、こう言うのに選ばれると女の子同士が牽制し合うみたいだね。実際は告白とかはないし、後は女友達からの同情票もあるからな」

実際はそんなにもてないと言うが、

「……何となく、大河君が人気ある理由がわかるわ」

「そうですね」

宏美と陽菜は咲耶が人気のある理由がわかると言う。

「……」

「ちよつと、米倉、どこに行く気よ」

「……話し合いをしないなら、俺がいる必要もないだろ」

巧は咲耶と深秋に振り回されているのを見て、時間の無駄だと判断したようで教室を出て行くこうとすると宏美は巧に止まれと言うが巧はこれ以上は時間の無駄だと言って教室を出て行き、

「ちよつと、大河、あんた、何にしにきたのよ。米倉がいないと全部、坂本に決められちゃうでしょ。何のための話し合いよ」

美波は雄二と対等に戦術の話をする巧は重要な人間だとわかってい

るようで咲耶に向かい言うが、

「別に腕輪の使用者の事だけだろ。さつき、中林も腕輪をFクラスが持つ事を承諾したんだ。問題ないだろ」

「……そうね。米倉はあまり試召戦争自体にあまり興味がないみたいだしね」

咲耶はそこまで青筋を立てる事ではないと言い切り、宏美は咲耶の言う事もわかるようのため息交じりで頷くと、

「そうそう、俺が何しにきたかって話だけだな。根本のクズがそろそろ動きだすぞ。模擬試召戦争で戦闘技術をあげるのに集中しすぎて足元をすくわれるんじゃないぞ」

「……動き出したか。まあ、頃合いか」

咲耶は本題はBクラス代表の『根本恭二』が何かを企んでいると言
い、教室を出て行き、雄二は咲耶からの情報に何か企んでいるのか
口元を緩ませる。

第87問

「しかし、これは考え付かなかったな」

「やっぱり、遊び心は大切だぞ」

模擬試召戦争は今までと少しだけ違っており、なぜか召喚獣が鬼ごっこをしている。

「サク、これって役に立つの？」

「重要なのは操作能力の向上、わざわざ、点を減らす必要はない」

明久はすでに我が物顔のように模擬試召戦争に混じり、雄二と方針を決めている咲耶に声をかけると咲耶は苦笑いを浮かべながら今までの模擬試召戦争は効率が悪かったと言いが、

「ですけど」

「そうよ。何で、召喚獣で鬼ごっこをしないとイケないのよ!!」

瑞希は苦笑いを浮かべ、美波は咲耶を怒鳴りつける。

「何で、鬼ごっこ、楽しいよ」

「いや、そうじゃないでしょ。みあ」

「……いや、大河の言う通り、効率は良い。それも今はBクラスの代表がこちらを警戒し始めているんだ。点数を減らすのは得策じゃ

ない。その間にそれなりに勉強を見れる大河がバカの相手をしてるんだからな」

模擬試召戦争の参加者が疑問の声を上げているなか、深秋だけは楽しそうに鬼ごっここの鬼をしており、宏美は深秋の様子にため息を吐くが巧はAクラスの咲耶に試召戦争で使えない点数の人間を預けて自分は気だるそうに欠伸をしており、

「いや、まさか、顔を出したら勉強を教える羽目になるとは思わなかったけど。まあ、俺も復習になるから問題ないけど、それに他のクラスの可愛い女の子とも知り合えるし」

「サク、そう言う事を言ってるここだと命を狙われるよ」

咲耶は苦笑いを浮かべた後、真面目な表情をして他のクラスの女子生徒と知り合えるのは重要だと言うと明久は咲耶の言葉にため息を吐くが、

「別にFクラスの男達みたくがつついてないんだし、そこまで言われる筋合いはないだろ。それに仮に狙われたとしても群れを作らないと何もできない奴らに女の子が惚れるとは限らない。みあ、お前はどっ思うっ？」

「そうだね。うちのクラスの男子は正直、ウザい」

咲耶は徒党を組んで他の彼女がいる男子生徒を襲撃しているFクラス男子生徒の事を鼻で笑うと深秋は笑顔で咲耶の言葉に頷き、

「……何人か心が折れたのう」

「そつみたいですね」

秀吉は深秋の言葉に膝を付いたクラスメートを見てため息を吐くと瑞希は苦笑いを浮かべる。

「あいつらつて、自分を磨くこともしないで誰かの足を引っ張るだけだろ。そう言うのって同性から見ても最悪だよな。島田、そこ、間違えてるぞ」

「……あんだ、結構、きついわね」

「まあ、サクはそれなりに努力してるしね」

咲耶はため息交じりでFクラスの男子生徒達とはわかり合う事はな
いと言い切り、美波は咲耶を見てため息を吐くと明久は咲耶をフオ
ロ―するようにつづる。

「そつなの？」

「うん。成績は良いでしょ。バイトだって自分の腕を磨くためだつ
て」

「腕を？」

「ん？ 一応、パティシエの専門学校希望。そして、実家を継ぐ」

美波は明久の言葉が信じられないようで咲耶を疑いの視線で見ると
咲耶は苦笑いを浮かべて自分の進路希望を話す。

「実家？」

「さっくんの実家は商店街にあるケーキ屋さんだよ」

「勉強、必要ないじゃない」

「そうでもないぞ。英語は留学するとしたら基本だしな。そして、言葉を覚えながらヨーロッパで武者修行を。本当は中学卒業と同時にきたかったんだけど資金もないしな。だから、今はバイト三昧」

美波は咲耶がAクラスにいる理由がわからないと言っが咲耶は本気でやりたい事のように表情は真剣そのものであり、

「ん？ そうだ。みなみちゃん、さっくんにドイツ語を教えてあげてよ」

深秋は美波に咲耶にドイツ語を教えて欲しいと言っ。

第87問（後書き）

どうも、作者と

深秋「主人公とさつくんです」

咲耶「どうもです」

咲耶の実家はケーキ屋さん、でも実家でバイトはしてません。

咲耶「おやじ以外の人の腕も見てみたいからね」

深秋「前ははるちゃんのお家でバイトしていた事もあるんだよ」

咲耶「さすがに店長が吹っ飛びすぎてて辞めたけどな」

咲耶のパーティシエ希望は最初から決まっていた。咲耶はパーティシエ、深秋はコスプレから服飾系の専門学校狙いです。だから、2人とも家庭科と文系が得意。

深秋も口には出さないだけで服飾関係で留学をしたいと思っているかも知れませんが。好きこそもの上手なれ。この2人にはそんな言葉が似合うのかな？

深秋の美波へのお願いに美波は何と答えるのでしょうか？

第88問

「ウチが？ みあ、いきなり何を言うのよ」

「ああ、島田はドイツからの帰国子女だったよな。頼めるか？」

美波は深秋の言葉に驚きの声をあげるが咲耶は美波に頭を下げると、
「ちょ、ちょっと待ってよ！？ いきなり、そんな事を言われても困るわよ。だいたい、ウチは日本語の読み書きが苦手なのよ。教えられるわけがないでしょ」

「そこまで難しく考えなくて良い。日常会話のがわかればある程度はどうにかする。と言うかイタリア語、ドイツ語、フランス語は読み書きはできるから、教えて欲しいのは会話、発音」

「……ウチが教える必要があるの？」

美波は自分には荷が重いと慌てるが、咲耶は予想以上に1人で勉強しており、美波は顔を引きつらせる。

「当たり前だ。会話ができないと言った時に辛いだろ。フランス語はみあと練習しているが発音も合っているかわからないしな」

「……ちょっと待て。今、おかしい言葉が聞こえなかったか？」

咲耶は実用的なものを覚えたいと美波に言うと咲耶の口から出た言葉に雄二は顔を引きつらせると、咲耶以外は深秋がフランス語を勉強している事を知らなかったようで驚いたような表情をすると、

「ん？ 知らなかったのか。みあ、悪い」

「さっくん、別に謝る必要はないよ。だいが前にアキ兄と瑞希ちゃんにも話してるし、しょうこちゃんやゆうちゃんも知ってるしね。

ボクは服飾関係に進みたいからいつかはパリとか言ってみたいんだ。

」

咲耶は深秋が誰にも話していない事にそこで気が付いたようで苦笑いを浮かべるが深秋自身は別に気にした様子もなく、いつかは留学したいと言う。

「明久、姫路、本当なのか？」

「いや、ちよつと待って。それはずいぶん昔にそれこそ小学校の時にみあに言われた気がするけど」

「はい。今もそう思ってるとは思ってなかったです」

雄二は明久と瑞希に聞くと2人はずいぶんと昔の記憶のようで何と云って良いのかわからないようであり、

「まあ、実際、人の夢を信じるってのは他の人間から見ればこんなもんだ」

「そうだね」

深秋と咲耶は慣れているようで苦笑いを浮かべると、

「それで、島田、俺にドイツ語を教えて貰えないか？」

「ちよつと、答えは後で良いかしら、今、ウチは頭が付いて行っていないわ」

美波に改めて、ドイツ語を教えて欲しいと頼むが、美波は初めて知った深秋の夢に向かっている様子に処理しきれないようで頭を押さえ、後にして欲しいと言う。

「ああ。かまわない」

「それより、そろそろ、真面目に練習しようよ」

「いや、現状で言えば、それができる状況じゃなくなっているんだが」

咲耶は美波の言葉に頷くと深秋は練習に戻ろうと言うが深秋の進路を聞いた深秋ファンは秀吉を筆頭に白く燃え尽きており、巧はため息を吐き、

「米倉、お前は無反応なんだな」

「吉井妹の問題だろ。俺には関係ない」

「みあ、こいつ、冷たいぞ。クール気取ってるぞ。何をしたら、動揺すると思う?」

咲耶は巧の反応に納得がいかないようで深秋に巧を動揺させる方法はないかと聞くと、

「うーん。たつくんはこつ言つものにも反応してくれないしね」

「何だと！？　こんなお宝本を出されて動揺しないなんて、お前は男か！！」

「……それ以前に、おかしな物を懐から取り出すな」

深秋は懐から様々な『保険体育の参考書』を取り出すが巧の反応は薄く、

「とりあえず、あいつはムツツリだな」

「そうだね」

「……」

深秋と咲耶の中では巧はムツツリスケベに認定され、巧は2人の言葉に眉間にしわを寄せる。

第89問

「みあ、サク、米倉くんはムツツリじゃないよ。ムツツリって言うのはムツツリーニみたいな」

「いや、土屋はすでにオープンな変態だろ。なあ、みあ」

「うん。こうくんはムツツリの名前では抑えきれない変態さんだよ」

「……………そんな事実はない」

明久は深秋と咲耶に巧はムツツリスケベではないと言うがその言葉のせいで攻撃は康太に飛び火するが康太は直ぐに否定するがその場には深秋と咲耶の言葉に賛同するような空気が流れ、

「明久、それなら土屋が仮にムツツリスケベの最高位だとしよう。それなら、米倉はどのランクだと思う？」

「だから、米倉くんは」

「違うと言うなら調べても良いんだよな？ 行け！！ みあ！！
水鏡！！」

咲耶は巧をムツツリスケベとして認定していようで確かめると言うのと深秋と陽菜に指示を出し、

「了解」

「どこにですか？」

深秋は咲耶の言葉で巧に飛びかかるが陽菜は意味がわからないため首を傾げ、

「避けたな」

「避けたわね」

「避けられた。たっくん、酷いよ」

「……弱点、発見。あいつ、やっぱりムツツリだ」

「……」

巧は飛びかかってきた深秋を避けると咲耶は巧の行動に何かを感じ取ったようでニヤリと笑い、深秋は不満そうな表情で巧を睨むと、

「みあ、米倉には直接攻撃じゃダメだ」

「なるほど、それなら、こつ言っの?」

咲耶は深秋に新たな指示を出し、深秋はスカートを少し上げ、太ももを巧に見せる。

『『『『『みあちゃんの太もも』』』』』

「み、みあ、はしたないのじゃ!?!? ダメなのじゃ!?!?」

「……………あの川の間こつは楽園」

深秋の太ももに男子生徒は歓喜の声を上げ、秀吉は慌てて深秋の太ももを隠そうとするなか、巧は顔を真っ赤にして深秋の太ももから目を逸らし、

「みあのサービスカットに目を逸らすのは失礼じゃないかな？ 米倉くん、だいたい、さっきだつて健全な男子高校生ならみあが抱きついてきたのを避けないはずだ」

「は、放せ」

咲耶は巧の様子を見て、彼の後ろに回り込み、深秋から目を逸らす巧を捕まえると、

「にゃふふふ。たつくんの弱点、見つけた」

「えーと、米倉くんって、女の子が苦手？」

「……意外ね。クール気取ってるのは周りに女子が近付かないようにしてた訳ね」

深秋は楽しそうに巧との距離を縮めて行き、巧は咲耶の腕から逃げ出そうとするが咲耶が巧を逃がすわけもなく、その姿に薫と宏美は苦笑いを浮かべる。

「だいたい、クール気取ってるような奴の9割はムツツリなんだよ。カッコつけて女の子から距離をとってる癖に女の子の視線は気になるってな」

「その意見も偏ってるとは思っけどな。しかし、まあ、それなりに良い情報を得たしな」

「……くっ」

咲耶は巧を捕まえたまま何かを企んだように笑うと雄二は自分と同程度の策を平然と出してくる巧の弱点を手に入れた事でニヤリと笑い、巧は深秋から視線を逸らしたまま自分の弱点がばれた事に苦虫を噛み潰したような表情をするが、

「たっくん、覚悟は良いね」

「ま、待て!？」

深秋は楽しそうに笑うと巧に飛びかかり、巧の慌てた声が教室に響き渡る。

第90問

「……吉井くん、あなた達は結局遊んでただけなの？」

「いや、そう訳でも無かったんだけどね」

明久は模擬試召戦争が混沌としてきたため、雄二に話を通すと優子に勉強を教わりに図書室に行き、先ほどあった事を優子に話すと優子は大きなため息を吐くと、

「まったく、みあと咲耶君がそろつとろくな事にならないわね」

「そうかも……」

「何？」

優子も深秋と咲耶には迷惑をかけられているのか頭を押さえ、明久は優子の様子に何か思ったようで優子に視線を向け、優子は明久の視線に聞き返す。

「いや、木下さんがサクの事を名前で呼んでるから、木下さんって、男子生徒を名前で呼ぶ印象がないからさ……えーと、サクの事が好きとか？」

「吉井くん、次にそんなくだらない事を言ったら殺すわよ」

明久は疑問に思った事を口に出すと優子は咲耶にはあまり良い印象がないようで明久に向かいくだらない事を二度と言うなど睨みつけてる。

「う、うん。わかった。二度と言わない」

「そうしなさい……それで、ドリルは進んでるの？」

明久は優子の視線に背中冷たいものが伝ったようで大きく頷くと、優子は明久に出している宿題は進んでいるかと聞き、

「うん。それなりにはやってるけど……」

「……うーん。日本史や世界史とか暗記モノの方が得意みたいね」

「うん。そっちはEクラスの原口くんにも見て貰ってるし」

明久はドリルを優子に見せると優子は明久のドリルを見て明久への教育方針を考えているようで首をひねる。

「あたしとしては暗記モノより、数学とか公式を覚えちゃった方が楽だと思つのよね」

「うん。姫路さんや雄二にも同じような事を言われたんだけど、数字を見てると眠くなるって言うかさ」

「……それはこのドリルを見ればわかるわ。数学や物理系のドリルは極端に進みが遅いから」

優子は自分は数学の方が得意だと言うが明久は苦笑いを浮かべながら、数学は苦手だと言うと優子はドリルを眺めてため息を吐き、

「まあ、一番重要なのは吉井くんに勉強をすると言う意識づけをす

るのが目的だから良いんだけどね」

「そう?」

「ええ、あたしが宿題を出さなかったら、家で何をやって良いかもわからなかったでしょ?」

「う、うん。確かに闇雲に机に向かっても何もできなかったかも」

優子は明久にドリルをやらせている意味を話すと明久は苦笑いを浮かべる。

「まあ、下地はできてきているしね。みあもそうだけど、吉井くんも漫画とかでも本は読むから漢字の読みはできるし、次からは漫画を読む時に作者が何を考えているか考えてみるのも良いと思うわ。結局、国語は本を読む事みたいだからね。と言う事で国語や暗記モノはこのまま1人でやっても今のまま進んで問題ないと思うわ。問題は……」

「数学や物理だね」

「ええ。眠くなるって言うんだから、誰かと一緒に勉強した方が良いと思うしね。その代わり、あたしが勉強を見ている前で寝るような事したら、どうなるかわかるわよね?」

「……うん。気を付けるよ」

「そうして、それじゃあ、始めましょうか? 基本的に公式を見ながら自分で問題を解く、それができない場合はあたしからヒントを出すわ。良い?」

「うん」

優子は自分が明久に教える勉強は理系に絞ると言つと明久は頷く。

第90問（後書き）

どうも、作者です。

明久避難。（爆笑）

この作品だと明久、優子のお兄ちゃん、お姉ちゃんズを書くのが割と好きだったりもします。

そして、たぶん、優子は深秋、咲耶コンビの1番の被害者。
2人は宿敵かも知れません。

第91問

「……こんな手段が上手く行くかしら？」

「さあな。正直、やってみないとわからないって事もある」

Fクラスの教室にFクラスとEクラスの中心メンバーが集まり、Eクラス対Cクラスの戦術として雄二が立てた作戦とCクラスのクラス名簿を見て、宏美は眉間にしわを寄せている。

「みあとサクの情報網から作った作戦でもあるからね」

「Cクラスの生徒はこうやって見るとやっぱりバランス的に点数を取ってますよね」

「……特化型は有栖くらいじゃのう」

明久は苦笑いを浮かべながら、深秋と咲耶のもたらした情報から作った作戦でもあると言い薫はCクラス生徒の点数を見て頷き、秀吉は日本史と世界史で学年トップクラスの實力の恋華を思い出してため息を吐き、

「有栖さんですか……わたしと原口くんで倒せれば良いんですけど」

「うん……操作性は上がったけど、もし、有栖さんが腕輪を持っていたら、ぼくと水鏡さんで倒せないかも……」

薫と陽菜は恋華を倒せるかが不安のようすで表情を曇らせると、

「……それは俺と坂本がどうにかする」

「ああ、特化型が少ないならやりようなんていくらでもある」

巧はこの作戦の要が自分である事を理解しているようで気だるそうにため息を吐くと雄二は巧の隣で何かを企んだように笑うが、

「ちょっと待って。米倉はわかるけど、何で、坂本くんが出てくるのよ。他のクラスは試召戦争にかかわれないわよ」

「中林さん、落ち着いて、雄二は直接、試召戦争に出るわけじゃないから」

宏美は2人の様子に雄二の参戦はルール違反だと慌てて言うと言くと明久が宏美を押さえる。

「実際、坂本は何をするつもりよ？」

「まあ、せつかく、妖怪に貰った腕輪だ。データ収集に協力してやるうと思っただけ」

「あの妖怪も雄二にこんなものを渡した事を後悔するはずだよ」

「……俺をお前らの悪だくみに巻き込むな」

美波は雄二がおかしな事をしでかさないか心配なようでため息を吐くと明久と雄二はまたろくでもない事を考えているようでニヤリと笑うと巧は先日、弱点がバレたせいもあるためか、強気に行けない事もあるようで不機嫌そうに眉間にしわを寄せると、

「……作戦を立てた人間から言わせて貰っても、今回は綱渡りだ。まあ、ぶっちゃけると、俺達FクラスはEクラスがCクラスに負けようがどうでも良い。お前らが負けたら、Bクラス狙いからCクラス狙いに変えて着実にクラス設備をあげさせて貰う」

「坂本くん、いきなり、何を言い出すんですか!？」

雄二はEクラス対Cクラスの試召戦争は自分的には結果はどうでも良いと言うと瑞希は慌てて雄二を止めるが、

「姫路さん、落ち着いて、雄二は作戦を立てる人間だから、Eクラスにおかしな情をかけちゃいけないんだよ。今回のEクラス対Cクラスは決着がわからないけど両クラスともに多くの戦死者が出るはずだしね」

「ですけど……」

「俺達はFクラスは腕輪を持っている人間は3人いるけどな。最後の回復試験でもEクラスで400点に届いたのは米倉だけだ。それも腕輪の能力は使ってみないとわからない。Cクラスの有栖の腕輪の能力もな。この状況じゃ、賭け以外の何物でもないだろ」

明久が瑞希を押さえると雄二は頭を掻きながら、作戦に賭けの要素が多すぎると言うつと、

「それでも、ここまで戦える状況になるとは思いませんでした。それは坂本くんをはじめとしたFクラスの方々のおかげです」

「……そうね。どうせ、本当なら私達は卓袱台だったよね。それに個人的にCクラス代表は気に入らないし」

「代表、そんな事を言ったらダメですよ。それに代表は冷静になつてドンと構えて貰わないと困ります」

真子はまだ直ぐ始まる試召戦争に血が騒ぎだしているようでそんな真子にあてられたのか宏美はニヤリと笑うと陽菜は宏美をなだめ、

「開戦は明日の朝で良いんだな？」

「……ええ」

「それじゃあ、明久、お前、代わりにEクラスがCクラスに宣戦布告するって言うて来い」

「うん。わかった……って、何で、僕だよ!？」

雄二はEクラスとCクラスとの試験召喚戦争を翌日の朝と決めると宏美は頷き、雄二は何故か明久に宣戦布告の使者に行けと言い、明久はドアの近くまで言うて雄二の言葉に驚きの声をあげる。

「別に違うクラスの間が代わりにしちゃいけないってルールはないだろ」

「なるほど、それじゃあ、行ってくるね。って違う!! Fクラスの僕がEクラスの使者っておかしいだろ」

「……ほら、これでお前が正式なEクラスの使者だ」

「ありがとう。それじゃあ、行ってくるね」

「アキ兄、気を付けてね」

雄二はルール違反じゃないと言うが明久は納得がいくわけもなく声を上げた時、巧がEクラスからCクラスに宣戦布告すると言う書状を書いて明久に渡すと明久は教室を出て行き、

「……えーと、吉井くんに任せて良いんですか？ みあちゃんも止めなくて良いんですか？」

「大丈夫だよ。ボクはアキ兄の泣き顔も大好きだから」

薫は顔を引きつらせながら深秋に言うが深秋はこれから明久に起きる事を理解しながら見送ったようであり、

「……今更ながら、明久は可哀想だな」

「そう思うなら、使者に出すな」

雄二は深秋の言葉に苦笑いを浮かべ、巧は気だるそうに言う。

その後、Cクラスの生徒にボコボコにされた明久が教室に戻ってきた事は言うまでもない。

第91問（後書き）

どうも、作者と

深秋「主人公とさつくんです」

咲耶「どうもです」

ようやくE対Cクラスの試召戦争が始まります。

深秋「戦術は……本当にあれで良いの？」

どうですかね。この戦術ありきで雄二に白金の腕輪を渡したわけ
すし、

咲耶「それっていつからこの戦術を決めてたんだ？」

FがDの設備を奪うと決めた時から、

深秋「それから、オリキャラを募集したの？ 戦術、きまってる
に」

むしろ、それに使えそうな投稿キャラばかりで投稿してくれた方が
俺の性格をわかってるんじゃないかと疑うくらいです。

咲耶「まあ、中身は同じ人って話はどこにでも」

ないですから、皆さんに失礼ですから！？」

深秋「まあ、そういう事で次回からはC対Eの試召戦争になります」

咲耶「ようやく、投稿してもらったCクラスが出てくるな」

そうですね。

第92問（前書き）

Cクラスの投稿キャラを投稿キャラクターデータに更新しました。

第92問

「まったく、Fクラスにも負けたくせに私達に仕掛けてくるなんて、Eクラスってバカなんじゃないの」

「そつだよな。代表の言うとおりだよな」

「……八幡、うるさい」

Cクラス代表の『小山友香』は昨日、明久が持ってきたEクラスからの宣戦布告に身の程もわきまえないバカの相手をしたくないといけな
いと思っっているせいかため息を吐くと『八幡公介』は友香の言う通りだと
言い、無責任にクラスメートを煽ると『有栖恋華』が冷たい口調で公介を静止するが、

「何だ。有栖、ノリが悪いぞ。せつかくの試召戦争だ。テンションをあげないと面白くないだろ」

「八幡くん、お、落ち着いてよ。代表も話をしている途中だし……」

「眞崎、何だ？ 言いたい事があるなら、はっきり言え、そんな風だから、『男の娘』とか言われるんだぞ」

「……」

「どうした？ 何かあったのか？ 眞崎？」

公介は恋華を指差して表情の少ない恋華にテンションをあげると言う
と『眞崎蓮』が遠慮がちに公介を止めようと声をかけるが公介は

蓮の言葉など聞く事なく、蓮が気にしている自分の身長や容姿の事を良い、涙目になってしまいが公介は自分の言葉が蓮を傷つけたとは思ってないようで首を傾げる。

「代表、それでどうするつもりですか？ 言わせて貰いますけど力押しで勝てるのかは持ってないでしょうね？」

「……所詮はEクラスよ。バカばかりだしね。力押しで倒せるとは思うんだけどね。恭二が言うにはEクラスはFクラスとずいぶんと仲良くやっているみたいだからね。Fクラスの教室は調べさせて貰うわ」

「……伏兵、確かにFクラスは私達の教室の前だし、戦術的には悪くないわね。伏兵は歴史的にも有効性は証明されているし」

『羽鳥恋』は友香にどんな作戦でEクラスと戦うかと聞くと友香は彼氏でありBクラスの代表の『根本恭二』から、EクラスはFクラスの教室に伏兵を隠している可能性があるかと教わっているようでFクラスの教室を調べると言うと言華は伏兵を警戒するのは間違いではないと頷くと、

「開戦と同時に蹴散らすわよ！！ バカどもの相手をして授業時間を削るわけにはいかないわ！！ 私達が目指すのは上よ。下のバカどもは二度と逆らえないように叩き潰すわよ！！」

友香はCクラス生徒に気合いを入れるように言うところCクラス生徒は友香の声に続く。

「……Cクラスの戦意は上々か？」

「そうみたいだね。小山さんは人をプライド高そうだし、Eクラスから仕掛けられる事に頭にきているみたいだしね」

「うん。ゆうかちゃんは頭に血が昇りやすいからね。Dクラスの設備を持っているボク達が仕掛けてくるならまだしも、Eクラスが仕掛けてくるんだから、舐められているって思ったんだよ」

Fクラスは福原教諭のHRを早々に切り上げ、Eクラスを援護するために雄二と明久が教壇に立ち、最後の打ち合わせを始めていると向かいのCクラスの教室からは戦意の高いCクラスの声が聞こえる。

「しかし、この戦術で上手くいくかのう？」

「さあな。昨日も言った通り、綱渡りの部分が多いからな。俺達はBクラス代表の根本が動いている事を前提で作戦を立ててるからな。小山が根本にアドバイスを求めていなければ最初の段階でこの作戦は崩れる。後は運と俺達しだいだよ？」

秀吉は雄二の立てた戦術が上手く行くのか心配そうな表情をすると雄二はこの戦術に自信があるようでニヤリと笑うと、

「俺はEクラスがどうなろうと知っちゃ事じゃないが、お前らは違うだろう？ それなら、お前ら上手くやれ。Eクラス対Cクラスの試召戦争だが勝負を決めるのは俺達だ」

「うん。実際はクラス間の試召戦争だから騙し合いもあるかも知れないけど、僕はEクラスは仲間だよ。行けるよね」

雄二はこの戦術の要はFクラスだと言うと明久はEクラスは仲間だと言うとクラスメート達は頷き、

「ムツツリーニは戦況を随時、米倉に連絡。Cクラスは開戦してしばらくしたら、ここに乗り込んでくる……お前らは作戦通りに動け」

雄二はクラスメイトに指示を出すとFクラス生徒は大きく頷く。

第93問

「それじゃあ、宏美ちゃん、ぼくと水鏡さんは前に出るね」

「ええ、任せるわよ。薫、水鏡さん」

「はい。行ってきます」

開戦の合図であるチャイムが鳴るとEクラスは雄二の立てた作戦なのか薫と陽菜を中心とした日本史と世界史を得意とした生徒をまとめた部隊を前に押し出すと、

「……米倉、本当に大丈夫なのよね？」

「……お前は原口を信じられないのか？ 少なくとも今のEクラスで1番、指示が的確なのは原口だ」

「信じてはいるわよ。だけど……あいつ、元々、人と争うような事には向かないし」

宏美は薫の事が心配なようで少し不安そうな表情をするが巧は気だるそうに答え、宏美は巧の性格を知っているためか苦笑いを浮かべる。

「……大丈夫だろ。あれでも男だからな。守りたいもののためには頑張るんだろ」

「ん？ それってどう言う事よ？」

巧は宏美の様子に呆れたようなため息を吐くと宏美の相手をするのが面倒になってきたようで立ち上がり、宏美は巧の言葉の意味がわからずに首を傾げると、

「……そんな事だから、坂本や吉井から『髪筋』って言われるんだ」

「米倉、私にケンカ売ってるの!!」

「……売られるだけの事をしてるんだろ」

巧は薫が可哀想だと言いたげに教室を出て行き、宏美は巧を怒鳴りつけて追いかけようとするが流石にクラスメートに止められる。

「水鏡さん、左側が押されています。援護をお願いします」

「はい。わかっています。原口くんも気を付けてください」

『何だ。あの2人は？ 何で、Eクラスにあんな化け物みたいな奴らがいるんだよ』

「み、みなさん、落ち着いてください。確かに点数は高いですけど、1人で倒そうと考えないでください。2人か3人で必ず、戦えば戦力を削って行けます」

薫と陽菜は自分達のフィールドである2教科でCクラスを押し去っていくと蓮は冷静に薫と陽菜を囲めと言うが彼の声は小さく、誰も蓮の指示には従わずに単体で薫と陽菜に当たって行き、Cクラスの生徒の戦力は削られて行くと、

「真崎くん、どうしたら良いんですか？」

「は、羽鳥さん！？ あ、あの！？」

「落ち着いてください」

蓮がCクラスを落ち着かせようとしている事に気づいた恋が蓮に声をかける。

「う、うん。えーと、EクラスはFクラスと試召戦争をしているせいか、点数が僕達より低くても操作するのが上手いんです。自分より点数が高い相手には必ず多対1に持ち込んでいますし、あの点数の高い2人が上手くフォローしているから僕達の攻撃は届かないし、点数が削られてきて戦力にならなくなった生徒は自分が犠牲になる事も恐れてないです」

「そうですね。それなら、私達も1人で動かないように戦いましょう。眞崎くん、背中、任せても良いですか？」

「ぼ、僕で良いんですか？」

「悩んでいる暇はありませんよ。私達Cクラスは浮足立っていますから、私と眞崎くんやって見せれば冷静になっってくれるはずですよ」

「は、はい」

蓮は今の状況ではCクラスの生徒は確実に削られて行くと言明すると恋は2人で戦況を立て直そうと言い、蓮と恋は2人でCクラスの生徒をまとめて行き、

「原口くん、Cクラスにも連携の重要さに気づいた生徒もいるみた

「いですよ」

「はい。見えています。ここからは削り合いです。必ず、有栖さんを引つ張り出しましょう。有栖さんを引つ張りださないと次に進めませんから」

「はい」

『2人は後ろで指示をしてくれ。この部隊で2人が負けるわけにはいかないんだから、それに坂本や吉井達が動いてくれる』

薫と陽菜は自分達の役割は恋華を友香から引き離す事と割り切っているようで前に出ようとしますがEクラスの生徒は恋華との対決のために2人に下がるように言うと2人組になったCクラス相手にはEクラスは3人で相手をして行き、

「で、でも」

「原口くん、落ち着いてください。わたしと原口くんがそろってないと有栖さんを引つ張り出す事はできません。1人になると囲まれて終わりなんですから、辛くても耐えてください」

「は、はい」

薫は自分も前に出ようとしますが陽菜は薫の手をつかみ、薫を説得すると、

「それに補習室に送られてしまうと代表と勝利の喜びを味わえませんよ」

「な、何を言っているんですか!？」

「慌てないでください。たぶん、クラスの人達は代表以外は気づいていますから」

陽菜は薫をからかうように言い、薫の顔は一気に耳まで赤く染まる。

第94問

『米倉、これで旧校舎側に潜んでいたCクラスは全部、補習室送りだ』

「……まったく、なんで、俺がこんな面倒な事を」

「……文句を言うな。これが終わればEクラスはお前達がAクラスに仕掛けなければ3カ月の試召戦争はなくなるんだ」

巧は10名のクラスメートを引きつれてCクラスの伏兵を狩っていると康太が巧に声をかける。

「……わかってる。それで、Fクラスは上手くやってるのか？」

「……当然、試召戦争に引っ張りだされると面倒な教師の捕縛には成功している。後は決着用の教師も確保してある」

「……坂本がここまで俺達に協力するとは思わなかったな」

巧は気だるそうにため息を吐くと康太にFクラスが受け持っている作戦の進行状況を聞くと康太は順調に進んでいると言い、巧は雄二がここまでEクラスに加担する理由がわからないためか眉間にしわを寄せると、

「……Fクラスの中心はみあと明久。あの2人がEクラスの味方をすると言った。俺達はそれに従うだけ」

「……目的はEクラスの女子の目だろ」

「……………そんな事実はない」

康太は深秋と明久がEクラスの味方をするからだと言うが巧はFクラスの男子生徒の目的はEクラスの女子生徒と仲良くなる事だと言
い、康太は直ぐに首を振るがその態度はより一層、巧の言葉を肯定
しているように見える。

「……………まあ、良い。行くぞ。そろそろ、有栖が出てくる頃だ。後ろ
からの攻撃がなくなつたんだ。原口と水鏡の援護に向かうぞ。土屋、
代表にも伝えて教室に残っている予備戦力を全部出させる」

「……………了解」

巧は康太に宏美への伝言を頼むと中央階段に向かつて進みだす。

『代表、Eクラスが思いのほか粘って攻めきれません。それに2人、
点数が高い人がいて』

「何をしてるのよ。日本史や世界史で敵わないなら、教科を変えれ
ば良いでしょ。それくらいもわからないの!!」

友香はCクラスの教室で伝えられる情報に自分の思い通りに進んで
いない事に舌打ちをして報告にきたクラスメートを怒鳴りつけるが、
『それが、他の教科の先生が見つからないんです』

「教師が捕まらないってどう言う事よ。職員室に行けば」

『それが中央階段を占拠されてしまったため、職員室に誰も送れな

いんです』

校舎の中心である中央階段が薫と陽菜が率いるEクラスに占拠されてしまっているため、教科選択をするにも教師が捕まらないと言う。

「それなら、他の階に配置していた伏兵はどうしたのよ!! 少数でも階段を中央階段に陣取っているバカ達に仕掛ければスキを点けるでしょ!!」

『そ、それが連絡がつかません』

「何してるのよ!! 使えないわね」

「……友香、私が出てくるわ。あなたは少し落ち着きなさい」

友香は自分の思い通りに試召戦争が進まないためかイライラしているようでクラスメートを怒鳴り付け始めるとそれに見かねたのか恋華が中央階段に行くと言い、

「……恋華? そ、そうね。日本史と世界史なら恋華が出れば簡単に決着がつくわね。恋華には私のそばに居て欲しかったけど、この状況じゃ仕方がないわ」

友香は恋華の言葉に少しだけ冷静になろうとしたようで大きく深呼吸をすると、

「恋華はウチの要よ。できればAクラスを倒すのにEクラス程度には戦って欲しくなかったんだけど仕方ないわ。八幡、何人が連れてってFクラスを調べてきて、Fクラスから伏兵がきて恋華を倒されるとその2人を倒す事はできないわ。伏兵が居なければそのまま中

「中央階段に向かって」

「了解、行ってくる」

「……友香、Fクラスは何を仕掛けてくるかわからないわ。桶狭間の戦いのように寡兵でも大軍を破ったと言う事もある。戦力が上だからと言っても油断しないで」

「ええ」

友香は改めて、次の指示を出すと恋華は10人を率いて中央階段に向かい、公介は5名のクラスメートを連れて教室を出て行く。

第95問

「雄二、作戦は上手く行ってるかな？」

「さあな。中央階段をEクラスが占拠している事はムツツリーニから連絡があつたが、そこから先はわからん」

明久は作戦が上手く行っているか不安なようで雄二に聞くが雄二は興味無さそうに言うが、

「坂本、昨日から言いたかつたんだけど、それって冷たすぎない？」

「仕方ないだろ。それにお前らはEクラスに肩入れしすぎだ。俺達はおくまでEクラスと無関係って感じを出さないといけないんだからな」

「そうかもしれないですけど、やっぱり気になりますよ」

美波は雄二の態度が気に入らないようで口を尖らせると雄二は苦笑いを浮かべ、瑞希は作戦は理解しているけどEクラスよりだと言つた時、

「失礼する。悪いんだけど、ちょっと教室を調べさせて貰うよ。Eクラスの生徒がいなかをね」

『動くな』

公介がCクラス生徒5人連れてFクラスの教室に入ってくるなり、Fクラスに許可を得る事なくEクラスの生徒がいなかを確認する

ためにFクラスの生徒を押しつけ机をひっくり返して行く。

「……6人か？ もう少し来て欲しかったね。それに小山さん自ら来てくれたら楽だったのに」

「そう言うな。少しでもCクラスの戦力を削れるんだ。後はEクラスとみあと大河しだいだ」

「しかし、なぜ、大河はワシらを手伝ってくれるんじゃない？ Aクラスには得はないはずじゃ」

Cクラスの生徒が教室に入って来たのを見て予想していたより少ないと言うと雄二は苦笑いを浮かべるとこの作戦には咲耶も協力しているようで秀吉は首を傾げると、

「まあ、サクにはサクで何かあるんだと思うよ」

「そうだな。本気でみあを狙ってるとかな。秀吉、自分から行かないと大河にみあを取られるんじゃないのか？」

「ゆ、雄二、お主はこんな時に何を言うておるのじゃ！？」

明久は苦笑いを浮かべ雄二は秀吉をからかうように笑い、秀吉が声を時、

『おい。Fクラスの生徒は少なすぎないか？』

「どこに行ってるんだ？ 正直に話せば何もしいけど、言わないならそれなりにこちらを動かさせて貰う」

騒いでいる明久達の様子を見て公介とCクラスの生徒はFクラスの教室に人が少ない事が気になったようで高圧的に言う。

「知らねえよ。自習だしな。どっかでサボってるんだろ」

「話せて言うてるだろ。お前らは何を企んでるんだ？」

「ちょっと待ちなさいよ。いきなり、何なのよ？」

雄二は公介達Cクラスの高圧的な態度にうっとうしいと言いたげに言うと公介の言葉でCクラスの生徒2人が雄二をつかんでその場に立たせると美波はCクラス生徒の行動に驚きの声を上げて止めに入ると、

『邪魔するんじゃないよ。バカが上位クラスに逆らうって意味を身体に!?!』

『お、お前、何をする!?!』

「何? こっちのセリフだろ。俺達は別に何もおかしな事をしてないぞ。それなのにケンカ腰で入ってきて、教室を調べさせるだ? クラスに人が少ないからどこ行っただか教えるだ? 知らねえと言ってるだろ」

雄二は自分を無理やり立たせたCクラス生徒2人の腹に拳をめり込ませ腹を押さえた2人を見下ろしながら言う。

「お、お前、手を出したな!?!」

「知るかよ。先に手を出してきたのはお前らだろ」

「ちゃんと録画させて貰ったから言い逃れはできないよ」

公介は雄二の行動に驚きの声を上げるが雄二は先に手を出したのはCクラスだと言うと明久は康太から借りたのがカメラを持っており、雄二の言葉を待っていたと言いたげにFクラスの生徒はCクラスの生徒を囲い、縛りあげると、

「何をするんだ？」

「決まってるだろ。人を疑ったんだ。反省くらいして貰おうと思っ
てな。明久、ここは任せるぞ。俺は次の行動に移る」

公介は雄二を睨みつけるが雄二はCクラスが先に仕掛けてきたと言
い、明久に残りのFクラスの生徒を任せて教室を出て行き、

「Cクラスは関係ない僕達Fクラスを疑った。これに対して、僕達
はどうするべきかな？」

「決まっておるのじゃ！！ 代表に謝罪をさせるのじゃ！！」

明久は残っているクラスメイト達に自分達はどうするべきかと聞く
と秀吉はCクラスに文句を言いに行くと言いFクラスは教室に公介
達を残してCクラスへ向かう。

第96問

「……邪魔よ」

「有栖さん、来てくれたんですね」

「……友香を守るためだから」

恋華は中央階段に到着するなり、その圧倒的な点数でEクラスの生徒を蹴散らし始めると、

「有栖さんが現れましたね……腕輪はないみたいです」

「うん。やっとここまでできたね。これで、ぼく達の役目は一先ず、終わりですね」

薫と陽菜は蓮華の腕に400点オーバーの証である腕輪がない事に安心したような表情をし、

「有栖さん、少しだけわたし達のお相手をしてくれないでしょうか？」

「……そうね。あなた達を倒せばここは押しきれぬわ」

薫と陽菜は恋華の前に出ると恋華は2人がEクラスの要である事を理解したようでその前に立つ。

「でも、有栖さんが出てくるとは思いませんでした。あまり試召戦争に興味があるとは思えませんでしたから」

「……別に関係ないでしょ。それに直ぐに補習室に行くんだから」
陽菜は恋華の前に立ち、あまり周りに興味の示さない恋華が試召戦争に出てきた事を聞くと恋華は陽菜には関係ないと言つと陽菜の召喚獣に攻撃をしかけると、

「有栖さん、あなたの相手は水鏡さんだけじゃないですよ」

「……原口くん」

薫の召喚獣が恋華の召喚獣の側面から攻撃を仕掛ける。

「……2対1ですか？ でも、その点数で今の私に勝てると思いませんか？」

「勝てるかじゃなくて、勝たないといけないんです」

「そう言う事です。腕輪があれば危なかったですけど、わたしと原口くんの2人なら悪い賭けじゃないですから」

薫と陽菜の点数は200点近くまで減少しており、恋華1人に2人で戦つて対等位の点数であり、圧倒的に不利な点数差に恋華は無駄な事をするなど冷たく言うが薫と陽菜は恋華には負けなと言つと、

「……ずいぶんと余裕ね」

「いえ、わたし達は部隊長なんです。仲間を守らないといけませんから」

陽菜の召喚獣は鞘から素早く刀を抜き、恋華を補佐しにきたCクラス
の生徒を切り裂き、

「点数だけでは召喚獣の勝負は決まらないですから」

「……それは勝つてから言うべきですね」

「……行くぞ。原口と水鏡を討たせるな。Cクラスの代表を討てる
のはこの2人だけなんだからな!!」

陽菜は柔らかい笑みを浮かべて恋華に向かい言うが恋華はくだらな
いと言いたげにEクラスの生徒達を討つて行くとEクラスの生徒は
恋華を止めるためにEクラスの生徒は薫と陽菜を無理やり後ろに下
げると一斉に恋華に襲い掛かり、Eクラスの生徒は次々と恋華の手
にかかり、次々と討たれて行き、

「待って!?! 有栖さんを倒すのは僕達の」

「そうです!! みなさん、引いてください」

「……ほら、点数差は圧倒的な差でしょ」

薫は自分と陽菜を守るために恋華に向かって行くクラスメートを止
めようとするがEクラスの生徒を見下すように言い、

「あなた達2人以外じゃ、友香は倒せないでしょ。ここであなた達
を倒せば決着が着くわ」

「それでもないんだな。原口、水鏡、よく持ちこたえた」

恋華がEクラスに勝ち目がないと言った時、恋華の後ろから雄二の
声が聞こえ、

「はい。作戦通りです。お待ちしてましたよ。坂本くん」

「ゴメンね。有栖さん」

薫と陽菜は雄二の登場に笑顔を見せる。

第97問

「アウェイクン
起動」

「な、何!？」

雄二は白金の腕輪の起動ワードを答えるとその場に張られていた世界史のフィールドははじけ飛び、恋華達Cクラスの生徒が驚きの声を上げると中央階段に召喚されていた召喚獣は姿を消すと、

「……Eクラス米倉巧がCクラス有栖恋華に物理勝負を挑む。試獣サ召喚!！」

『しよ、承認します』

このタイミングを最初から狙っていたようで物理教師と教室に残っていた予備戦力を引きつれた巧が恋華に向けて物理勝負を挑み、連れてこられた物理教師も何があったかわからないようで慌てながら承認許可をだし、巧の召喚獣は召喚され恋華に向かい武器であるメイスを構える。

「……Cクラス有栖恋華、受けます」

恋華は試召戦争のルールにより逃亡は許されないため、巧からの勝負を受けるが先ほどまでの点数はなく、恋華は苦虫を噛み潰したような表情をすると、

「……原口、水鏡、他の奴らは任せるぞ」

「うん」

「はい。任されました」

巧は恋華は自分が討つと言うと薫と陽菜は物理のフィールドで試召戦争を受けるのは不利のため廊下の両端に別れると、改めて、日本史での承認許可を受けて巧が引きつけてきたEクラスの生徒をまとめ、Cクラスを押し返して行く。

「……………何をした？」

「試召戦争の教師のフィールドの特性を利用して貰っただけだ。知ってるか？ フィールドはある程度の距離がないと『干涉』つてのが起きて消滅しまうそうだ。まあ、俺の腕輪じゃ、試してもいなかったからな。上手く発動するか、確認なしの1発勝負だったんだけどな」

恋華は雄二と巧を睨みつけてこの状況について聞くと雄二は口元を緩ませて賭けに勝ったと言うと、

「それじゃあ、悪いがその首を取らせて貰う」

「Cクラス羽鳥恋」

「同じく、眞崎蓮が有栖さんをフォローに入ります」

巧は恋華の召喚獣を打ち砕こうと進みだそうとした時、蓮と恋が恋華のフォローに入る。

「……………眞崎くん、羽鳥さん？」

「悪いんですけど、有栖さんは討たせません」

「はい。有栖さんはうちの攻撃の要ですから1人では無理かも知れませんが、3人ならどうにかかります」

恋華は2人の召喚獣が自分の召喚獣を守るように立ちふさがったのを見て驚きを隠せないようだが蓮と恋は1対3でならどうにかなると言つと、

「……さっきまでの有栖の戦い方を見せて貰ったが、この点数差でどうにかなると思ってるのか？」

「ならないとしても同じクラスの人間を見捨てるわけにはいかないでしょ」

「はい。羽鳥さんの言う通りです」

巧は2人が恋華のフロアに入ったのは無駄だと言つが蓮と恋にも譲れないものがあるようで巧を真っ直ぐに見据えて言つ。

「……あまり、面倒な事はしたくないんだが」

「そう言わずに付き合っつて貰います。Eクラスで点数の高い2人もこのままではじり貧ですしね。少しでもあなたの点数を減らさないとCクラスの勝利はありませんから」

巧は目の前に現れた2人の相手をするのが面倒だと言いたげにため息を吐くと恋は巧の点数を少しでも減らすと言つと、

「……坂本、時間稼ぎはこれくらいで良いか？」

「さあな。それは加賀谷しだいだろ。それより、せつかくの腕輪なんだ。使わないのか？」

「……わざわざ、お前に見せてやる気はない」

巧は雄二に向かいけだるそうにまだこんな茶番を続けるつもりかと聞くと雄二は巧に腕輪を使わないのかと聞くが巧は雄二に見せるつもりはないと言った時、

「誰でも良いです。教室に戻ってください!!」

雄二と巧の様子に蓮は何か気づいたようでCクラスの生徒に教室に戻るように言うが、

「それはできない相談です」

「疲れました」

薫と陽菜は廊下の端から単体でCクラスの後ろに回り込み、Cクラスのスの生徒を召喚フィールド内に閉じ込めている。

第98問

「眞崎くん、どうしたんですか？」

「僕達ははめられたんです。ここでの戦いは有栖さんを引つ張り出すためのだけの戦闘。やっぱり、伏兵がいるんです」

「……それなら、問題ないわ。友香がFクラスに伏兵を確認させに行かせたから、それは最初から話しあいをしていたでしょ。あの煩い八幡がFクラスに向かったわ……」

恋は蓮の様子に首を傾げると蓮はこの戦いはEクラスの作戦でしかないと言つと恋華は友香はそれくらいは計算していると言つが、

「悪いな。うちのクラスにきた奴らはあまりに態度がわるかったんでな。縛りつけて窓から吊してあるぞ」

「……坂本くん、それはやり過ぎじゃないかな？」

「そうか？ 高圧的にうちのクラスに入ってきてEクラスの生徒か隠してないか？ とか勝手な事を言つて教室を荒らしたんだ。『俺達がEクラスの生徒を隠している事実なんてなかった』のにな。それなのに人を不快にさせておいて謝る事なくこつちをバカにしたんだ。それなりの罰は与えないといけないだろ。ちなみにEとCの試召戦争が終わつたら鉄人に引き渡す予定だ」

「……坂本、お前、鬼だな」

雄二はFクラスにきた公介達Cクラスの生徒への報復方法を話すと

流石にやりすぎだと思ったようで薫と巧は眉間にしわを寄せると、

「何を言ってるんだ？ あいつらのせいでウチのクラスの数少ない女性陣が怯えてあしまったんだ。ウチのバカどもが報復しないわけがないだろ」

「……女性陣が怯えると言っても姫路だけだろ。島田は喰ってかかるところしか目に浮かばん」

「米倉、迂闊な事を言つとお前も明久みたく関節技を喰らうぞ」

巧はため息を吐くが雄二は気にする事なく楽しそうに笑っている。

「それなら、ここを守り通せばまだ反撃の手は」

「違います。新校舎には他にBクラスとAクラスの教室があります」

「……Bクラスは味方よ……Aクラスが協力しているって言うの？」
恋はまだ蓮の言いたい事がわからないようで首を傾げた時、恋華はこの試召戦争でEクラスに協力しているのがFクラスだけではない事に気づき、

「そう言う事だ。Cクラスは協定を結ぶ人間を間違えたな。お前達の代表様の彼氏とやらは俺が思う以上に厄介な人間達を敵に回しているようだ」

「……そう。確かにあの男は友香にとっても相応しくはないわね。そうね。これは友香にとってもお灸をすえるいい機会かもね」

雄二は蓮と恋華の言葉を肯定するようにニヤリと笑うと恋華は友香の彼氏であるBクラス代表の『根本恭二』に良い印象は持っていないようにため息を吐くと、

「諦めるのか？」

「いえ、そうだとでも負けるわけにはいかないわ。Eクラスの伏兵がCクラスの親衛隊を崩すにたつて時間がかかるはずよ。回復試験だつて受けられないしね。それに……少しだけ、味方を見捨ててはいけない気もするから」

雄二は恋華を挑発するように笑うが恋華はあまり面識がない自分のフォローに入ってきてくれた蓮と恋の思いにそれなりに何かを感じ取つたようで無表情なはずの表情を少しだけ柔らかくして負けるわけにはいかないと言う。

「……やる気になるな」

「……そうはいかないわ。悪いんだけど、羽鳥さん、眞崎くん、手伝って貰えるかしら」

「はい。元からそのつもりです。みなさん、諦めないでください。ここを倒して代表を守りに行きます」

巧は恋華の変化に気だるそうに言うつと恋華は蓮と連にフォローを求め、3人は巧の召喚獣に向かう。

第99問

時間はEクラスとCクラスの試召戦争が始まる少し前にさかのぼる。

「……みあ、咲耶君、これはいったいどう言う事なのかしら？」

「気にするな。気にすると負けだぞ」

「うん。気にしちゃダメだよ。ゆうちゃん」

優子は深秋と咲耶がAクラスに入ってきたのを見て眉間にしわを寄せながら2人に聞くが2人は気にする事なく、

「まこちゃん、みんなも早く入って、見つかると面倒だからね」

「し、失礼します」

深秋はAクラスの教室の中に真子を中心としたEクラスの生徒10名を招きいれ、真子は今まで入った事のないAクラスの教室に気後れしながらも教室に入ると、

「さてと、後はあいつらしだいだな」

「アキ兄なら、何も問題ないよ」

「……みあの言う通り、雄二は絶対に上手くやる」

咲耶は下準備が上手く行ったため、後はFクラスとEクラスしだいだと言うと深秋と翔子は作戦は上手く行くと言うが、

「まずはこの状況について話なさいよ！！　なんで、Aクラスの教室にEクラスの生徒が入ってくるのよ！！　代表もどうして、この状況を当たり前のように受け入れてるのよ！！」

「まあまあ、優子も落ち着いて、それで大河くん、吉井さん、これってどう言う事？」

優子は納得がいくような説明をするように言うと優子は咲耶につかみかかろうとし、優子の様子に流石に暴力沙汰は不味いと思ったように『工藤愛子』が割って入り、深秋と咲耶に説明を求めた。

「ん？　EクラスがCクラスに勝つためにここに伏兵を置こうと思つてな。最初はFクラスに置こうと考えただけど、流石にばれると思つたからな」

「……その前提がおかしいわよ。だいたい、それはこの状況を見ればわかるわよ」

咲耶は伏兵をAクラスに置き、Cクラスの目を欺きたいと言つたが優子が納得するわけもなく、

「も、申し訳ありません」

「加賀谷、謝るな。代表から承諾も得てるしな。しかし、加賀谷、お前、試召戦争や部活の時は別人だな」

真子は優子に謝るが咲耶はすでに説明は終わったと言いたげに真子に試召戦争時のバトルモードとは違つと言つた。

「気を付けてはいるんですけど、どうしても……血が騒ぐと言っか

「まあ、良いか……何だ？」

真子は咲耶の言葉に苦笑いを浮かべると咲耶は特にそれ以上追及する事はないが優子はやはり納得が行っていないように咲耶の制服をつかむ。

「説明になってないわよ。それに咲耶君や代表までなんで、FやEクラスの肩を持つのよ」

「まあ、落ち着け。別に個人的にはEとCの試召戦争の結果はどうでもいいんだけどな。もっと個人的にBクラスの根本と小山がそのかのじよ気に入らないだけだ」

優子は納得がいかないから詳しい説明をしると言っくと咲耶は個人的な感情だと言い、

「確かに、あの2人は感じ悪いよね。なんか、他人をバカにしてるって感じで小山さんはバレー部でも期待のホープって話だけど、良い噂は聞かないしね。根本くんも同じだね」

「……うん」

優子は咲耶の言葉に同意する点もあるようで苦笑いを浮かべると深秋は彼女にしては珍しく眉間にしわを寄せながら頷くと、

「……優子」

「……わかってるわよ。まったく、みあ、えーと、加賀谷さん、こ

ここに居て貰うのは目をつぶるわ。その代わり、静かにして居てよ。見ての通り、真面目に自習に取り組んでいる生徒もいるんだからね」
翔子は優子の名前を呼ぶと優子は深秋の表情に何か感じる事もあるように目をつぶると言つとAクラスに身をひそめる代わりに静かにするよつに言い、

「ゆづちゃん、ありがとう」

「ちよ、ちよつと、みあ!？ いきなり、抱きつかないで!？」

深秋は笑顔で優子に抱きつき、優子が驚きの声を上げるのを見て、

「相変わらず、優子はツンデレだな」

「それも、ちよつと違う気がするかな？」

咲耶は2人の様子にくすりと笑つと愛子は苦笑いを浮かべる。

第100問

「……面倒だな」

「この状況で言うか？　と言うか加賀谷がCクラスまで届かなかった場合はお前がどうにかするはずだろ」

巧は目の前でやる気になっている恋華、蓮、恋の3人を見て気だるそうにため息を吐くと雄二は苦笑いを浮かべながら言うと、

「……パスだ。面倒くさい。だいたい、ここまで削ったんだ。必要ないだろ」

「くっ!？」

巧の召喚獣は素早く動き、メイスで恋華の召喚獣を叩きつけ、補習室送りにし、

「えっ!？　米倉くん!？」

「……補習室に行ってくる」

巧はすでにCクラス摘んでいるためか気だるそうに補習室に向かい歩いて行き、物理のフィールドは解除され、薫は驚きの声を上げることが巧は振り返る事なく、

「羽鳥さん、戻りましょう」

「でも、ここの人達を見捨てるわけにはいきません」

蓮は物理のフィールドが解除された事で薫と陽菜に足止めされる前に戻ろうとするが恋の行動は一步遅く、

「……羽鳥さん、僕は代表を守りに行きます」

「眞崎くん、代表をお願いします。私は前に進みます。羽鳥恋が物理で……」

蓮は友香を援護するために教室に戻り、恋は日本史と世界史では薫と陽菜に敵わないため物理フィールドを再展開してCクラスをまとめて行く。

「……これはFクラス？」

「お。気づいた奴がいるんだ」

「……さっくん、あ、あの子」

蓮はCクラスに戻ろうとするが廊下は深秋、咲耶、優子を中心としたFクラスとAクラスの数名が通行止めにしており、深秋は蓮を見て何かあるのか目を輝かせはじめ、

「……えーと、確か、眞崎だったな。木下と原口と同性の」

「ち、違います。ぼくは男の子です」

咲耶は戻ってきた蓮を男の娘だと言うと蓮は慌てて否定するが、

「男の娘？」

「……みあ、すぐにそう言う脳内変換するのをやめなさい。秀吉もたまに傷ついているから」

深秋は獲物を狙う目で蓮を見ており、優子はため息を吐きながら深秋を押さえつける。

「眞崎、逃げるなら今のうちだぞ。1人じゃここを抜けないだろうからな」

「で、でも、羽鳥さんと約束しました」

「……そうか。優子、残念だが、みあを解放するんだ」

咲耶は蓮にここで大人しくするように言うが蓮は恋とも約束していると廊下を進もうとした時、咲耶はすでに火の点いている深秋を優子に解放するように言い、

「……本当に良いのかしら」

「蓮ちゃん　これにお着替えしようね」

優子はため息を吐きながら、深秋を押さえていた手を放すと深秋は女子の制服を手に蓮に襲い掛かかり、

「や、止めてください!?　ほ、ぼくは男の子です。お、女の子の制服なんてきません!?!」

「みあに襲われる男子生徒か?　去年に比べると増えたな」

「……最初は吉井くんだけだったのにな」

蓮は全力で抵抗するが深秋に制服を？がれて行き、その様子を見て咲耶は深秋と出会った時の事を思い出しながら懐かしむよう言々と優子は肩を落として言う。

「それで、あたし達はいつまでこんな事をやってれば良いの？」

「さあな。後は加賀谷しだいだろ」

優子は結局は最後まで深秋に巻き込まれている自分にため息を吐くと咲耶は苦笑いを浮かべた時、

「完成」

「ど、どうして」

「つ、土屋くん？ どうしてここにいるの？」

「……………俺の嗅覚を舐めるな」

深秋は連の着替えを終えたようで一仕事を終えた良い笑顔を浮かべるのとは対照的に蓮は女子制服に着替えさせられて目に涙を浮かべており、その姿を康太がシャッターが擦り切れる勢いで写真を撮っている。

第100問（後書き）

どうも、作者と

深秋「主人公と」

咲耶「咲耶です」

ついにきた100問目、まだ決着はつきません。（苦笑）

とりあえず、100問の記念として蓮くんには女装をしていただきました。あづまさんに怒られるかな？

そして、巧は戦線離脱、補習は試召戦争終結までですからね。戦闘が長引くよりはそっちを選ぶでしょう。

そして、何となく蓮と恋のフラグが立っている気がするのは気のせいでしょうか？

咲耶「どうだろうな？ 投稿キャラ同士って受け入れられるのか？」

わかりませんね。まずは試召戦争編が終わってからの出番があるかわかりません。

深秋「出るとしたら強化合宿編だろうね。ものすごく遠そうだけど」

そうですね。

第101問

「何！？ 恋華が負けたって言うの？ 八幡は何をしてるのよ」

Cクラスの教室のドアが勢いよく開き、なだれ込んで来た生徒がCクラスの生徒ではないため、友香は舌打ちをすると、

「Cクラス代表はどこなのじゃ！！」

「木下、あいつが代表の小山だ」

「秀吉、行くよ」

「うむ」

Cクラスの教室になだれ込んで来た生徒達はFクラスであり、わざとらしく自分達の名前を聞こえるように友香に向かい歩を進めて行き、

『代表を守れ！！』

『Cクラス……』

友香の周りを取り囲んでいた親衛隊がFクラスに向かい試召戦争を仕掛けるが、相手は試召戦争を行っているEクラスではないため召喚獣は召喚される事はなく、Cクラスの親衛隊達の半分がルール違反により、補習室に送られて行く。

「ど、どう言う事よ！？」

「ゴメンね。小山さん、僕達はFクラスなんだよね」

友香は自分の親衛隊がいなくなり、状況について行けないようで慌てる。明久は苦笑いを浮かべながら、自分達はFクラスだと言う事を説明すると、

「何で、FクラスがCクラスに攻めてくるのよ？」

「決まってるでしょ。ウチらにはあんた達Cクラスがわけのわからない因縁を付けてきて教室を荒らされたのよ！！ 謝りなさいよ！！」

友香は意味がわからないと言い、美波はCクラスがやったFクラスの教室でやった事に文句があると言うが、

「うるさいわよ！！ これは戦争なの！！ Eクラスと手を組んだのはそっちでしょ！！ 疑われるマネをしたあんた達が悪いんですよ」

「謝る気はないと言うのじゃな？」

「当然でしょ。それにあなた達、下級クラスに文句を言われる筋合いはないわ」

友香はFクラスが疑われるような事をしたFクラスが悪いと言うと、秀吉は目つきを鋭くして言うが、友香はこの状況でもFクラスを見下したように言う。

「小山さん、よく、この状況で強気で居れるね」

「当然でしょ。あなた達がFクラスって事はまだ、Eクラスはここにこれてないんだから、Eクラス程度に世界史と日本史で恋華を抜ける人間がいるわけないわ。総合力でEクラスがCクラスを倒せるわけがないでしょ」

明久は友香の高圧的な態度に少しムツとした表情で言うが友香はこの状況でもCクラスに負けはないと思っっているようでFクラスをバカにしたように笑い、

「そう。反省する気はないんだね」

「まあ、反省したところで結果は変わらないからのう」

明久と秀吉は友香を可哀想なものを見るような目で見てため息を吐くと、

「良い事を教えてあげるよ。小山さん、君や根本くんみたいに人を見下してる人間には敵が多いんだよ」

「何よ？ バカをバカにして何が悪いのよ？」

明久は友香に向かい態度を改めた方が良いと言うが友香はそれでも明久達をバカにするように言った時、

「Eクラス、加賀谷真子。以下10名がCクラス代表小山友香、Cクラス親衛隊に数学勝負を挑みます！！」

Fクラス生徒の中心に道ができ、Aクラスに隠れていた真子を中心としたEクラスの生徒がCクラスの生徒に試召戦争を仕掛ける。

「さあ、そこまで、私達をバカにする上位クラスの実力を見せて貰いましょう……弱い。この程度か！！ これなら、Fの島田さんや吉井の方が齒ごたえがあるわ！！」

「な、何！？」

「……加賀谷さん、全開ですね」

「……周りが試召戦争してるなか、お預け喰らってたわけだしね」

真子の召喚獣は大剣を振りまわし、Cクラス生徒の召喚獣を薙ぎ払って行くと友香は目の前でCクラスの生徒がEクラスの真子に蹴散らされている事に顔を引きつらせ、明久と瑞希は苦笑いを浮かべ、

「……島田、お主、よくいつも加賀谷の相手をできるのう？」

「……言わないで、結構、命がけなんだから」

秀吉は模擬試召戦争で真子の相手をしている事の多い、美波に声をかけると美波は首を振り、

「つまらないわ。さあ、Cクラス代表、代表と言っくらいなんだ。私を楽しませてくれるんでしょうね」

真子は自分に襲い掛かってくるCクラス生徒が居なくなった事につまらなさそうに舌打ちをすると友香の召喚獣に大剣の切っ先を向け、

「な、何なのよ！？」

「……それでも代表ですか？ 成績は良くても坂本やうちの代表と

違って代表の資質もないようですね。まあ、あなたはそうですね」

友香は目の前で大剣を振りまわし、Cクラスの召喚獣を蹴散らす真子の様子にしり込みしているようで1歩下がると真子はそんな友香の様子につまらなさそうに友香の召喚獣を一刀両断にし、Eクラス対Cクラスの試召戦争は終結する。

第102問

「決まったな」

「はい」

雄二は召喚フィールドが消えるのを確認してニヤリと笑うと薫は流石に疲れたようで廊下に腰を下ろすと、

「原口くん、立ってください。あなたがそれだと締まりませんよ」

「まあ、Eクラス勝利の1番の貢献者だからな」

陽菜は薫に手を伸ばし、雄二は薫が今日の勝利の立役者だと言うが、「ち、違いますよ。今日の試召戦争の立役者は米倉くんです。自分の信念を曲げて本来の成績を取ってCクラスの伏兵を排除してくれなかったら、僕達がここを守りきっても宏美ちゃんが討たれて終わりだったんですから」

薫は巧の功績が1番だと言った時、

「薫、水鏡さん」

「代表、お疲れ様です」

「お、きたな」

戦争終結を聞きつけてEクラスの教室から宏美が駆け寄ってくる。

「あれ？ 米倉は？ あいつが補習室送りになるわけないし……サボリ？ まったく、あいつは何をやってるのよ……！」

「まあまあ、代表、落ち着いてください。それより、代表、原口くん、戦後処理、お願いしますね」

宏美は巧がない事に首を傾げた後、巧をサボリだと決めつけて声を上げると陽菜は苦笑いを浮かべながら宏美を止め、宏美と薫の2人に戦後処理を任せると言つと、

「水鏡さんは行かないんですか？」

「流石に疲れてしまいました。代表だけだと話がずれてしまいそうですから、原口くん、よろしくお願いしますね」

「……私だって、戦後処理くらいできるわよ。だいたい、設備交換をするだけでしょ」

薫は陽菜の言葉に首を傾げると陽菜は苦笑いを浮かべ、宏美は自分はそこまで血が昇りやすすくないと言つが、

「確かにな。原口は一緒の方が良いな」

「ですよ。それじゃあ、坂本くんもお願いしますね」

「ああ。あんまり、長くなると逃げられそうだからな」

「そうですね。素直じゃありませんから、それじゃあ、わたしも行きませぬ」

雄二は陽菜の言葉に同意すると陽菜がこの後、何をするつもりかも理解しているようでくすりと笑う、陽菜も雄二につられるように笑顔を見せて廊下を歩いて行く。

「それじゃあ、行こうぜ。楽しい、楽しい。戦後処理の時間だ。そ
うちの……」

「羽鳥恋です」

雄二は陽菜の背中を見送るとCクラスをまとめあげていた恋に声をかけると恋は立ち上がるがEクラスがFクラスと同盟を組んで戦った事を卑怯と想っているようで雄二を睨みつけるが、

「悪いな。これは戦争だろ。それに同盟が行けないって言うなら、最初からBクラスと同盟を組んでいたお前の方が汚いだろ。それに俺達には俺達のお前らを敵にした理由がある。元々、試召戦争には介入するつもりはなかったが、そっちが俺達に伏兵がいるとかありもしないいいちゃもんをつけてきたんだからな」

雄二はしれっとした顔で原因はCクラスだと言い切ると、宏美と薫は雄二の表情に苦笑いを浮かべ、

「それじゃあ、行きましようか？」

「そうですね。みあちゃんもいるから眞崎くんが心配だし」

「ああ、あの男の娘か？ 間違いなく、みあに捕まってるだろうな。今は女装させられて泣いてるんじゃないか」

宏美は戦後処理に行こうと言うと薫はバリケード役の深秋に戻って行った蓮が捕まっていそうだとため息を吐くと雄二は間違いなく蓮は深秋に捕まっていると言い切る。

第103問

「ま、眞崎くん!？」

「は、羽鳥さん!？ み、見ないでください!？」

雄二達がCクラスへ向かっていると恋は深秋に着替えをさせられ半べそになっている蓮を見つけて驚きの声を上げると蓮はこんな姿を見られたくないようで逃げ出そうとするが、

「逃がさないよ 次はこれだよ」

「……………その涙目、絵になる」

深秋と康太から逃げられるわけはなく、女子生徒の制服は脱がされかけ、新たなお着替えタイムに入ろうとしており、

「……………やっぱりな」

「やっぱりじゃないです!？ 皆さん、止めてください!！」

「……………ごめん。羽鳥さん、あの状態のみあちゃんはぼく達には止められないんだよ」

「……………ええ、止めに行くと被害が拡大するから」

雄二はため息を吐くと恋は深秋を止めるように言つが薫と宏美は自分達には深秋を止めるのは無理だと首を振る。

「よ。坂本に原口、中林、上手く行ったみたいだな」

「ええ、協力ありがとね。大河くんにも木下さん」

「……別にあたしはあなた達に協力したつもりはないわよ」

咲耶は雄二達の作戦の成功に笑顔を見せると宏美はバリケードの作ってくれたAクラスを率いている咲耶と優子に頭を下げるが優子は協力したつもりはないと言つと、

「咲耶君、結果も出たんだから、あたし達は教室に戻りましょう」

「そうだな……悪いな。中林、優子は素直じゃないから、照れ隠しみたいなもんだ」

「咲耶君!!」

優子は教室に戻ると言い、咲耶は宏美に優子の態度を謝ると優子は咲耶に余計な事を言つなと言いたいようで咲耶を呼び、

「悪いな。これ以上は面倒になるから、俺は戻るな……そうだ。中林、原口、勝利、おめでとさん」

「ええ、ありがと」

咲耶は優子の様子に苦笑いを浮かべると宏美は優子の態度もわかるようで苦笑いを浮かべながら咲耶に礼を言つと咲耶は邪気のない笑みを見せた後、Aクラスの教室に戻って行く。

「さてと……行くか？」

「行くかじゃないです。少なくとも試召戦争は終わっただんです。眞崎くんを解放してください」

「……羽鳥、勘違いするな。あれは試召戦争とは別物だ」

雄二は廊下を塞いでいたAクラスが教室に戻るのを見て改めてCクラスの教室に行くかと言うが恋は深秋を止めるように言うと雄二は首を横に振り、

「それなら、私が止めます。止めてください。あなたに眞崎くんをおもちやにする!？」

「ゆうじくん、かおるちゃん、ヒロちゃん、この可愛い子は誰？」

「ちょ、ちょっと、い、いきなりなんなんですか!？」

恋は深秋を止めに行くと言うと深秋の視界には恋の姿が映り、深秋は恋に向かい飛び付くと恋を抱えて雄二達に聞くと恋は今の自分が置かれている状況について行けないように声を上げるが、

「……新たな獲物だな」

「……そうね」

雄二と宏美はこれから恋に起きるであろう事を考えてため息を吐くと、

「Cクラスの羽鳥恋だ」

「れんちゃん？ ……どうしよう？ れんちゃんが3人だよ」

「……せめて、眞崎くんはくん付けにしてあげて」

雄二が恋の名前を深秋に教えると深秋は真剣な表情で『れん』が3人だと言うと薫はせめて蓮は男の子だからくん付けにして欲しいと言う。

「まあ、それはおいおい考えれば良いや、それじゃあ、お着替えタイムだね」

「な、なに？ こ、この子は何なんですか！？ や、止めてください！？」

深秋は後で考えれば良いと言うと恋の制服に手をかけ出し、恋は深秋の腕から逃げようとするが逃げられる訳はなく、

「……原口、中林、行くか？」

「……そうね」

「……うん」

雄二達は恋を見捨ててCクラスの教室に向かう。

第104問

「雄二、原口くん、中林さん」

「あれ？ みあは？」

雄二、薫、宏美の3人がCクラスの教室に入ってきたのを見て明久が手を振ると美波が深秋がいない事に首を傾げると、

「……島田、良いか。みあの事は忘れる。被害に遭いたく無ければな」

「……わかったわ」

雄二は深秋の事に触れるなど首を横に振り、美波は雄二の言葉に全てを察したようでもう頷き、

「……今度は誰が被害に遭ってるんだろっね」

「……吉井くん、気にしない方がよいよ。見に行くと絶対に捕まるから」

「……私が今まで見た事ないくらい全開だったわよ」

明久が被害に遭っている人間の姿を思い浮かべてため息を吐くと薫と宏美は明久の肩を叩いて近付かない方がよいと言っ。

「それじゃあ、そろそろ、始めようぜ。中林、原口」

「ええ。小山さん、戦後処理に移りたいんだけど良いかしら？」

「……」

雄二は戦後処理を始めるように薫と宏美を呼ぶと宏美は友香に声をかけるが友香は下位クラスに負けた事が気に入らないようで宏美を睨みつけると、

「小山さん、悪いんだけど、そんな風に睨みつけてくれないかな。私達は試召戦争で勝つたのよ。そんな風に睨まれる筋合いはないわ」

「……よく言うわね。Fクラスと同盟まで組んでおいて」

「悪いな。それはお前達に言う資格はないだろ。進級して直ぐにBクラスと同盟を結んでいたんだ。こちらが先に同盟を組んでいたなら言われても納得が行くけどな。そっちの同盟を組み相手を間違えたんだろ。それをとやかく言われる筋合いはねえよ」

宏美は友香に睨まれる筋合いはないと言うが友香は同盟を組んだのが汚いと言うが雄二はつまらなさそうにBクラスと同盟を組んだCクラスに問題があると言い、

「そうだね。同盟って割にはたいした手伝いもしない。伏兵がいると言ってもいる場所は見当違い。はっきり言わせてもらえば根本くんはCクラスのために動いたって感じはしないね」

「しよせんは自分の身が可愛い小者だからな。Cクラスを倒した相手がいたらBクラスに攻め入る前に叩き潰そうと考えてるくらいだろ。同盟って割には捨て駒に近い」

「あ、あの。坂本くん、吉井くん、小山さんの前でそれを言うのはどうかと思うんですけど」

明久は恭二の考えはあまりCクラスを重要視していないと言うと雄二も明久と同じ考えのようでバツサリとCクラスを捨て駒だと言うと薫は2人の言葉に苦笑いを浮かべるが、

「……」

「……自覚も少しはあったようじゃのう」

友香は少しは自覚している部分もあったようで苦虫をかみつぶしたような表情をすると秀吉はため息を吐く。

「……それじゃあ、勝ちクラスの代表として言わせて貰うわ。って言いたいところなんだけど、私達は特に言う事もないのよね。私達はFクラスの代表と違ってクラス設備を交換条件に何かを頼むような事はないし」

「そうなんですよね。坂本くん、Fクラスからは何かありますか？」

「ん？ そうだな。Cクラス代表が俺達の条件を飲むなら、今から手に入れるはずのクラス設備をうちの設備を交換してやっても良い」

宏美と薫はEクラスからは設備交換以外は特に条件を付ける気はないと言うとが雄二がここに残っている事で雄二に何か考えがあると思い雄二に話を振ると雄二は何か考え付いているようで口元を緩ませると、

「……坂本くん、何を考えているんですかね？」

「……また、ろくでもない事でしょ」

瑞希は雄二の様子に苦笑いを浮かべ、美波は呆れたようなため息を吐く。

第105問

「……どう言う事？」

「簡単な事だ。本来なら、CクラスはEクラスの設備になるはずだが、俺達の話に乗るなら、お前達は俺達の持っているDクラスの設備に移動し、俺達がEクラスの設備に入る」

友香は雄二の言葉の意味がわからないように眉間にしわを寄せながら言つと雄二はFクラスの設備をCクラスにゆずると言い、

「……何が目的？」

「目的？ 決まってるだろ。俺達がBクラスに勝つのにあんた達に協力して欲しいと思つてな。彼氏とは言え、自分達を見捨てたBクラスとEクラスを勝利に導くために全面的に協力した俺達Fクラス。どちらが信用出来ると思つ？」

友香は雄二の思惑がわからないため首を傾げると雄二はクラス設備を交換に友香にFクラスとCクラスの同盟に使いたいと言つ。

「ちよつと、坂本、何でわざわざ設備を落とす必要があるのよ？」

「落ち着いてよ。島田さん、雄二にも考えがあるんだから」

美波は雄二の提案の意味がわからずに声を上げると明久は苦笑いを浮かべながら美波を止め、

「だけど」

「僕も雄二が設備交換を提案する理由がわかるし、説明は教室に戻ってからするから」

明久は納得がいかなさそうな美波に後で説明をすと言つと、

「……」

「小山さん、言わせて貰うわ。Fクラスの代表の坂本くんは信頼しづらいけど、吉井くんとみあは信頼できるわ」

「……宏美ちゃん」

友香は雄二の提案に乗るべきか考えている姿に宏美は深秋と明久のいるFクラスは信頼に値すると言い、薫は宏美の言葉にため息を吐く。

「……わかったわ」

「そうか？ それなら、Fクラス代表の坂本雄二だ。俺達、Fクラスは今からCクラスに試召戦争を仕掛ける」

「Cクラス代表、小山友香。受けるわ」

友香は宏美の言葉に少し考えた後、頷くと雄二は形だけの試召戦争をCクラスに仕掛け、

「勝敗は代表間の話し合いで決める。俺達、Fクラス勝利としてCクラスとFクラスの設備交換を行う」

「……その提案を受け入れます」

形だけの試召戦争のため、Fクラス対Cクラスの試召戦争は直ぐに収束し、

「次は明久、Bクラスへの宣戦布告だ。開戦は明日の朝」

「うん。言ってくるよ」

雄二は明久に宣戦布告に言って来いと言うと明久は他の人間に宣戦布告の使者をさせるわけにもいかないと思っているようで頷くとCクラスの教室を出て行き、

「薫、それじゃあ、設備交換を始めるわよ。ここを早く終わらせてFクラスのも終わらせるわよ」

「う、うん」

宏美は自分達の設備交換だけではなく、Fクラスの設備交換も手伝うと言い、薫と一緒にCクラスの教室を出て行く。

「……ずいぶんとEクラスをうまく取り込んだみたいね」

「おかしな事を言わないでくれ。少なくとも俺はそんな事をしたつもりもない。ただ、うちにはクラスが違うから敵として認識するよ。うな奴がいなかっただけだ」

友香は自分達の教室に戻って行く、FクラスとEクラスの生徒を見て雄二を睨みつけて言う。雄二はお人好し2人に巻き込まれている自分がガラにもないと思っっているようで苦笑いを浮かべ、

「さてと、ここからは戦後処理の続きだ。悪いけど、あなたの彼氏を引きずり下ろすために協力して貰うぜ。あいつにBクラスの代表に居座り続けられるとこの先に無駄な火種が上がりそうだからな」

「……ええ。負けた私達は何も言える立場じゃないからね。協力させて貰うわよ」

雄二はCクラスとの戦後処理は終わっていないと友香に言い、友香は諦めているのかため息を吐くと、

「ずいぶんと物分かりが良いな」

「私にも恭二と同盟を組む時に私やクラスの事を考えて苦言してくれた人がいたのよ。私はその子のためにもクラスをまとめられる代表にならないといけないのよ……中林さんや坂本くんみたいだね」

雄二は友香が素直に自分の提案に乗ると言っつのを聞いて少し驚いたような表情をすると友香は少しだけ照れくさそうに苦笑いを浮かべる。

第105問（後書き）

どうも、作者です。

今回は話の内容ではなく感想の返信についてなのですが、今までは更新前に返信していましたがこれからは感想に気づいたときに返信させていただきます。ご了承ください。

第106問(前書き)

今回は黒丸さんと光闇雪さんに怒られるかも知れません。(苦笑)

第106問

「見つけました」

「……何のようだ？」

巧は補習室に向かう途中で試召戦争が終結したため、補習を受ける事なく設備移動をサボろうとしていると巧の行動を見透かしていたように陽菜が巧に声をかける。

「何のようだ？ じゃないですよ。せつかく、勝利したんですから、皆さんでお祝いしましょうよ」

「……パスだ。面倒くさい」

「ダメですよ。そんな事を言ってるから、みあちゃんや大河くんに遊ばれるんですよ」

陽菜は巧の様子にくすりと笑うと巧は自分の行動が見透かされている事に不機嫌そうな表情をして陽菜の言葉に従わないが陽菜は巧の顔を覗き込みながら、巧に態度を改めるように言っと、

「……」

「逃がしませんよ」

巧は自分の目の前に無防備に顔を近づけて笑う陽菜の顔を直視する事が出来なく、陽菜から距離を取ろうとするが陽菜はにっこりと笑うと巧の腕をつかみ、

「……は、放せ」

「ダメです」

巧は陽菜の突然の行動に顔は赤く染まっただけで、陽菜は手を放す事ではなく、

「教室に戻るって言うてくれないとずっとこのままです。そうなる」とFクラスの男の子達にも追いかけられますよ」

「……何の嫌がらせだ？」

陽菜は口調はおっとりとしているが巧を脅し、巧は顔を赤くしたまま陽菜の言葉に眉間にしわを寄せる。

「嫌がらせじゃないですよ。今回はFクラスの協力で試召戦争には勝てましたけど、3カ月後はFクラスと戦う事だつてあり得るんです。坂本さんと対等の策を出せるのは米倉くんだけなんですから、クラスから信頼を得て貰わないと困るんです。だから、逃がしません」

「……そんなもんは原口と水鏡がやれば良いだろ。お前らは日本史も世界史も得意なんだ。過去の戦争から役に立つものを探せば良いだろ。先陣は加賀谷がいるんだ。俺はもうこれ以上は知らん。Fの設備まで落ちなければそれで良い」

陽菜は巧にはこれからのEクラスの事を考えて貰わないと困ると言うが巧は自分はその気はないと言うが、

「ダメですよ。1度、実力がばれてしまってるんですから、そこで無関心を気取つても立場を悪くするだけです。それに米倉くんの弱点はみんなにばれてるんですからね」

「……顔を近づけるな。戻れば良いんだろ。離れる」

陽菜は巧が女の子が苦手だとクラス中に知れ渡っているから、傍観者にはなれないと言いながら、巧の顔を覗きこむと巧はとうとう折れ、教室に戻るから陽菜に手を放すように言う。

「逃げるのみあちゃんと大河くん……そうでした。みあちゃん、経由でDクラスの玉野さんとも先日から仲良くさせていただいているんですけど玉野さんにも協力して貰いましょう」

「そいつは何者だ？」

「えーとですね。みあちゃんと一緒にコスプレ衣装を作ったりしてまして、2人がそろうともしかしたら、米倉くんも木下くんや吉井くんみたいに女装させられちゃうかも知れませんか」

陽菜は巧が逃げた場合は深秋と美紀を巧にけしかけると言い、

「……教室に戻るから、それだけは止める。俺はそっちの趣味はない」

「はい。それじゃあ、戻りましょう。みんな待ってますから、待ってくださいよ。米倉くん」

巧は女装させられる事は避けたいと思ったたようのため息を吐くと陽菜は巧から離れた後、巧に教室に戻ろうと手を伸ばすが巧は1人で

歩きだして行き、陽菜は巧の後ろを慌てて追いかけて行く。

その後、教室に戻った巧を見つけた宏美は試召戦争を途中で向け出した事を長々と文句を言い、そんな宏美を薫は必死に止めていた。

第107問

「……坂本くん、詳しい話を聞かせてくれる？」

「ん？ ああ、そうだな」

放課後、一先ず、設備交換を終えて本来、Cクラスの設備になるはずだったEクラスの教室にF、Eクラスの首脳陣とCクラスからは代表の友香、深秋に捕まっている蓮と恋の2人と先ほどまで窓から吊るされていた公介、補習から解放されたばかりの恋華が集まっており、友香がこれから自分達がFクラスにどんな協力をさせられるのかと聞く。

「そうだな。まずはどうして、俺達がEクラスの設備と交換させて貰ったかだな」

「そうよ。せっかく、勝ち獲った設備なのにわざわざランクを落とす必要はないでしょ」

雄二は先ずはFクラスとCクラスの設備を交換したかと話そうとすると美波は納得がいかないようで雄二に向かい言つと、

「島田さんも落ち着いてよ」

「……その前にここにいるCクラスは信用できるのか？」

明久は美波をなだめ落ち着くように言う隣で巧が新たに参加したCクラスの生徒は信用できるのかと言つ。

「……別に疑うなら疑えば良いでしょ。私達は友香の指示に従うだけ」

「おいおい。米倉も有栖もこんなところでケンカするなよ。これからは仲間だ。仲良くやろうぜ」

恋華は巧の言葉に表情を変える事なく言うと2人の間には微妙な緊迫した空気になると公介が2人の間に割って入り笑顔で2人の手を取り握手をさせようとするが、

「……八幡、うるさい」

「……黙れ」

巧と恋華は公介の手を振り払うと、

「何だよ。その反応？ あれだな。2人ともツンデレってヤツだな。ダメだぞ。人間素直が1番だ」

「……小山さん」

「……言わないで」

公介は空気を読まずに笑顔で言うと宏美は公介の様子に友香にどうにかして欲しいと言うが友香は疲れたようなため息を吐く。

「まあ、さつきまで敵だったわけだしね。すぐに信用して欲しいとは言わないわよ。それに状況しだいじゃ、裏切るかも知れないし」

「代表!!」

友香は信じないならそれでも良いと言うと連は友香の言葉に声を上げると、

「……羽鳥さん、私にも後に続く言葉ってものがあるのよ。ちゃんとそれを証明して見せるわよ。借りを作ったままって言うのは気分も悪いしね。それに恭二はCクラスを本気で援護するつもりもなかったみたいだし、クラスの代表としてはクラスを守るために動かないといけないでしょ」

「その言葉、信じさせて貰うぜ」

友香はため息を吐きながらFクラスから受けた恩義は返すと言うと雄二はニヤリと笑う。

「それじゃあ、どうして俺達がEクラスの設備を欲しかったかだが、明久」

「うん。僕達がEクラスの設備を欲しかったのはBクラスと戦う上でDクラスの設備じゃ都合が悪いんだよ」

雄二は明久に声をかけると明久は黒板に簡単なフロアの略図を描いて行き、

「あ、あの。吉井くん、都合が悪いって言うのは」

「まずは設備の配置個所、DランクとBランクの設備じゃ、場所が近すぎるんだよ。場所によってはBクラスの教室内から召喚フィールドを張られると僕達の行動が制限される」

瑞希は明久と雄二が何を考えているかわからないように明久に聞くと明久はBとDの設備間の壁に円を書く。

第108問

「召喚フィールドの有効範囲は？」

「……えーと、召喚フィールドの効果範囲は半径約10メートルでしたよね？」

明久は円の中心と円周を繋ぐ線を描きながら聞くと薫は首を捻りながら答え、明久は「(半径)10メートルと黒板に記入すると、

「ああ。それでフィールドを展開されてしまうとウチのクラスでBクラスとまともに戦えるのは姫路だけだ。後は教科指定になるとみあの家庭科、現代文、ムツツリー二の保険体育、島田の数学だけだ」

「それで、坂本くんはEクラスの設備に移動したいって事？」

雄二は今のFクラスでBクラスとまともに戦える人間は少ないと言うつと宏美は単純にBクラスとの距離を取りたいからだと聞くが、

「……いや、だからこそ、雄二には開戦開始にここに居て貰う」

「待つんじゃない!! それではCクラスと設備を交換する意味がないのじゃ」

明久はDランクの教室の1番端の召喚フィールドの半径に入らないところに雄二の名前を書き込み、秀吉は驚きの声を上げる。

「……困? それを代表である坂本くんがやる必要はあるの?」

「恋華、どう言う事？」

恋華は明久の描いた雄二の立ち位置に雄二が囷だと言うと友香は意味を理解できないように声をあげると、

「まあ、そのままだ。代表である俺の居場所は知られるようになってるからな。それなら、囷にでもなつてかき回してやろうと思つてな」

「それで雄二の護衛にEクラスに部隊を3つに分けた時の須川くんの部隊に姫路さんとムツツリー二。開戦直後に教科は保険体育で召喚フィールドを張る。残りはEランクの教室設備から開戦。数学、家庭科、現代文の先生を確保しに移動。頃合いを見てからBクラスを挟みうちにする」

雄二はニヤリと笑うと代表自ら囷になると言い、明久は黒板にDランクの設備に瑞希、康太、亮の名前を書き込み、Eランクの設備に明久、深秋、秀吉、美波の名前を書き込む。

「待つてよ。そこじゃ回復試験はどうするのよ？ Dクラス回復試験も受けられなきゃ、負けちゃうでしょ？」

「そつでもないんだな」

「うん」

美波は回復試験を受けられなければ瑞希や康太を配置してもBクラスに押し切られてしまつと言うが明久と雄二はニヤニヤと笑つと、

「ん？ 回復試験は場所を指定しているわけじゃないだろ。それな

ら、ウチやウチと戦ったEは回復試験を申請しているんだ。一緒に受ければ良いだろ……なんだ？ 俺はおかしな事を言ったか？」

「八幡、あんた、いきなり何を言い出すのよ？」

公介は明久と雄二が考えている事に気づいているようで美波がFクラスが回復試験を受けられなくなると言う意味がわからないと首をかしげ、友香は公介の言葉に驚きの声をあげるが、明久と雄二は頷いており、

「ちょ、ちょっと待ってください！？ それって可能なんですか？」

「……ルールのには何も問題なさそうだな」

蓮は驚きの声をあげると巧は眉間にしわを寄せてこれは頭になかったため息を吐く。

「ああ。Cクラスには俺達との形だけの試召戦争は伏せて貰っている。Fクラス、Eクラスも同様にだ」

「だから、試召戦争が明日の開戦前にBクラスの目を欺くためにCクラスは2つに分かれて貰い、回復試験を受けて貰うよ」

「……となると私は明日の朝はこっちな」

雄二はニヤリと笑うと明久はCクラスを2つに分けて貰うと言うと友香はあまりEランクの設備には居たくないようだがCクラスがEランクの設備に落ちたとBクラスに思わせるためにため息を吐きながらEクラスの教室に移動すると言う。

第109問

「そう言う事だ。後は」

「……今回と同様にFクラスの生徒をCクラスに隠す事」

「うん。少なくとも小山さんの周りに居て、根本くと面識のある生徒はEランクの設備に居て欲しい」

友香の言葉に雄二は友香が察しが良いため、説明が楽だなと言った感じで頷くと恋華は友香の様子を恭二やBクラスが見に来る可能性も考えられるため、Fクラスの生徒を上手く隠す必要があると言っていると明久は頷くと、

「……そうね。それなら、恋華と羽鳥さんは私と一緒にEクラスの設備に来て……後は八幡くんも眞崎くんは悪いんだけど、坂本くん達の方をまとめて」

「私ですか？ 有栖さんはわかりますけど、私は代表とはあまり」

友香は少し何かを考えると自分と一緒にくる人間とDランクの設備に残る人間を振り分けるが恋は友香とはあまり折り合いが悪くないようで人選の意味がわからないと言おうとするが、

「恋ちゃん、ダメだよ。仲良くしないと仲良くなならないならゆうかちゃんと恋ちゃんと一緒にこれを着て貰うよ……むしろ、着せる」

「姫路、島田、話の邪魔だから、みあを押さえてる」

深秋はケンカは良くないと言うと仲直りをさせるために友香と恋にお揃いの衣装を着せると言い始め、雄二はため息を吐いて瑞希と美波に深秋を押さえておけと言う。

「は、はい」

「……………うちには無理よ」

雄二の言葉に瑞希は頷くが美波は今の深秋に近づくのは危険と判断しているため首を振ると、

「そうか？ みあ、ずっと保留になっていた島田のコスプレなんだが、今日、島田はどうしてもお願いしたいようだ」

「ちょ、ちよつと、坂本、いきなり、何を言い出すのよ!？」

雄二はこの会議に深秋と美波がいる可能性をあまり感じてないよう
で美波を深秋の生贄に捧げ、美波は雄二の仕打ちに驚きの声をあげ
るが、

「……………うん。そう言う事だから、はるちゃん、みきちゃん、よろしくね。こうくん、撮影の準備　あとはさっくんにも連絡して」

「……………任せろ」

深秋は美春の撮影会も一緒に行うようで美春に電話をかけており、
康太に撮影会の準備を頼むと咲耶にも手伝ってもらう事があるよう
で勢いよく教室を出て行く。

「島田さん、頑張って逃げてね」

「い、言われなくてもわかってるわよ！！ 坂本、あんた、覚えておきなさいよ！！」

明久は美波の行く末に苦笑いを浮かべると美波は雄二を怒鳴りつけた後、急いで教室を出て行くこととして勢いよくドアを開けた先には咲耶が立っており、

「逃げるな。行くぞ。みあがお待ちかねだ。明久、坂本、島田を借りてくぞ。土屋も行くぞ」

「……………了解」

「ちょ、ちよつと、大河！？ あんた、何をするのよ！？」

美波の首をつかむと美波を引きずり、康太は咲耶の後を付いて教室を出て行き、

「さてと、小山、羽鳥の疑問に答えてやってくれ」

「え、ええ。私に付いてきて貰う人に羽鳥さんを選んだのは恭二に羽鳥さんの事を話した事があるから、意見が合わないから、よくぶつかるとしてそれに恭二が同盟を持ちかけてきた時にもその場で反対したでしょ」

「……………反対したわね。Bクラスの代表は信じられないと」

雄二は友香に向かい説明の続きを頼むと友香は恋は恭二に目を付けられていると言い、恋華は友香が恋を選んだ理由に納得したようで頷くと、

「……そうですね。私は根本くに顔を知られてるからいないと目立ちますね」

「ええ。恋華も恭二とは面識があるし、八幡くんはうるさくて目立つからね。眞崎くんは今日の試召戦争の内容を見せて貰って分けたクラスをまとめて貰えると思ったからよ」

恋は友香の考えに納得すると友香は続けて公介と蓮を振り分けた理由を話す。

第109問（後書き）

どうも、作者と

深秋「主人公です」

ご機嫌ですね。

深秋「そうだよ。ようやく、みなみちゃんとはるちゃんのお着替えタイムだよ。胸のないみなみちゃんにも似合う服をみきちゃんといっぱい用意したんだよ」

まあ、美波の意見も聞いてあげてくださいね。

深秋「いや」

「まずは深秋たちは現在、書くかは未定です。作戦会議が終わってから考えます。」

第110問

「ぼ、ぼくがですか！？ む、無理ですよ」

「そんな事はないわ。眞崎くんが連携の重要さに気づいて羽鳥さんと前線を支えてくれなければもしかしたらもつと早く負けていたかも知れないわ。眞崎くんと戦った原口くんと水鏡さんは私の考えをどう思うかしら？ 眞崎くんならできると思う？」

蓮は自分ではクラスメートをまとめる事はできないと言うが友香は彼女なりにEクラス対Cクラスの試召戦争の事を分析しているように蓮にならできると言った後に薫と陽菜に意見を求めると、

「はい。眞崎くんならできると思います」

「そうですね。眞崎くんと羽鳥さんのお相手をするのは大変でした」

薫と陽菜は蓮なら問題なくできると言うが、

「あ、あれは」

「……ねえ。眞崎くん」

蓮は自信がないように視線を伏せてしまい、明久はそんな蓮の様子に何か感じたように蓮の名前を呼ぶ。

「自信なんて誰も持てないよ」

「そうですね」

明久は最初の試召戦争の時の自分と重なったようで苦笑いを浮かべて言うと宏美もEクラスをまとめる時に蓮と同じ不安を抱えていたためか明久の言葉に頷き、

「大丈夫だよ。眞崎くんが不安なら誰かが助けてくれるよ。1人じや無理でも仲間とならきつとできるから、僕だってそうだった。最初の試召戦争でどうしてもクラスをまとめないといけなくなった時、秀吉や島田さんが手伝ってくれた。みあが僕の背中を押してくれた」

「私も一緒よ。代表として周りに流されてFクラスに試召戦争を挑んで負けた時、Cクラスと戦うとは決めただけど不安でたまらなかつたわ。部活とかの緊張感とは全然違うしね。そんな時に薫が手伝ってくれた。米倉は面倒だつて言いながらもクラスのために動いてくれた。水鏡さんや加賀谷さんもクラスのみんなもね」

明久と宏美は実体験を蓮に話すが、

「……でも」

「代表、俺、眞崎と一緒にこっちに残るわ」

「ちょ、ちよつと、八幡くん！？いきなり何を言い出すの？あなたがこっちにいる理由も話したでしょ！？」

蓮はそれでも不安のようで目を伏せたままであり、そんな蓮を見て公介は蓮と一緒にいると言い始め、友香は声をあげる。

「良いだろ。それに俺、根本見たいなタイプ嫌いだし、ぶつちやけ、顔を見たくない」

「……そう言う問題じゃないわよ」

公介はあまり深く考えていないようで恭二に会いたくないからだと
言つと友香は頭を押さえながらため息を吐くが、

「……八幡が友香の意見に逆らうなんて珍しい」

「そうですね」

いつもは友香の指示に何も考えずに頷く公介の言葉に恋華と恋が何
かあったのかと眉間にしわを寄せると、

「俺は難しい事は良くわからないから、代表の指示に従おうって思
つてただけどな。今はそんな時じゃなさそうだしな。それにクラ
スはまとめられなくても眞崎の指示くらいは伝えられる」

「……八幡くん」

「……仕方ないわね。恭二が何か言ったらこっちでどうにかするわ」

公介は笑いながら蓮の苦手な人にものを伝えるところを受け持つ
と言い、蓮は公介が助けてくれる事に安堵の息を漏らし、友香は納
得しきれていないようだが頷き、

「……みあがいなくて良かったな」

「……うん。いたら、絶対に眞崎くんと八幡くんの様子にテンシヨ
ンが上がるだろうからね」

明久と雄二は深秋が居た場合の事を考えて苦笑いを浮かべた後、

「それじゃあ、続けるぞ……」

雄二は残りの作戦に付いて話をして行く。

第111問

「……なんで、ウチがこんな事を」

「何で？ つて別に似合ってるし、可愛いんだから別に良いだろ」

美波は深秋に無理やりメイド服に着替えさせられて、割と自分から深秋に付き合っつて執事服に着替えている咲耶に愚痴をこぼすが咲耶は照れる事無くあっさりと美波のメイド服姿は可愛いと言い、

「あ、あんたいきなり何を言ってるのよ!？」

「何だ？ 別におかしな事は言っていないだろ」

美波は咲耶の言葉に顔を赤くして声をあげるが咲耶は本心で言っているため、美波が慌てる様子を見てクスクスと笑うと、

「……オネエサマニイロメヲツカウナブタヤロウ」

「別に色目を使ってるつもりはないぞ。それに似合ってるのは清水もだしな。やっぱり、可愛い娘は何を着ても似合うよな」

美春は咲耶が美波を口説いているように見えたようで背後に殺意をまといながら咲耶にフォークとナイフを投げつけるが咲耶は美春の攻撃になれているのか慌てる事無くフォークとナイフを交わしながら、うんうんと頷く。

「な、何を言ってるんですか!？ 豚野郎!!」

「何？ って言われてもな。事実だし、それより、清水、あんまりその格好で髪を振り乱して暴れるとみあに怒られるぞ。俺的には汗ばむ美少女はそそるが」

美春は咲耶の言葉に少し慌てながらも攻撃の手を緩める事はないが咲耶は美春が慌てる姿を見て楽しそうに笑いながらも落ち着かないと深秋に捕まるぞと言った時、

「はるちゃん、まだ、衣装合わせている途中だつて言ったよね？」

「……み、深秋？」

深秋が笑顔で美春の肩を叩き、美春は壊れたおもちゃのようにゆっくりと深秋の顔を見ると、

「もう。キレイに髪もセットしたのに直さないといけないよ。みきちちゃん」

「うん。清水さん、こっちにおいで」

「い、いやあああ！！！！？？？？」

美春は深秋と美紀に肩を捕まれて着替えのためにしきっている一画に引きずられて行き、美春の叫び声が響く。

「清水も諦めが悪いな」

「……大河が落ち着き過ぎなのよ」

咲耶は美春の声に苦笑いを浮かべると美波は咲耶がこの状況になれ

すぎているとため息を吐いた後、

「……だいたい、可愛いとか簡単に口に出すとか。恥ずかしくないの？」

「別に恥ずかしいって言う理由がわからないな」

美波は咲耶が軽い男に見えているのかジト目で咲耶を睨みつけるが咲耶は美波が何を言いたいのか理解できるようで苦笑いを浮かべ、

「だって、基が良いからって言ったってそれだけじゃないだろ。島田だって肌とか手入れもしてるだろ。努力して可愛くなるうとしてるんだ。人の努力は誉めてやらないといけないだろ。頑張る女の子ってのはそれだけで可愛いと思うぞ」

「あ、あなたは何を言ってるのよ!？」

咲耶は美波は美波なりに努力していると言い、その姿が可愛いと笑顔で言うと美波は『可愛い』とあまり言われないためか顔を真っ赤にして咲耶を怒鳴りつけて拳を振りまわすが、

「だから、暴れるな。早く終わらせたいなら、大人しくしている。そうじゃないと清水みたいに次も玩具になるぞ」

「……………」

咲耶はひょうひょうと美波の拳を交わすとポンポンと美波の頭を優しく叩き、深秋の相手をする時に下手に暴れるのは得策ではないと言つと美波は自分の行動を軽く交わす咲耶が何か気に入らないのか納得がいかなさそうに咲耶を見上げた時、

「さっくん、みなみちゃん、お待たせ さっくんが興奮するよう
なかわいいはるちゃんになったよ」

「みあ、勘違いするな。確かに島田も清水のコスプレ姿も興奮する
が俺はどんな服を着ているより、何もつけていない生まれのままの
姿が良い」

深秋は美春を納得がいくものに仕上げられたようでやりきった笑顔
で美春を連れてくるが咲耶は男前の表情で言い切り、

「……こいつは」

美波は先ほどまでの咲耶とは違う様子に頭を押さえてため息を吐く。

第111問（後書き）

どうもです。

活動報告にバカテス二次創作の思いつきの原案を書きました。今回はDクラスの女の子が主人公です。興味が湧いたら読んでみてください。

第112問

「……何しにきたの？」

「友香、怒るなよ」

EクラスとCクラスの試召戦争の翌日、情報操作により、FクラスとCクラスの間で秘密裏に行われたやり取りを知らないためか、Bクラス代表の『根本恭二』はEクラス設備にいる彼女である友香を訪ねるが友香は恭二やBクラスが試召戦争にたいした協力もしなかったため、負けたと言いたげに不機嫌そうな表情をすると恭二は苦笑いを浮かべてBクラスがCクラスに表だって協力しなかったのはルールに反するからだと弁明をしております、

「……なんか、見苦しいわね」

「そうだな。まあ、クズの性格の悪いって噂は最近、さらに加速しているからな。小山を逃したら、次はないだろうからな」

「……大河、なぜ、お主がここに一緒に隠れておるのじゃ？」

恭二の様子に美波はため息を吐くと咲耶は美波の意見に同意し、なぜかいる咲耶を見て秀吉はため息を吐くと、

「ん？ 気にするな。何となく、面白そうだからな。どうせ、今日も自習なんだ。教室にいるより面白いだろ」

「……そんな問題ではないのじゃ」

咲耶は教室で自習しているより、FクラスとBクラスの試召戦争を眺めている方が楽しいと言いつ切るが秀吉は咲耶が深秋と仲が良いのが面白くないのか少しだけ不機嫌そうに言うが、

「今回もサクが協力してくれるのは心強いね」

「うん。さっくんがいると楽しいよね」

当の想い人とその兄は咲耶がいる事を歓迎している。

「しかし、Cクラスの奴らは出席確認とかここに居て良いのか？」

「うん。何か、事前に福原先生に話したら、Cクラスの担任の先生にも話して置いてくれるって」

「へえ、福原先生、融通効くな」

咲耶はクラスが完全に分かれているため、出席確認はどうするんだと首を傾げると明久はすでに問題は解決していると言いつ、咲耶は感心したように頷くと、

「恭二、Fクラスは強敵見たいよ」

「何を言ってるんだ？ Fクラスに俺が負けるわけがないだろ」

「そう？ 恭二、そこまで言うなら、覚えておいてよ。昔、言ったわよね。私は頭が良い男が好きなの。Fクラスに負けたら別れるわよ」

友香は恭二と話していて何となく、彼のその浅さを感じ取って

たよつで試召戦争の結果次第で別れると言い、

「何を言ってるんだ!？」

「何？ 自信がないの？」

「そんなわけがあるか。Fクラス程度に負けるわけがないだろ」

恭二はFクラスを完全に見下しているよつで負ける事などあり得ないと言つ。

「……みあ、島田、抑えろ」

「……大河？」

「そつ言つ、さつくんが1番キレそつだよね」

深秋と美波は恭二の言葉に前に出て行きそつになるが咲耶は落ち着いた声で2人に落ち着くよつに言つがその様子はFクラスをバカにされた事への怒りが見え、美波は今まで見た事のない咲耶に戸惑い、深秋は自分達の仲間のために怒つてくれる咲耶の様子に少しだけ落ち着いたよつで苦笑いを浮かべると、

「……今は抑えて、あそこでFクラスを見下している人間を倒すのはあなた達の役目なんだから」

「……有栖さん、ありがとつ。みんな良い。有栖さんの言つとおり、根本くんを倒すのは僕達の役目だ。見下している僕らに負ければそれだけで充分な仕返しになる。だからこそ、ここで飛び出すわけにはいかないよ」

恋華は恭二の様子に殺気立ち始めているFクラスに落ち着くように言い、明久は恋華がクラスメート達を止めてくれた事に感謝を述べるとクラスメートに今は抑えろと言い、クラスメート達は明久の言葉に頷いた時、

「じゃあな。友香」

「ええ」

恭二は友香に別れを告げて教室を出て行き、

「……ばれてないわよね？」

「たぶん……代表、何か別れ話になってましたけど」

友香はため息を吐くと恋は友香と恭二の間の約束の事を聞く。

「そのままよ。何か、恭二と話をしたらイライラしてきて私も昨日まではあんな感じだったのかな？ ってね」

「……」

「別に無理に何かを言わなくても良いわよ。吉井くん、一先ず、私は自分の仕事はしたわよ。後はあなた達の仕事よ。私、恭二と別れたいから、絶対に負けないでよ」

友香は恋の言葉に苦笑いを浮かべると恋は次の言葉が出てこないようであり、友香は何も言わなくて良いと言うとこの教室にいるFクラスの全員への指揮権を持っている明久に負ける事は許さないと

い、

「えーと、負けられない理由が増えちゃったね」

「そうだね」

深秋と明久は苦笑いを浮かべると、

「何？ 吉井くんとみあは誰かのためになら頑張るタイプの人間だってEクラスの中林さんや水鏡さんから聞いたんだけど、私のためだと力にはならない？」

「……いや、充分だろ。明久、みあ」

咲耶は深秋と明久の肩を軽く叩き、

「そうだね。それにここで負けたら結局、畳とちゃぶ台だから、負けるわけにはいかないね」

「うん。畳はそれなりに魅力的なんだけど……ごめん。僕の感情になっちゃって悪いんだけど、僕はあのクズには意地でも負けたくない」

明久はここまでみんなで勝ちあがってきた事を無駄にしたくないと言つと深秋は恭二に嫌悪感を抱いているようであり、彼女の瞳にはいつもの彼女にはない感情が灯っており、

「……木下、島田。みあから目を逸らすなよ。このままだと1人で突っ走って自滅する」

「う、うむ。それはわかるのじゃが、なぜ、ワシらに言うのじゃ。そう言うのは明久に言うべきではないのか？」

咲耶は秀吉と美波の2人に深秋から目を逸らさないように言うと秀吉は明久ではなく、自分達に咲耶が声をかけた理由がわからないように首を傾げる。

「明久は全体を見ないといけないだろ。ただでさえ、負担が大きいんだ。なら、それをやるのはお前達だろ？」

「そうね。わかったわ」

咲耶は明久に負担をかけすぎると言うと美波は頷き、

「……始まる前に少しでも落ち着けば良いんだけどな」

「……大河、なぜ、ワシを見るのじゃ？」

咲耶は何かを企んだようでニヤリと笑いながら秀吉を見ると秀吉はいやな予感しかしないように数歩、後ろに下がるが、

「みあ、木下がCAになりたいらしいぞ」

「ホント」

「わ、ワシはそんな事は言っていないのじゃ!？」

咲耶は深秋に秀吉が女装したいと言うと深秋は直ぐに目を輝かせて秀吉に襲い掛かり、

「今日も平和だな」

「……そう思える。あんたが凄いわよ」

咲耶は深秋と秀吉の様子にくすりと笑うが美波はため息を吐く。

第113問

「……雄二、今日は負けないで」

「ああ、だいたい、負けるつもりはねえよ」

雄二はDランクの設備に向かう途中で翔子が雄二の制服をつかんでFクラスとBクラスの試召戦争に勝って欲しいと言うと雄二は当たり前の事を言うなどため息を吐くが、

「……お願い」

「翔子？ 何かあったのか？」

翔子の様子は雄二の激励だけではなさそうであり制服をつかむ力が緩む事はなく、雄二は翔子の様子に何か感じたように翔子に向かい聞くと、

「……雄二、お願い。みあに無理をさせないで」

「みあに？ ……翔子、みあは根本と何かあるのか？」

翔子は深秋の事を心配しているようで不安そうな表情をし、雄二は翔子の様子に深秋が以前にBクラス代表の『根本恭二』に敵意を込めた言葉を放っていた事を思い出して翔子に聞く。

「……みあは悪くない」

「何かあったんだな」

翔子は詳しくは語れないのか一言だけ言うと雄二は翔子は頑固なところもあるためかこれ以上聞けないと判断したようで頷くと、

「……わかった。そうならないように努力する」

「……お願い。みあは無理をするから、『みあは私の初めての友達』だから」

雄二は翔子に心配させないように優しくな笑みを見せると翔子はそれでも不安なのか雄二の顔を見上げ、

「ああ。任せておけ。俺を信じる」

「……うん。信じる」

雄二は乱暴に翔子の頭を撫でると翔子は雄二の言葉に小さく微笑み、

「それじゃあ、俺は行くからな。作戦の最後の打ち合わせもあるからな」

「……うん」

雄二は翔子にまだやる事があると言うとDランクの設備に入っていく。

(……翔子とみあ、2人に何があったんだ？ それと根本か？ ……みあが観察処分者になった事と何か関係があるのか？ それに翔子の『みあが初めての友達』って言うのは確かにあいつはガキの頃に友達って言えるような人間はいなかった。でも、翔子とみあがあ

ったのは文月だろ？ あの後には翔子にもそれなりに友達と言える人間はいたはずだ……待てよ。ガキの頃に1度だけ、友達ができたって嬉しそうにしていた事があったような……だとしても」

雄二は一先ず、適当に席に座ると先ほどの翔子の様子が気になるように眉間にしわを寄せながら翔子の言葉の意味を考えていると、

「坂本くん、おはようございます」

「……………おはよう」

「……………ああ、おはよう」

Dランクの設備に集まった瑞希と康太を中心としたFクラスの生徒が雄二の周りに扱って来て挨拶をするが雄二の反応は薄く、

「坂本くん、何かあったんですか？」

「……………いや、なあ、姫路、お前はみあが観察処分者になった原因を知っているか？」

瑞希は雄二に何かあったかと聞くと雄二は少し考えた後、瑞希に深秋が観察処分者になった原因を知っているかと聞くが、

「すみません。私は知らないんです。前にみあちゃんに聞いた事があるんですけど、何も言ってくれなくて、ただ……………みあちゃんの事ですから、お友達のためだと思います」

「……………そうだな。俺もそう思う。本来なら、明久に比べてみあは成績は悪くないんだ。と言うかFクラスではかなり上位のはずだ。そ

れなのにみあは観察処分者になった。その原因がBクラスの誰かにある気がするんだ」

瑞希は原因は知らないと言うがきつと友達のためだと言うと雄二は頷き、今日の試召戦争で何かわかるかも知れないと言う。

「……………もともと、負けるつもりはねえが、お前ら気合い入れろよ」

「……………当然」

雄二は翔子の言葉で少し迷いが出てきたようでそれを振り払うようにFクラスの生徒に気合いを入れると言うと康太は頷き、その言葉にFクラス生徒は続いて頷いた時、

「吉井妹が観察処分者になった理由？ お前ら知らないのか？」

「や、八幡くん、いきなり、乱入しないでください!？」

公介は深秋が観察処分者になった原因を知っているようで首を傾げると蓮は空気を呼んで欲しいと公介を止めようとする。

第113問（後書き）

どうも、作者と、

咲耶「咲耶です」

まさかの公介からの深秋が観察処分者になった理由が話される？

咲耶「……あいつは空気を読まないな」

まあ、そういうキャラクターですしね。と言う事で公介は深秋が観察処分者になった理由を知っている。

咲耶「去年のクラスメイトとさせてもらったわけだ」

はい。深秋と1年時のクラスメイトは

咲耶「俺、公介、代表、優子……それにクス」

となります。

深秋が観察処分者になった原因に口を閉ざす理由は翔子のため？

咲耶「どうだろうな」

さて、公介の口からはどんな言葉が出てくるんでしょうか？（悪笑）

第114問

「……八幡、お前、みあが觀察処分者になった理由を知っているのか？ どうしてだ？」

「俺は去年、同じクラスだったしな……それで、知りたいのか？」

雄二は公介に深秋が觀察処分者になった理由を知っているのかと聞くと公介は去年、深秋と同じクラスだったと言い、雄二に聞き返すと、

「……ああ、教え……」

「……… 必要ない」

雄二は聞く事を少し悩んだ後、公介に深秋が觀察処分者になった理由を教えて欲しいと言いかけた時、康太が雄二の言葉を静止する。

「ム、ムツツリーニ？」

「……… みあが話さない事を他の人間から聞くのはフェアじゃない」

「ああ、みあちゃんが言わないなら、俺達は聞く気はない」

雄二は康太が割って入ってきた事に首を傾げると康太は聞く気はないと言つと亮は康太の言葉に頷き、クラスメート達も同意見のようであり、

「まあ、俺も言う気はないけどな」

「八幡くん」

公介はFクラスの生徒達の言葉にくすりと笑うと蓮は公介の様子にため息を吐くが、

「……坂本、俺も詳しくは言えない。俺は当事者じゃないから咲耶や木下、霧島ほど詳しくないし……ただ、吉井妹は悪くないし、間違ってもいない。吉井妹が観察処分者になった理由を知っている人間は同じ事を言う……あのクズを抜かしてな。あのクズが何を言おうとそれは変わらない」

「ああ……そうだな。みあは絶対に間違っていない」

公介は不意に真面目な表情をして深秋は間違っていないと言うと雄二は大きく頷き、

「……坂本、意地でも負けるな。どんなにかっこ悪い勝ち方でも今日だけは勝て、俺は負ける事が恥だとは思わない。成長するのに負けを知る事は必要な事だと思う。だけど、絶対に負けちゃいけない戦いだってあるはずだ。お前らにとって今日の試召戦争がそれだ」

「当然だ」

公介は雄二の返事に満足そうに笑い、雄二の肩を叩き叱咤をすると雄二は公介の言葉に真剣な表情をし、

「はい。絶対に負けません。みあちゃんはきつと大切なもののために戦ったんです。それなら、みあちゃんのために私達が負けるわけ

にはいきません」

瑞希は小さな声だがしつかりとした口調で気合いを入れ直す。

「よし、それじゃあ、作戦の確認をするぞ。姫路、ムツツリー二。今日の要はお前達だ。保険体育での戦闘になる。2人と400点を超えているが腕輪の使用は抑えろ」

「坂本、腕輪を使って貰った方が良くないか？」

「いえ、僕も坂本くんの言う通り、腕輪の使用は抑えた方が良いでしょう。腕輪の能力を使うと点数の消費が激しいとも聞きますから、戦況を引き延ばすなら高得点者に長時間、抑えて貰った方が良いでしょう」

雄二は最終確認を始め出すと雄二の高得点者である瑞希と康太への腕輪を使うなと言う指示に亮が首を傾げるが蓮は雄二の考えが理解出来るようで雄二の指示の補足をする、

「はい」

「……………了解」

瑞希と康太は大きく頷き、

「他のメンバーは2人の援護だ。須川、全体を見て回復試験の指示を出せ。Bクラスだってバカじゃない。保険体育で教室に入ってきたら来れないとなるとどこかで教科を変えてくるはずだ。姫路は対応できるが康太には無理だ。そこで康太が負けると戦線が維持できなくなる可能性もある。良いか。八幡も言っていたが今日だけは負けるわ

けにはいかねえ!!」

「当然だ。Bクラスにみあちゃんを傷つけた奴がいるなら、俺達が負けるわけに行くか!!」

『良いか。我ら『みあちゃんファンクラブ』にはみあちゃんの敵をぶち殺す義務がある!!』

雄二はFクラスの生徒に向かい叫ぶように言うと亮は大きく頷き、亮を中心にクラスメート達はおかしな覆面をかぶりだし物騒な言葉が上がり始めると、

「吉井妹のファンクラブ、おかしいのも増えてきたな」

「……八幡、みあにファンクラブってあったのか？」

「ああ、去年の夏くらいからあったはずだぞ。なあ、土屋」

「……………みあの写真集の売り上げは好調」

Cクラスの生徒数人までおかしな覆面をかぶり始め、公介は苦笑いを浮かべながら深秋にファンクラブがあると言うと雄二は苦笑いを浮かべる。

第115問

「……まったく、Fクラス如きが俺に逆らうなよ」

『代表、Fクラスの姫路、土屋が堅くて攻めきれません』

FクラスとBクラスの試召戦争が始まり、しばらくすると恭二は瑞希と康太が守備している雄二を攻め切れる事が出来ずに舌打ちをしていると、

『だ、代表、新手がきました。中央階段がFクラスに占拠されました！！ そのせいで新しく教科が選べません！！』

「何？ ど、どう言う事だ！？　なんで、Fクラスが中央階段に出てくるんだ！！」

『Eクラスが廊下に出てきてバリケードを作りだしました廊下の半分が封鎖されて行きます。』

明久が率いるEランクの設備が出陣して中央階段を占拠したと言う情報が届けられ、それ以外にもEクラスがFクラスを援護するため廊下を生徒が通れないようにバリケードを積み上げて行くなど恭二は伝えられた情報に机から立ち上がり、

「バ、バカどもが俺に逆らいやがって」

『代表、Aクラスまで出てきて中央階段側にバリケードを作り始めました』

「Aクラスまでだと!? 大河、木下、霧島……」

恭二はBクラスを囲むように動き出す他のクラスに去年のクラスメートである咲耶、優子、翔子の顔を思い出して舌打ちをする。

「木下さん、霧島さん、どうしたの?」

「何? あたし達が協力したらおかしい?」

「……友達を助けるのは当然の事、みあが私を助けてくれたように今日は私がみあを助ける」

明久は職員室に向かい教師を呼びに行っているBクラスの殲滅を深秋、秀吉、美波の3人にEランク側に集めていたFクラスの生徒の半分を預けて中央階段を占拠すると、優子と翔子が先頭になり、Aクラスを指揮してバリケードを作り始めた事に驚きの声をあげると優子は少し不機嫌そうな表情をすると翔子は小さく笑みを浮かべると、

「まったく、優子は素直じゃないな。協力したいなら最初から言えば良いだろ。自分だけじゃ恥ずかしいからって他の奴らまで巻き込んで」

「咲耶君、余計な事を言わないでくれる?」

咲耶は優子の様子に苦笑いを浮かべ、優子は咲耶を睨みつけるが、

「まあ、そろそろ、あのクズと決着を付けとかないといけないからな。そうなるやっぱりこのメンバーは必要だろ。なあ、代表」

「……うん」

咲耶は優子と翔子が出てきた事に口元を優しく緩ませると翔子は小さく拳を握り、

「……まったく、吉井くん、悪いんだけど、今日はあたしも協力させて貰うわ。あのクズに思い知らせてやらないといけない事があるのよ」

「あのだ。木下さんも霧島さんもどうして？」

「あれ？ 吉井くん、ぼくもいるんだけどな」

優子は咲耶と翔子の様子にため息を吐きながらも彼女にも何か感情で走らないといけない事があるようで目つきを鋭くすると明久はAクラスがFクラスに協力してくれる意味がわからないように戸惑ったような表情をした時、愛子が明久の様子を見て楽しそうな声をかけ、

「工藤さんまで」

「うん。ぼくは代表達がどうしてそこまで吉井さんの味方をするかわからないけど、ぼく達も吉井さんが好きだからね。ねえ、久保くん」

「まったく、だからと言って自習を潰してまでここまでの事をする必要があるのかい？」

明久は驚きの声をあげると愛子は深秋の事の味方をしたいと言うと『久保利光』にも同意を求め、利光はやり方に問題はないのかと言

いたげにため息を吐く。

第116問

「久保くんまで？ ……今更だけど、みあの交友関係がわからない」

「まあ、気にするな。それだけ、みあが仲間を大切にしてきた証拠だ」

明久はAクラスの多くの人間が深秋のために動いてくれていると言う事実には苦笑いを浮かべると咲耶はそれは今までの深秋がしてきた事だと言い、

「……そうね。まあ、みあの行動もあるけど、クズの行動の結果でもあるんじゃない？」

「あのさ。みあも咲耶も木下さんもどうして、根本くんをクズ扱いするの？ 確かに評判は良くないけどさ」

優子は深秋への好意とBクラス代表の『根本恭二』への敵意が原因だと言うと明久は深秋達が恭二を『クズ』扱いする理由がわからないため首を傾げるが、

「……吉井は気にしなくて良い。Aクラス代表の霧島翔子です。戦意のない人間は降参してそうすれば補習室送りにはならない」

「ああ。その代わりに、試召戦争まではAクラスの窓際で大人しくして貰うけどな」

翔子は明久に気にする事はないと言うと咲耶とともに完全に囲まれて逃げ場がなくなっているBクラス生徒に降服勧告をすると恭二は

クラスメイト達から信用を集められていないようで少しずつだが降服勧告を受け入れて退場して行く生徒も出てくるが、

「……押しきれないね」

「流石にFクラス対Bクラスじゃ分が悪いわよ。点数を見てると2倍以上点数に差があるし」

それでもBクラスの生徒達はFクラス生徒とは成績が明らかに違うため、Bクラスを押し切る事は出来ずに戦況は膠着状態に陥る。

「しかし、明久、ずいぶんと指揮になれてるな」

「そうかな？ まあ、指揮ばかりしてるしさ。それにみあや姫路さん、みんなが頑張ってるんだ。僕は僕のやれる事をしなきゃ」

咲耶はFクラスから戦死者を出さずに指揮を執る明久の様子に感心したように言っていると明久は深秋や瑞希達クラスメイトが頑張っていると言った時、

「……………明久」

「ムツツリーニ？ あっちは良いの？」

康太が明久側に現れて声をかけると明久は康太がここにきた事で雄二側がどうなっているかと聞き、

「……………あちら側のBクラスのドアは姫路が占拠したドアを中心に戦闘を展開している。俺は次の段階に移る」

「うん。ムツツリー二、みあ達のフォロー任せるよ」

康太は瑞希が頑張ってくれているため、自分が動ける状況になった
と言い、明久は康太にここにいない深秋の事を任せると言うと、

「……………任せられた。明久も上手くやれ」

「うん」

康太は明久の前に拳を突き出すと明久は康太の拳に自分の拳を合わせ、

「行くよ。ここが執念場だ。一気に攻めるよ!!」

「明久、正念場な」

明久はFクラスに気合いを入れるように言うが咲耶に言葉の間違いを指摘され、

「……………正念場だ。一気に攻めるよ!!」

「……………吉井くん、勉強を教えている立場から言えば、それくらいわか
かってよね」

明久は訂正して言い直すと優子は明久の間違いにため息を吐くがF
クラスは明久が何を間違えたかわからないようでも誰にも気にする事な
く、Bクラスを教室に押し込んで行き、

「えーと、誰も吉井くんの間違いに気付かなかったみたいだね」

「そうだな」

愛子はFクラスの様子に苦笑いを浮かべると咲耶は笑う。

第116問（後書き）

どうも作者です。

今日は報告を以前書かせていただいた特別問題を『繋ぐ絆と境界破壊』と言う題名で再投稿します。すべて更新したらこの特別問題を削除します。

第117問

(……大河は何となく、今日も手伝ってくれそうだったが、まさか、秀吉の姉貴やAクラス連中に……翔子まで？ まあ、翔子の今朝の反応に大河、秀吉の姉貴が同じクラスにいる時点で翔子も動く事は考えられたが……けど、Bクラスも自分達の設備が落ちるのにも関わらず、離反する人間までいるのかよ。確かに根本はいけすかねえ奴だけど、ここまでの事が起きるのか？)

雄二は当初の予定であったEクラスの廊下封鎖はまだしもAクラスの多くが廊下を封鎖し、Bクラスの数名が設備がダウンする事も気にする事なく離反をしている事に何か起きるのではないかと眉間にしわを寄せていると、

「坂本、そんなに気を張り詰めるな。張り詰め過ぎると仲間も怪しく思えてきちまうぞ」

「……八幡か」

公介は雄二の様子におかしな事を考えすぎると言う雄二は眉間にしわを寄せたまま返事をする。

「吉井妹とクズの確執がそんなに気になるか？」

「……まあな。俺達の試召戦争がここまで大きくなっているのはそこに何かある気がしてならないからな」

「確かにな……坂本、例え話だ。お前はクラスにいじめられてる奴がいるとしてそいつをいじめている奴と友達じゃないからいじめら

れている奴を無視している奴だとどっちが罪が重いと思う？」

公介は雄二の様子に深秋と恭二の間に何が起きたか聞きたいかともう1度聞くと雄二はいつの間にも2学年全部を巻き込んでしまっている試召戦争の大元になるものが深秋と恭二にあると言っていると公介は公介は真つ直ぐと雄二の目を見て1つの質問をすると、

「あ？　なんだ。よく言う無視している奴も同罪だって言いたいのか？」

「どうかな？　ただ、いじめられている奴がいなくなってしまった時に1番、心を痛めるのはどんな人間かはわかるか？」

「……」

雄二は公介の質問の意味がわからないため、首を傾げながら答えると公介は続けて新たな質問で返し、雄二はこの質問の先に深秋と恭二のなかにある事を察して少し考えるような素振りをした後、

「……そのいじめられていた人間がいじめられる前に友人だった人間、またはいじめに本当に気づかず友達面していた人間ってところだな」

「……後はいじめに気づいて必死にその人間を守ろうとしていた人間」

「……いじめていたのが根本、それを必死に守ろうとしていたのがみあか」

雄二は公介の言葉から1つの答えしか出てこないため、苦虫をかみ

つぶしたような表情をする。

「……まあ、話はそんな簡単じゃないんだけどな。だいたい、咲耶、霧島、木下がいるのにそんな簡単で済むと思うか？」

「……思わないな。付き合いは短いが大河もみあや明久と同類の間だ。それに翔子は無視や省かれる奴の気持ちが誰よりもわかるはずだ」

公介は深秋以外にも深秋と行動を共にした人間がいると言うと雄二は最近知り合った咲耶や小さい頃に友人のいなかった翔子は深秋とともに行動すると言うと、

「……ここからは独り言だ。お前は何も聞いていない。俺もお前には何も言っていない。問題ないな？」

「……ああ、俺は何も聞いていない。俺はFクラスをBクラスに勝たせる作戦を考えるのに必死だからな」

公介は雄二から視線をそらしながら言う。雄二は公介が言おうとする事を全て理解して公介を見ずに言う。

第118問

「……去年の俺達のクラスに1人の少年がいた。体も小さく自分の言いたい事も言えないような奴だった。性格の歪んだ奴らから見れば直ぐに力毛にしたいくなるような奴だった。クラスの奴らだって最初は気にかけるが話しても反応はないとなると途中から気にしなくなって行く。気にしないから他の奴らから見ればそいつは見えないんだ」

「……」

公介は口を開くと雄二は目をつぶり、公介の言葉に集中し始める。

「その少年に気づくのはそいつを食い物にする人間、そして、それでも気にかける人間の2種類。対立は表には出てこないが当然、周りの目からは明らかにわかる……そして、その少年を食い物にした奴は自分の思い通りにならない事にイラつき始めると次の行動は簡単だ」

「……暴力か？ くだらねえ」

「……それも咲耶みたいない人間が居れば本当にスキを見てしかできないからな。それにここまで辺までくれば今まで少年を見ていなかった人間にも少年は目に映る」

公介の言葉に雄二は恭二のやった事にイラついてきたようで舌打ちをすると公介は雄二の舌打ちに反応する事なく淡々と話して行くが、

「……それまで人から注目を浴びる事もなく、いじめられる事を半

ばあきらめていた少年には自分が注目される事に耐え切れなかった」

「ちよつと待て!？ それだとみあが……」

雄二は深秋が少年を追い込んだのと変わらないと言おうとすると公介は雄二の前に手を出し、彼の言葉を静止すると、

「……どちらが追い込んだかなんて今となつてはわからない。だけど、いじめる相手がいなくなった奴らは次を探す。その標的は自分達を邪魔した人間」

「……」

公介の言葉に雄二は怒りをあらわにして拳を強く握り締める。

「……だけど、話はここじゃ終わらない。吉井妹は『自分の事ならどんな事があつても耐えきる人間』。いじめる人間にしてはこれ以上につまらない人間はいない。そして、吉井妹が最も嫌がる事は『彼女の近い人間を傷つける事』、彼女に近くその標的にもつともなりやすい人間」

「……翔子か？」

雄二が自分一人にこの話をしようとした理由に気づき、自分が昔と同じように翔子の変化に気づいてやれていなかった事に唇を噛みしめると雄二の口の中には鉄くさい味が広がって行き、強く握り締めていた拳には掌に爪が刺さっているのか赤い液体が滲みだし、

「……霧島も周りに心配をかけないようにはしていたが、その変化に吉井妹は直ぐに気づいた。抑えきれなかったんだろうな。教室で

クラスメートも教師もいるなかでクズの鼻っ柱をぶん殴った。クラスメートは今までの経緯も知っているしな。吉井妹を庇おうとしたが教師の前つてのが不味かったし、当然、クズとその取り巻きは吉井妹を悪者扱いにした。退学って話も上がりかけたが、吉井妹は別にお前や兄貴と違って生活態度には問題はないから、鉄人や福原先生、高橋先生や多くの教師が退学は重すぎると庇ってくれてな」

「……それでみあは観察処分者か。根本の野郎。ふざけやがって」

雄二は深秋が観察処分者になったわけを知り、恭二への怒りが隠せないようだが、

「……抑えろ。俺やお前は当事者じゃない」

「落ち着けるか!!」

公介は落ち着いた声で言うとそんな公介の態度がさらに雄二の怒りを煽るが、

「……今まで、吉井妹や霧島がお前や兄貴に知られないようにしていたのは何のためだ？ それを考えろ」

「……なら、八幡、お前は何で、俺にこんな話をした？」

「……知ってるか。俺は空気を読まないんだ」

公介は雄二に落ち着けと言うと雄二は公介が自分に真実を語った理由がわからないと言うと公介はくすりと笑い、

「……吉井妹、咲耶、霧島、木下は感情が先走っている可能性があるあ

る。Fクラスで何とかそれを割り切れるのはお前だけだろ」

「……ちっ」

雄二の肩を叩き、決着がついた時の事を任せると言うつと自分の席に戻って行き、雄二は公介の言いたい事もわかるが直ぐには冷静になりきれないよう舌打ちをした後、乱暴に頭をかく。

第119問

「……バカが調子に乗りやがって」

『おい。根本、どうするつもりだ!! 完全に囲まれてるぞ。教室で回復試験を受けれるとは言え……』

「うるさい。そんな事はわかっている!!」

恭二はF、E、Aの連合が成立している事に舌打ちをすると恭二の取り巻きの1人が逃げ場のない状況ではBクラスの戦意が上がらないため、このままではじり貧だと言おうとすると恭二はかなりイラついているようで取り巻き達を怒鳴りつける。

「……吉井深秋、あいつはいつも俺の邪魔をしゃがる……ちっ、このままじゃ不味いな。友香に連絡をしてバリケードを破壊させるか? 後はFクラスに恨みがあるDクラスに同盟を出すか、3カ月後にDクラスの設備に戻るように策を考えてやると言えばそうだとしたら、ここをどうやって抜ける?……」

『根本、早く決める。このままじゃ、押し切られ!?!』

恭二はぶつぶつとこの戦況をひっくり返す事を考えているが時間は止まってくれる事はなく、

「よう。クズ」

「大河」

Fクラスがタイミングを見計らったかのように2個所のドアからなだれ込んできて、咲耶は恭二を睨みつけて言うと恭二は咲耶を睨み返し、

「お前、何なんだよ！！ AクラスがFなんかクズに関わるんじゃないよ！！」

「……何度も言わせんじゃねえ。クズつてのはお前みたいに人を見下す奴に使う言葉なんだよ。まあ、お前もそこまでバカにしている人間に負ければ少しは反省するか？」

恭二は咲耶を怒鳴りつけると咲耶は嫌悪感を表情に出してFクラスをバカにするなど言うが、

「は？ 俺がバカ相手に負けるわけがないだろ。お前や霧島、木下は俺の首を取る事が出来ねえんだからな！！ バカどもで俺の首を取れるのは姫路だけ、他に2人、教科指定だけすれば勝てるかも知れないけどな。相手の土俵で戦うようなバカな事はしない。お前ら、姫路を囲め！！」

恭二は所詮、Fクラスでは自分に勝つ事はできないと叫び、残っているBクラスの生徒に瑞希を囲むように指示を出す。

「姫路さん！？」

「は、はい」

Bクラスの生徒達は恭二の指示通り点数を削られて腕輪の能力が使えなくなっている瑞希1人を囲み瑞希の動きを封じると

「行くぞ。結局は代表の首を取った方が勝ちなんだ。俺に勝てるカードは限られているんだ」

「姫路さん!!」

「吉井くん、戻ってください。坂本くんを守ってください」

恭二は親衛隊を引きつれて瑞希の横をすり抜けると雄二のいるドラックの設備に向かいだし、明久は瑞希を助けようと彼女に駆け寄ろうとするが瑞希はここは自分に任せて欲しい、

「でも」

「行ってください。私達には負けられない理由があるんです!!」

「わ、わかったよ」

明久は瑞希を見捨てられないようだが瑞希は深秋と恭二の因縁を終わらせてあげたいようである。明久は恭二を倒して欲しいと言い、明久は瑞希の決意を秘めた瞳に押されて頷き、

「吉井、良いところを任せるんだ。決めて来い。俺達も直ぐに追いかける」

「うん。須川くん、任せるよ」

亮がこの教室の指示は受け持つと言い、明久は恭二を追いかけて行く。

第120問

「坂本、終わりだな。お前らは回復試験で忙しいみたいだぜ。兵隊は切れたか？ それとも切り札があると見栄でも張ってみるか？」

「どうかな？ 知ってるか？ 切り札つてのは先に見せると負けなんだぜ」

「吉井深秋か？ あのバカが俺に届くわけねえだろ。俺が家庭科なんかで勝負を受けるわけねえだろ。それくらい考えろよ」

恭二はバリケードのところに抑えを残し、Dランクの設備に乱入するとCクラスの生徒が回復試験を受けている姿を見て雄二以外でこの場で戦える人間がないと判断したようでニヤリと笑うが雄二は公介から聞いた恭二の行いに怒りを抑えきれないようだが何とか冷静に見せようとしていると恭二は雄二の言う切り札が深秋の事だと思っっているようで雄二をバカにするが、

「……いるんだよ。事実を知らなくてもずっと妹を支えていた心配性なバカが、バカは厄介だぜ。1度決めたら何でも動かないからな」

「は？」

「吉井明久がBクラス親衛隊に日本史勝負を挑む。試験召喚！！」
サモン

雄二はニヤリと口元を緩ませ、恭二は雄二をバカにするように鼻で笑った時、バリケードの抑えにいたBクラス生徒と恭二の後ろで雄二を笑っていた親衛隊を巻き込んで明久が日本史のフィールドを展

開し、

「な、何で、Fクラスにこんな人間が!?!」

「ちよ、ちよと待てよ。こいつ、吉井兄妹の兄貴だろ。兄妹そろつて観察処分者のくせになんでこんなに点数が高いんだよ!?!」

「君達はFクラスだってバカにするけど僕達だって努力はしてるんだ。僕の勉強に付き合ってくれた原口くんや木下さんに顔向けできない点数を取るわけにはいかないよ」

明久の日本史の点数は300点近くまで上昇しており、観察処分者としての利点である召喚獣の操作技術でBクラスの生徒を倒すと、

「雄二!!!」

「おせえよ。バカ久。さつさと人の事を見下してくれてる奴らを蹴散らせよ。今のお前ならできるだろ」

「言われなくてもわかってるさ。多重^{ダブル}召喚!!!」

Dランクの設備のドアを勢いよく開けた明久を見て雄二はBクラス親衛隊を蹴散らせと言うと明久は学園長から渡されている白金の腕輪を発動させ、明久の召喚獣は2体に別れるとBクラス親衛隊の召喚獣を翻弄して行く。

「は? たかがバカ1人が増えただけだろ。俺がお前を倒せばそこで終わりだ」

「そうかな? 知ってるか。バカは感染するんだぜ。特に自分のた

めじゃなく、仲間の^{ひと}ために動けるバカが周りにいるとな。俺達にはそんなバカが2人もいるからな。感染はさらに早く拡大するんだ。なあ、八幡、眞崎」

「ま、そう言う事だ」

「はい」

恭二は1人で親衛隊の相手を始めた明久を見てそれでも戦況は変わらないと鼻で笑うが雄二はニヤリと笑いながら窓を開けると蓮と公介を中心としたCクラスの生徒が雄二に続いて窓を開け、

「ただいま」

「まったく、どうしてウチがこんなふう^にに2階まで上がってこないといけないのよ。スカートなのよ」

「……………これで役者はそろった」

「うむ。根本、観念するのじゃ」

「よ、吉井深秋!？」

「ここで切り札を使わせて貰うぜ。^{アウェイクン}起動」

深秋、康太、秀吉、美波が窓から教室に入ってくると恭二は驚きの声を上げた時、雄二はポケットから白金の腕輪を取り出して腕につけると腕輪の能力を使い召喚フィールドを形成させ、召喚フィールドには『現代文』と表示されており、

「Fクラス吉井深秋」

「同じく木下秀吉」

「島田美波」

「……………土屋康太」

「……」Bクラス代表根本恭二に現代文勝負を挑む。試獣召喚サモン!!」

「」

「言っただろ。切り札ってのは最後に使うから切り札なんだよ」

4人は恭二に向かい試召戦争を仕掛けると雄二は恭二を冷めた目で見て言うと、

「くっ!? 根本恭二、受ける!! 試獣召喚サモン!!」

恭二は苦虫をかみつぶした表情で召喚獣を呼び出すが、深秋の現代文は恭二と同程度であり、秀吉は優子に美波は咲耶に勉強を見ていて貰っていたためかDクラス程度には上昇が見られるため、4対1の状況では流石に支えきる事は出来ず、

「お前がバカにしてる奴らも充分にやるだろ？」

『終結!!』

雄二は4人に囲まれている恭二を見てくすりと笑った時に深秋の召喚獣の矢が深々と恭二の召喚獣の胸に突き刺さり、召喚戦争終結の音が響く。

第120問（後書き）

どうも、作者と、

深秋「主人公です。そして、久しぶりの出番です」

……いわないでください。

深秋「いや　ぼくは主人公なのに出演が少ないことに徹底的に抗議するんだ」

いや、今回は深秋と恭二の確執を書きたかったわけですし、この話でみあが自分で話すのはおかしいですからね。

深秋「それこそだよ。ぼくの秘密をばらすなんてひどいよ」

それは公介が空気を読まなかった結果なので俺のせいじゃないです。

深秋「言い切った!?　書いてる人間なのに言い切った!?!」

まあ、決着はつきましたが深秋の過去を聞いた雄二はどんな対応をするんでしょうか？

そして……

深秋「ぼくは大丈夫だよ。みんなが支えてくれたから強くなれるよ」

第121問

「何で、俺がこんなバカどもに……」

「決まってるだろ。他人を見下した結果だ」

恭二は自分がバカと見下していたFクラスに負けた事が信じられな
いように膝を付くと雄二は恭二を冷めた目で見ると、

「とりあえず、勝ったな」

「当然」

雄二はやはり代表自ら囿になるのに危険は感じていたようで少し安
心したようで息を漏らしながら右手をあげると明久は自分の右手で
雄二の手を叩くが、

「次はこんな綱渡り止めてよね。召喚フィールドがみあの得意な現
代文だったから良かったものの」

「確かに他の教科だと勝てたかわからんのじゃ」

美波と秀吉は雄二の持っている白金の腕輪のフィールド構築はラン
ダムのため、ひやひやしていたとため息を吐く。

「それなんだけどな。一応、あたりはつけてたぜ。だから、お前ら
4人なんだ」

「どつ言う事じゃ？」

雄二は苦笑いを浮かべながら、深秋、秀吉、康太、美波を選んだのには意味があると言うと秀吉は首を傾げるが、

「ランダムとは言われてたけど、本当に規則性がないかって話しになつてな。米倉と加賀谷に手伝って貰って調べたんだよ。結局は確率の問題だしな。次にくる可能性が高い確率は『現代文』、『数学』、『保険体育』、『家庭科』の順だったわけだ」

「……ずいぶんと大変な事をしたのね」

雄二は自分でやっておきながらも大変だったと言いたげに言うと美波は苦笑いを浮かべた時、

「……みあ」

「みあ、おめでとう」

試召戦争が終結したため、Fクラスの生徒達と翔子、優子、咲耶が教室に入ってくるなり、翔子は深秋に抱きつき優子は深秋と翔子の様子に苦笑いを浮かべながら、深秋に勝利祝いを言う姿を恭二は忌々しいものを見るように視線を送る。

「……それじゃあ、戦後処理に移ろうか？ 負け組代表様」

「くっ……」

雄二は深秋の恭二の間にあつた確執を知るメンバーが集まったのを見て戦後処理に移ると言うとき恭二は苦虫をかみつぶしたような表情をするが、

「……一先ずは俺はお前に言うような事はねえよ。設備交換をしてくれれば良い」

「……ああ。この俺がDランクの設備なんてな。それもこんなクズどもに負けて」

雄二は恭二にあまり関わり合いたくないようで恭二に向かい設備交換だけすれば良いと言うとFクラスとCクラスの間で同盟が結ばれている事を知らない恭二が舌打ちをすると、

「恭二、あなたが行くのはEクラスの設備よ」

「友香？ 何を言ってるんだ？」

友香、恋、恋華の3人を先頭にCクラスの生徒が自分達の教室に戻ってきて言うが恭二は意味がわからないため首を傾げる。

「悪いな。根本、ここは俺達Cクラスの設備なんだ」

「は？ 八幡、お前は何をわけのわからない事を言ってる!? ゆ、友香、俺を裏切ったのか？」

公介は恭二に向かいこの教室はCクラスのものだと言うと恭二は1つの答えが浮かんだようで友香に向かい叫ぶと、

「悪いんだけど、名前で呼ばないでくれる。根本くん」

「ど、どう言う事だ!？」

「そのままよ。私達はEクラスに負けた後、Fクラスと試召戦争を行って負けたの。そして設備交換をした。簡単でしょ」

友香は朝に言った通り、今は恭二は彼氏じゃないと言う意味を込めながらこの教室がCクラスのものだと言う説明をし、

「そう言う事だ」

「他人を見下してきた奴の末路は哀れだね」

雄二と咲耶は事実を知り、顔を引きつらせている恭二を冷めた目で見て言う。

第122問

「まあ、と言う事で、クラス代表としては特にこれ以上言う事もないんだけどな……みあ、お前は何か言う事はあるか？」

「ボク？」

「……みあ」

雄二は眉間にしわを寄せながら、深秋に恭二に何か言ってる事はないかと言うと深秋は雄二が自分に声をかけた理由がわからないよ、うできよとんとすると翔子は深秋の制服をつかみ、

「……」

「そっか、ゆうじくんは知ってるんだ」

「……ああ」

公介は口には出さずに深秋に謝り、深秋は公介の態度に苦笑いを浮かべると雄二は小さく頷き、

「……別にボクはこれ以上、何も言う気はないよ。ここで追い打ちをかけるとボクは根本くんと変わらなくなるから、今日だってボクは……」

「……みあ」

深秋は恭二にこれ以上、言う事は何もないと言うと翔子は深秋の身

体をしっかりと抱きしめる。

「……良いんだな？」

「うん。ゆうちゃん、しょうこちゃん、さっくん、これがボクの出した答えだよ」

「……謝るんじゃないわよ。みあは何も間違っていないから」

雄二は深秋の言葉に眉間にしわを寄せたまま聞き返すと深秋は少しだけ困ったように笑って優子、翔子、咲耶に謝り、優子は深秋の頭を優しく撫でて優しい声で言つと、

「……そうか」

「ちょっと、雄二、何をする気!？」

雄二は深秋、翔子、優子の様子を見て優しげな笑みを浮かべた後、直ぐに表情を険しく戻して恭二の胸倉をつかみ、その様子に明久は驚きの声をあげるが、

「……お前が去年、何をしたか、みあがこれ以上、何も言わねえつて言うからな。俺に何か言う権利はないのかも知れない。ただどな今度、お前のくだらない自尊心で翔子やみあ、俺の大切な奴らを傷つけてみる。二度と陽の下を歩けないような顔にしてやる」

「……抑える」

雄二は恭二に向かい吐き捨てるように言つと咲耶は雄二の手を恭二からほどき、

「お前はFクラスの代表なんだ。熱くなるなよ。それにそれには先約ってのがあるんだ」

「……ちっ」

咲耶は雄二の前に恭二が何かした場合は先に自分が行動に移すと言
うと恭二は付き合っていていられないと言いたげに舌打ちをして教室を
出て行く。

「ね、ねえ。雄二もサクもどうしたの？」

「……そう言えば、こいつ知らないんだよな」

「そうだな」

明久は雄二と咲耶の様子に何があったのかと2人に駆け寄るが雄二
と咲耶は明久の顔を見た後、2人で顔を見合せて苦笑いを浮かべる
と、

「明久は気にするな」

「ああ。必要ねえよ」

「ちょ、ちょっと何それ!? 教えてよ!? 何か重要そうな話な
のに!?! 僕だけ仲間はずれ!?!」

明久には聞かせない方がいい話でもあるためか、教えてやらないと
言うが明久は2人の様子に教えて欲しいと言った時、

「アキ兄」

「ちよ、ちよつと、みあ!? 抱きつかないで!? 危ないから!」

深秋が明久に向かい飛び付いてきて明久は慌てながらも深秋を抱きとめる。

「アキ兄、ボクが試召戦争を決めたんだよ。誉めて、誉めて。ご褒美のキスは?」

「しないよ!? そんな事はしないからね!」

深秋は明久に甘えるがいつも通り、その甘え方はおかしく、

『……何で、吉井だけ』

『俺たちだってみあちゃんのために頑張ったのに……』

2人の様子を見ていたFクラスの生徒達は明久へ向けて殺気を放ちはじめ、

「ちよ、ちよつと、みんな、どうして僕に殺意を向けてるの?」

「それは吉井妹に愛されてる兄貴がムカつくんだろ」

「八幡くん、もう少し、言葉を選んだ方が」

明久は自分に向けられる殺意に後ずさりをはじめると公介は明久が狙われるのは当然だと言い切り、蓮は公介の言葉に苦笑いを浮かべ

た時、

『限界だ！！ 吉井を血祭りにあげる！！』

「な、なして！！！？？？」

Fクラスの生徒に限界がきたようで明久はFクラスの生徒達に追われて教室を出て行き、

「……………秀吉も行ったわね」

「……………ああ。あいつも毒されてきたな」

明久への殺意を向けている人間には秀吉も混じっており、優子は苦笑いを浮かべると雄二は少し意外だったようで苦笑いを浮かべながら頭をかく。

第122問（後書き）

どうも、作者です。

根本がひどい目に遭う事を期待していた皆さん申し訳ありません。深秋は何もしない事を選びました。恭二を悪者として糾弾するのは去年、恭二がやった事と変わらないから、キレイごとかもしれない。いえ、キレイごとです。でも、深秋と言うキャラクターを書くに決めた時、恭二を悪者とするに決めた時に2人のエピソードを決めた時にこの答えしか私には見つかりませんでした。

この後に恭二に変化があることを祈りつつ、Bクラス戦は終了です。

次はAクラス戦？ ……できるのか？

第123問

「……………」

FクラスとBクラスの試召戦争が終結し回復試験を終えて2日が過ぎた昼休みに雄二は先日から何か考える事があるようでAクラスに宣戦布告を仕掛けると言う話は出てこなく、

「……………ねえ。吉井、坂本おかしくない？ 回復試験も終わったのにAクラスに試召戦争を仕掛けるつもりはないのかしら？」

「うーん、わからないなあ。僕も雄二とAクラスとどう戦うか話をしたけど勝てる見込みもなくて、少しそれぞれで考えてみないかって話にはなってるんだけど」

美波は何かを考え込んでいる雄二の様子に違和感があるようで明久に声をかけると明久はAクラスに仕掛けて勝つ見込みもないように苦笑いを浮かべると、

「アキ兄、学食行こうよ。お昼食べられなくなっちゃうよ」

「う、うん。今行くよ。ゴメン、島田さん」

「明久、今日は弁当ではないのか？」

深秋が明久に学食に行こうと声をかけると明久は美波に謝り、席から立ち上がると秀吉はいつも弁当である深秋と明久が学食に行くと言ふ事に首を傾げる。

「うん。今日はみあが学食のカツ丼が食べたいって言って」

「カツ丼ですか？ …… みあちゃん、あの、カロリーは気にならないんですか？」

明久は苦笑いを浮かべながら深秋のリクエストに答えたと言うと瑞希は深秋が『カツ丼』と言う女性の敵なメニューを選んでいる事に真剣な表情をして言うが、

「うん。ボクは食べたい物を食べるから、お腹減ったから今日は150円増しの特盛りにして貰うんだ」

「……」

「……」

深秋はカロリーなど気にしないと言い切ると瑞希と美波は何か敗北感を受けたようだがっくりと膝を付き、

「アキ兄、いこ」

「うん。ちょっと、僕とみあは学食に行ってくるね」

「うむ」

明久は2人の様子に苦笑いを浮かべながらも教室を出ると深秋と一緒に学食に向かう。

「……混んでるね」

「うん。やっぱり、早起きするのは面倒だけど、お弁当の方が良いね」

2人は学食に到着すると群がっている生徒達を見て苦笑いを浮かべながら、やっぱり弁当を作ってきたら良かったと言っている。

「ん？ 吉井兄妹も学食か？」

「八幡くんも？」

「ああ。俺は基本的に学食だから」

公介も学食で昼食を食べるようので2人を見つけて声をかけ、

「それじゃあ。一緒に食べよ」

「そうだな」

深秋は公介を誘い、3人になり各自昼食を受け取って席を探すが、

「なかなか、席って空いてないね」

「まあ、3人つてなるとな……ん？ あそこ空いてるな」

席は見つからずに深秋が困ったように笑った時、公介が3人座れる席を見つけ、

「ホントだ。すみません。ここ、良いですか？ ……根本くん？」

「……ちっ」

明久が座って1人で座っている生徒に声をかけるとその生徒は先日、Fクラスが倒したBクラス代表の『根本恭二』であり、恭二は3人の顔を見て舌打ちをするが、

「空いてるんだ。ここで良いだろ」

「あっ！？ カ、カニクリームコロッケだ！！ な、何で、この学食にカニクリームコロッケはなかったはずなのに！！ 何で、きょうくんはカニクリームコロッケを食べてるの？ ずるいよ！！」

公介は微妙な空気を気にする事なく恭二の前に座り、深秋に至っては恭二の昼食を見て悔しそうに涙を流しており、

「……………根本くん、何か、ごめん」

「……………」

明久は深秋の様子に恭二に謝り、恭二は今の状況に意味がわからないように眉間にしわを寄せる。

第123問（後書き）

どうも、作者と

深秋「主人公です」

1人で昼食な恭二を空気を読まない男公介が襲撃をする。

そして、深秋の視線は『カニクリームコロッケ』に釘付け。（苦笑）

深秋「だって、大好きなんだよ」

そうですね。俺は個人的にあまり好きじゃないので意味がわかりません。

深秋「何で!?!」

だって、作るの面倒だし、それにお惣菜で買ってもあまりうまいと思っただことない。コロッケ買うならポテトコロッケが良い。北海道人だし、むしろポテトコロッケ以外はコロッケとして認めない。

深秋「作者さん、こんなところでボクに喧嘩を売るなんてね」

と言うか、読者さんはこの会話を望んでないでしょ。

深秋「関係ないよ!! ボクにとっては大問題なんだよ」

はいはい。

まあ、本題です。

今更ですが……深秋の相手、どうしよう？

深秋「ヒデくんじゃないの？」

うーん。考えてみたんですけど、深秋の秀吉へ向ける想いは『like』であって『LOVE』じゃない気がする。変化もなさそう。

深秋「……そういわれるとそんな気がするね」

だから、どうしようかな？と。

深秋「どうしよっか？」

オリキャラは他の小説でオリ×オリは否定したし……募集？

深秋「収集つかなくなるよ」

ですよね。（苦笑）

第124問

「きょうくん、どうしてなの!!　なんで、なんで、カニクリームコロッケを食べてるの!!」

「……日替わりのメニューだったんだよ。騒ぐなよ」

深秋は恭二が相手と言う事より、カニクリームコロッケの方が大事なようで恭二につかみかかるように言うと恭二はうっとうしそうに日替わりの定食のおかずだと言い、

「アキ兄、ボク行ってくるね!!」

「ちょ、ちょっと、みあ、カツ丼はどうするの!？」

「それはそれで食べる!!」

深秋はカツ丼をテーブルの上に置くと全力で券売機まで駆け出し、明久は慌てて深秋を止めるが深秋は止まる事なく、

「相変わらず、吉井妹は真っ直ぐだな」

「……ム力つくくらいにな」

公介は深秋の行動がいつも通りだと言い笑うと恭二は不機嫌そうに頷き、

「えーと、根本くん、相席して良いのかな?　誰か来るんじゃないの?」

「吉井も気にしないで座れよ。根本は現在、今までの悪行の件で省かれ中だし、取り巻きもこいつの権威が落ちてきたらすぐに見限つたし、誰も来ないから」

「……八幡」

「吉井、ここからいなくなると吉井妹が帰ってきた時に面倒だから座れよ。それに俺はもう動く気はない」

明久は恭二に空いてる席に誰か来る予定はないかと聞くが公介は恭二は今までやってきた仕打ちが帰ってきていると言いつつ、恭二は苦虫をかみつぶしたような表情するが公介は気にする事なく明久に座るように言い、明久は苦笑いを浮かべながら恭二の隣の席に座ると、

「今更だけど、何だ。この集まり？」

「お前が言っつな!!」

「八幡くんが言わないでよ!？」

公介は自分の前に座る明久と恭二の顔を交互に見て首を傾げると流石に2人からツッコミが入る。

「まあ、騒ぐな。飯を食え。昼休みは限られてるんだ」

「……」

しかし、公介は2人のツッコミを気にする事なく2人に飯を食うように言い何となく、明久と恭二の思いが重なった時、

「……日替わり売り切れた。ボクのカニクリームコロッケが」

日替わり定食はすでに売り切れていたようで肩を落とした深秋が戻ってきて席に座り、

「……じー」

「……」

恭二の皿に1つだけ残っているカニクリームコロッケを見つめており、恭二は微妙に居ずらそうにすると、

「きょうくん、きょうくん、そのカニクリームコロッケをボクのカツ井のカツ2切れと交換してください」

「断る」

「断られた!？」

深秋は恭二におかず交換を願うが恭二は直ぐに断り、深秋は断られると思っていなかったようで驚きの声をあげ、

「根本、空気読めよ」

「お前にだけは言われてたまるか!!!」

公介は深秋と恭二の様子にため息を混じりで空気を読めて言い、恭二は公介の反応に声をあげる。

「……取り」

「おい。吉井深秋!？」

恭二が公介相手に声を荒げている間に深秋は恭二のカニクリームコロッケをかすめ取り口に頬張ると恭二は驚きの声をあげるが、

「ふぁい。おかえひ。あーん」

「みあ、口に物を入れたまま、話さない。行儀悪いよ。と言っか何をしてるんだよ!？ ね、根本くん、ごめん」

深秋はカニクリームコロッケを頬張ったまま、自分の箸でカツを恭二の口元に運ぶと明久は深秋を注意してから恭二に謝ると、

「……せめて皿におけ」

恭二は何かいろいろと諦めたようであぐらをかきながら深秋にカツを皿の上に置くように言う。

第125問

「……疲れた」

「吉井くん、どうかしたんですか？」

深秋と明久は昼食を終えて教室に戻ると机に突っ伏し、瑞希は明久の様子に首を傾げると、

「うん。学食に行ったら、八幡くんと根本くんに会って一緒にお昼を食べただけど」

「根本じゃと」

明久は公介と恭二と一緒に昼食を食べたと言うと秀吉の目つきは鋭くなるが、

「……みあと八幡くんが自由すぎて、根本くんに迷惑をかけちゃったよ」

「……」

明久は深秋と恭二の確執を詳しく知らないためか大きく肩を落とすと言つと教室には微妙な空気が流れる。

「確かにみあちゃんと八幡くんだと騒がしくなりそうですね」

「……今まで、サクとみあが一緒に悪のりを始めた時が大変だと思つてただけど、みあと八幡くんは一緒のところには置いてちゃいけない」

い」

「何を言ってるんだ。ご希望なら、そこに俺も混じるぞ。後は玉野を追加とかな」

「……咲耶君、ふざけた事を言わないで、あんなの2度とごめんよ」

瑞希は明久の言葉に先ほどまでの学食の様子が思い浮かんだように苦笑いを浮かべると明久は深秋と公介は一緒にしてはいけないと言うつとタイミングよく咲耶と優子が教室に入ってきて、咲耶は楽しそうに笑うが優子は深秋、咲耶、公介に美紀が混じった混沌を経験した事があるように咲耶を睨みつけて言い、

「……木下さん、それは大変だったよね」

「……ええ」

明久はその時の様子を想像はしたくないが大変な事だけは理解出来るように苦笑いを浮かべながら言うつと優子は眉間にしわを寄せながら頷き、

「……姉上、その時はいったい何があったのじゃ？」

「……秀吉、世の中には興味を持たない方がいい事もあるのよ」

秀吉は優子の様子に何か感じたように恐る恐る聞くが優子は機嫌が悪そうに秀吉に答えた時、

「それはね。ゆうちゃんにこんな可愛い格好をして貰ったんだよ」

「い、いやああああ！！！！？？？？」

深秋と美紀に捕まったのかいろいろな衣装に着替えた優子の写真が教室前のスクリーンに映り、優子は恥ずかしさのあまり悲鳴を上げて教室を出て行き、

「ちょ、ちよつと、みあ、何をしてるの！？ 木下さんが出て行っちゃったよ！？」

「明久、気にするな。後半はわりとノリノリだったから、ほら、あれを見てみる」

「……そ、そのようじゃのう」

明久は深秋の行動に驚きの声をあげるが咲耶はその時の事を思い出しているようで楽しそうに笑うと秀吉は普段、見る事のない優子がコスプレ衣装に着替えてポーズまでつけている写真も混じっており顔を引きつらせる。

「それで、大河、あんたは木下さんで遊びにきたの？」

「いや、俺はこれを届けにな。優子は明久の勉強の進み具合を確認しに行くって言ってたから一緒にきたんだが……」

美波はため息を吐きながら咲耶に何しにきたんだと言うと咲耶は美波の日本語勉強用の資料を渡し、優子は明久に用事があったと言うと、

「……帰っちゃったね」

「そうですね」

明久と瑞希は苦笑いを浮かべて頷き、

「まあ、そのうち冷静になったら戻ってくるだろ。ほら、島田、昨日までの復習をするぞ」

「わかってるわよ」

咲耶は優子も時間が経てば戻ってくると言つと美波の隣の席に座り、美波の日本語の勉強に付き合いだし、

「あれはあれで、良い雰囲気なのかな？」

「うむ」

深秋は咲耶と美波の様子を見てニヤニヤと笑つと秀吉は何か深秋に言いたい事もあるようだが何も言う事はなくただ頷く。

第126問

「……ちよつと良いか？ 聞いて欲しい事があるんだ」

授業も終わり、クラスメート達が帰宅しようとして席を立とうとしたのを雄二が制止する。

「ゆうじくん、Aクラスとの試召戦争の事が決つたの？」

「それで、いつ仕掛けるのよ？」

クラスメート達は雄二の言葉にAクラスとの試召戦争の事が決まつたと思つたようで食い付き気味で聞くが、

「……ああ。決めた。今からその話をするから少しだけ付き合つてくれ」

「うむ。わかつたのじゃ」

雄二は眉間にしわを寄せながら話を聞いて欲しいと言うとクラスメート達は自分の席に座り直し、

「坂本くん、それで」

「ああ。まずは今までの試召戦争に協力してくれた事をクラス代表として礼を言う。ありがとつ」

雄二はクラスメート達に向かい頭を下げると、

「……そして、次の試召戦争なんだが、俺はここで一先ず、試召戦争をやめようと思う」

「ゆ、雄二、いきなり何を言ってるの!？」

「そ、そうなのじゃ!？」

雄二はAクラスに試召戦争を仕掛けるのを諦めると言い、明久と秀吉は驚きの声を上げて教室のクラスメート達もざわつき始める。

「ゆうじくん、それで良いの？ ゆうじくんにはゆうじくんのAクラスと戦いたい理由があつたよね？」

「ああ。現状で言えば、俺はAクラスに勝てる作戦が立てられない」
深秋は雄二がAクラスと戦いたいはずだと言うが雄二は勝てる見込みがないと首を振ると、

「坂本、前に言っていた作戦つてのは使えないのか？ 吉井と話を
して作戦を練り込めば使える作戦にならないか？」

「そうよ。吉井」

「う。うん。雄二、僕にもその作戦を教えてよ」

亮はEクラスとの試召戦争の前にAクラスを倒す作戦があつたはずだと言い、明久は雄二のその作戦を教えて欲しいと言うが、

「……狙っていたのは俺と翔子の1対1の勝負。限定テストで上限を決めて戦うはずだった。1対1は無理でも5対5までなら勝てる

見込みはあった。その交渉にいろいろとするつもりだったんだけどな」

「5対5？ みあちゃんにムツツリー二、姫路に坂本が勝てる見込みがあるなら4勝か？ いけるだろ」

「……いや、無理だと思う。きっとそうになったら、みあにはサクが当たるだろうし、Aクラスだから単体教科で考えると姫路さんに勝てる人間だって出てくるかも知れない」

「うん。たぶん、ボクとさっくんの勝負になったら腕輪の能力でボクはさっくんに勝てないよ」

雄二は最初にAクラスと戦うために考えていた作戦を話すと亮はそれで勝てそうだと言うが深秋と明久は亮の考えを否定する。

「俺も同意見だ。俺達を舐めていてくれればその条件で受けてくれたかも知れないし、勝てる見込みもあっただけど、俺達の戦力はAクラスにばれてるからな」

「……姉上と大河じゃな？」

雄二は深秋を通じて知り合ったAクラスの面々の事を考えるとこの作戦に乗ってこないと言うと秀吉は雄二の作戦を潰すであろう咲耶と優子の名前を出す。

「ああ……賭けに出ても良いがそれをやってクラス設備を落とすのもな。だから、今回の試召戦争は終わりだ。勝手な事を言って悪いとは思っている。すまない」

雄二は設備を落とすのは良策ではないと言つと頭を下げて反論を聞く事なく自分のカバンを持って教室を出て行く。

第127問

「雄二!?!? みあ、僕、ちよつと行ってくる」

「うん」

明久は慌てて自分のカバンを手に取ると雄二を追いかけて行き、

「ちよ、ちよつと、みあ、ウチ達も坂本を追いかけなくて良いの?」

「良いの。良いの。むしろ、アキ兄だけの方が良いよ。ゆうじくんは意地っ張りだしね。それに悩んだ結果だろうから、みんなで考え直せつて言っても変わらないよ。それに誰かゆうじくんの考えが間違っていると言える?」

美波は自分達も雄二と明久を追いかけようとして立ち上がるが深秋は美波の手をつかんで彼女を静止するとクラスメート達に雄二の考えは間違っているかと聞くと、

「いや、正直、俺達じゃ、Aクラスには勝てないだろ?」

「し、しかし、ワシらはBクラスを倒すためにEクラスとCクラスと同盟を結んだのじゃ、納得して貰えるのかのう?」

亮は冷静になってきたようでAクラスに勝てないと言うが秀吉はここまで上り詰めたために結んだ同盟を考えるとここで止めてはいけないと言う。

「で、ですけど、私達はAクラスにも助けて貰いましたよ。それな

のに戦いを挑むのは」

「確かにそうよね」

瑞希は咲耶、翔子、優子の3人が中心になって自分達を助けてくれたため、Aクラスに宣戦布告をするのもおかしい気がすると言つと美波も瑞希の言つ事も理解出来るように頷き、

「うん。でも、さつくんやゆうちゃん、しょうこちゃんが手伝ってくれたのはボクが原因だから、同盟を結んだってわけじゃないし、誰も何も言わないと思つよ。問題はゆうじくんの気持ち」

「……………雄二の気持ち？」

深秋はAクラスは宣戦布告をしてもFクラスを責める事はしないと、言つと康太は意味がわからないように聞き返すと、

「うん。ゆうじくんも男の子だからね」

「……………みあ、意味がわからないわよ」

深秋は雄二の考えている事が理解できているように優しくな笑みを浮かべるが美波は意味がわからないようにため息を吐く。

「みあちゃん、それってそう言つ事ですか？」

「うん。そう言つ事」

「そうですね。なら、仕方ありませんね。坂本くんは素直じゃなさそうですねから」

「うん。もう少し素直になっても良いのにね」

瑞希は深秋の言葉に以前、深秋と話をした『男の子のちっぽけなプライド』と言う話を思い出したようで深秋と顔を合わせると雄二の顔を思い浮かべながらくすくすと笑うと、

「ちょっと、瑞希もなんでわかった風なのよ？　ウチにも教えなさいよ」

「内緒だよ。みずきちゃん」

「そうですね。内緒です」

美波は自分だけ仲間はずれにされていると思ったようで2人に自分にも教えて欲しいと言うが2人はくすくすと笑いながら内緒だと言う。

「しかし、試召戦争もこれで終わりで良いのかのう？」

「まあ、今の状況では俺達に試召戦争を仕掛けてこれるのはEクラスだけだしな。同盟違反をしてこなければ……一先ず、教室に残っていても仕方ないだろ。坂本の事は吉井に任せて解散するか？」

秀吉は美波をからかっている深秋と瑞希に視線を送りながらこんな試召戦争の終わり方で良いのかと首を傾げると亮は解散しようと言いつつ、

「うん。それじゃあ、みんな、また明日ね　みずきちゃん、帰る

」

「はい」

「ちょっと待ちなさい。うちにも教えなさいよ」

深秋と瑞希は2人で教室を出て行き、美波は慌てて2人の後を追いかけて行く。

第128問

「雄二、待つてよ」

「……付いてくるなよ。Aクラスの設備までは行かなかったが、姫路の事を考えれば十分すぎる設備だろ」

明久は雄二を追いかけけるが雄二は明久に話す事はもうないと言いたげに先を進んで行こうとする。

「待てよ。確かに姫路さんの事を考えれば新校舎に移れば良かったかも知れないけど、僕は雄二に試召戦争を止める気になった理由を聞いているんだ」

「……だから、言っただろ。代表としてここで試召戦争を止めるのが1番だと思っただからだっ」

「違うだろ。僕は代表としての言葉じゃなく、雄二の言葉を聞いているんだ。雄二は最初に僕が試召戦争をしたいつて言った時に雄二にも目的があつたはずだ。どうして、それを諦めるんだよ!!」

明久は雄二の腕をつかみ言うつと雄二は明久の言葉を誤魔化そうとするが明久は雄二が押し込めた本心を教えると言い、頑固のところのある明久はわけを聞かないと動かないと言いたげな視線を雄二に向け、

「……場所、替えるぞ」

「うん。一先ず、屋上で良いかな？」

「……………ああ」

雄二は明久の性格も知っているため、こうなってしまうてはどうしようもないと思っただようで頭を押さえて場所移動を提案すると明久は移動場所を屋上に決めて2人は屋上に移動する。

「雄二」

「……………そうだな。明久、お前は俺が最初の試召戦争の時にお前になんて言っただか覚えているか？」

屋上に他人がいない事を確認すると明久は雄二が話し出すように名前を呼ぶと雄二はため息を吐きながら、最初に明久が試召戦争を仕掛けようとした時に雄二が明久に言った事を覚えているかと聞くと、

「確か、『世の中が学力だけじゃないって事を思い知らせてやる』とか、そんな感じの事」

「ああ。それなら、みあが風邪で倒れて翔子の家に泊まった日にお前が俺に言った事はどうだ？」

「『……………みんなで勝ちたい』って言った事？」

雄二は自分が試召戦争を止めようと思った言葉があるようで明久に質問すると明久は首を傾げながら答え、

「ああ……………少なくとも俺達の試召戦争はウチのクラスだけじゃなく、他のクラスを巻き込んでここまで上り詰めた。これは俺が言った事もお前が言った事も叶えてしまったんじゃないか？」

「それはそうかも知れないけどさ。雄二はそれで良いの？」

雄二は目的は達してしまったと言いたげに生徒が帰宅している道路に視線を向けながら言うが明久は雄二にもう1度、雄二の本心を聞かせて欲しいと言う。

「……そうだな。これで良いと言うと嘘になるかも知れないな。最初は俺自身の能力でどうにでもなると思ってた部分もあるしな。だけど、お前の言葉とみあや秀吉、ムツツリー二と戦術を話しながら上のクラスを倒したら、これでも良いんじゃないか？ って思う自分もいる事は確かだ。こんな迷ってるなかで何かやっても失敗しからない気がしてな」

「……そう」

「後は……そうだな。おかしな事を……あいつを泣かせると俺はみあにぶっ飛ばされるからな。あの方法じゃ、確実にぶっ飛ばされる」

雄二は自分でもらしくないと思っている部分もあるようで苦笑いを浮かべると明久は頷くと雄二は思い出したかのように深秋の言葉にも原因があると言い、

「みあは何を言ったの？ また、おかしな事？」

「いや。あいつらしくて……もしかしたら俺がもっとも言って欲しかった言葉かも知れないな」

明久は深秋が雄二にむちゃくちゃな事を言ったと思ったように困ったように笑うと雄二は引っかかっているものに納得が言ったようにで

笑顔を見せると、

「明久、今回はAクラスを倒すのは諦めたが、倒す算段が付いたら仕掛けるぞ。『俺達Fクラス全員』でAクラスを倒すぞ」

「う、うん……雄二、なんからしくなってきたね」

明久に向かい準備ができたならAクラスに攻め込むと言い、明久は雄二の様子に納得が言ったように笑顔で返事をする。

第128問（後書き）

どうも、作者です。

一先ずはAクラス戦をやらずに試召戦争を終結させるために張った伏線はすべて見つける事は出来たでしょうか？

まあ、大きなところは文面でもありましたが、

深秋が雄二に翔子を泣かせたらぶっ飛ばすと言ったところ。

明久が深秋の風邪により、弱音を漏らしながらも決意したところ。

他のクラスと同盟を結び、雄二の試召戦争への考えを崩すところ。

の3つですね。

660

読みながら、この結果を予想していた人ってどれくらいいるんでしょうか？

まあ、重要なところや伏線めいた個所はわかりやすく、『』で囲んでいるのでこれはなんの伏線だ？あのバカ作者、今度は何を企んでるんだ？程度で探して見てください。

試召戦争終結への誹謗・中傷は例の如くやさしくお願いします。

そして、この結果への賛成意見や感想もいただけたら嬉しいなあ。

第129問

「……なあ、島田、お前は何がしたいんだ？」

「良いでしょ。少しくらい、付き合いなさいよ」

咲耶は今日はバイトが休みだったために実家のケーキ屋を手伝っていたのだが、美波は結局、深秋と瑞希にまかれたようので1人仲間はずれにされた事もあるのか咲耶に絡んでいると、

「まあ、話しくらいは聞いても良いんだけどさ。今の状況を見てくれないか？」

『サク兄、今日は彼女が手伝いに来てるのか？ お姉さん、可愛いね。名前、教えてよ。サク兄じゃなくて、俺と付き合い合えね？』

『良かったよ。みあちゃんにふられてからはサクくんには女つけがないから、おばちゃん、心配してたのよ』

咲耶は常連客から浴びせられる冷やかしに少しだけ困ったように笑った後、

「彼女じゃないし、俺はみあにふられたって事実はない！！」

『なら、優姉ちゃんにふられたの？ 翔子姉ちゃんは彼氏がいるから相手にもされなかつたんだよね？』

「それも違う！！ 優子にも霧島にも告白した事実もふられてない！！」

深秋にふられた事実はないと言うと今度は優子の名前が出され、咲耶は声を上げ、

『……咲耶、休憩をやるから奥に行ってる。島田さん、うちの愚息が迷惑をかけてしまないね』

「い、いえ。ウチは気にしませんけど」

「……悪い。親父、島田も中に入れてくれ」

店長の咲耶の父親はこの騒ぎでは商売にならないと思ったようで咲耶に休憩に入るように言うと咲耶は父親に謝り、美波に付いて来いと言うが、

『サクくん、きちんとひに……』

「……そのネタは島田に失礼だからな。俺はまだしも女の子に使う冗談じゃないから」

『わかってるわよ。怒らないの』

お客の1人からの冗談に咲耶は美波に悪いからそれ以上は止めると言うとそれ以上は2人をからかう声はなくなり、

「島田、悪いな」

「う、うん。ウチもいきなり押しかけて来たわけだし」

咲耶は苦笑いを浮かべながら美波に謝ると美波は今の状況に自分も

悪いところがあつた事に気づいているようで苦笑いを浮かべる。

「それで、何があつたんだ？」

「あつ！？　ありがとう……ねえ、ここつて喫茶店もやってるの？」

咲耶は美波を奥のスペースに招き入れてインスタントコーヒーと店からモンブランを拝借してきて美波に渡すと美波は周りを見渡しながらこのスペースに違和感を覚えたようであ咲耶に聞くと、

「昔はそのつもりだったらしいんだけど、うちの両親の淹れるコーヒーや紅茶、死ぬほど不味いんだ。喫茶店で飲み物が不味いのは致命的だからな」

「そ、そうなの？　ケーキはこんなに美味しいのに」

咲耶は苦笑いを浮かべながら喫茶店を辞めた理由を話すと美波は口に広がるモンブランの美味しさに目を輝かせながら言い、

「まあ、俺が継ぐ時はここも使いたいから掃除とかはきちんとしてるから安心してくれ」

「それは見ればわかるし、疑ってなんかいないけど」

「そうか？　それで、今日は何の用だ？　勉強の続きか？」

咲耶は掃除は行き届いていると言うと美波は疑っているわけではないと慌てると咲耶は美波の様子に苦笑いを浮かべながら自分を訪ねてきた理由を聞く。

第130問

「仲間外れねえ……」

「そうよ。酷いと思わない？ みあや瑞希はそんな事をしないと思っただのに」

美波は咲耶に放課後に深秋と瑞希が自分に内緒と言った話が気になるようで咲耶に愚痴をこぼすが咲耶は苦笑いを浮かべながら、美波の話に付き合っていると美波は口を尖らせるが、

「まあ、内容が内容だけに仕方ないんじゃないか？ 俺も何となくだけど、みあと姫路が秘密にした理由がわかるし」

「何で、大河がわかるのよ!？」

咲耶は美波の様子が面白いようでくすくすと笑いながら深秋と瑞希が何を隠していたか予想が付いたようであり、美波は自分がわからないのに咲耶がわかった事に驚きの声をあげると、

「それは島田に女子力が足りないからわからないんじゃないか？」

「ウチは充分に女子よ!!」

咲耶は美波をからかうように言うと美波はこめかみに青筋を浮かべて咲耶の胸倉をつかみ、自分は女の子らしいと言っ。

「いや、男の胸倉つかんでも説得力がないからな……それにそんな風に青筋を立てるとかわいい顔が台無しだぞ」

「あ、あんたはウチをからかって何が楽しいのよ!!」

咲耶は美波の様子にくすくすと笑った後に彼女の耳元で美波はかわいいと言つと美波の顔耳まで真っ赤に染まっ行って行き、

「島田、お前、本当にかわいいな」

「う、ウチをからかうんじゃないわよ。悪かったわね。どうせ、ウチはかわいいって言葉になれてないわよ。みんなウチを男友達みたいなノリで相手をするからね。どうせ、ウチはみあや瑞希みたいにかわいくないわよ」

咲耶はかわいいの一言に耳まで真っ赤に染める美波を見て笑いをかみ殺しながら言つと美波は顔を真っ赤に染めたまま咲耶から視線を逸らして不貞腐れたように言つが、

「そんな事ないって、思つてても口に出せない奴もいるんだ。そこから辺がわからないから、島田は今回、みあと姫路に秘密にされたんだよ。自分だけじゃなく、相手もいる問題だからな。特に今回はあの2人は当事者じゃないし、周りが騒ぐと面倒になるしな」

「……どう言つ事よ?」

咲耶は苦笑いを浮かべながら言つと美波は咲耶の言葉の意味が理解できないように咲耶を睨みつけ、

「まあ、簡単に言えば、これは島田達女の子の問題じゃなくて男のプライドの問題だから、島田はわかんなくても良いんだよ」

「わけわかんないわよ。男の子のプライドって何よ？」

咲耶は優しいな笑みを浮かべながら、美波にはわかる必要はないと言つと美波は不満そうに言う。

「まあ、わかりやすいのは好きな娘にかっこ悪いところは見せたくない。自分の事を好きになって貰えるように自分を良く見せたいかな」

「ふーん。男の子もそんな風に考えるの？」

咲耶は納得のしない美波の様子に雄二の気持ちも察してやれと言つが美波は理解していないようで首を傾げ、

「あるある。普通にな。だから、『自分の気になる娘が他の男を見てることやっぱり悔しい』ぞ」

「そうなんだ。男の子はバカやる事しか考えてないと思つたわ」

「……まあ、そんな反応だから、みあと姫路に秘密にされるんだろ
うな」

咲耶は美波の様子に苦笑いを浮かべると、

『咲耶、そろそろ、戻ってくれ』

「わかった。島田、悪いな。俺は戻らないといけないから。ここままで良いか？」

父親から咲耶に戻るように言う声が聞こえて咲耶は立ちあがり、

「う、うん。付きあわせて悪かったわね」

「いえいえ、かわいい女の子のお願いなら喜んで」

「あんだ、そう言う冗談ばかり言っていると女の子のから軽いと思つて嫌われるわよ。女の子はそう言うのは冗談交じりで言わないで貰いたいの」

美波は慌てて立ち上がると咲耶にお礼を言うが咲耶の返事に咲耶にからかわれていると感じたようでジト目で咲耶を睨みつける。

「そうか？ なら、真面目に言ったら良いのか？ ……美波、俺と付き合わないか？」

「へ？ ……あ、あんだ、いきなり何を言い出すのよ！？」 「冗談を言わないでよ！！ 今、言つたばかりでしょ！！！」

咲耶は真面目な表情をして美波に告白すると美波は一瞬、何が起きたかわからなかったように呆けるが直ぐに顔を真っ赤にして咲耶を怒鳴りつけると、

「いや、冗談を言ってるつもりもないんだけどな。と言うか、いくら俺でも冗談ではこんな事は言わない。冗談でこんな事を言ったら悪質でしかないからな……まあ、別に答えをすぐくれとは言わないから、少しでも悩んでから答えを出してくれ。流石に直ぐにごめんなさいは傷つくからな」

「ちょ、ちょっと待ってよ。何で、ウチなのよ？ あんたの周りにはみあや木下さん、霧島さん、他にも大勢、女の子がいるでしょ？」

咲耶は逃げるように店に戻ろうとするが美波は咲耶の腕をつかんでどうして自分に告白したかと言うが、

「あのな。これ以上、詳しくきくな。俺だって、こんなタイミングで言うとは自分でも思ってたんだからな。実は結構と言うか、かなりてんぱってる」

「そ、そうなの？」

咲耶の顔は珍しく赤く染まっており、美波は初めて見る咲耶の様子に自分の鼓動が速くなっているのを感じ、

「あ、あのね。大河」

「な、何だ？」

美波は咲耶の顔を見上げると2人とも場の空気に流されているのか2人の距離は近づいて行き、唇同士が触れそうになった時、

『……若いって良いわね。私も父さんとの事を思い出すわ』

「か、かあさん、何でここにいる？」

咲耶の母親が2人を見てニヤニヤと笑っており、咲耶は驚きの声をあげると、

『何で？ って遅いから咲耶を呼びにきたんだけど、邪魔だったみたいね。私は戻ってるから、続けて、父さんには上手く言っておくから』

「つ、続けられるか!？」

「続きません!？」

母親は後は若い2人に任せると言いたげに店に戻ろうとする。と咲耶と美波の音が店内に響き、

『店長、3代目も期待できそうね』

『最初は男の子かしら、女の子かしら』

『……………』

店では咲耶の父親が常連客にからかわれ始める。

第130問（後書き）

どうも、作者です。

咲耶、美波への告白。

咲耶「……タイミング悪いな」

そうですね。そして、美波は空気に流されて咲耶に返事もしていないのにキスをしようとする。この後の彼女の反応と咲耶の態度に変化はあるんでしょうか？

咲耶「……もう少し、流れを考えてくれ」

いやです。

第131問

「おはよう。げんじくん」

「平賀くん、おはよう……大丈夫？」

「……ああ、おはよう。吉井くん、吉井さん」

深秋と明久は朝、教室の前でDクラス代表の『平賀源二』を見つけ、挨拶をするが源二は何か心配事があるようで眉間にしわを寄せている。

「げんじくん、何かあったの？ ボク達で手伝える事なら言っ
て、力になるよ」

「い、いや、吉井さんには教室の掃除とかでかなりお世話になっ
てるし、これ以上、迷惑をかけるわけにはいかないよ」

深秋は源二の顔を覗きこんで言うと源二は目の前に現れた深秋から
視線を逸らしながら迷惑をかけられないと言いが、

「平賀くん、待ってよ。僕もみあも迷惑なんて思わないから、話し
てよ。僕とみあの頭じゃ良い案が浮かぶかはわからないけどさ」

「そっだよ」

「それじゃあ、話だけ……えーと、場所、どうしたら良いかな？」

深秋と明久が諦めるわけではなく、源二は苦笑いを浮かべながら場所

を移動して2人に話をしようとし、

「一先ずは、ウチの教室で良い？ それなりの広さもあるし、話をまとめるような事もあるかも知れないし」

「それは」

「決まり、行こう」

明久はFクラスの教室で良いかと聞くと源二はあまり良い顔をしないが深秋は源二の腕を引っ張って行く。

「おはよう。みなみちゃん……あれ？ 反応がない？」

「みあ、島田は登校してからずっとそんな感じだ……って、平賀？」

深秋は教室に入ると美波に声をかけるが美波は考え事をしているようで窓の外を見つめており、雄二が美波の様子を説明すると深秋と明久の他に源二がいる事に気づき首を傾げると、

「何か、悩んでる事がありそうだから、話を聞こうと思って」

「そうか？ みあに捕まったわけか」

「ああ」

明久は源二を連れてきた理由を話し、雄二はその時の様子が目に浮かんだように苦笑いを浮かべると源二は居心地が悪そうに頷くが、

「それで、げんじくんは何を悩んでるの？」

「……いや、Fクラスの人達に聞いて貰うのは少し」

「設備の事か？」

深秋が源二の悩みを聞こうとするが源二は深秋と明久だけでなくFクラスの代表の雄二が出てきた事で言いずらそうにしていると雄二は源二が何に悩んでいるか納得が言ったようで源二に聞く。

「……ああ。吉井さんが掃除を手伝ってくれて何とか維持はしてるけど、それでもね。やっぱり、女の子で体調を崩す子も出てきているから、どうにかしたいんだけどそれを君達に話すのは筋違いだろうし」

「確かにな。俺達もあの設備は経験しているから、今はまだしも夏場、冬場は不味いだろ」

「確かにそうだね。僕達も姫路さんの体調があつたから仕掛けたわけだし、そうだよ。姫路さんだけじゃないんだよ。他のクラスにも体調を崩す人が出てくるなら、変わらないじゃないか」

源二は今のDクラスの状況を話すと明久と雄二は源二の心配に納得したようで大きく頷くと、

「それで清涼祭の売上で設備を向上させたいと思っただけで、設備に差を付けるのはこの学園の方針だし、学園長先生に直談判をしようかなと思ってたんだ。それでも学園長先生も忙しいだろうし、1学生の言葉なんて聞いてくれるかな？　と思っただけ」

「ばばあにか？　……ん。待てよ。平賀、良い事を思いついた。俺

達も協力してやる」

「良いのかい？ 君達には何も利点はないんだ」

源二は代表としてやれる事をやるうと思っていたようで真剣な表情をすると雄二は何か思いついたようでニヤリと笑うと源二は雄二が協力する意味がないと言うが、

「げんじくん、気にしないでよ。それにE、Fランクの設備の向上は2学年全体の問題なんだし、ボク達は全面的に協力するよ」

「そうだ。せめて、腐った畳と割れた窓、夏と冬の事を考えればエアコンくらいは付けにと行けないからな」

「で、でも、学園長先生が納得するかわからないんだよ」

深秋は笑顔で源二に協力すると雄二は必要な設備を上げて行くが源二はここで話してもカヲルしだいだと言うと、

「大丈夫だ。ばばあは説得できる。ばばあは俺達に貸しがあるからな」

「……そうか。白金の腕輪の事で脅迫すれば」

「明久、おかしな事を言うな。これはあくまで説得だ」

雄二と明久はカヲルにこちらの条件を飲ませる方法を思いつきニヤリと笑い、

「……吉井さん、2人に任せても大丈夫なのかい？」

「大丈夫だよ。それより、げんじくん、げんじくん、クラスの出し物、こう言うのやらない？ Fクラスはボクが説得するから、Dクラスの説得、お願いできないかな？」

「良いのかい？ 確かにこれなら、お客さんもくると思う」

「良いの。良いの。みんなでやった方が楽しいし」

源二は明久と雄二の様子に不安を覚えるが深秋は何か考え付いたように源二に何かを提案し、源二は深秋の提案に魅力を感じたようである。

第131問（後書き）

どうも、作者と

深秋「主人公です」

— 先ず、清涼祭編に突入なのかな？

模擬試召戦争もやってたし、試召戦争が決着付いた次の日ですから
美波と咲耶の決着はついていませんし、いろいろと企んでいる事も
あります。（悪笑）

深秋「ボクとあの人のイベントだね」

ええ、長い1日になりますよ。（悪笑）

第132問

「それじゃあ、平賀、一先ず、ばばあには俺達が当たりをつけておくが」

「ゆうじくん、ゆうじくん、今、げんじくんに提案したんだけど、FクラスとDクラスで喫茶店何かしようよ。売り上げはFランクの設備に回すのにこれならDクラスも変に気を使わなくて良いですよ？」

雄二は源二にカヲルとの話し合いは自分達でどうにかすると言おうとすると深秋は雄二にDクラスとFクラス合同の展示物を提案する。

「ん？ ……確かにそうだな。ウチの設備だとそれなりの広さもあるし、全てを回すとしたら結構な人間が必要だしな。俺は悪くないと思う。明久、お前はどうか？」

「うん。そうだね。僕が考え付かないだけかも知れないけど学園祭で収益を出すならやっぱり飲食店だとは思っけどあの設備じゃ人もこないだろうし」

明久と雄二は深秋の言葉に頷くと、

「それなら、平賀、最初のHRの時はウチと合同でやるって提案があつて飲食店をしようと言う話をしてくれ。まあ、俺達Fクラスが相手だともしかしたら納得しない人間も出てくるかも知れないが」

「いや、そこはどうにかするよ。俺達がFランクの設備に落ちた時から吉井さんと吉井くんは掃除も手伝いに来てくれてる時もあるし、

2人からの提案とえば、女子をまとめる清水さんと玉野さんも間を取り持つてくれるはずだし、何より、設備向上がかかっているなら、納得して貰わないと困るからね」

雄二は改めて源二にDクラスの生徒の説得を頼むと源二は大きく頷き、

「それなら、2回目はウチの教室で全員で打ち合わせと言う形にすれば良い。実際、俺もこの設備を改めてみると1クラスが使うには広すぎる設備だしな」

「そうだね。僕らでこれならAクラスはどうなんだろうね。Aクラスは僕らより予算もあるだろうし、凄いものを作ってきそうだから気合入れないと」

雄二は2回目の清涼祭の打ち合わせの時の話をすると明久は苦笑いを浮かべながらAクラスの予算が気になると言う。

「……明久、お前、今、良い事を言ったな」

「え？ 何、雄二？」

明久の言葉に雄二は何か新しい事を思いついたようで口元を緩ませると明久は雄二の言葉の意味がわからずに首を傾げ、

「せっかく、売り上げを設備向上に使おうって言うてるんだ。俺達だけじゃなく、他のクラスも巻き込まないか？」

「坂本くん、それはいくらなんでもないんじゃないか？」

雄二はFクラスとDクラスだけではなく、他の2学年のクラスをも巻き込もうと言いだし、源二は流石に無理だと苦笑いを浮かべるが、

「他のクラスが今、何を考えているかは置いておいてな。俺達が2学年全体の設備の向上を考えていると言う話は他のクラスの奴らに話して置いても問題ないはずだ。賛同してくれるクラスがあれば、同じように飲食店をして貰う」

「うん。メニューを被らせなければ客層は少しずつ増えると思うし……ねえ、ゆうじくん、それなら、チケットを売って2学年のお店ならどこでも使えるとかしたら全体の売り上げになるよね？」

「それもいい考えだけどな。各クラス単位で業者を探して材料の発注より、学年でまとめてだとその分の単価も下がる可能性もある。協力する価値を見いだせる物を提示すればのってくれる可能性は高いだろ？」

「なるほど、確かにそうだね」

「それに衣装関係は得意な人間が各クラスにいるとは限らない。Dクラスには玉野、ウチにはみあがいるが他のクラスもレンタルじゃなく、衣装も凝りたいと言う人間も出てくるとしたら協力は悪い手じゃない」

深秋と雄二は完全に他のクラスをも巻き込むつもりのようにであり、2人の話に明久と源二は確かに魅力的な話だと頷く。

第133問

「それじゃあ、ボク、ちょっと出てくるね」

「うん」

「あれ？ みあちゃんはもうしたんですか？」

昼休みになると深秋はお弁当箱を持って教室を出て行き、瑞希は深秋とお弁当を食べようと思っていたのか深秋が急いでいなくなった事に首を傾げる。

「えーと、昨日、根本くんに迷惑をかけたから、お詫びの品と言っか力ニクリームコロッケを届けに」

「な、何じゃと!？」

「……………根本、許すまじ」

明久は昨日の昼休みに深秋は恭二に迷惑をかけた事を話すと秀吉は驚きの声を上げ、康太やクラスメート達は恭二に向けた殺意を背中から放ち始め、

「……………明久、根本にみあが迷惑をかけたって言うけど、今更、みあがいつに何かする必要があるのか？」

「え？ うーん。わからないけど、みあだからね」

雄二は1年の時に深秋と恭二の間に起きた事を知っているために眉

間にしわを寄せると明久は苦笑いを浮かべ、

「……まあ、それがみあの良いところと言えば良いところか」

「そうですね。みあちゃんらしくて良いと思います」

雄二は頭をかくと深秋らしいと笑い、瑞希も雄二と同じ意見のよう
で頷く。

「あ、そうだ。雄二、姫路さん、お昼一緒に食べない？ みあが張
り切りすぎていっぱいあるんだよね」

「……これ、全部カニクリームコロッケか？」

「……流石に全部は辛いからコーンやホタテも作ったよ。後は普通
のコロッケも」

明久は雄二と瑞希に声をかけるとカバンから重箱を取り出してふた
を開けるとそこにはいっぱいのコロッケが入っており、雄二は流石
の量に顔を引きつらせると明久は全力で深秋を思いとどまらせたと
言うつと、

「島田さんも一緒にご飯食べない？」

「……」

美波にも声をかけるが美波は反応する事無く窓の外を眺めており、

「美波ちゃん、朝からずっとあんな感じですけど、どうしたんですし
よつか？」

「さあな。それより、みあは戻ってくるのか？ 流石に3人じゃ食
い切れないだろ？」

「うん。今日は根本くんと一緒に食べる予定って言ってたから戻っ
てこないと思うけど、秀吉、ムツツリーニ？ ……あれ？ 2人と
もいない？ って、誰もいない？」

瑞希は美波に何があったのかと心配そうな表情をすると雄二はコロ
ツケの量に困ったように笑うと明久は秀吉と康太にも声をかけよう
とするが教室には明久、雄二、瑞希、美波の4人しか残っておらず、

「……………どうする？」

「雄二、霧島さんと木下さんに声をかけてみない？ 設備向上の話
もしたいし」

「翔子か？ ……いや、先に中林とか原口に話をしないか？」

雄二は目の前のコロツケの量に首を傾げると明久は翔子と優子に声
をかけようと言うが雄二は乗り気ではなく、宏美と薫に声をかけよ
うと言うが、

「……………雄二、一緒にお昼ご飯を食べる」

「失礼します。あれ？ 吉井くん、みあはいないの？」

雄二にとってはタイミングが悪くお弁当箱を持って翔子と優子が教
室に入ってくる。

「木下さん、みあはちょっと他でお昼を食べてくるって出て行ったよ」

「そうなの？ 代表、どうします。教室に戻り……ませんよね」

明久は翔子と優子に深秋がいない事を話すと優子は翔子に教室に戻ろうかと言うがすでに翔子は雄二の隣を陣取っており、

「木下さん、あの、よろしかったら、一緒にませんか？ みあちゃんを作ったコロッケがたくさんあるんですけど私達じゃ食べきれなくて」

「……みあもずいぶんと作ったわね。そうね。ごちそうになるわ」

瑞希は何度か顔を合わせてはいるがあまり優子とは話した事はないため遠慮がちに言うと優子は苦笑いを浮かべながら瑞希の誘いに頷く。

第133問（後書き）

どうも、作者です。

美波は今も乙女モード爆進中。お相手の咲耶は何をしているんでしょうか？

そして、深秋は恭二にお詫びの手作り弁当を持って行き深秋ファンクラブの標的になる。（爆笑）

清涼祭編に入りまして気づいた事が……あれ？ DクラスとBクラス、キヤラクター少なくねえ？ まあ、周りが濃いつて感じですけどね。

募集しちゃいます？ って感じです。現在でもかなり人数も多いですし、必要ないかな？ とかも思いつながらもこれは仲間とワイワイガヤガヤがウリですからね。募集もありなのかな？と思つてます。ご意見貰えたら嬉しいなあ……第140問位まで意見を受け付けたいと思います。

- 1．募集しちゃえよ。
- 2．もういらないだろ。

できれば感想と一緒に理由も込めて欲しいです………すみません。調子に乗りました。番号だけでも良いです。

番宣

『繋ぐ絆と境界破壊』に深秋と秋雨さんの『久遠光一』、『大神白夜』兄弟とのコラボ小説を書かせていただきました。興味がわいた

からお読みください。できれば感想もいただけたら嬉しいです。

第134問

「……つて事なんだけど、Aクラスも参加してくれないかな？」

「なるほどね……」

明久は5人で昼食を食べながら、今朝、Dクラス代表の源二と話した清涼祭の合同企画を翔子と優子に話すと優子は険しそうな表情をして頷き、

「ダメかな？」

「……別にダメとは言わないし、みあや吉井くんの言い分もわかるわ。何より、みあらしい提案だし、あたしも協力してあげたいけど」

明久は優子の表情にAクラスの参加は難しいと思ったようであり、不安そうな表情をすると優子は苦笑いを浮かべて優子自身は協力しても良いと言つが、

「それなら」

「待つて。あたしはみあのかになるなら協力は全然、構わないの。代表も咲耶くんも他にも愛子や久保くん、佐藤さんも問題ないとは思うわ」

「!？」

明久は優子に改めて、協力を願うと優子は翔子や咲耶と言ったAクラスの中心メンバーは協力してくれると言つと咲耶の名前が出た瞬

間に美波の体はびくつと小さな反応をするが誰も気づく事はなく、

「それなら」

「だけど、事が事だから、あたしと代表では決められないの。話はクラスに通すわ。準徐を間違えるとクラスが分裂しちゃうし……あたし達はこの間、試召戦争で無理したわけだし、口には出さなくても不満に思っている人もいるだろうし」

明久は優子が直ぐに返事をしてくれない理由を聞くと優子は苦笑いを浮かべながら自分達2人では直ぐに承諾できないと言う。

「確かにそうだな。翔子達も大部、無理しただろうし」

「……雄二、心配してくれて嬉しい」

「だあ！？ ひつつくな！？ 翔子！？」

雄二は深秋と恭二の対決に協力してくれたAクラスの面々には感謝しているがそれでも非協力的な人間もいると優子の言葉に頷くと翔子は雄二の腕に抱きつき雄二は翔子を引き離そうと声をあげ、

「それに、少なくともウチのクラスは他のクラスに試召戦争で負けると思っていないでしょうね。自分達がFランクの設備まで落ちるなんて誰も思っていないわ……その油断がBクラスを最低設備まで落とす結果になったわけなのにな」

「ま、まあ、他のクラスが全部、敵だとは思いませんしね」

「うん。そ、そうだね」

優子はAクラスの中の生徒にも他のクラスの生徒を舐めている生徒は多いと言うと明久と瑞希は苦笑いを浮かべ、

「まあ、たぶん、大丈夫だとは思わね。ウチのクラスは勉強中心の人間が多いから、逆に清涼祭の準備とかは手間取りそうだから協力してくれる人間がいると心強いって意見も出るでしょうしね」

「そうか。となると後は3クラスだな。Eは協力してくれるだろうが問題は……」

「BとCね」

優子は苦笑いを浮かべながらAクラスにも協力するメリットはあると言うと雄二は残りのBクラスとCクラスが協力してくれるかわからないように頭をかくと優子も同じ意見のようで眉間にしわを寄せると、

「え？　なんで、BとCが問題なの？　協力する利点はあるでしょ」

「……明久、Bクラス代表は根本だ。俺達が言いだした事に意地になる可能性も多いし、小山はプライド高そうだしな」

明久は2クラスにも利点はあると言うと雄二は苦笑いを浮かべ、

「……Cクラスには八幡がいるから大丈夫」

「……代表、八幡くんがいるから不安なんですよ」

翔子はCクラスは公介がどうかしてくれると言うが優子は翔子と

は反対に公介がいるから不安だと肩を落とす。

第135問

「はい。3人ともお茶」

「……これはいったい何の嫌がらせだ？」

「嫌がらせだ？ 美味そうな美少女の手作り弁当を目の前に良くそんな事が言えるな。根本、お前、何様だ？」

「まったくだ。根本、空気くらい読めよ」

恭二は今の状況の意味がわからずに眉間にしわを寄せるが深秋、咲耶、公介の3人は気にする事なくEクラスの恭二の席を囲んで深秋の作ったお弁当を頬張っている。

「八幡、お前にだけは言われてたまるか!!」

「きょうくんも落ち着いてよ。カルシウム不足してるの？」

「牛乳飲めよ」

「いや、日本人は牛乳からカルシウムは取りづらいらしいから、小魚にしる。煮干とか」

「イライラの原因のお前らが言うな!!」

恭二は自分の神経を逆なでする3人がそろっている事もあるのか3人に向かい叫ぶが3人は気にする事はなく、

「まあ、落ち着けよ。ほら、みあもお茶を用意してくれたわけだし」

「はい。きょうくん」

「ああ……だから、違う!! これはなんの嫌がらせだって聞いているんだ!!」

咲耶は深秋がお弁当と一緒に持ってきたお茶を飲めと言うと恭二は一口お茶を飲んだ後、改めて、今の状況について話をしると叫び、

「昨日はきょうくんからカニクリームコロッケを取っちゃったから、お詫びを」

「俺もみあから聞いてな。せつかくだから、ウチの新作の試食をまとめてやること」

「いや、今日の昼は豪華で良いな。根本、お前もそう思わないか？」

深秋は流石に昨日は恭二に悪い事をしたと思っっているようで苦笑いを浮かべると咲耶は実家のケーキ屋の試食品を取り出し、公介はうんうんと頷き、

「その意味がわからねえよ!! お前らは今更だけどバカなのか？確かに詫びと言われれば納得するかも知れないが、お前らと俺じやあり得ないだろ!!」

「何だよ？あの件はこの間で決着ついたんだ。いつまでも引きずるなよ。女々しいぞ」

「まったくだ。そんな風にしつこくてちっさいから、ウチの代表に

ふられるんだ」

「八幡、それは関係ないだろ!! ……美味しい」

恭二は先日までの確執を機にする事なく自分に近寄ってくる3人に意味がわからないと言つと咲耶と公介は恭二にいつまでもこだわるなど言うが恭二は友香にふられた事は今は関係ないと言つた時、深秋が恭二の口にカニクリームコロッケを運び恭二は口の中に広がる味に驚きの声をあげる。

「きょうくん、ご飯食べよ。せつかく、作ってきたんだから、食べてくれないとボク悲しいよ」

「……つたく、今日だけだからな。2度とこんな事をするんじゃないぞ」

深秋は恭二の様子にっこりと笑つと恭二は周りから注目を浴びている事もあるため、不機嫌そうに席に座ると、

「根本はツンデレだな」

「八幡、おかしな事を言うな!!」

「みあ、実際、男のツンデレは萌えなのか？ 坂本もそうだが、同性から見ると正直……キモい」

「キモいは言いすぎだけど女の子も一緒だよ。素直になった方が可愛いのにと思つのにもつたないよね」

公介は恭二の様子にため息を吐くと恭二はその評価は嬉しくない

叫び、深秋と咲耶は2人の様子に苦笑いを浮かべる。

第136問

「と言う事なんだよ」

「なるほどな。確かに良い案だとは思っな」

「良いんじゃないか。全部を巻き込んだ方が面白そうだ」

「……そう言う事か？」

深秋は昼食を食べながら、3人に設備向上の件を話すと咲耶と公介はおおむね賛成をしてくれるが恭二の眉間にはしわが寄って行き、

「そう言う事？」

「俺にも言う事を聞けって言うんだろ？ その話をするためにこんなものまで用意したわけか？ お前、バカじゃないのか？ 誰がそんなものに協力してやるか！！」

深秋は恭二の反応に意味がわからずに首を傾げると恭二は立ち上がりこの昼食も自分に言う事を聞かせるための手段だと言うが、

「根本、話を聞いてたか？ 今の話が決まったのは今朝だぞ」

「……」

公介は冷静にツッコミを入れると恭二は黙って席に座り、

「無理に協力してなんて言わないけど、みんなで何かやった方が楽

しいよ」

「……お前、何で、そんな事が言えるんだ？ 俺はお前やあいつに嫌がらせをしてたんだぞ。普通に考えて仲好ごっこなんてできるわけがないだろ。それなのにこんな話をしてバカじゃないのか？」

深秋は不安げな表情で恭二に言うと恭二は眉間にしわを寄せたまま言い、

「うん。バカで良いよ。ボクは誰かが笑えないで1人でのいるよりはみんなが笑える事を探したい。それがバカだって言われるならボクはバカで良い。やっぱり、みんなが笑ってる方が楽しいから、しょうこちゃんもゆうちゃんもきょうくんもあの子にも笑っていて欲しい。他人を傷つけるのは心が痛いから傷つけられた相手だけじゃなく、きつと、自分の心も見えなくても気づかなくてもきつと痛いはずだから」

「……」

「……根本、お前の負けじゃないか？ それにこの間、お前は負けたんだ。1回くらいみあの提案に乗ったってバチは当たらないだろ」

深秋は真っ直ぐな瞳で恭二から視線を逸らす事なく言い切り、恭二は彼女の真摯な瞳に息を飲むと咲耶はくすりと笑い恭二の負けだと言う。

「つたく、何なんだよ」

「まあ、良いだろ。このメンバーでバカやれるのだって時間は限られてるんだしな。俺達は2年後には少なからず、バラバラだ。みんな

なでバカやるのも悪かないだろ」

恭二は納得がいかなさそうに頭を乱暴にかくと公介はニヤリと笑い、「やれば良いんだろ。やれば、だけど、今回だけだからな。それに今の俺の状況は見ての通りだ。クラスがまとまると思っちなよ!!」

「流石、ツンデレ、捨て台詞も完璧だ」

「誰がツンデレだ!! 八幡、お前、いい加減にしろよ!!」

恭二は今の自分にクラスをまとめるだけのものはないと言うが公介は空気を読む事なく、それは恭二の照れ隠しでしかないと言うと恭二は公介を怒鳴りつけるが、

「吉井妹、咲耶、ごちそうさま。美味かったぞ。できればまた食わせてくれ。昼食代も浮くからな。こんな誘いなら大歓迎だ」

「うん。また一緒にご飯食べようね」

「おい!! 言うだけ言っていないくなるな!!」

公介には恭二の怒りなど関係ないようで空気を読む事なくBクラスの教室を出て行くことし、恭二は立ち上がり公介を追いかけて行く

『見つけたぞ。根本だ!!』

『みあちゃんの手作り弁当を食ったなんて許せん。すぐに始末するんだ!!』

「な、何だ！？　これは！？」

廊下に出た途端に『深秋ファンクラブ』に見つかったようで恭二は連れ去られて行き、

「……みあ、そろそろ、あのおかしな軍団をどうにかしないか？」

「う、うん。流石に人様に迷惑をかけるのは不味いよね」

深秋と咲耶は視界から突如として消えた恭二の様子に顔を引きつらせる。

第137問

「ただいま」

「みあ、お帰り」

「ん？ やつと帰ってきたか」

深秋がFクラスの教室に戻ると明久、雄二、瑞希は深秋を待っていたようであり、

「アキ兄、ゆうじくん、きょうくんが一先ず、Bクラスに清涼祭の件を聞いてくれるって」

「み、みあ、本当か!？」

「うん。ホントだよ」

深秋は明久、雄二、瑞希のすぐ近くに座ると恭二との約束を取り付けたと言い、雄二は驚きの声をあげるが深秋は笑顔で言い切り、

「となると後はCクラスとEクラスですね」

「そうだね」

「まあ、Bクラスの連中が根本の言葉に頷くかはわかんねえけどなあ。あいつはクラスを負けに導いた戦犯なわけだし、それにいろいろと問題もあるからな」

明久と瑞希は深秋の行動に苦笑いを浮かべて後は2クラスだと言うが雄二は現在は根本の指示にBクラスの生徒が従うかが疑問のよう
で頭をかくが、

「大丈夫だよ。きょうくんはボクと違ってやれる子だもん。ちよつ
と不器用でわかりにくいけどね。だから、大丈夫だよ」

「……そうだと良いけどな。まあ、考えていても仕方ないか？ 少
なくとも根本の言葉に従うかはわからないが悪い提案じゃないわけ
だしな」

深秋は笑顔で恭二に任せておけばどうにかなると言い、恭二は深秋
の言葉にため息を吐きながらも深秋の言葉はどこか信じれる不思議
さがあるように苦笑いを浮かべると、

「それより、後2クラスって言ってたけどAクラスにはもう話した
の？」

「さつき、木下さんと霧島さんが来てて話をしたんだよ。みあの作
ったコロツケの山を崩すのを手伝って貰ったんだよ。それで、クラ
スのみんなに話してくれるって」

「……それでもまだあるけどな。流石に俺も明久ももう食べないぞ」
深秋は話を持って行くのがEクラスとCクラスだと聞き、明久と雄
二は食べきれなかったコロツケの山を見て苦笑いを浮かべたまま、
Aクラスには協力の申請をしたと言う。

「そうなの？ それなら、早く行くこうよ。Cクラスはこうすけくん
に頼んだから、大丈夫だと思うから、ヒロちゃん達だね」

「……待て。Cクラスの説得を八幡に頼んだのは不安しか感じないんだが」

「……木下さんも言ってたしね。霧島さんはみあとと一緒に大丈夫だつて言ってたけど、八幡くんの言葉に小山さんが切れてる気がするよ」

「大丈夫だよ。こうすけくんはちよつと空気を呼んでくれないけどとっても頼りになるよ。それにみんなもいるから、アキ兄、ゆうじくん、みずきちちゃん、ボクは先に行ってるからね」

深秋は昼休み中にEクラスに話をしてこようと言うが深秋の口から出たCクラスへの協力要請に雄二は不安しか感じないようで眉間にしわを寄せるが深秋はEクラスの教室に突撃して行き、

「とりあえず、雄二、行こうか？」

「そうだな。姫路はどうする？ 一緒にくるか？」

「は、はい。私も行きます……あの、これも持って行きます？」

「そうだな。食べる人間もいるかも知れないからな」

明久達3人は深秋の行動に苦笑いを浮かべながらも深秋の後を追いかけてEクラスの教室にコロッケを持って向かって行く。

第138問

「失礼します」

「あれ？ みあ、どうかしたの？」

「あ。ゆうかちゃんもいる。ヒロちゃん、お勉強中？」

深秋がEクラスの教室に顔を出すと宏美のそばには友香が座っており、どうやら友香が宏美の勉強を見ているようであり深秋は首を傾げると、

「……ちよつとね。清涼祭でソフトテニス部で他校と交流試合をするんだけど」

「中林さん、その試合の2年生の代表に選ばれたんだけど、キャプテンが代表は文武両道って言ってるらしくて」

「ええ。大変なのよ。薫も水鏡さんも加賀谷さんも1教科、2教科に特化しているから誰も勉強、教えてくれないし、米倉なんて勉強を教えて欲しいって頭を下げたら、鼻で笑うのよ」

「それで、バレー部のキャプテンとソフトテニス部のキャプテンは仲が良くて私に見てあげてって。それで先輩の顔をつぶすわけにはいかないしね」

「……背に腹は代えられないのよ。頑張って練習してきたんだから試合に出たいじゃない」

宏美は友香に勉強を教わる事になった経緯を話し、宏美はすでに勉強が嫌になっているようで肩を落とす。

「それで、吉井さんは何のよう？」

「えーとね。もう少し待ってて」

「邪魔するぞ。中林はいるか？」

友香は宏美の様子に苦笑いを浮かべながら深秋にEクラスを訪れた理由を聞いた時、雄二を先頭にして明久と瑞希が教室に入ってきたのを見て、

「あれ？ 何かあったんですか？」

「原口くんも参加して、聞いて貰いたい事があるんだ……小山さん！？」

「……吉井くん、私がここにいたらおかしいのかしら？」

薫が駆け寄ってくると明久は薫にも聞いて欲しいと言った後に友香がいる事に驚きの声をあげると友香は不機嫌そうな表情をするが、

「お、ちょうど良いな。手間が省けたぜ」

「ちょうど良い？」

雄二は友香がいる事で手間が省けたと言うと宏美は首を傾げると、

「ああ、今、清涼祭の事で各クラスに協力して貰えないかって話を

しているんだけどな」

雄二は真剣な表情をして清涼祭での学年で協力しての展示物と下位ランク設備の向上の話をする。

「どうですか？」

「そうね。私達Eクラスとしては断る理由はないわね……個人的にもそうして貰った方が助かるし、特にうちのクラスは私を含めて部活中心の生徒が多いから、部活の方の出し物もあるから、クラスの方がおろそかになりそうだし」

「うん。Eクラスは問題ないと思います。たぶん、賛同してくれる人は多いと思います」

雄二が話し終わると提案に考える事があるようで黙ってしまった宏美、友香、薫の様子に瑞希は不安そうな表情をして聞くと宏美と薫は頷くが、

「良い提案だけど、直ぐには答えられないわ」

「どうして？」

友香は直ぐに返事はできないと答えると深秋は首を傾げると、

「私も部活をしている人間だから、中林さんの意見とは同じでそうなる助かるんだけど、私は試召戦争でクラスをまとめるのに失敗している身よ。代表なのに暴走してクラスを敗戦に導いたのは事実だからね。1人で直ぐに答えを出すような事はできないわ。恋華や眞崎くん、羽鳥さん、クラスのみんなにも話を聞いて貰うのよ。そ

れに学年での協力はまだ許可を貰ったわけじゃないでしょ。まずはそこをはつきりさせないと返事のしようがないわ」

「まあな。一応は放課後にでもこの事を妖怪ばあに話をしてくれるつもりだ。それに今はその返事が貰えれば良いさ」

友香は彼女なりに試召戦争で学んでいる事もあるようで直ぐに返事はできないと言うが雄二は一先ずは各クラスの代表が提案を好意的に受け止めてくれた事に笑顔をさせる。

「まあ、一先ずは設備向上は置いておいても協力って面はどうにかしたいわね」

「中林さん、あなた達Eクラスにとっては設備向上が重要じゃないかしら、3カ月後に旧校舎に戻るわけだし、実際問題、これは酷いわよ」

宏美は大きく頷きながら言う「と友香は宏美がやっていたノートを見てため息を吐くと、

「「「……」」」

明久、深秋、薫は宏美のノートを見てもまったく理解できなかったように視線を逸らし、

「ちょっと、止めてよ!？」 少なくともあなたは試召戦争を勝つて上の設備にいるんだから、こんな問題がわからないなんて言わないでよ!？」

「……小山、俺達は俺達のペースで勉強しているから、そんなに責

めないでくれ」

「あ、あの。坂本くんもですか？」

友香は3人の反応に声をあげると雄二は気まずそうに3人を弁明し、そんな雄二の様子に瑞希は雄二も理解していないと思ったように顔を引きつらせ、

「な、なんで、私達はこんな人達に負けたのよ。泣きたくなくなるわ」

友香は情けなくなってきたように肩を落とす。

第139問

「失礼します　おばあちゃん、いますか？」

「ちよ、ちよつと、みあ!？」

「……吉井さん、坂本くん、こんな事をして悪い印象を与えないかな？」

「言っても仕方ないだろ。平賀も行くぞ」

「うん」

放課後になると深秋、明久、雄二、源二の4人は学園長室の前までくると深秋はノックをする事なく学園長室に入って行き、明久は慌てて深秋を止めるが深秋は止まる事なく明久は深秋に引きずられて行き、2人の様子に源二は顔を引きつらせるが雄二はこの状況にすでに麻痺しているようで気にする事なく源二に声をかけて2人を追いかけて学園長室に入って行くと、

「……なんの用だい？　くそじゃりども、あたしは忙しいんだよ。だいたい、ノックくらいして入ってきな」

「おばあちゃん、お願いがあるんですけど」

「……みあ、あんだ、あたしの話を聞いているのかい？」

カヲルは不機嫌そうな表情をして深秋達の相手をしているヒマはないと言うが深秋は気にする事なくカヲルの事を覗き込むとカヲルは

肩を落としてため息を吐く。

「み、みあ、何をしてるんだよ!? そんなばあ長に近付いたらダメだよ!? 妖怪の毒気にあてられちゃうよ!?」

「待て、明久、みあはばあ長を何と呼んだ? この妖怪!!! すでにみあを洗脳してやがる。汚いマネをしやがってみあを解放しろ!!!」

「……あんた達はわざわざあたしを訪ねて来て置いてケンカを売ってるのかい?」

明久と雄二は深秋とカヲルの様子にかなり失礼な事を叫ぶとカヲルは眉間にしわを寄せながら言った後、

「ん? 何だい、今日はいつもと違うメンバーだね。みあ、何かあったのかい?」

「はい。今日はお願いがあってきました。こっちはDクラス代表の平賀源二くんです」

「Dクラス代表の平賀源二です」

カヲルは源二に気づくと深秋はカヲルに源二を紹介し、源二は緊張した様子でカヲルに向かい頭を下げ、

「Dクラスの平賀ね。それがみあやFクラスのバカどもと一緒になんの用だい?」

「……おい。明久、なぜだ? みあはばあ長から特別扱いされて

るみたいだぞ」

「う、うん。 どうしてだろう?」

深秋とカヲルの様子に2人の間に何かあると思ったようで2人でそこそと話を始めると、

「みあは兄の方と違ってしつかりと観察処分者の仕事をしてくれるしね。 あたしからの仕事も嫌な顔1つしないでしてくれるからね。 当然の結果さね。 それで、みあ、他のクラスの代表と一緒になんて何があつたんだい? くそじゃりどもも座りな」

「うん。 えーとね」

カヲルは深秋の評価は当然だと言うと深秋達に来客用のソファに座るように言い、自分もソファに腰をかけると深秋に学園長室に来た理由を聞くと深秋はカヲルに学年での共同の展示物と設備向上の件を話す。

「……やはりダメでしょうか?」

「そうさね…… あんた達は文月学園ウチのルールを思いつきり破ろうとしてるわけだしね。 文月学園ウチが設備に差をつけている意味はわかってるはずだよな?」

「ああ、設備に差をつける事で向上心を煽る事、設備向上をしてしまえばそれが崩れるって言うんだろ」

カヲルは深秋からの説明を聞いて眉間にしわを寄せると文月学園の根底にあるルールを確認すると雄二はわかっていると言うが、

「わかっているなら、この提案が受け入れられない事もわかるね」

「ああ、だから、条件を持ってきた」

「……まったく、このくそじやりは嫌になるね。脅迫なんて汚いマネは止めてくれないかい」

カヲルはため息を吐き、雄二はニヤリと笑うとカヲルは雄二が何を使って脅しをかけてくる事も理解しているようであり、

「脅迫なんておかしな事を言わないでくれ。今回はあくまでお願いだ」

「やれやれ、仕方ないね。流石にかわいい生徒達のお願いだ。むげに断るわけにもいかないさね。だけど、その代わりにこっちからも条件を出すよ」

雄二は脅迫なんてする気はないと笑うとカヲルはカヲルにも思惑があるのかにやりと口元を緩ませて条件があると言う。

「また、ろくでもない事ですか？ ばばあ長」

「……あたしがろくでもない事しかしてないような事を言うんじゃないよ。くそじやり、何でみあの兄貴はこんなにバカなるくでなしなのかねえ」

明久は白金の腕輪の実験もあるため、カヲルに向かいくでもない事だと言うとカヲルは深秋と明久を交互に見てからため息を吐き、

「まずはわかっているだろうけど学年が同意したという証明。各クラスの代表の連名で提案書を持ってきな」

「それで良いんですか？」

カヲルは提案書の提出と言つと源一はあまりの呆気のない言葉に驚きの声をあげるが、

「平賀、騙されるな。この後が本題だ」

「流石に坂本は頭が回るね。あんた達は清涼祭で召喚大会が開かれる事は知っているね」

「えーと、確かペアで出場のトーナメントですよ。白金の腕輪は優勝賞品だつて……」

「……ばばあ、まさか、腕輪の修理が間に合わなかつたつて言うんじゃないだろうな？」

雄二はそれだけでは終わらないというとカヲルは清涼祭に開催される召喚大会の話を出すと雄二と明久は白金の腕輪に不備があると思つたよう眉間にしわを寄せる。

「白金の腕輪？ たしか、新技術として発表される腕輪だよ。どうして、それを吉井さんと坂本くんが知っているんだ？ それに修理つて」

「えーとね。ボク達が模擬試召戦争をしていた時におばあちゃんから試作品のデータ取りを頼まれてたんだよ」

「そうなのかい」

源二だけは白金の腕輪に心当たりがないため、首を傾げると深秋が簡単に白金の腕輪を自分達が知っている理由を説明し、源二は先ず納得が言ったように頷くと、

「白金の腕輪に関しては何の問題もないさね。ただ、あんた達の協力のおかげで時間が余ってね……」

「ばばあ、今度の腕輪も爆発するんじゃないだろうな!!」

「ばばあ、僕達をなんだと思ってるんだ!!」

カヲルは白金の腕輪の修理は問題ないと言った後、言葉を濁らせる
と明久と雄二はカヲルの言葉に何があったかを理解したようにカヲルを怒鳴りつける。

第140問

「えーと、吉井さんと坂本くんも落ち着いてよ。まだ、悪い事と決まったわけじゃないんだし」

「平賀、言っておく、このばあは俺達に試作品の白金の腕輪のデータ収集をさせる時に暴走する可能性もあるのに俺達ならどうなっても良いと言いやがったんだぞ」

「暴走しなかったんだ。問題なんてないね。だいたい、バカなあんな達じゃ暴走はしないと行ってあったはずさね」

源二は明久と雄二に落ち着くように言うが雄二はカヲルが白金の腕輪のデータ収集時に言った事を思い出しながら叫ぶがカヲルは何も問題なんかなかったと言うと、

「召喚大会の優勝ペアには白金の腕輪と如月グループから今度オープンする如月ハイランドのプレミアムオープンチケットが与えられる」

「こっちは問題なさそうだね。白金の腕輪は問題ないって言ったし」

「うん。それでおばあちゃん、それなら何が問題があるの？」

カヲルは召喚大会の優勝賞品を話し、深秋と明久はここまでは何も無いと言って次に続く言葉を待ち、

「準優勝ペアには優勝ペアと同じように如月ハイランドのプレミアム

ムオーブンチケットと『錬創の腕輪』が与えられる」

「……錬創？ 当て字か？ 練って創るか？ で、効果と不具合は何だ？ ばばあ長」

「不具合って？ 学園長、どう言う事ですか？」

カヲルが準優勝ペアに与えられる腕輪の名前を出すと雄二は眉間にしわを寄せながら腕輪の詳細を話すように言つと源二は立ち上がりカヲルに聞く。

「まあ、落ち着きなよ。錬創の腕輪の効果は2つ。1つは武器の変更、これ召喚獣の基本装備の武器以外に2種類の武器を登録する事で装備を変更する事が出来る。まあ、いくつか細かい設定もあるんだけど、その件は省略するよ。もう1つは……」

「1つの効果が武器の変更って事は防具の変更かな？」

「くそじゃり、正解だよ。もう1つは防具の変更。まあ、装備によつて防御力や召喚獣の可動域も変わってくるからね。召喚獣の動作に影響があるはずだよ」

カヲルは源二に落ち着くように言つと錬創の腕輪の効果を話し始めると明久は1つ目の腕輪の能力から2つ目の腕輪の能力を推測するとカヲルは感心したように頷き、

「防具変更の腕輪は正常に機能するんだけどね。どうしても武器変更の腕輪が上手く行かなくてね。点数的にはこの間と同じようにクラス程度の成績で暴走する」

「それなら、その腕輪を賞品から外すわけにはいかないんですか？」
カヲルは腕輪の1つが暴走すると言つと源二はその腕輪を賞品から外せと当たり前前の事を言うが、

「……ばばあ、それを俺達に取れって言いたいのか？ 確かに俺と明久、みあ、平賀も点数的には問題ない。俺と明久は現在Dクラス相当の成績、みあもEクラスの中堅くらいまでは成績が上がってる。だからと言つて3年やAクラスも出てくるんだ。はつきり言つて難しいぜ」

「難しい？ できないとは言わないんだね。くそじゃり」

雄二は面白くなってきたと言いたげに口元を緩めるとカヲルは雄二を挑発するように笑い、

「……雄二、これってチャンスだよな？」

「ああ、元々、白金の腕輪は欲しかったからな。俺と明久でどうかしようと思つてたが、まさか、白金の腕輪以外にも戦力をあげれる腕輪が貰えるなんてな。これでAクラスを倒すのに必要な駒が増えるぜ」

明久と雄二は不具合の事より、『錬創の腕輪』に魅力を感じているようにニヤリと笑つと、

「平賀、悪いが腕輪は俺達Fクラスが貰う」

「それはかまわないけど、暴走するかも知れないんだぞ」

「点数しだいだからね。今の僕達なら問題ないし、それに腕輪とか特殊な装備ってわくわくしない?」

源二の心配事など2人は気にする様子も見せずに『鍊創の腕輪』はFクラスが貰い受けると言う。

「ばばあ、その条件は飲むがこのままじゃ優勝と準優勝は無理だ。鍊創の腕輪を取るためにトーナメント表の参加者の振り分けと教科選択は俺の自由にさせて貰うぞ」

「ああ。点数の水増しは無理だけどそれくらいは許可してやるよ。あたしも高得点者に腕輪を取られてお披露目の時に暴走するとスポンサーとかいろいろと面倒でね……平賀って言ったね。あんたはここでこの事を他の人間に話すんじゃないよ。話した時点であんた達の提案は却下だからね」

「し、しかし、暴走するかも知れないものを賞品として出すわけには」

雄二は準優勝ペアを出すために条件を出すとカヲルは雄二の提案に頷くが源二はやはり納得がいかないようであるが、

「おばあちゃん、清涼祭、ぎりぎりまで腕輪のデータ収集はできないの?」

「ん? そうさね。みあ、手伝ってくれるかい?」

「うん」

深秋は源二の心配もわかるためか、カヲルに『鍊創の腕輪』の暴走

を抑えるために協力できる事はないかと聞くとカヲルは深秋の言葉に優しいな笑みを浮かべ、

「だ、だけど」

「平賀、気にするな。腕輪のデータ収集はみあが手伝ってギリギリまで修理するんだ。暴走する点数を引き上げられる。もしくは召喚大会の時には修理が終わっている事もある」

「そう言う事、それなら、僕達は僕達のやれる事をするよ」

明久と雄二は納得がいかなさそうな源二の肩を叩くが源二の迷いは晴れる事はなく、

「……………そうだね。一先ずはできる事からやろうか」

源二は自分が大変な事に巻き込まれているため肩を落として力なく笑う。

第140問（後書き）

どうも、作者と

深秋「主人公です」

「まずは深秋用に作った『錬創の腕輪』のお披露目です。

深秋「れんそう?」

名前はどうしようか考えました。白金の腕輪の対だから黒金にしようかな?とも思いましたが黒金は多くの方が使ってますね。特にバカテス二次創作最強の方が

深秋「同じにして迷惑かけたらなんだしね」

そうですね。中堅は大手さんには頭が上がらないので仕方ありません。（苦笑）

「一応、深秋用の腕輪を武器変更としたのは弓は近距離戦で不利だからですね。操作技術が高い深秋でも戦線が維持できない時は囲まれて攻撃ができなくなってしまう。その時は攻撃を交わすだけではなくわずかでも攻撃をできるようにするためです。」

深秋「うん。そんな状況が作られるわけだね」

ハハハ、ナニヲイツテルンデスカ。

深秋「怪しいんだけど」

まあ、気にしない方向で行きましょう。

後は前にBクラスとDクラスの人材不足と言う話をさせていただきましたが感想にコメントいただきましたが総評数5票。

うん。あまり、関心は持たれなかったようだ。（苦笑）

深秋「まあ、そんなもんだよね。それでどうするの？」

一応は募集に好意的な意見の方が多かったですから募集しようと思います。

で、下が募集事項。

深秋「軽いノリだね」

もう3回目ですしね。

今回、募集するのは3名

Dクラス男子1名

Bクラス男女1名ずつ

募集事項

名前

性別

所属クラス：B or Dクラス。

得意教科：1教科 or 2教科（150～300点）

苦手教科

総合得点

Dクラス1201～1450点
Bクラス1601～2100点
くらいで考えてます。

タイプ

特化型（深秋、康太、美波、薫、恋華、真子）
バランス型（瑞希、秀吉、公介、蓮、恋）
隊長型（明久、雄二、咲耶、巧）

備考

禁止事項

本当はAクラスの成績。
原作キャラの兄弟。
観察処分者。

完全な話を壊すチートキャラ。

明らかに話を読んでくれていない上での投稿。

例

名前 吉井ヨシイミナキ深秋

性別 女

所属クラス：F

得意教科：家庭科450点、現代文200点

苦手教科：化学、日本史、世界史

総合得点：987点

タイプ：特化型

備考：実の兄である吉井明久を血の繋がりと言っ些細な事を気にしないので愛する少女。

趣味はコスプレの衣装作り。読書（BL本含む）
兄と同じく観察処分者。

募集期間は第145問までです。

深秋「短いね」

まあ、待ってもあまりないって事を学びましたから、投稿してくれる人は割とすぐに送ってくれます。投稿方法は感想板、作者のメルボックス。活動報告にも書き込みができるようにしておきます。

深秋「お友達を待ってます……投稿なかったらどうするの？」

投稿がない場合や明らかに話からそれているキャラしか投稿されない場合は自分で作ります。

第141問

「一先ずは、誰で腕輪を取りに行くかだよな？」

「そうだね」

カヲルから『鍊創の腕輪』の事を言われた翌日の朝、明久と雄二は召喚大会に参加させる人間を考えているようであり、昨日、カヲルから貰った召喚大会開催のポスターを眺めていると、

「明久、雄二、難しそうな顔をして合同の出し物の件は上手く行かなかったのか？」

「いや、それは上手く行った。要求された提案書も一応は作った。後は各クラス代表のサインが貰えればそっちは問題ない」

「それではなんで首をひねっておるのじゃ？」

秀吉は2人の様子に声をかけると雄二は学年での合同の展示物は上手く進んでいる事を告げると秀吉は2人の様子に首を傾げる。

「ちよつとね。この間、模擬試召戦争で白金の腕輪を使わせて貰った。それが召喚大会の優勝賞品になるって言うからAクラスと戦うために欲しいんだよ。それ以外に準優勝でも『鍊創の腕輪』ってのが賞品になってるからさ。せっかくだから、腕輪を全部、僕らで取れないかな？ と思って」

「そうなのか？ ……こ、これは!？」

明久は『錬創の腕輪』に不備がある事は告げずにどうにか優勝と準優勝をFクラスから出したいと言うと秀吉はポスターを手に取ると賞品を見て驚きの声を上げ、

「どうしたの？ 秀吉？」

「明久、雄二、一組はお主達と決まっておるのじゃな？」

「そうだな。多重召喚の腕輪は明久と相性が良いし、フィールド展開の腕輪は使い勝手で考えると俺が持つのが1番なんだよな」

秀吉は慌てて2人に召喚大会のペアを確認すると雄二は自分と明久が組むと言い、

「そ、そうなら、他は誰が出ても良いわけじゃな？」

「まあ、そうだけだな。錬創の腕輪の能力を考えると武器変更の腕輪にみあやムツツリー二、島田みたいな1教科に特化した人間が持つ方が良い気がするんだよ。でも、トーナメントだから、上手く相手を選ばないと勝ち抜けないだろ」

秀吉は何か考えがあるのか慌てた様子で雄二に聞くと雄二は出場ペアをどうするか考え付かないようで乱暴に頭をかくと、

「そ、それなら、ワシがみあとと一緒に出場するのじゃ、ワシは姉上に勉強を見て貰っておるからFクラスではバランス良く点数は取れておるし、みあとも試召戦争では組んで動いておったから相性はばつちりじゃ」

「秀吉とみあか？ ……」

「ダメね。みあと秀吉は組ませられないわ」

秀吉は明久と雄二に向かい自分が深秋と出場すると言い、雄二は少し考えると秀吉の持っていたポスターを優子が取り上げて秀吉と深秋を組ませる事に反対する。

「木下さん？ 朝から、どうしたの？」

「代表から伝言よ。Aクラスは正式にあなた達の提案に乗るわ。代表は直接、坂本くんに報告したかったみたいだけど、代表を1人でFクラスに行かせると帰ってこなくなるから、咲耶君達が代表を捕まえているわ」

明久は優子にFクラスの教室を訪れた理由を聞くと優子はAクラスが合同展示に正式に参加する事を伝えに来たと言い、

「そうか。これでは3クラスだな」

「うん」

「あ、姉上、なぜ、ワシがみあと出場するのは反対なのじゃ？」

明久と雄二は笑顔を見せて頷くが秀吉は優子が自分と深秋がペアを組む事に反対している理由を聞くと、

「決まってるでしょ。秀吉、あんた、下心が透けて見えてるからよ。如月ハイランドのプレオープンチケットを取ってみあとデートとか考えてるんですよ。言っておくわ。あんたみたいなダメな弟にみあは渡さないわ」

優子は秀吉に向かいビシッと指差しながら言い、

「……明久、このセリフってお前が言うべきなんじゃないか？」

「う、うん。みあの彼氏になりたいって人には言ってみたいセリフだけど、秀吉は女の子なんだから、秀吉に言う事じゃないよ」

雄二は深秋を狙う秀吉の前に立ちはだかつたのが秀吉の実の姉の優子である事に苦笑いを浮かべながら明久に言っていると明久は女の子同士の交際は認めないと秀吉を女の子扱いする。

第141問（後書き）

どうも、作者と

深秋「主人公です」

秀吉の前に立ちほだかる優子……これがやりたかった。（爆笑）

深秋「なんか、ボク、ゆうちゃんに愛されてる？」

取り敢えず、実の弟の秀吉よりは深秋の方が大切な感じですよ。姉弟ってこんな感じかな？というイメージで実際は知りません。

深秋「うん。どうなんだろうね。ボクはアキ兄のお嫁さんはみずきちゃん以外は認めるつもりはないけどアキ兄はどう思ってるんだろうね？」

さあ？ 取り敢えず、秀吉は論外なんじゃないですか？

深秋「そうかも」

深秋は実際、秀吉を好きかは決めてないですからね。最初は遊びで書いてた感じだし、かわいい男の娘をからかいたって感じで今も進行中ですがそれが恋愛になるかは謎ですよ。

深秋「うーん。実際、僕も恋愛ってわからないからね。しょうこちゃんやみずきちゃんを見てると良いものなのかな？とも思うけど」

深秋は現状では恋を知らない少女ですよ。だから、明久に飛びつくっ

て感じ。

深秋は誰かを好きになるんでしょうか？

言っておきます。これはキャラ募集をしている手前『ネタふり』ではありません。まあ、とらえ方は読んでいる方次第。(爆笑)

後は投稿キャラですが名前に振り仮名もお願いします。

深秋「ボクも作者さんも読めないと困るからね」

そうですね。

第142問

「普通の姉上なら応援してくれるところではないのか!？」

「そうね。普通の弟なら応援くらいしてあげるわ。あんたは前提が間違ってるのよ。みあとと一緒にペアチケットが欲しいと思ったなら吉井さんと坂本さんに助け船を出して貰うようにしないで、みあとに直接、行くのが筋でしょ。それなのにあんたは周りから埋めようとした。男らしくないわ。相手がみあじゃなかったら、あたしも何も言わないけど。みあはあたしにとって大切な友達なの。大切な友達とあんたみたいな半端ものの応援なんかするわけないでしょ」

秀吉は優子に姉として応援してくれるところだと言うが優子は秀吉の言葉を斬り捨て、

「……これ、何だ？」

「うん。これってよく言うあれかな? ……結婚を願ってきた男の人を怒鳴りつける父親?」

「ああ。何か、そんな感じだ」

明久と雄二はすでに2人に置いて行かれていよう。他人事のように2人を眺めており、

「半端もの? なら、姉上はどんな男ならみあと釣り合つと言つんじゃない?」

「どんな男? そうね……みあは夢を目指しているから、そんなみ

あをしつかりと支える事のできる堅実なタイプね。まあ、あの子は夢見がちだから同じタイプを好きになるかもしれないけど、目の前の事だけやって夢や将来を語ってるようなあんたみたいな現実を見てないタイプじゃなく、夢を目標としてそれまでの過程を考察して必要な道筋を立てて向かって行くタイプ……言いたくないけど咲耶君みたいなタイプね」

秀吉は優子に叩きのめされながら、どんなタイプなら優子は深秋との事を認めてくれるのかと聞くと優子は少し考えながら、深秋の彼氏に許せる男に咲耶の名前を出すと「ガン」と言う音が響き、

「島田さん、どうかした？」

「な、何でもないわよ！？ よ、吉井は気にしないで！！」

明久はその音の原因は美波が何かに驚いて机に頭をぶつけた音であり、明久は慌てて美波に声をかけるが美波はぶつけた頭が痛いのか少し涙目で何も無いと言う。

「でも、おでこ、赤いよ」

「だ、大丈夫よ！？ な、何も問題ないわ」

「そうか？」

明久と雄二は秀吉と優子の話を聞いていても仕方ないためか美波は何もないと言うと1人で教室を出て行き、

「あ、姉上に言われる筋合いはないのじゃ……！ ワシはみあを直接誘ってくるのじゃ……！！」

「誘えるものなら、誘ってみなさいよ。あんたの事だから、みあを目の前にしたら何も言えないでしょうけどね」

「そんな事はないのじゃ！！ 見ておれ、絶対にみあを誘って見せるのじゃ！！」

その間にも秀吉と優子の話は進んでいたようで秀吉は涙目になりながら深秋を召喚大会のペアに直接誘うと叫ぶが優子は秀吉の言葉を斬り捨てると秀吉は深秋を試召競争に誘うと叫んで教室を出て行くとした時、

「おはようございます」

「おはようございます」

深秋と瑞希が一緒に教室に入ってくる。

「み、みあ！？」

「なあに？ ヒデくん？」

秀吉は深秋の登場に優子に深秋を誘うと言いきった手前、直ぐに言いだそうとするが優子の言った通り、緊張しているのか言葉が出てこないようであり、

「うーん。ヒデくん、ちょっと待ってね。アキ兄、ゆうじくん、ボク、召喚大会、みずきちゃんと出るからね さっき、おばあちゃんのところに参加するって言ってきたよ」

「はい。私とみあちゃんで開催したいと思います」

深秋は瑞希と召喚大会の話をしていたようで明久と雄二が考えている事など気にする事なく出場を決めてきたと言い、

「ほらね。あんたじゃダメなのよ」

「……」

優子は深秋の言葉を聞いて真っ白に燃え尽きている秀吉の肩を叩いてため息を吐く。

第142問（後書き）

どうも、作者と

深秋「主人公です」

読んでる方の9割くらいが予想していたと思います。が深秋のペアは瑞希です。

深秋「みずきちゃんといっしょ」

『錬創の腕輪』には第140問で説明した能力以外にもいくつか特殊能力を付加しています。それは2人で使わないといけないので深秋の親友のポジションである瑞希をペアにしようと思いました。

深秋「それで防具の方は不具合がないんだね」

そういう事です。

そして、秀吉は燃え尽きる。言っておきます。作者は秀吉が大好きです。

深秋「でも、それ以上にさごとです」

そういう事です。明久も秀吉も涙目が1番似合うと思っってます。

第143問

「みあと姫路か？」

「ダメ？」

雄二は深秋と瑞希から聞いた召喚大会参加に少し考えるような素振りを見せ、深秋は雄二の様子に首を傾げて聞き返し、

「いや、悪くはないな。みあと姫路はFクラスでは主戦力だからな。2人が腕輪を持っていれば戦略の幅が広がるからな」

「うん。そうだね。だけど、姫路さん、よく召喚大会に参加する気になったね。姫路さんって召喚大会みたいな催し物ってあんまり好きじゃないでしょ？」

「は、はい。人前に立つのはあまり得意じゃないんですけど……」

「それなら、どうして？ 無理しなくても良いんだよ」

「そ、それは……プレオープンの子チケットで吉井くんを誘えって言うってくれて、1人じゃ不安ですけど、みあちゃんとならやれそうな気がするんです」

「どうしたの？ また、みあが無茶な事を言ったの？」

雄二は深秋の様子に苦笑いを浮かべながら深秋と瑞希が腕輪を持つのは利点があると頷き、明久は雄二の言葉に頷くが瑞希は進んで人前に出て行くようなタイプではないためか不思議そうに首を傾げる

と瑞希は恥ずかしそうに明久から視線を逸らしながら小さな声で明久と2人で如月ハイランドでデートをしたいと言うがその声は小さすぎて明久の耳には届かず、

「みあ、どうして、明久は姫路の気持ちに気付かないんだ？」

「アキ兄は気づいてるよ。でも、まだ、みずきちゃんの隣を歩く勇氣がないんだって、誰かに似てるね」

「……そう言うお前はどんなんだ？ それなりに須川やファンクラブを語る奴らから告白とかもされてるんだろ？ セツかくの学祭なんだ。誰か、誘って歩く気とかはないのか？ もしくは誘ってくれる相手とか」

「……」

明久と瑞希の様子に雄二はため息を吐くが深秋は雄二の言葉を否定した後、雄二も明久と同じだと言いたげにくすくすと笑うと雄二は深秋に痛いところを突かれたのと先ほどから真っ白になってる秀吉に助け船を出そうとするが秀吉は未だ傷が癒えないよう微動だにせず、

「うーん。ボク、恋愛って良くわからないから、みずきちゃんやしようこちゃんが頑張ってるのを見ると良いものだとは思っけど今はそんな風に誰かを想えないかな？ ボクはボクでやりたい事もあるしね。それに誰か1人と思っ出を作るよりはみんなと一緒にいっばい楽しい思っ出を作りたいよ」

「ちょ、ちょっと、秀吉!？」

深秋は雄二の言葉に少しだけ困ったように笑いながら『恋愛をする気はない』と言うと秀吉を始めとした多くのクラスメート達が崩れ落ち、優子は秀吉のダメージが予想を大幅に超えたように秀吉の肩を揺するが秀吉は反応する事はなく、

「だからこそ、みずきちゃんとしようこちゃんを応援したいのかな？ 本当はゆうちゃんのも応援したいんだけど、ゆうちゃん、薄くて男の子しか出ない本にしか興味が！？ い、いふあいよ。ゆうちゃん！？」

「みあ、こんなところで何を言うつもりなのかしら？」

「本当に仲が良いな」

深秋は親友3人の恋愛を応援したいと言いながらも優子の恋愛だけはどう応援したら良いかわからないと言うと優子は秀吉を放り投げて深秋の頬をつねり、雄二は深秋と優子の様子に苦笑いを浮かべる。

第143問（後書き）

どうも、作者と

深秋「主人公です」

後書きで何度か書いてましたがついに本編でした。『深秋恋愛なしよ?』宣言。（爆笑）

深秋「です」

実際は読んでいる皆さんはどう思ってるんでしょうかね？

深秋「批判とか来るかな?」

わかりませんね。深秋はみんなと一緒に仲良くしたいが本質ですからね。それを変えるだけの男性ひとはいない。

それを変えるだけの何かがあれば良いんですけどね。

深秋「そうだね」

第144問

「……そうよね。大河の隣はウチじゃなくみあの方が似合うよね」

美波は屋上で教室で優子が話していた深秋に相応しいのは咲耶だと言う事に納得している自分がいる事に気づき小さな声でつぶやくと

「そうよ。だいたい、ウチは吉井の事が好きなんだから、悩むような事じゃないわよ。大河の告白に驚いたただけであつた。この気持ちはそのよ。当てられてるだけよ……」

咲耶の告白により、自分の中で咲耶が明久より大きくなっていく事に気づきながらもその想いにふたをしようとするが、

「美波ちゃんはどうかやら大河くんに告白されたみたいですね。わたしは美波ちゃんと大河くんはお似合いだと思いますよ」

「は、陽菜！？ い、いきなり、何を言ってるのよ！？ と言うか、何で聞いているのよ!?!」

「私もいますよ。しかし、大河くんが美波さんに告白ですか、それでここ最近の美波さんの反応がおかしかったんですね」

美波を見つけた陽菜と真子が美波に声をかけ、美波は2人にまったく気が付いていなかったよついで驚きの声をあげる。

「な、何を言ってるのよ!?! う、ウチはおかしい事なんかまったくないわ。いつも通りよ」

「明らかに動揺してますよ」

「そうですね」

美波は2人に聞かれた事を誤魔化そうと全力で何か言おうとするが2人はすでに全てを察しているようで生温かい目で美波を見ており、「だから、違うわよ!？」 あれは大河の冗談だし、ウチはからかわれてるだけなんだから」

「何が違うんですか？ 大河くんが美波ちゃんに告白したか本意を確認してきましようか？」

「陽菜さん、それは少しやりすぎだと思いますよ」

美波は顔を真っ赤にして2人の思っている事は嘘だと言おうとする
と陽菜は首を傾げながら事実を咲耶に確認しに行くと言いだし、流石にそんな陽菜を行動を真子は止めると、

「は、陽菜、ウ、ウチになんの恨みがあるの？」

「恨みなんかありませんよ。ただ、男の子だろうと女の子だろうと告白をしてきたんです。それを嘘や冗談で片付けられてしまったのは大河くんがかわいそうですねから」

「そ、それは、で、でも、あいつ、軽いし、本気かどうかなんかわからないでしょ？ それに……」

美波は陽菜に向かい嫌がらせは止めて欲しいと言うが陽菜は美波が咲耶の告白を嘘や冗談で片付けようとしている事に少し怒っている

ようであり、彼女にしては少し珍しく語尾を強く言うと美波は咲耶の告白は本人からは冗談ではないと言われているもの教室での優子の言葉が気になるようで目を伏せてしまい、

「陽菜さん、大河くんの告白が冗談ではない事は美波さんが一番、理解しているようですよ」

「そうですね。それなら、何を悩んでるんですか？ 美波ちゃんは大河くんの事が嫌いですか？」

「き、嫌いじゃないわよ。だ、だけど、いきなりだったし、それに大河がウチのどこを好きになったのかだってわからないし」

美波の様子に真子は美波は勢いで咲耶の告白が冗談だと言ってしまった事に気づき陽菜に落ち着くように言うと陽菜は美波に咲耶をどう思っているかと聞くと美波は咲耶から自分のどこを好きになったか聞いていない事もあるのか不安そうな表情を言う。

第145問

「それじゃあ、それを聞く事ですよね」

「そ、そうかも知れないけど、それを改めて聞けって言うの!？」

「でも、聞かないと納得できないのでしたら、仕方ないのではないですか？」

美波の表情に陽菜は咲耶が美波のどこを好きになったか聞く事が先決だと言うが美波は顔を真っ赤にしてそんな事を聞けるわけがないと首を振るが真子も陽菜の意見に頷くと、

「で、でも、ウチ、告白されたの初めてだし、大河にどんな顔をしてあつたら良いかわからないし」

「それは告白された事のない。わたしへの自慢ですか？」

「……美波さん、見そこないました。友達になれたと思ってましたのに」

美波は告白された事がないからどう咲耶と向い合って良いかわからないと言うと陽菜と真子は美波をからかうように言い、

「そ、そんな事じゃないわよ!？ だいたい、2人は模擬試召戦の後、たくさん、告白されてたでしょ？」

「あんなのは告白になんかありませんよ。Fクラスの人達は確かに告白紛いの事は言ってきましたけど、実がないんですから、そんな

告白は心には響きませんし」

「そうですね。大河くんの告白はそれとは違ったから、美波さんは悩んでいるのではないですか？」

美波は陽菜と真子の反応に2人を怒らせてしまったようで慌てるが2人はそんな美波の様子にくすりどりと笑うと美波への咲耶の告白は本物だから心配する必要はないと優しい笑みを浮かべる。

「そ、そうなのかな？」

「それじゃあ、聞き方を変えますね。美波ちゃんは大河くんの事を先ほどは嫌いじゃないと言いましたが好きですか？ その好きは友達としての好きですか？ 男の人としての好きですか？」

「そ、それは……」

美波は小さく頷くと陽菜は咲耶への美波の好意はどんな種類かと聞くと美波の顔はゆでダコのように耳まで真っ赤に染まって行き、

「聞くまでもないですね」

「そうですね」

「うー」

陽菜と真子は美波の様子にくすくすと笑うと美波は2人からかわれる事も理解しているようで恨めしそうな視線を2人に向けてるが相談に乗ってくれている2人におかしな事を言えない事は理解しており、

「せっかく、清涼祭があるんですから、チャンスですよ。今回はFクラスの人達が言いだした企画にわたし達Eクラス以外にもきつと賛同してくれますし」

「Aクラスの人達はみあさんと仲がよろしいですから、大河くんと一緒に作業をすればチャンスはありますよ」

陽菜と真子は美波に清涼祭の準備期間を無駄にしないように言うが、

「何？ その企画って？」

「……」

美波は咲耶の告白から今まで教室での話がまったく耳に入っていなかったようで首を傾げると陽菜と真子はここまで真剣に咲耶の事を考えていた割には何も答えの出せていない美波の様子に大きく肩を落とす。

「えーと、一先ずはFクラスから出てきた企画って言うのはですね……」

「そ、そうなの？ 全然、ウチ、知らなかったわ」

「まあ、それだけ真剣に悩んでいたって事でしょうから、何も言いませんが、1つ覚えておいてくださいね」

陽菜と真子は美波にFクラスが考えている企画の話をするると美波は感心したように頷き、真子は苦笑いを浮かべたまま美波に何かを忠告しようとするど、

「な、何？」

「2学年、全てを巻き込むって事は美波さん以外にも大河くん近づきたい女の子がいるわけです。清涼祭はお祭りですから彼氏や彼女が欲しいと考える人達は多いですから、最近、私も剣道部の後輩から大河くんには彼女がいないかとか聞かれましたし」

「そ、そうなの？」

「そうですね。以前、みあちゃんから聞きましたけど、やっぱり、大河くんは人気が高いみたいです」

美波は慌てて真子に聞き返すと陽菜と真子から改めて咲耶の人気の高さを聞かされ、

「そ、そうなんだ」

「だから、落ち込んでダメですよ」

「そうですねよ」

美波は自信がなさそうに肩を落とし、陽菜と真子は咲耶の事で一喜一憂する美波の様子に苦笑いを浮かべる。

第145問（後書き）

どうも、作者と

咲耶「咲耶です」

どうですか？ 美波が悩んでいる姿は？

咲耶「まあ、うれしくはあるよな。考えずにごめんなさいは立ち直れなさそうだし」

そうですね。陽菜と真子に背中を押された美波は咲耶にどんな接触をするんでしょうか？

咲耶「どうだろうな」

投稿キャラ募集の件。

勝手ですが募集期間を延長させていただきます。

理由としてはDクラスの投稿が寂しいからです。

期日は第150問までです。

第146問

「……おし、それじゃあ、始めるぞ」

清涼祭の準備に振り分けられた時間に2学年の各クラスの代表と数名の補佐が集まり、合同展示の提案を出した雄二と源二が教壇に立ち、打ち合わせを始めようとすると、

「きょうくん、Bクラスはきょうくんだけ？」

「……悪いかよ」

深秋がBクラスは恭二しかきていない事に首を傾げ、恭二は不機嫌そうに返事をする。

「みあ、お預け」

「ゆうくん、ボクはワンちゃんじゃないよ!？」

「……似たようなもんだろ」

「……ゴメンね。根本くん」

雄二は深秋が暴走すると会議が始まらないため、深秋に止まるように言うがそれは犬のしつけの言葉であり、深秋は驚きの声を上げる。が恭二は雄二が正しいと言い、明久は申し訳なさそうに恭二に謝り、

「……優子、あいつらに任せると進まないか仕切ってこい」

「……そうね」

咲耶は目の前で行われてるやり取りに苦笑いを浮かべると優子に進行役を任せると言うので優子もこのままでは話し合いにならないと思っただようので教壇に移動すると、

「それじゃあ、改めて、2学年の合同展示の話し合いを始めたいと思います。進行役はAクラス木下優子が進めさせていただきます。問題ありませんね」

優子は進行役を引き受けさせて貰うと言って参加者に反対意見がないかと聞くと反対意見はなく、

「それじゃあ、始めさせていただきます。最初に各クラス代表、この合同展示に参加と言う事で問題ありませんね？」

「……Aクラス、参加する」

優子は各クラス代表に合同展示への参加確認をすると最初にAクラス代表の翔子が参加を表明すると他のクラスの代表も続き、

「それでは今年の清涼祭の2学年の展示は全クラス協力とします。それではまだ署名をしていないクラスの代表はこの提案書にお願いします」

「……良かった」

「ね。大丈夫だって言ったでしょ」

優子は各クラス代表に提案書への署名を頼むとすでに署名を終えて

いる源二は他のクラスも合同展示に参加してくれる事に安心したように呟くと深秋は笑顔で源二に言う。

「そうだね」

「まあ、大変なのはここからだけだな。クラスをまとめるだけじゃなく、300人をまとめないといけなくなるんだからな。このメンバーだけじゃまとめられるかどうか。特にうちのクラスがな」

「うん。確実に暴走するね」

源二は深秋の言葉に笑顔を見せると雄二はFクラスの生徒達の行動を考えて頭が痛くなってきたようで眉間にしわを寄せながら大変なのはここからだと言うと明久は苦笑いを浮かべて頷き、

「坂本くん、提案書は坂本くんが学園長先生のところに持って行くのよね？」

「おう。悪いな。それじゃあ。展示なんだけど基本は飲食店として各クラスで決めるって事で、だけど、Dクラスの教室は飲食店をやる環境じゃないから、Fクラスで合同で」

「まで、坂本。俺とみあからみんなに聞いて欲しい提案があるんだけど、聞いて貰って良いか？」

「良い考えと思いついちゃったんだよね」

優子は提案書を雄二に渡すと雄二は一先ずは各クラスで展示物を決めて欲しいと言おうとした時、深秋と咲耶が何か考え付いたように意見を言いたいと言うが、

「……どうしてかしら、酷く不安なんだけど」

「こ、小山さん、言いたい事はわかるけどひとまず聞きましよう」

会議に集まったメンバーは2人の意見が酷く不安だため息を吐く。

第146問（後書き）

どうも、作者です。

番宣です。

オリジナルファンタジーの小説を投稿しました。『性悪魔術師と白銀の歌い手』と
言う作品です。相変わらず、主人公の性格はよくないですがまあが
作る新たな世界を楽しんでいただければ幸いです。

興味がある方は作者のページから探してみてください。

第147問

「別におかしな事じゃない。今回は2学年での合同展示って決まったから、このフロアは俺達で全部、使って良いわけだろ？」

「まあ、必然的にそうなるな」

咲耶はおかしな話ではないと苦笑いを浮かべて言うところのフロアは全部使えろと言い、雄二はその言葉に頷くと、

「飲食店をやるつもりなら、わざわざ、旧校舎でやる必要はないだろ。そっちは俺達の控室や休憩室に回す。DはFと一緒にと言ってたけどな。Bも同じように新校舎側に戻ってきて貰って2クラス合同で3つの店を出す」

「……確かにAクラスとFクラスの設備は充分すぎるスペースがある」

「なるほど、廊下を仕切ってしまってEとCの設備を1店とするわけか」

咲耶は2学年で3つの飲食店をやるつとと言うと雄二と翔子は咲耶の意図に気づいたようで頷き、

「なら、振り分けはどうするつもりだ？」

「そだね。言いたくは無んだけど」

恭二は清涼祭ですでに自分のやる事は終わったと判断しているよう

で面倒そうに言うつと宏美は恭二に良い印象は持っていないようでBクラスとは組みたくないと言いたげな表情をする。

「まあ、中林の言いたい事もわかる。だけど、たぶん、これが1番、集客率も良くなる。Dが新校舎にくるつて事は旧校舎がBだけになるだろ。ただでさえ、学園側が設備に差を付ける事で新校舎と旧校舎では見た目的にもかなり差がある。Bクラスの方にはお客さんが行きたがるかは疑問が残る」

「そうだね」

咲耶は宏美の言葉に苦笑いを浮かべながら、旧校舎での飲食店をやる利点がない事を話すと集まった人間達は咲耶の言葉に頷き、

「そうなると一先ずはどう人数を分けるかは別として代表を3つに分けた方が良いわね？」

「……雄二は私と一緒に」

「ま、待て。翔子、普通に考える。設備を考えると俺達と一緒にするのはおかしいからな!!」

友香は代表を3つに分けようと言い、翔子は雄二と組みたいように雄二に迫ると雄二は翔子から逃げるように深秋と明久の陰に隠れ、

「代表、坂本くんの言う通りだから、落ち着いて……これなら、設備や代表を見ると」

「えーと、たぶん、AクラスとDクラス、FクラスとBクラス、そして、ぼく達EクラスとCクラスが組むのが良いと思います」

優子は翔子の様子にため息を吐くと宏美とともに参加していた薫が遠慮がちに手を上げて言い、

「そうだね。無難なところだと思う。言いたくないけど霧島さんは誰かをまとめるって感じじゃないし、平賀さんと木下さんが補佐してくれた方がやりやすいと思う」

「……ええ、平賀くん、手伝ってくれるかしら」

「う、うん。俺で良ければ」

明久は薫の意見に頷くと翔子を押さえつけるためには優子の補佐に源二を置きたいと言うと優子も明久の意見に納得したようで源二に補佐を願い出て源二は頷くと翔子は残念そうに肩を落とす。

「EとCは最近では代表同士が仲良くしてるしな」

「そうね。ウチのクラスも結構、部活をやってる生徒が多くてEクラスと知り合いが多いから上手くは行きそうなんだけど……」

「……何だよ？」

雄二は翔子が大人しくなってきた事で宏美と友香の関係が部活繋がりで良好だと言うと友香は頷くが恭二をFクラスと一緒にする事が不安なようで恭二に視線を送り、恭二は友香の反応に不機嫌そうに返事をする、

「いや、根本の補佐をするのは今はみあ以外にはいないと思う。何なら、公介も付けるか？ 小山、公介を借りても……」

「いるか！？ あんな奴！！」

咲耶はクラスと上手く行っていない恭二のサポートに深秋を付けた
いと言つと人手が足りないならCクラスから公介を借りようと言
言つが恭二は全力で否定し、

「まあ、バランスは良いか？」

「坂本くん達が酷く不安だけどね」

咲耶と恭二の様子に雄二は苦笑いを浮かべると優子はため息を吐
くが、

「大丈夫。何とかなるよ」

「そうね」

深秋は笑顔で大丈夫だと言つと優子は深秋の笑顔に吊られて笑顔で
頷く。

第148問

「って事が、代表会議で決まった内容だ。俺達は清涼祭までBクラスと協力体制を取る。それ以外でもクラス間での話し合いもあるから、俺と明久、みあだけじゃ手が足りないから2人か3人、代表会議に参加してくれる清涼祭の準備委員みたいのを立てようと思うんだが」

「Bクラスと協力じゃと!? ワシは反対じゃ!」

「……………反対」

深秋、明久、雄二が教室に戻り、代表会議で決まった内容を説明するとBクラスとの協力体制を取ると言う事に納得が行かないように秀吉と康太を先頭にしてクラスメートから反対の声が上がりが始め、

「やっぱり、こうなったか?」

「そつだね」

明久と雄二は予想はしていたようであらため息を吐くと、

「どうして、反対なの?」

「そ、それは、なあ……………」

「根本だしな」

『『『この間、みあちゃんの手作りお弁当を食ったのが許せない!』』』

！」「」

深秋はFクラスの反応に少し悲しそうな表情で理由を聞くと深秋の様子に罪悪感はあるもののクラスメート達はBクラスとの協力ではなく、恭二が気に入らないと言い切り、

「……みあのコロッケに関しては勝手に暴走したのはお前らだろ」

「……うん。1人1個、当たるくらいは作ったからね」

「そうですね。結局、Eクラスの運動部のみなさんが引き受けてくれましたけど」

深秋のコロッケを食べていた明久、雄二、瑞希の3人は昨日の昼休みに勢いで教室を出て行ったクラスメート達の様子を思い出して苦笑いを浮かべる。

「良いか。これに関しては決定事項だ。お前らがどう思おうが関係ない。それとも、みあが頑張ったのを無駄にする気か？」

「し、しかし」

雄二は清涼祭の2学年の合同展示のために動いている深秋の頑張りを無駄にするのかと聞き返すと秀吉は試召戦争が終わってから、深秋と恭二の距離が近い事が気に入らないように納得がいかなさそうな表情をしていると、

「もう。男らしくないわよ。決まった事なんですよ。文句を言っただけで変わらないでしょ。だいたい、あんた達は結局、真面目にやらないで遊び始めるんだから、ウチとしては真面目なBクラスと一緒に

の方が良いわよ」

「みなみちゃん？」

「島田の言う通りだ。正直に言うとな俺も明久も清涼祭でお前達を全く信用してない。どうせ、勝手に遊びだして作業もまったく進まないだろうからな」

「……はい。みあちゃんと坂本くん、吉井くんが代表会議に出てる間にみなさん、外で野球を始めてしまいました」

美波は男子生徒達の態度に腹を立てているのか一人賛成意見を出す
と雄二は代表として清涼祭準備でクラスメート達を信用できないと
言い、瑞希は深秋達が代表会議に出てた間の行動を話した時、

「お前達、話し合いは進んでいるか？」

「て、鉄人！？ ぼ、僕達は真面目にやっている！？」

「西村先生と呼べ」

教室のドアを西村教諭が開け、話し合いの状況を確認すると明久は
なぜ、西村教諭が教室に顔を出したかわからないよう
で西村教諭に怒られるような事はしていないと言うが西村教諭からは態度がなっ
ていないと明久の頭には拳が振り下ろされ、

「……それで、何か御用ですか？」

明久は頭を押さえながら西村教諭に教室を訪れた意味を聞く。

第149問

「ああ、俺がこの教室に来た理由だが今日から福原先生に変わり、補習担当のこの俺がFクラスの担任になる事になった」

西村教諭は1つ咳をした後、Fクラスの担任が自分に変更になったと告げると教室は西村教諭が担任になったと言う事に反対の声が上がり始め、西村教諭の担任就任への対する怒りすら見えるが、

「静かにせんか!!」

西村教諭が一喝すると教室は静まり返り、

「テツセンセー、どうして、担任が変わる事になったんですか？」

「……吉井妹、西村先生と呼べ。お前達兄妹は俺の言う事は聞けないのか」

深秋は手をあげて、西村教諭に担任変更になった理由を聞くと西村教諭は兄妹そろって自分を先生と叫ばない2人のため息を吐くと、

「4月になってFクラスの快進撃は誉めてやりたいと他の先生方も言っていたんだがな。試召戦争が終了してからのFクラスの授業態度が問題になっていたんだが」

「……ああ、確かに設備が変わってもウチのクラスの授業はな」

「坂本、他人ごとのように言っているがお前も授業を聞いていないと先生達から苦情が出てるんだ。まったく、この設備になってから、

真面目に授業を受けているのが姫路と吉井兄妹だけと言うのはどう言う事なんだ」

「そ、それは俺にも考える事があってだな」

西村教諭はFクラスの授業態度が問題になっていると言うと雄二は一理あると頷くと西村教諭は真面目に授業を受けていたのは3人しかいないと言い、雄二は翔子との事で試召戦争に踏み切るか悩んでいたため授業には集中していなかった事は理解しているが言いだす事は出来ず、

「それが問題になっているなかで2学年の合同展示、坂本、吉井兄妹、姫路の4人が真面目に他のクラスとの打ち合わせや協力体制を取ろうとしているなか」

「……さっきの野球が原因かな？」

「そう言う事だ」

西村教諭は合同展示の事で一生懸命に働いていた4人を誉めた後、他の生徒達を睨みつけると明久は全てを察したようで苦笑いを浮かべると西村教諭は大きく頷き、

「他のクラスとも協力体制を取らないといけないのにそんな状況で良いわけがないだろ。他の先生達も学年での合同展示には賛成できるがFクラスとは協力体制が取れるか心配だと言う意見が多くてな。生活指導も兼任する俺に白羽の矢が立ったわけだ」

「……なるほど、何か納得が行ったな」

「そつだね」

他の教師からの意見だと言うと明久と雄二は協力体制に問題があるであろうFクラスの行動に制限をかけるために教師陣が先手を打った事を理解する。

「と言う事で、俺が担任になる事は決定事項だ。良いか。お前ら、おかしな事をする直ぐに生徒指導室に連れて行くからな!!」

「はい」

西村教諭はおかしな事はすると言うと深秋は手を上げて返事をすると深秋の様子に瑞希と美波は苦笑いを浮かべているが男子生徒達は現実を受け止めたくないよう悲痛な叫び声をあげるが、

「静かにせんか!! 坂本、吉井、続ける」

「ああ。それじゃあ、代表会議に参加してくれる人間を選ぶぞ。決まってるのは俺と明久、みあ、後2人か3人なだけだな。誰か推薦か立候補あるか?」

西村教諭は男子生徒達を再度、一喝すると雄二に続けるように言い、雄二は西村教諭が担任になった事には納得はいかないようだが今のクラスをまとめるには仕方ないと思ったよう清涼祭準備委員の選出を続けると、

「あ、あの。私がお手伝いします」

「ワ、ワシもやるのじゃ」

「……ウチがやっても良いわよ」

瑞希、美波、秀吉の3人が立候補をし、

「反対意見は……ないな。それじゃあ、3人ともよろしくな」

雄二はクラスメイト達に反対意見を聞くが他のクラスメイト達は進んで協力するような気概はなさりとメンバーが決まる。

第150問

「これで合同展示の許可が下りるんだよね？」

「ああ。後は俺達が上手くやるだけだ」

深秋、雄二、明久の3人は提案書をカヲルに持って行くことと学園長室の前まで移動すると、

「……賞品の……として隠し……」

「……こそ……勝手に……如月ハイランドに……」

「……言っているんですか？ ……達も喜んでます」

学園長室のドアの奥からカヲルと誰かが話している声が聞こえる。

「どうした。明久」

「いや、中で何かを話しているみたいんだけど」

「そうか。つまり、中には妖怪がいるって事だな。無駄足にならないくて何よりださっさと中に入るぞ。失礼します」

「おばあちゃん、約束通り、提案書を持ってきたよ」

明久は学園長室の中から聞こえる会話の中に入るのをためらうが深秋と雄二は気にする事なく、学園長室のドアを開けて入って行き、

「……やっぱり、みあの態度っているいろいろ問題があるよね。僕も気を付けないと」

明久は最近、カヲルとのやり取りも増えているためか、自分達の行動のせいで担任が西村教諭に変わった事もあるためかため息を吐いた後、2人を追いかけて行くと、

「……あんた達、この間も言ったはずだよ。ノックと返事を待つてから入ってきなと」

「やれやれ。取り込み中だと言うのに、とんだ来客ですね。これでは話をする事もできません……まさか、貴女の差し金ですか？」

カヲルの他には竹原教頭が立っており、何かあるのかカヲルを睨みつけるように言う。

「バカな事を言わないでくれるかい？ このガキどもはあれだよ。職員会議で話しただろ。2学年の合同展示の件だよ」

「ああ……あの」

カヲルは竹原教頭の態度にため息を吐きながら言う竹原教頭は3人を見下すような視線を送り、

「それではこの場は失礼させていただきます」

踵を返すと学園長室を出て行き、

「何だ？ 感じ悪いな」

「雄二、流石に話をしているのを邪魔されたわけだしさ」

「……………うん。そうだけど、何か、すごく竹原先生はいやな感じがするよ。おばあちゃん、大丈夫？」

雄二は竹原教頭の背中を見て眉間にしわを寄せると明久はため息を吐くが深秋は何かを感じ取っているようで明久の制服をつかみながらカヲルの事を心配するようにカヲルの名前を呼ぶと、

「大丈夫さね。それで提案書の件かい？ まあ、西村先生から聞いてるけど、あんた達の方は上手く行ったみたいだね」

「当然だろ。これが提案書だ」

「どれ……………確かに受け取ったよ。これで、あんた達の言う通り、学年での合同展示ができるわけだ」

「後は設備向上もな」

カヲルは深秋に心配させないように優しくな笑みを浮かべると雄二に提案書を出すように言い、雄二が提案書を渡すとカヲルは提案書に目を通して話を終わらせようとしますが、

「……………おばあちゃん、ボク達じゃ、力になれないの？」

「みあ？ ……ばばあ長」

深秋は不安そうな表情でカヲルに言う「と明久は深秋の感じている痛みになんかを感じ取ったようで真剣な表情でカヲルを呼び、

「……何でもないよ」

「……錬創の腕輪の不具合が教頭に嗅ぎつけられたってところだろ？」

カヲルは深秋と明久の様子にそれでも何もないと首を振るが雄二はカヲルと竹原教頭の態度と錬創の腕輪の不具合から1つの答えを導き出したように真剣な表情でカヲルに言う。

第150問（後書き）

どうも、作者と

深秋「主人公です」

取り敢えずは竹原教頭との遭遇にカヲルの事を心配する深秋。

深秋「おばあちゃん、1人で何かをかかえようとしてるんだよ」

深秋は学園長がお気にいりですね。

深秋「うん。だって、おばあちゃん、優しいよ。ちょっと口は悪いけど、ちゃんとボク達の事を見てくれてるし」

そうですか。

深秋「だから、ボクは頑張るよ」

はい。頑張ってください。

そして、投稿キャラ締切です。

深秋「延長したけど1人しか増えなかったね……ボク達、人気ないね」

そうですね。他に比べると人気薄いです。

深秋「カズくんにはすでに引き離されてるからね」

ええ、和真は理音や伐に追いつく勢いです。

深秋「……………」

投稿キャラは使用する時に投稿キャラクターデータに更新します。

深秋「そのうち、投稿キャラクターデータはクラスごとにまとめようと思
っています」

第151問

「……」

「……ばばあ、何も言わないなら、俺達は勝手にそう判断するぞ。そうすると感情のままに動くバカがウチにはそろってるんだ」

雄二の言葉にカヲルは眉間にしわを寄せて黙ってしまつと雄二は沈黙は肯定とさせて貰うと言い、

「……いやになるね。その通りだよ。まあ、実際は白金の腕輪と錬創の腕輪、どっちに不具合があるかはわかっていないみたいだけだね」

「雄二、どう言う事？」

カヲルは雄二の言葉に深秋と明久に視線を移すと2人は勝手に飛び出して行きそうであり、ため息を吐きながら雄二の言葉を肯定すると明久はカヲルの立場が悪くなっている事は理解できているようだ。がどこまでの問題に発展しているかはわかっていないようで雄二に説明をするように言う。

「……俺の推測だ。大方、間違つてはないと思うけどな」

「そうだね。坂本、悪いけど、あんたの口から説明してくれるかい」

雄二は自分の考えは推測の域でしかないと言うとカヲルに視線を向けるがカヲルは雄二に説明を頼み、

「……簡単に言えば、ばばあ長の失脚と文月学園の転覆ウチを考えている奴がいる。教頭はその手先」

「手先？ 主謀ではないの？」

「主謀にしてはなんか小者っぽいだろ。良いように使われてるのに気付かない三下臭がする」

「……坂本、あんたも容赦がないね」

雄二はあまり難しい事を深秋と明久に言うのは無駄だと判断しているように簡単に今の状況を説明するとカヲルは雄二の説明に苦笑いを浮かべ、

「ホントの事だろ。それではばあ、教頭が打ってくる手は召喚大会のデモンストレーションで腕輪を暴走させるってところだな？」

「……そうさね。それが一番効果的な方法だろうからね」

「なら、俺達のやる事は1つしかないな。安心しろ。ばばあ、この間も言ったが腕輪は俺達が貰ってやる」

雄二は竹原教頭が打ってくる手にも予想が付いており、カヲルは雄二の意見を肯定すると雄二は何も問題ないと言い切り、

「できるのかい？」

「ああ。俺達はばばあ、あんたの共犯だ。だから、しっかりと協力して貰うぜ。2つ、俺に任せてくれれば問題なく、腕輪を手に入れよう」

カヲルは雄二の様子に苦笑いを浮かべると雄二はカヲルにもやっつて貰う事があると言い、

「点数操作とかは無理だよ」

「当たり前だ。腕輪の暴走が点数でなら、そんな事はできないだろ。やる事は召喚大会の対戦で使う教科指定と最初のトーナメントの振り分けだ。これくらいなら問題ないはずだ」

カヲルはできない事もあるというが雄二は腕輪を取るのに必要な2つの条件を出す。

「それくらいなら、どうにかなるね……わかったよ。出場枠が埋まったら連絡するさね」

「おう……みあ」

「ゆうじくん、おばあちゃん、大丈夫なの？」

カヲルは少し考えた後、雄二の条件を飲むと言うと深秋は不安そうに雄二の名前を呼び、

「大丈夫だよ。みあ」

「ホントに？」

カヲルは深秋の様子に優しい声で彼女の頭を撫でながら心配はいらないと言うが深秋の表情は不安げであり、

「みあ、大丈夫じゃない。俺達ではばあを守るんだ。俺としてはこんな妖怪ばあを守るために動くのは不本意なだけだな」

「確かに、可愛い女の子を守るならやる気が出るのに何が悲しくてこんな妖怪ばあを守らないといけないのかな？」

明久と雄二はため息を吐きながらも深秋にカヲルの守るのは自分達だと言うと、

「……うん。おばあちゃん、ボク、頑張るからね」

「みあ、ありがとうね……あなた達、言っておくよ。もし、あなた達の身に危険が及ぶような事があるんなら、直ぐに手を引きな」

深秋は明久と雄二の言葉に笑顔で頷き、その姿にカヲルは3人に危険になったら手を引くように言うが、

「悪いな。自分で言うのもなんだが、俺達は1度、火が点いたら簡単には消さないんだ」

「そうだね」

明久と雄二は撤退抗戦をする気のようにニヤリと笑い、

「……お願いだから、あんた達のせいであたしの首を飛ぶような事は止めておくれよ」

「おばあちゃん、大丈夫だよ。アキ兄もゆうじくんもすつごく頼りになるから」

「そうさね。あの2人は信じられないけど、あたしはみあ、あんたを信じるよ」

カヲルは明久と雄二の様子に不安そうなため息を吐くが深秋は笑顔でカヲルに抱きつくとカヲルは優しい声で深秋を抱きしめ返す。

第151問（後書き）

どうも、作者と

深秋「主人公です」

取り敢えず、最初からカヲルと共犯な深秋たち。

深秋「だって、おばあちゃんを守らないと」

まあ、確かにカヲルを陥れる事で利益を得る人間もいますが不具合のある腕輪をそのまま賞品にしておく、カヲルにも充分に問題があるはずなんですけどね。

深秋「そうかも知れないけど、おばあちゃんは良い人だよ」

そうですね。深秋との関係は良好にしていますしね。読んでる方はどうみえてるのかは謎です。「こんなのばあじゃねえ」と思っている方もいるでしょうしね。

第152問(前書き)

投稿キャラクターデータに『三津屋流』、『阿久津鈴』、2人のデータを追加しました。

第152問

「やっぱり、そう簡単にまとまらないか？」

「まあ、鉄人の力で抑えつけたような形だしのう。それに」

「……なんだよ？」

初めてのFクラスとBクラスの合同での清涼祭の話し合いを終えるが充実した結果とは言えず、雄二は苦笑いを浮かべると秀吉はFクラスのやる気は上がる状況ではないと言うがその原因は恭二にもあると言いたげであり、恭二は秀吉の言葉の中にある敵意に気づき秀吉を睨み返すと、

「秀吉も根本くんも落ち着いてよ。それに僕達だけで大まかな事は決めて良いってなったわけだしさ」

「そうよ。ある程度の事が決まって準備も進んで行けばある程度、まとまってくるわよ」

明久は秀吉と恭二の間に割って入ると美波も作業が進んで行けばどうにかなると言い、

「まあ、そうだな。とりあえずは大まかな事でも決めちまおうぜ……ん？ みあはどこに行った？」

「みあちゃんなら、さっき、Bクラスが根本くんだけでは寂しいからってBクラスの教室に走って行きました」

雄二は話し合いを続けようとするが深秋がいつの間にか居なくなっている事に気づき、首を傾げると瑞希は苦笑いを浮かべて深秋はBクラスの教室に行ったと言う。

「確かにのう。Fクラスは実行委員を6人も出しておるのにBクラスが根本だけではのう」

「……」

「それじゃあ、直ぐに戻ってくるだろうから、始めちまおうぜ。他のクラスとも打ち合わせをしないとイケないしな」

秀吉は代表の恭二に問題があると言うと恭二はすでに秀吉の相手をする気はないようで返事をする気もなく、雄二は秀吉が恭二に敵意を向ける理由がある程度は理解できるようで苦笑いを浮かべた時、

「たっただいま 助っ人、連れてきたよ」

「し、失礼します」

「代表、人手がいるなら事前に言っといてくれよな。そんな話もでないから必要ないのかと思ってたぞ」

深秋が男女1人ずつBクラスの生徒を連れて帰ってくる。

「流くん？」

「明久、知り合いか？」

「うん。まあ、僕より、みあとサクの知り合いかな？ 商店街に甘

味どころがあるだろ。そこの1人息子」

「三津屋流だ。よろしく」

明久は深秋と一緒に戻ってきた男子生徒とは面識があるようでFクラスのメンバーに紹介すると男子生徒『三津屋流』は軽く挨拶をす
ると、

「あのお店ですか!？」

「あれ? 瑞希、知ってるの?」

「は、はい。この間、みあちゃんと一緒に行ってきました。栗ぜんざいを食べたんですけど、凄く美味しくて……おかわり、しちゃいます」

瑞希は驚きの声を上げると美波は首を傾げ、瑞希は明久には効かれたくないようで少し恥ずかしそうにうつむき小さな声でおかわりを
してしまっただと言い、

「そりゃ、どうも。これ、ウチの割引券、今度、デートにでも使っ
てくれよ……代表、この間、彼女にふられたらしいけど、やけ食
いにでも使うか?」

「……いらねえよ」

流は瑞希の様子に明久と瑞希を交互に見てニヤニヤと笑った後、店
の割引券を集まっているメンバーに配るが恭二を見て首を傾げると
恭二は不機嫌そうに答え、

「りゅうくんは良いね。それで、この子が阿久津鈴ちゃんだよ。手芸部だから、衣装関係で力を貸して貰おうと思ったんだよ」

「あ、阿久津です。よ、よろしくお願いします」

「……阿久津、俺の背中に隠れるな」

深秋は今度は女子生徒を紹介すると『阿久津鈴』と言う女子生徒は人前に出るのが苦手なように流の後ろに隠れながら頭を下げる。

第153問(前書き)

投稿キャラクターデータに『神村海』を追加。
投稿キャラクターデータを移動しました。

第153問

「お、衣装関係できる人間がいるじゃねえか。これは頼りになるな」

「そうだね。みあはかなりの確率で暴走するから」

「そ、そんな事ないです。わ、私なんか」

明久と雄二は深秋以外にも衣装関係で頼りになる人間がいる事に笑顔を見せるが鈴は自信がなさそうにうつむいてしまいが、

「りんちゃん、下向かないの。りんちゃんはこんなかわいいものを作れるんだし」

「これ、阿久津さんが作ったんですか？」

「は、はい。あ、あの」

「凄いいじゃないの。ねえ、これって簡単に作れないよね？　ウチの妹、小学生なんだけど、こう言うの好きなのよ」

深秋は鈴が部活中に作ったであろう小さなぬいぐるみを取り出すと女性陣はそのできの良さに鈴に質問し始め、

「姦しいとはこう言う状況か？」

「……うるさいだけだろ」

「まあ、裁縫の腕は確か見たいだし、戦力が増えるのは良い事だろ。」

それで、どうする。メニューはせっかく、三津屋がいるなら、甘味どころや和喫茶みたいな感じにするか？」

女性陣の様子に流が苦笑いを浮かべると恭二は話し合いにならないと言いたげにため息を吐くが雄二は流がいる事でメニューを流に任せてみようかと言う。

「いや、それは女性陣が衣装を決めてからにしないと面倒な事になりそうだ」

「確かにね」

流はすでに衣装の決定権は女性陣にあると思っっているようでそれを決めてからでないと危険だと言うと明久は苦笑いを浮かべながら頷き、

「それなら、おい。話し合いに戻ろうぜ。時間もないからな」

「お姉さま」

雄二は女性陣に話し合いを再開させようと言った時、勢いよく美春が美波に飛び付き、

「み、美春！？ は、放れなさいよ!？」

「いやですわ。せっかく、お姉さまと一緒に清涼祭の準備ができると思っていましたのに。それなのにそれなのに、この豚共の陰謀のせいで、愛し合う2人は引き離されてしまいました。そんな力に美春は負けませんわ。お姉さま、美春と一緒に逃げましょう。2人の楽園へ!！」

「……行かせないからな」

美波は美春を引き離そうとするが彼女の手から逃げきる事が出来ずにいると美春の後ろから1人の男子生徒が現れて美春を美波から引き離すと、

「放しなさい。豚野郎！！ お姉さまと美春の邪魔をするのは許しませんわ！！」

「……邪魔する気はないけど、頼むから、真面目に話し合いに出てくれ。Aクラスとの共同って割にはAの代表は指示を出さない。調理担当の大河と清水はまとまらない。仕事を増やさないでくれ」

美春は男子生徒を怒鳴りつけるが男子生徒は手一杯なのか大きなため息を吐く。

「ふざけないでください。何で、美春が大河咲耶なんかと協力しないといけないのですか！！」

「……そう決まっただろ。実家が喫茶店とケーキや軽食は清水、デザート関係は大河に指揮を執って貰おうって」

「美春は納得していませんわ！！ だから、美春はお姉さまと一緒にこの時をともに過ごすのですわ！！」

しかし、美春はAクラスとDクラスの人員配置に納得がいかないようであり、男子生徒を怒鳴りつけると、

「海、清水さんは見つかった？」

「ほらな。ここにいただろ。神村、清水は話を聞かないから捕まえ
たなら、そのまま、引きずって戻るぞ」

「いや、流石に乱暴だろ」

咲耶と源二は美春を押さえつけている男子生徒を『神村海』と呼び、
教室に戻ろうと言うが、美春と海の様子に雄二は苦笑いを浮かべる。

第154問

「放しなさい。豚野郎！！ 美春は美春はお姉さまと一緒に！！」

「……とりあえず、平賀、玉野を連れてこい。2匹の獣を解放すれば治まるだろ」

「……そうだね。海、悪いけど、しばらく、よろしく頼むよ」

しかし、美春は海の腕を振りほどくと咲耶、源二、海の3人を威嚇するように叫び、その姿に咲耶と源二は美春を押さえつけるために最終兵器を投入しようとする、

「待ちなさい！！ 美春は話し合いを要求しますわ！！」

「……ずいぶんと虫の良い話だな。おい」

美春は2人からは逃げきれないと判断したようので掌を返し、海が大きなため息を吐いた時、

「坂本くん、いる？」

「ちょっと、相談に乗って貰いたいんだけど……取り込み中？」

友香と宏美が話があるようで顔を出す。

「まあ、気にするな。それで何かあったのか？」

「えーとね。私達のクラスなんだけど、それなりに料理はできる子

はいたただけどさ。そっちに比べると見劣りするのよ。話を聞くと坂本くん達も平賀くん達も喫茶店をやるのに料理の核になる人もいるわけでしょ」

「確かにそうだね」

「それで、この間のみあのコロッケは凄く美味しかったでしょ。それでウチの調理の中心になってくれないかな？　と思って」

雄二は揉めている咲耶達がかまわなくてくれと言つと友香と宏美はCクラスとEクラスでは調理の核になる人間が見つからなかったため、深秋を貸して欲しいと言つが、

「みあをか？　……」

「やっぱり、不味い？　みあは衣装作りもあるだろうし」

「いや、衣装作りはある程度、協力しないといけないから問題はなただけだな。みあ姫路と召喚大会に出る予定だから、ある程度、まとまつた方が都合がいい気がするんだよな」

雄二は2人の提案に少し考え込むと宏美は無茶な提案だとは理解しているようで苦笑いを浮かべると雄二は召喚大会の事を考えているようで良い返事はできなさそうであり、

「そう？　それなら、仕方ないかな？　吉井さんがダメって事は吉井くんも一緒でしょ？」

「うん。ボクは雄二と出るから無理かな」

「待ちなさい。美春に言い考えがありますわ！！」

「却下だ。また、ろくでもない事だろ」

友香は状況を理解したようのため息を吐き、明久が2人に謝ろうとした時、美春が何かを思いついたと言うがその言葉を直ぐに海が却下すると美春は机にしがみつく。

「話くらい聞きなさい。豚野郎！！ これは絶対に有益な話ですわ」

「その言葉、そっくり返してやるよ。遊んでる時間はないんだからな」

「待て。神村、話くらい聞いてやれ。被害が膨らむからな」

美春は机にしがみつきながら良い話だと言うが彼女の日頃の行いから海が信じてくれるわけもなく美春を引きづって行くこうとするがそのせいで教室の中の物をひっくり返し、恭二はため息を吐きながら美春の話を聞けと言うと、

「豚野郎！！ あなたなんかに助け船を出される覚えはありませんわ！！」

「……神村、大河、平賀、さっさと連れてけ」

「言われなくてもそうする」

美春は恭二に助け船を出されたのにも関わらず、恭二を罵倒すると恭二は当然、眉間にしわを寄せて咲耶、源二、海に美春を連れて行けと言う。

第155問

「あの。とりあえず、聞いてあげてから考えても良いんじゃないでしょうか？　それが本当に有益な話なら」

「そうは言っても清水の話だしな」

鈴は目の前で繰り広げられている状況が少し怖いようでおどおどしながらも美春の意見を聞いた方が良いと言つとまとめ役に納まっている雄二は困つたように頭をかき、

「とりあえず、落ち着こうよ。それが何かのヒントになる可能性もあるわけだしさ」

「まあ、明久や……」

「あ、阿久津鈴です」

「阿久津の考えも一理あるしな。その前に新顔もいるみたいだし、自己紹介するか？」

明久はCクラスとEクラスの問題の解決になるヒントはあるかも知れないと鈴の意見に続くときゃも話くらいはと考えたようで頷いた後、今まで話し合いに参加していなかった生徒も混じっているため、自己紹介を済ませておこうと言い、各自、簡単な自己紹介を済ませる。

「それじゃあ、清水、始めてくれと言つ前に、おかしな意見だったらみあを解放するからな」

「はるちゃんの衣装はこれかな？ それともこっちな？ ……りんちゃん、これに着替える着ない？」

「き、着替えません」

雄二は美春が逃げるために口から出まかせを言っていた場合は深秋を仕掛けると言うത്深秋はカバンの中からいろいろなコスプレ衣装を選び始めるが途中で目つきが鋭くなり、鈴を見ると彼女は身の危険を察したようでそばにいた流の後ろに隠れ、

「まあ、みあも落ち着けよ。一先ずは清水の衣装だ。あまりに自分本位な提案だったら、その写真をおじさんに送る事も考えないといけないんだ」

「ま、待ちなさい！！ それだけは勘弁してください！！」

「……清水の親父って何かあるのか？」

「気にするな……いや、関わるな」

「……わかった」

流は苦笑いを浮かべながら深秋に落ち着くように言うと美春にも枷をつけ、雄二は美春の様子に彼女の父親に何かあると思ったようで知っていそうな咲耶に聞くが咲耶は小さく首を振り、雄二はその様子に関わらない方がいいと判断して頷くと、

「それじゃあ、清水、始めてくれ」

「ええ。美春の提案は簡単ですわ。三津屋がCクラスとEクラスの
手伝いに行つて、美春がお姉さまと一緒に甘い一時を！」

「……みあ、行け」

「うん」

「……玉野さんを呼んでくるよ」

美春は流をCクラスとEクラスに派遣して自分はBクラスとFクラ
スの調理場に納まると思うがその意見にはやはり、彼女の欲望が色
濃く見え、雄二は深秋に出撃指示を出すと深秋は美春に襲い掛かり、
深秋の行動と同時に源二は美紀を呼びに教室を出て行く。

「待ちなさい！！ おかしな提案はしていませんわ！！」

「……普通に考えれば清水、お前か大河が行くのが筋だろ。明らか
に自分の欲望を優先しているだろ」

美春は自分の制服に手をかける美春を押さえながら、自分の提案は
間違っていないと言うが海は大きいため息を吐き、

「た、確かにね」

「ちょっと待って、三津屋くんって、近くの甘味どころの息子って
話よね？」

「ああ。これ、割引券」

「あ、ありがとう」

明久は海の見方がもつともだと頷くと友香は美春の言葉に何か考える事があるようで流に実家が甘味どころかと確認すると流は友香と宏美に割引券を渡し、

「どうかしたんですか？」

「私達の方で和喫茶とか甘味どころをやりたいて話も出てるのよ。小山さんは茶道部にも入ってるから、そう言うのもどうかって話が出てるの」

「ええ、私以外にもCクラスには茶道部の子もいるし、まあ、茶道部の子から考えると部活と被るから嫌だって意見もあったんだけどね。着付けできる人が多いなら着物を着てみたいって言う子も多くて」

瑞希は友香と宏美の様子に何かあったと感じたようで2人に聞き返すとCクラスとEクラスでは和喫茶をやってみたいと言う意見が多いと言いつつ。

第156問

「それなら、俺はそっちに行っても良いぞ」

「……三津屋、お主、軽いのう」

流は別に気にした様子もなく、和喫茶なら自分が仕切った方がいとも理解しており、自分は美春の提案通りにCクラスとEクラスの手伝いに行っても良いと言うと秀吉は苦笑いを浮かべる。

「基本は調理指導だろ。本番までに合格ラインに乗れば問題なし。ダメなら、そのままでも問題ないだろ。その代わり、こっちに女子を回してやってくれ」

「女子？ どうして？」

「いや、Fクラスって4人しか女子がいな……」

「ワシは男じゃ!？」

流は自分の代わりに女子生徒をBクラスとFクラスに回して欲しいと言うと友香は首をかしげ、流はFクラスに女子生徒が少ないため、売り子が不足すると言おうとするがその言葉に秀吉は声を上げるが、

「そうね……やっぱり、Bクラスの女子が入ったとしてもFクラスはバランスが悪いわよね」

「みあと姫路さんは召喚大会にも参加するんでしょ。そうなると残り2人だし、そうね。トレード要員は女子で考えておくわ」

「小山、中林、別に眞崎か原口みたいな男の娘でも良いぞ」

友香と宏美は秀吉の言葉を無視して女子生徒に頼んでおくと言うと
咲耶は笑いながら薫や蓮でも良いと言い、

「な、なぜ、ワシは男扱いされんのじゃ？」

「……止める。あの2人がくるとみあが暴走する」

「そうだね」

秀吉が友香や宏美にまで男子に扱われなくなっている事に悲しそう
に肩を落とす隣で明久と雄二は咲耶の言葉を否定する。

「そうになると俺達の手伝いに大河か清水か？」

「必然的にそうなるね……そう言えば、勝手に決めてるけど霧島さ
ん達にも相談しなくて良いの？ 勝手にサクか清水さんがウチの手
伝いに来るって決めて良いのかな？」

「美春がこつちに来ますわ！！ お姉さまと一緒にになれるならどん
な仕事でもしますわ！！ 説得もします！！」

恭二は流がCクラスとEクラスに支援に出ると言うと明久は今更だ
けど翔子達にも相談しなくて良いのかと首を傾げるが美春はどうし
ても譲れないようで深秋の魔の手から逃れながらAクラスとDクラ
スを自分で説得すると叫ぶ。

「……清水、お前、Fクラスはほとんどが男子だけどもに仕事

できるのか？」

「豚野郎となんか協力できるわけがありませんわ！！ 百歩譲って、吉井くんとくらいですわ」

「……ダメだろ」

「明久、どうやって清水をてなづけたんだ？」

「えーと、何度かみあの暴走を抑えつけてるからかな？」

海は美春がまともに男子生徒と仕事をできるのかと聞くと美春は直ぐに明久以外の男子とは協力する気はないと叫び、恭二は眉間にしわを寄せると雄二は美春が明久とは協力すると言った事に首をかしげ、明久は苦笑いを浮かべた時、

「やつほー。面白い事になってるね」

「工藤さんに霧島さん？」

「平賀くんから話聞いて見に来ちゃった。優子はちよつと手が話せないからボクと代表も話し合いに混ぜて」

「……雄二をトレード希望」

美紀を呼びに戻った源二から人員交換の話し合いを聞いたようで翔子と愛子が顔を出し、翔子は教室に来るなり雄二に抱きつこうとするが、

「バ、バカな事を言うんじゃない？ だいたい、何度も同じ説明

をさせるな―！」

「……何で、まともな話し合いにならないんだ？」

「さ、さあ。べつしてでじょうじ。」

雄二は翔子から逃げ出し、恭二と鈴はまとまらない話し合いに力なく笑う。

第157問

「えーと、工藤さん、一先ずはサクか清水さんのどちらかをボクらに貸して欲しいんだけど」

「うん。良いよ」

「あ、あの。ずいぶんと軽いですね」

雄二と翔子が教室を出て行ってしまったためか明久は苦笑いを浮かべながら愛子に咲耶か美春を貸して貰えるかと言う話をすると愛子は笑顔で答え、瑞希は愛子の返事に苦笑いを浮かべると、

「協力するのはもう決まった事だしね。気にしなくても良いよ。それで大河さんと清水さん、どっちが良いかな？」

「み、美春が行きますわ！！」

愛子は改めて咲耶と美春をどっちを選ぶかと聞き、美春は声を上げるが、

「……工藤、大河で頼む」

「お。根本が俺を選ぶとは意外だな」

「……少なくともあいつよりはマシだろ」

恭二は美春を無視して咲耶を選ぶと答え、咲耶は恭二が自分を選んだ事が意外だと言いたげに聞くと恭二は消去法だと舌打ちをする。

「な、なぜですか!？」

「……当然の結果だろ」

「納得がいきませんわ!! お姉さまの隣に立つのは美春の役目、
言え、運命ですわ!!」

美春は自分が選ばなかった事に声を上げると海は呆れたようなた
め息を吐くが美春は納得がいかないと声を上げるが、

「あ、あの。島田さんはどうなんですか？」

「ウ、ウチ? ウチは……大河の方が良いかな」

鈴は美春が固執している美波に意見を求めると美波は咲耶の方をち
らちらと見ながら咲耶を選ぶと、

「大河!! あなた、お姉さまに色目を使いましたわね!! お姉
さまは美春のものです!! あなたなんかあげませんわ!!」

「いや、島田は俺のものでも清水のものでもないからな。島田の気
持ちも聞かないで勝手に自分のものって言うのはどうかと思うぞ」

「そんな事はありませんわ!! お姉さまは美春を愛してくれてい
るはずですよ!!」

美春は咲耶を睨みつけて威嚇し始め、咲耶は美春の言葉に苦笑いを
浮かべて美波の答えを待っていると言うが美春は咲耶が美波に告白
をしている事を知らないため、自分の勝手な考えで咲耶を怒鳴りつ

け、

「……はずで話を決めるな」

「は、放しなさい！！ 豚野郎！！」

海は美春の様子にため息を吐くと美春の首をつかみ、彼女を引きずって行こうとするが美春は抵抗を見せるがその抵抗は彼女の来訪により、徒労に終わる事となる。

「みあちゃん、清水さんがお着替えしてくれるんだって」

「そうだよ。今日はどんな格好が良いかな？ これなんてかわいいよね」

「うん。可愛いよ。清水さんなら絶対に似合うよ！！ もちろん、アキちゃんにも！！」

「他にもりんちゃんにヒロちゃん、ゆうかちゃん、あいちゃん、みずきちゃんにみなみちゃん、ヒデくん、可愛い子がいっぱい」

深秋と同じ暴走をする少女『玉野美紀』がこの場に現れると相乗効果なのか深秋のギアは一気にトップまで上がり、美春以外にも深秋と美紀の獲物は増えて行きそうであり、

「えーと、神村、一先ずは清水を連れて行ってくれるか。最初のターゲットは清水だしな。まだ、2人の理性があるうちに対象を清水に持って行く」

「ま、待ちなさい！！ 美春は話し合いを要求しますわ！！ 美春

だけが辱めを受けたくありませんわ!!」

「行くぞ。玉野、吉井妹」

咲耶は被害を最小限に抑えるために原因の美春を生贄にしようとする
ると海は直ぐに理解したようので美春を引きずって教室を出て行き、
その後を深秋と美紀が追いかけて行く。

第158問

「それじゃあ、話し合いでも始めるか？」

「う、うん。そうだね」

「あのさ。坂本くんもみあちゃんもいなくなっちゃったけど良いのかな？」

咲耶は当然のように美波の隣に座ると話し合いを続けようと言い、明久は頷くがFクラスを中心である深秋と雄二がいなくなっている間に話し合いをして良いのかと愛子は苦笑いを浮かべるが、

「……別に問題はないだろ。それに吉井妹がいると話し合いにならない」

「えーと、確かにそう言うところもあるとは思いますが」

「クラスをまとめる事のできないお主にそんな事を言う権利はないのじゃ！ー！」

恭二は2人がいなくても問題ないと言うと瑞希は苦笑いを浮かべるが秀吉は恭二の言葉が気に入らないのか声を張り上げる。

「秀吉？」

「まあ、落ち着け。優子の弟、実際、全員で話し合いをしなくてもBとFの生徒がいるんだ問題ない。それと。まとまってないのはFも一緒だろ。根本だけ責めるのは筋違いだ」

明久は秀吉が恭二に向ける敵意の意味がわからずに首を傾げると咲耶は既にこの状況を割り切っているため、Fクラスも一緒だと言うと、

「あ、あの。代表はちゃんとFクラスと協力体制をとるようにクラスをまとめています。やり方は問題があつたかも知れないですけど」

「ああ。自分が嫌われている事を前提に反対して見せて反対意見で満場一致の協力体制賛成だ。まあ、数名は代表の意図を読み取つた奴らもいるけどな」

流と鈴は実行委員になっているメンバー以外がまとまっていないFクラスに言われる筋合いはないと言い、

「へえ、根本くんも状況を理解してるじゃない」

「……………うるさい」

「クラスのまとめ方は代表しだいだからな。代表のやり方を責める事はできないさ。それより、始めよう。咲耶、工藤さん、AクラスとDクラスの出し物は決まっているのか？」

宏美は流と鈴から聞かされた言葉に少しだけ感心したように言うと恭二は不機嫌そうに返事をする。流は話をここで区切ろうと咲耶と愛子にAクラスとDクラスの出し物がどこまで決まっているかを聞く。

「ボク達はメイド喫茶をやるのかな？ って」

「優子たつての希望でな。玉野がいるから上手く誘導して決まった時は小さくガッツポーズまでしていたぞ」

「大河くん、あんまりそう言う事を言うと優子にまた怒られるよ。まあ、決まった時の優子は嬉しそうだったけど」

咲耶と愛子はA、Dクラス合同の出し物はメイド喫茶に決まったと言つと、

「……メイド喫茶？」

「男としては嬉しい状況だな」

明久と流は女子達がメイド服姿を着ている姿を思い浮かべたようであり、ガッツポーズを取り、

「根本、お前は何も感じないのか？」

「……あのな」

「反応しないと性別『秀吉』と同列扱いか。ホモ疑惑が出るぞ。ちなみに決まった時の男子陣は久保を抜かして大歓声だった」

咲耶は明久と流とは対照的にため息を吐く姿に男子生徒として恭二は間違っていると言い、

「そつだよ。男だったら、霧島さんや木下さん、工藤さん他にもいろいろ問題はあるけど清水さんや玉野さんかわいい子がメイド服姿をきてくれるんだ。喜ぶべきだよ!？」

「……吉井くん？ そんなに翔子ちゃんや優子ちゃんのメイド服姿が見たいんですか？」

「な、何？ 姫路さん？ ど、どうしたの？」

明久は恭二に素直になれと吠えた時に瑞希の背後から真つ黒な嫉妬混じりのオーラが出ている事に顔を引きつらせ、

「大河、あんたも吉井と同じ意見なわけ？」

「ま、まで！？ 島田、落ち着け」

「あれ？ 大河くんと島田さんって何かあったのかな？」

「さあ？」

美波も瑞希と同様に黒いオーラを背後にまとうと咲耶は美波に落ち着くように言い、2人の姿に愛子はニヤニヤと笑い、流は苦笑いを浮かべる。

第159問

「……いい加減にしる。協力体制って割には何で、お前らはまとも
りがないんだ？」

「た、確かにそうですね」

恭二は話が進まない事にいら立ちを覚えているようで舌打ちをする
と鈴は苦笑いを浮かべて頷き、

「そ、そうだよ。姫路さんも島田さんも落ち着いてよ。時間だつて
ないんだから、話し合いを進めよう」

「そうだ。メニュー次第で俺だつて調理の仕方とか覚えなれないといけ
ない事もあるんだからな」

明久と咲耶は瑞希と美波から向けられる冷たい視線に声を裏返しな
がら2人に落ち着くように言うなか、

「CクラスとEクラスは和喫茶で着物、ボク達はメイド服だから洋
菓子だよな？」

「ええ、そうになるとBとFは何が良いかしら？」

「和、洋つてきたって事は中か？」

「中つて、中華料理？ 流石に難しくない？」

愛子、友香、宏美の3人はメニューを被らせないためにFクラスと

Bクラスの喫茶店を何にするか考えており、単純に中華と言う話を
して苦笑いを浮かべるが、

「咲耶、吉井兄、お前らチャイナ服は好きか？」

「もちろん、愛してる！！」

「……予想を大幅に上回った答えだな」

流は瑞希と美波に睨まれている2人をからかうためにチャイナ服は
好きかと聞くと瑞希と美波に怯えているはずなのに2人の声はキレ
イに合わさり、はつきりとした口調で返事があり、流は2人の返事
に苦笑いを浮かべる。

「中華ですか？ でも、難しくないですかね？」

「そうだな」

「……三津屋くん、冷静に頷いているなか、悪いんだけど、姫路さ
んと島田さんの殺意が上がったんだけど」

鈴は中華料理を作ることできるのかと言うと流は流石に難しいかと
言いたげに頭をかくと明久と咲耶のチャイナ大好き発言に瑞希と美
波の殺意はさらに膨れ上がって行き、友香は4人の様子に大きくた
め息を吐くなか、

「ま、待つて。姫路さん、ぼ、僕は」

「姫路さんのチャイナ服姿が見たい？」

「もちろんだよ!!」

明久は瑞希に命乞いをしようとしている途中で愛子の茶々が入り、明久はその言葉に拳を握り締めて頷くと、

「そ、そうなんですか？ よ、吉井くんが言うなら、私はチャイナ服でも」

「……姫路さん、それで良いの？」

「あれ？ もつと面白くなると思ったんだけどな」

瑞希は明久の言葉に頬を染めて頷き、宏美は瑞希の言葉に大きくため息を吐くが愛子は期待外れと言いたげに苦笑いを浮かべ、

「た、助かったよ。僕がこれで助かったなら、サク、サクも島田さんのチャイナ服姿が見たいよね？」

「明久、お前は何もわかっていない。確かに島田のチャイナ服も見たいが俺は何も着ていない生まれのままの姿が1番見たい!!」

「……大河、男らしいんだが、それを今言うのはどうかと思うぞ」

「……代表と同意見だな」

明久は咲耶に助け船を出すが咲耶はチャイナ服より更なる欲望を暴露すると恭二は男として同意はできるが今、言う事ではないと眉間にしわを寄せて言うと言つと流もこの答えは予想していなかったようで大きく肩を落とす。

第160問

「……大河、ちょっと良いかしら？」

「……いや、どちらかと言えば遠慮したい」

「まあ、遠慮しなくて良いわ」

美波は咲耶の本能のままに出た言葉に眉間にしわを寄せると咲耶の肩をつかむと咲耶の肩からは何かが軋むような音が聞こえはじめ、咲耶は顔を引きつらせながらそこで自分が迂闊な事を言った事を理解するがすでにその時は遅く、美波は咲耶を引きずって教室を出て行き、

「えーと……それで、中華って事だけど、作れる人っているかな？
僕とみあも簡単な点心くらいなら作れるけど、本格的なのは無理だよ」

「……中華料理なら俺と須川に任せろ」

「ムツツリーニ？ お主、できるのか？」

「……紳士の嗜み」

明久は美波の様子に関わると自分達の命にも関係すると思ったように咲耶を見捨てて話を続けるがやはり、中華料理は難しいのではないかと困ったように笑った時、康太が現れて自分と亮ができる事を告げる。

「……それが本当なら大河は要らなくないか？」

「まあ、良いじゃない。せっかくの学園祭なんだから、その方が島田さんも喜ぶだろうし」

「咲耶が調理で役に立たないレベルだったら接客を教えるって感じにすれば良いだろ。咲耶以外でこの中でFクラスに接客を教え込めそうな人間がいるか？」

恭二は中華料理ができる人間がいる事で咲耶に価値があるのかと言うと友香は美波と咲耶の様子も気になるのかくすりと笑うと流はFクラスの人間に接客を仕込める人間がいるかと聞くとその場にいた人間すべてが流の言う事に納得したようでFクラスの仕込みを咲耶に押しつける事を決めつけると、

「……大河くん、知らない間に大変な事になってますね」

「まあ、サクなら、どうにかできるよ。感覚的にはFクラスに近いから」

「そ、そうですね」

鈴は咲耶に起きるであろう厄介事に顔を引きつらせると明久は苦笑いを浮かべて咲耶奈良どうにかなると言う瑞希も明久の言葉に同意し、

「それなら、調理はムッツリー二と須川くんを中心に僕とみあも手伝うから、根本くん、Bクラスで料理と衣装作りできる人を聞いておいて、後は店の内装とかも必要だよな？」

「ああ」

明久は必要な作業を書き出して行くと恭二にBクラスにも大まかに担当を決めておいて欲しいと言い、恭二は頷き、

「一先ずは今はこれくらいかろう?」

「そうだね。方向性も決まったし、どんなメニューを出すかはムツツリー二さんに任せて良いんでしょ」

「……………任せる」

秀吉は明久が描きだした作業を見て、今、決められる事はここまでかと言うと愛子は康太に声をかけると康太は小さく返事をする。

「それじゃあ、3つとも方向性は決まったって事で良いわね。何かあったら、相談させて貰うから、よろしくね」

「はい。こちらこそ、よろしく願います」

「うん」

宏美は遅れていたFクラスとBクラスの出し物が決まったため、安心したようであり、改めて、協力体制を取ろうと言うと瑞希と愛子は大きく頷ぐが、

「……………三津屋、阿久津、戻るぞ」

「そうだな」

「は、はい」

恭二は慣れ合う気はないと言いたげに流と鈴に声をかけると2人は苦笑いを浮かべて頷いて3人で教室を出て行き、

「……………まったく」

「大丈夫だよ。根本くん1人じゃ無理かも知れないけど、きっとBクラスのみんなが力になってくれるよ。僕達も手伝うし」

「……………そうだと良いんだけどね」

友香は恭二の様子にため息を吐くと明久は素直じゃない恭二の事を流や鈴が手助けをしてくれると言うが友香はもう1度、大きくため息を吐き、その姿を見たメンバーは苦笑いを浮かべる。

第161問

「し、島田、どこに行くんだよ!？」

「うるさいわね。付いてきなさいよ。あんたに聞いておきたい事があるのよ!。 だいたい、いつもいつも、何なのよ」

咲耶は美波に引つ張れながら歩いていると美波が怒っている事は彼女の様子から察しているようであり、逃げだしたいのもあるが彼女が自分の言葉に嫉妬してくれた事が嬉しいようで表情は少しだけ緩んでおり、

「何、笑ってるのよ？」

「いや、それはさ。美波が俺をちゃんと意識してくれてるのが嬉しくって」

「そ、それは、そうでしょ」

美波は咲耶の表情にバカにされていると思ったようで彼を睨みつけるが咲耶は素直な気持ちを口にしてくすと笑うと美波は咲耶の表情に自分の気持ちが見透かされているような気分になったようで彼から視線をそらすと、

「初めて告白された相手なわけだし、それに……あの」

「いや、まあ、何だ。そう言う反応してくれるのは嬉しいんだけど、場所を変えないか？ 少し、周りからの視線が」

「!?!」

「お、おい。1人で行くな!?!」

美波は顔を赤くして小さな声でつぶやくと咲耶も美波の様子に気恥ずかしいように首の後ろを指でかくと視線が集まり始めている事に気づき、美波に場所を変えようと言うと美波の顔は耳まで真っ赤に染まり、1人で逃げるように駆け出して行き、咲耶は彼女の後を追いかけて行く。

「うー」

「睨むな。墓穴を掘ったのは美波であつて、俺じゃない」

美波は逃げるように屋上まで移動すると咲耶は彼女の隣に立つと美波は周りから視線が集まったのは咲耶のせいだと言いたげだが咲耶は苦笑いを浮かべると、

「それで、返事って聞けるのか?」

「そ、それは……ねえ、どうして、ウチなの? ウチはみあみたく可愛くないし、霧島さんや木下さんみたいにキレイでも、瑞希には完全に負けてるし……」

咲耶はいつもとは違って表情を引き締めて美波に告白の返事を聞かせて貰えるのかと聞くが美波は自分に自信がないようであり、咲耶にどうして自分を好きになつたか教えて欲しいと言う。

「……それは言わないといけない事なのか? 面と向かって言えと言つのはなかなか恥ずかしいものなんだけど」

「う、うん。聞かせて欲しいかな」

咲耶は美波の言葉に苦笑いを浮かべると美波は顔を赤らめながら咲耶の顔を見上げて彼に自分のどこを好きになつたかはつきりと言つて欲しいともう1度、聞き、

「えーと……どうなるんだろう？　一目ぼれになるって言つたら、納得してくれないかな？」

「え？」

「美波は俺と初めて会つたのは。たぶん、この間、Eクラスとの試召戦争が終わつた時だと思つてるだろ？」

「う、うん。それまではあつた事ないと思つけど」

咲耶は気恥ずかしいようで困つたように笑つと自分でも美波の事をいつから好きなのかはつきりとした時期はわからないようであるが初めて美波と咲耶が顔を会わせたのは2年になってからではないと言つが美波には咲耶と会つた記憶がないようでもそれでも記憶から探そうとしているのか首を捻つて思い出そうとする。

第162問

「去年、図書館に通ってる事があつただろ？ たぶん、日本語の勉強で」

「う、うん。ドイツ語の辞書は学園の図書室にもなかったし、言葉を覚えるために」

咲耶は自分の言葉で真剣に考えてくれる美波の姿に愛おしそうな視線を向けるとそれでも改めて自分が美波を好きになつた時の話を話すのは恥ずかしいようではあるがそれでも話さないといけない流れだと言う事も理解しており、美波に向かい、去年、図書館に通つていた時があつただろと言うと美波は日本語の勉強のために図書館に通つていたと頷き、

「俺もフランス語やイタリア語、他の国の言葉を覚えるのに図書館に通つてた時期があつてさ。その時に初めて見かけて気になった。文月学園の制服をきた娘が毎日のように真剣に何かを調べている。何を真剣に調べてるのかな？ って、最初はそれだけだったし、別にそれ以上に恋愛感情がなるなんて思つてもいなかったよ。そうだからその時に辞書を取つてやつた事もあるんだぞ」

「……全然、覚えてないわ」

咲耶は自分も同じ時期に図書館で語学の勉強をしていたと言うが美波は自分の事で精一杯だったようでもまったく記憶にないようで申し訳なさそうに視線を逸らすと、

「別に責める気もないって、その後、噂でDクラスにドイツからの

帰国子女がいるって聞いてさ。ああ、それでかと納得が言ったんだけど、知るとやっぱり気になってさ。最初は言葉が通じなくて困ってたけど、1人、2人と美波の周りに人が増えて行く姿を見るとなんか俺まで嬉しくなった。そんな事を考えているヒマがあるなら声をかけろって話もあるけどな。いきなり、クラスの違う奴から話しかけられても困るかな？ とかも思ったし、まあ、実際は自分が良くわからなかった」

「よくわからなかった？」

咲耶は何となく、目が美波を追っている事には気づいていたがその理由はその時は自分でもわかっていなかったと苦笑いを浮かべると美波は咲耶に聞き返す。

「正直、恋愛って良くわからなかったのが本音。俺はこう言う性格だろ？ 男女問わず、一緒にバカをやれてればそれで良いって感じなんだよ。特別な女性（ひつこ）ができるなんて思ってもいなかったし、作ろうって気もなかった。だから、みあや公介とバカをやって優子や清水をからかって、高校を卒業しても大人になってもこんな感じだと思ってた……まあ、他の奴から見れば逃げてたって事なんだろうけどな。それで良いと思ってたんだ。だけど、みああまり考えでもない一言で美波と一緒に時間を過ごすようになって、自覚するしかなかった。頑張り屋で意地っ張りで、自分が張った意地で落ち込んでいる姿が可愛くて愛おしくて、力になってやりたいと思った。そばで笑ってくれると嬉しくて、美波の口から出るアキの事にあいつへの嫉妬もした。ここまできたら、やっぱり、美波が好きだって自覚するしかなかった」

「そ、そうなんだ」

咲耶は美波を真っ直ぐと見て、自分が美波を好きになった理由を話す。美波は彼の言葉に嘘偽りはない事は理解出来たようで顔を真っ赤にしたまま頷くと、

「あ、あのね。ウチ、ウチね」

顔をあげて咲耶に自分の今の気持ちを伝えようとするが、

「ん？ 咲耶に島田、屋上で何してるんだ？ ヒマなら荷物を運ぶのを手伝ってくれ」

「ちょ、ちょっと、八幡くん、ダメだって、今は、声をかけたらいけない空気だつて!？」

「眞崎、何を言ってるんだ？ せっかく人手がいるんだぞ。だいたい、ペンキを使うんだ。匂いはするに決まってるだろ。屋上でって言うけど、それこそ、旧校舎で良いだろ」

タイミング悪く、屋上で何かの作業をしようとしていた公介と蓮が現れ、蓮は2人のなかに流れる空気に何かを察したようだが公介は空気を読む事はなく、

「……………まあ、こうなるな」

「……………大河くん、ごめん」

「まあ、気にするな。こんなところで話をしていたのも悪いんだし」

「でも……………って、こんなところでゆっくりしていいの?」

「……俺にもいろいろとあるんだよ」

「何をわけのわからない事を言ってるんだ。ヒマなら手伝えよ。時間ないんだぞ」

美波は空気に耐え切れなくなったようにで全力で屋上から逃げ出し、咲耶は苦笑いを浮かべると蓮は咲耶に頭を下げるが公介は気にする事なく、咲耶に作業を手伝えと言う。

第163問

「それで逃げ出してきたわけですか？」

「八幡くん」

美波は屋上から逃げ出した後に陽菜と真子に捕まり、咲耶との話を吐かされると2人は公介の行動にため息を吐き、

「ううう」

「まあ、元気をだしてください。これで大河くんの気持ちも美波ちゃんも気持ちははつきりとしたわけですし」

「で、でも、うち、2回も逃げたのよ。絶対に呆れられてるわ」

美波は咲耶から受けた2回の告白を両方とも逃げだした事で咲耶に嫌われてしまふと思っっているようで肩を落としていると、

「加賀谷さん、水鏡さん、いつまでも遊んでないで、島田さん、クラスに戻らなくて良いんですか？」

「う、ちょっと帰り難くて」

「島田さん、何かあったんですか？」

恋が3人の様子を見て清涼祭の準備を捨て欲しいと言うが美波は咲耶がFクラスとBクラスの共同展示に参加するため教室に戻ると咲耶と鉢合わせになる事に心構えができないようであり、気まずそう

に視線を逸らし、美波の様子に恋は首を傾げる。

「……彼氏がいる人にはわからないわよ」

「そうですね」

「彼氏？ 誰がですか？」

美波は恋を見て彼氏持ちの彼女には自分の気持ちはわからないと言
うと真子は大きく頷くが恋は自分の事を言われているとは思って
ないようでも聞き返すと、

「私？ ……わ、私は彼氏なんかいません！？」

美波、陽菜、真子の3人は恋を指差し、恋は一瞬、何があつたか
わからないようでも首を傾げた後に顔を真っ赤にして彼氏はいないと
否定するが、

「この間のわたし達との試召戦争の後から、Cクラスの眞崎くんと
大変仲がよろしいみたいですけど」

「……うん。ウチも学校帰りに2人で一緒にいるところを見た」

「はい。凄く仲が良さそうでした」

3人は恋と蓮が試召戦争の後から良い雰囲気だと言う。

「な、何を言ってるんですか！？ わ、私と眞崎くんはそんな関係
ではありません！？ あの時はお父さんの誕生日が近いので誕生日
プレゼントの相談に乗って貰っただけです。私は他に男の子にお友

達はいませんし、眞崎くんは話しやすいから」

「女の子っぱいからね。ウチよりかわいいし……」

恋は慌てて蓮は仲の良い男友達だと言うと美波は蓮の可愛さに蓮は恋に男と意識されていないと言うと、

「違います!! 確かに普段は頼りなさそうで女の子っぽくも見えませんが、ここぞって時に男らしいところは素敵な人です!!」

「……羽鳥さん、それは白状しているのと変わらないわ」

「あ……」

恋は蓮を女の子扱いされた事が面白くなかったようで美波の言葉を否定するがその言葉からは恋が蓮に好意を寄せている事が丸わかりであり、近くにいた恋華が淡々とした口調で恋にそれは肯定と変わらないと言うと恋の顔は一気に赤みを増して行き、

「……羽鳥さん、凄く可愛いわ。ウチにはこんな反応できない」

「いえいえ、美波ちゃんも可愛いですよ。恋華さんもそう思いますよね?」

美波は自分は周りの女子生徒達より劣っているかと思っているように落ち込むように肩を落とす姿に陽菜は恋華に同意を求め、

「……興味がないわ。ただ、島田さんも羽鳥さんも頑張つてとだけは言っておくわ」

「う、うん」

「はい」

恋華は恋愛に興味がないようで淡々とした口調で興味はないと言いながらも、2人に頑張れと言うと美波と恋は口数が少なく建て前なども言わない恋華から応援の言葉が聞けるとは思っていなかったように驚きながらも返事をする。恋華は2人の返事に彼女にしては珍しく表情を和らげる。

第163問（後書き）

どうも、作者と

深秋「最近、出番のない主人公です」

と言う事でラブ拡大中です。

深秋「あれ？ ぼくは無視？」

投稿者様に許可もいただいています。現在は蓮×恋と薫×宏美を企
み中。

他の投稿キャラも考えたいけど……男キャラが地味に少ないと言う
事に気付きました。これはキャラ募集のふりではないため、投稿し
てこないでくださいね。

そして、Cクラス、Eクラスを投稿した投稿者の方はラブイベント
おっけーなら連絡をください。考えます。BクラスとDクラスは最
初からありで募集をかけていたため確認はしない……で、良いのか
な？（苦笑）

第164問

「……………納得がいきませんわ」

「……………それはクラスで言ってくれ」

深秋と美紀にメイド服姿に着替えさせられた美春は不貞腐れた表情でFクラスの教室に現れて、自分ではなく咲耶が選ばれた事に納得がいかないと言う雄二は美春が現れた事で作業が滞ってしまったように思ったようで大きいため息を吐くと、

「うるさいですわ!! 豚……………」

「……………雄二は豚野郎じゃない」

「しよ、翔子!? な、何でお前までここにくるんだよ!？」

美春は雄二になど話しかけてないと彼を罵倒しようとする雄二をバカにされる事が許せないと言いたげに黒い何かをまとったメイド服姿の翔子が現れ、美春は彼女がまとう何かに自分が苦手とする気配もと同様の恐怖を感じたように言葉を飲み込むと雄二は翔子の登場に顔を引きつらせる。

「ゆうじくん、しょうこちゃんのメイド服姿はどうかかな?」

「……………似合っ?」

翔子の後ろからなぜか意味もなく同じようにメイド服姿の深秋が現れて雄二に翔子の姿の感想を教えてほしいと言うと翔子は先ほどま

でまとっていた黒いものを霧散させて少し顔を赤らめて雄二に感想を求めるが、

「し、知るか」

「……その反応は許さない」

「や、止める!? わ、割れるうう!!?!?!?!?!」

『……霧島さんといちゃつきやがって』

雄二はメイド服姿の翔子の感想を改めて聞かれた事で素直に自分の感想を言うのが恥ずかしいようでそっぽを向いて言うと言つて翔子は雄二の感想が不満なようで彼女の細くてきれいな指先は流れるように雄二の頭をつかみ、アイアンクローをかけ始め、Fクラスの教室は雄二の悲鳴が響くがその姿はクラスメート達にはなぜか雄二と翔子がいちゃついているように映っており、雄二に向けた殺意が上がり始める。

「みあ、お帰り。清水さんもお疲れさま」

「ただいま。アキ兄」

「……ええ、本当に疲れましたわ」

明久は雄二と翔子の様子に苦笑いを浮かべた後、深秋と美春の2人に声をかけると深秋は明久に抱きつき、美春はこんな事になるとは思っていなかったようで大きくため息を吐くと、

「でも、結局、当日は着ないといけないんだし、衣装合わせをした

と思えば……みあ、そう言えば、どうしてメイド服を持っているの？」

「何を言ってるんだよ。アキ兄、女の子はいつもメイド服の4着や5着持っているものだよ」

「持っていないからね！？ そんなものを持ち歩くのはおかしな子だからね！？」

明久は美春の様子に苦笑いを浮かべたまま、衣装合わせをしたと思うように言うと深秋が何故、3人分ものメイド服を持っているのかと首を傾げるが深秋は笑顔で当然の事だと言い切り、明久は常識からかなり離れた深秋の言葉に声を張り上げるが、

「何を言ってるんだよ。アキ兄、ほら、まだ、後5着あるよ」

「み、みあ、1つ聞いて良いかな？ どうして、僕の肩をつかむわけ？」

「決まってるよ。この5着は、みずきちゃんとみなみちゃんとヒデくんとアキ兄とゆうじくんの分だから」

「おかしいからね！？ 姫路さんと島田さんと秀吉は間違ってるけど、僕と雄二はおかしいからね！？」

美春はどこからか5着のメイド服を取り出して言うが人選はおかしく、明久は深秋の人選は間違っていると叫ぶ。

第165問

「大丈夫だよ。ゆうじくんのはしょうこちゃんの希望だから」

「……みあ、雄二の準備ができた」

「ゆ、雄二!?!? き、霧島さん、雄二に何をしたの!?!?」

深秋は明久の言葉を笑顔で否定すると翔子が深秋と明久に声をかけると翔子の右腕には白目を向いた雄二がぐったりとしており、明久は驚きの声をあげるが、

「……説得」

「おかしいからね!?!? その説得の仕方は間違っているからね!?!?」

翔子は一言で説得だと言い切るがその説得の仕方は明らかにおかしく明久は声を張りげると、

「「えっ!?!?!?」

「おかしいからね!?!? みあも霧島さんもどうして、そこで、不思議そうな顔をするの!?!?」

深秋と翔子は明久が説得の仕方が間違っていると言う意味がわからないように驚いたような表情をするため、明久は更なるツッコミを入れる。

「……吉井くん、美春はすでにこの2人とのまともな会話は諦めま

したわ。それより、お姉さまはどこですか!! 美春はそんなぶ…
…男のメイド服姿ではなく、お姉さまのメイド服姿を見にきたので
すわ!!」

「……清水さん、それも間違っていると思うよ」

「何も間違っていないせんわ!!」

「どうしよう!? ツッコミが足りないよ!?!」

美春は深秋と翔子に振り回されている明久を見て、同情するように
ため息を吐いた後、自分がここにきたのは深秋が美波にメイド服を
着せるのが楽しみだからだと叫び、明久は会話にならないこの状況
にどうしたら良いのかわからないように叫んだ時、

「……完成」

「ごっくん、ごっくん、撮影タイムだよ」

「……こんな被写体では俺の気分が乗らない」

深秋と翔子は雄二の着替えを終えており、深秋は康太に雄二のメイ
ド服姿を撮影するように言うが康太はこんな写真は撮るに値しない
と言っ。

「……土屋、レートは5倍出す」

「………任せる」

翔子はどうしてもメイド服姿の雄二の写真が欲しいようで写真の値

段を釣りあげると康太は直ぐに頷き、シャッターが擦り切れる勢いで雄二の写真を撮って行き、

「ム、ムツツリーニ!? それは止めてあげて!?!」

「次はアキ兄だよ」

明久はあまりに雄二が哀れだと思ったようで康太に止めるように声をかけて時、深秋が明久の肩をつかみ、

「な、何を言ってるの? ぼ、僕はそんなものを着るわけないじゃないか!?!」

『アキちゃんだ!! 俺達のアイドル、アキちゃんが降臨するぞ!』

「明久、坂本に同情する前に逃げるべきだったな」

「サ、サク!? た、助けて!?!」

明久はメイド服など着ないと逃げようとするがすでにクラスメート達は明久の女装姿である『アキちゃん』を期待しており、明久の逃走経路は完全に潰されており、逃げ道を画策していると咲耶は教室に戻ってきてメイド服を手に明久との距離を保っている深秋を見て全ての状況を理解したようで苦笑いを浮かべると明久は咲耶に助けを求めるが、

「姫路、明久のメイド服姿、見たくないか?」

「はい。見たいです!?!」

咲耶は瑞希に話を振り、瑞希は大きな声で返事をする、

「姫路さんまで!？」

「まあ、諦めて、可愛くしてもらえ」

明久は瑞希が自分の味方をしてくれると思っていたようで瑞希の言葉に膝を付くと咲耶は明久に声をかけると深秋は明久に襲いかかる。

第166問

「いやあああ!!!???」

「みんな、アキ兄を押さえて」

明久はそれでも最後の悪あがきをしようと思っただけで逃げ出そうとするが深秋はクラスメート達に指示を出し、明久はクラスメートに捕まり、

「アキ兄、猫耳メイドと犬耳メイド、どっちが良い？」

「ど、どっちもイヤだああ!!!???」

深秋はメイド服以外にオプシオンを付けようと思ったようであり、猫耳と犬耳を手に明久ににじり寄ると明久は大きく首を振るが、

「姫路、どっちが見たい？」

「もちろん、両方見たいです!!!」

「みあ、両方だつてよ」

咲耶は首を振って拒否をしている明久の様子に瑞希に決めて貰おうと思ったようで声をかけると瑞希は直ぐに両方見たいと返事をし、咲耶は苦笑いを浮かべながら深秋に言くと、

「了解。うさ耳もだね」

「み、みあ、何で増えるの!? そうじゃない!? つけないか

らね！？ メイド服も着ないからね！！」

深秋は直ぐに頷き、新たなオプシオンを取り出ししており、明久は悪あがきをしているが彼を押さえつけるクラスメート達の手が緩む事はなく、

「……明久、頑張れよ」

「そう言うなら、助けてよ！？」

「それじゃあ、アキ兄、行ってみようか」

咲耶は2人の様子に明久に最後の応援をすると明久は咲耶に助けを求めると助けて貰えるわけもなく深秋は明久に襲い掛かった時、

「……待って、みあ」

「何？ しょうこちゃん」

「た、助かったの？」

明久に襲いかかろうとしていた深秋を翔子が呼び止め、明久は翔子が自分を助けてくれたと思ったたようだが、

「……私にも貸して欲しい。雄二にも付ける」

「わかったよ。犬耳だけでもこれだけあるけど」

「違った！？ ゆ、雄二、目を覚まして！？ に、逃げないと危険だよ！？」

翔子が明久を助けるために動くわけもなく、雄二にも犬耳や猫耳をつけたいように深秋と一緒に雄二に付けるものを話し始め、明久は気を失ったままの雄二に起きるように声をかけるが雄二はぴくりとも動かない。

「…………汚い絵面ですわ」

「確かにな」

「大丈夫です。吉井くんはきつと可愛く出来上がります!!」

「いらぬからね!? 姫路さん、そんな評価はいらぬからね!」

咲耶と美春は完全にメイド服に着替えさせられて康太に撮影されている雄二に視線を向けて言うと言と瑞希は明久なら大丈夫だと言つと明久は声を張り上げるがその声はむなしく響くだけであり、

「…………まあ、あの天然カップルはほっておくか」

「そうですね。それより、お姉さまはどこですか?」

咲耶と美春はこれ以上は関わらない方が良いと思ったようであの騒ぎの中心から目を逸らすと美春は美波のメイド服姿を期待しているようであ美波を探すが教室の中にはおらず、

「…………まだ、帰ってきてはいないか? まあ、帰りにくいだろうしな」

「まだ？ それはいつたいたいと言う事ですか！！ 大河咲耶！！
お姉さまに何をしたのですか！！」

咲耶は屋上から逃げ出して行った美波の事を思い出して小さな声でつぶやくが美波の事に関しての美春の嗅覚は侮る事が出来ず、美春は咲耶が美波に何かしたと思ったようで咲耶を怒鳴りつける。

第167問

「何をしたと言われると？ まあ、告白」

「告白？」

咲耶は別に隠す気もないと思っていると言う以前に、仮に美波と付き合う事になった場合に美春は乗り越えなければいけない壁だと思っ
ているようで美波に告白した事を正直に話すと美春の殺意は1段
階上がり、

「それも2回した」

「殺しますわ！！」

咲耶は告白の回数まで話すとさらに美春の殺意は跳ね上がる中、

『大河を殺せ！！』

『みあちゃんや姫路さんは敷居が高いと思っていたから、島田は狙
い目だと思っていたのに！！』

Fクラスの男子生徒までもが咲耶に殺意を向ける。

「いや、清水に殺意を受けるのは何となく理解できるが、妥協案み
たいな感じであいつを狙ってたヤツらに文句を言われる筋合いはな
いな」

「さっくん、男らしいね」

「任せろ」

咲耶はFクラスの男子生徒から言われる筋合いはないと言い切ると深秋は明久の着替えの途中ではあるが咲耶に向けて右腕の親指を立て、咲耶は深秋の言葉に返事を返すように右腕の親指を立て返すが、

「納得がいきませんわ！！ 大河咲耶！！ 貴様みたいな豚野郎に美春のお姉さまは渡しませんわ！！」

「……いや、島田さんは清水のものじゃないだろ。それより、咲耶、清水、当の本人が逃げ出そうとしているんだけどどうしたら良いと思う？」

「放して！？ 三津屋、お願いだから放して！？」

美春は背中から強烈な殺意にも似た物をまといながら咲耶を指さして吠えると教室に戻ろうとした時にこの状況に出くわし、全力で逃げようとしていた美波の首根っこをつかんだ流が顔を出す。

「いや、この状況で逃げたらダメだろ」

「違うわ！！ 今は逃げる時なのよ！！ この状況じゃ、返事も何も無いわよ！！ せ、せつかく、ちゃんと返事をしようと思ったのに八幡と言い、美春と言い、何なのよ！！」

「……あ、あの。美波ちゃん、それは大河くんに返事してるのと変わらないんじゃないかと」

「あ、あう」

美波はそれでも必死に逃げようとするが流は今の状況で逃げ出しはいけないと言うと美波は顔を真っ赤にして決意を決めたのにも邪魔が入ると叫ぶと瑞希は美波の咲耶への返事に自分の事のように顔を真っ赤にして言うと言つと美波は瑞希の言葉で自分がグダグダな返事をしてしまった事に赤かった顔がさらに赤みを増して行き、

「えーと、おっけーで良いんだよね？」

「う……待つて。ウ、ウチ、こんな返事じゃイヤよ。待つて!?!
三津屋、あんた、何をするのよ!?!」

「まあ、これはこう言う流れだろ。俺は八幡と違って空気を読む男だ」

咲耶は美波の反応に少しだけ照れくさそうに笑つと美波は今の返事では納得ができないと言うが流はそんな美波の様子に彼女を咲耶の方に押し出し、

「何を言ってるのよ!?!」

「待たない。俺、今、すっげー、嬉しいんだから」

「あ、あう。ウ、ウチも嬉しい」

美波は流のいきなりの行動に流を怒鳴りつけるがそれを押さえるように咲耶が美波の後ろから彼女をそつと抱きしめると美波は自分の耳元から聞こえる咲耶の声にどうして良いのかわからないようではあるが今の素直な気持ちの口にするが、

「……オオカワサクヤ、ユルシマセンワ。オネエサマハミハルノモ
ノデスワ」

『彼女持ちになどさせるか!! あの手切り者を全力で殺せ!!』

人外化を始めた美春と嫉妬に飲み込まれたFクラスの男子生徒から
の殺意は最高潮に達する。

第167問（後書き）

どうも、作者と

深秋「主人公と」

咲耶「……ひどく出づらいけど咲耶です」

美波の返事はぐだぐだ、それも思いつきり美春の前で、

深秋「りゅうくん、グツジョブ」

ですね。それに、

咲耶「……言うな。ひどく恥かしいんだから、それに次は生きていけるかが心配だ」

まあ、確かにそうですね。大丈夫です。きっと深秋が手伝ってくれます。

深秋「そのころにはアキ兄の着替えが終わってるだろうしね」

第168問

「はい。そこまでだよ」

「……ハナシナサイ。ヨシイミアキ、ジャマヲスルナラアナタゴトヤツザキニシマス」

深秋は猫耳メイドに着替えさせられ涙目になっている明久を見てご満悦なようであり、笑顔で美春に声をかけると美春の敵意は深秋にも向かうが、

「はるちゃん、わかってないね。知ってる？ ……ボクハ、イマ、アキニイノカワイイナキガオヲミレゼンカイナンドヨ。ソレニボクハイツモコイスルオンナノコノミカタナンドヨ」

「ミハルニサカラウトイウノデスカ？ ヨシイミアキ、オネエサマハミハルノモノデスワ」

深秋は明久の涙目でおかしなゲージはマックス状態であり、美春との対決に入るために人外化を始め出し、背中に黒い殺意ものをまとい、瞳は赤く異様な光を灯した2匹の獣がお互いを睨みつけて牽制を始め出すと、

「あれだな。気分的には怪獣大戦争だな」

「えーと、そうなのかも知れないけど……さ、咲耶、ウチ達、今、逃げなくても良いのかな？」

咲耶は深秋と美春の様子に苦笑いを浮かべると美波は照れ臭そうに

咲耶を名前で呼び、美春だけではなく、クラスメートからも咲耶が殺意を向けられているため、咲耶の制服の端をつかんで逃げなくて良いのかと聞く。

「いや、みあが頑張ってくれてるしな。ここで逃げると俺、卑怯者だろ」

「……これが咲耶とあの嫉妬の塊の違いだな」

「……雄二には劣るけど大河は良い男」

咲耶は美波の様子に心配ないと笑うと流と翔子はこれがそこで嫉妬に燃えている醜い奴らとは違うと言うと、

「だいたい、俺に逃げる理由がない。俺は美波が好きだから、きちんと告白をして返事を貰ったんだからな。それができないヘタレども嫉妬より、美波がいてくれればそれで良い」

「……うっ」

『ぐはっ!?!?』

「ん？ 嫉妬の塊にも数名にダメージが通ったみたいだな」

「……それ以上に、木下がダメージを受けている」

咲耶は真っ直ぐと美波を見つめて言うと数名のFクラスの男子生徒は膝を付き、その中には深秋にふられるのが怖くて告白ができない秀吉も混じっており、

「……優子の弟、何か、すまん」

「あ、謝らないで欲しいのじゃ。どうせ、ワシは大河のように男らしくないのじゃ、自分の気持ちも伝える事もできないのじゃ」

咲耶は秀吉の様子になぜか罪悪感を覚えたようで秀吉に謝るが秀吉は男らしくなく、床に『の』の字を書いていじけ始め、

『木下の告白なら、俺はいつでもおっけーだ！！』

『何を言っているんだ！！ 木下が告白するのは俺だ！！』

秀吉の言葉を聞いたFクラスのメンバーは秀吉が告白したい相手は自分だと叫び、同志討ちに突入し、誰も咲耶と美波を見ていない。

「……何か、ウチは納得がいかないんだけど」

「まあ、気にするな。俺だけが美波の魅力に気づいていれば良いわけだし」

「う、うん。そうね」

美波は秀吉に人気が負けている事に納得がいかなさそうな表情をするが咲耶は美波の腰に手をまわすと彼女を抱きよせて、自分は美波を見ていると言うと美波は咲耶の言葉に顔を真っ赤にして頷くと、

「……雄二、私も島田のように言って欲しい」

「……ほっ！？ しょ、翔子！？ お前は何をしゃがるんだ！？ っ
て、何だ、この格好は！？」

「……雄二と私、お揃い。ラブラブ」

「わけのわからねえ事を言うな!？」

翔子は雄二にも自分の事だけを見ていると言って欲しいようで強制的に雄二を起こすと雄二は自分がメイド服に着替えさせられている事に驚きの声をあげるが着換えさせた本人である翔子は話をまったく聞いていない。

第169問

「で、これはいったいどういう状況だ？」

「……残念」

雄二は自分の制服に着替えると隣で雄二が着替えてしまった事に残念そうに肩を落としている翔子を無視して、咲耶、美波、流の3人に混沌としている教室の事を聞くと、

「簡単に言えば、俺と美波が付き合う事になって、それを聞いた清水が嫉妬で人外化、みあが清水を押さえるために人外化したわけだ」

「そ、そうなの」

「そうか。大河と島田がな……何！？ 待て、どう言う事だ！？」

島田、お前は明久あのみかが好きだったんじゃないのか！？」

咲耶は苦笑いを浮かべて自分と美波が付き合い始めた事が原因だと言うと美波は口に出されるのは恥ずかしいようで顔を赤くして目を伏せ、雄二は始め、2人の様子に頷くが目の前で信じられない事が起きた事に気づき、猫耳メイド服姿で半泣きで康太に写真を撮られている明久を指差して言うが、

「そ、そうなんだけど、さ、咲耶と一緒にいるようになって、色々
とね」

「……いや、もう良い。何か、驚いたこっちが恥ずかしくなってきた」

美波は咲耶と知り合ってから、無自覚だが彼にひかれていて、陽菜や真子の応援もあり、自覚できた事を言おうとする美波の様子に雄二は聞いている方が恥ずかしくなってきたようで美波から視線を逸らして首筋を指でかく。

「と言う事で、嫉妬で清水だけではなく、Fクラスの奴らも暴走してな。この通りだ」

「……ああ。しかし、今更だが、作業が進まないな」

「そつみただいな」

咲耶は苦笑いを浮かべながら、その後にはFクラスの生徒が暴走したと言うと雄二は作業の進展がしない教室の様子にため息を吐くと雄二の苦勞が目に見えているようで流が苦笑いを浮かべた時、

「ま、待ちなさい！？ 吉井深秋！？ み、美春は話し合いを要求しますわ！！」

「ナニヲイツテルノカナ。ハルチャン、ハナシアイ？ ソンアモノハドウデモイインダヨ。ハルチャンガオキガエシテクレレバ」

深秋の人外化の方が業が深かったようで美春の人外化は霧散し、美春は深秋に捕まり、メイド服の下の下着を必死に抑えて最後のラインを防衛しており、

「……あれは止めた方が良いのか？ と言うか、すでに目的が変わってないか？」

「まあ、みあだからな。それより、止められる自信があるなら、止めてきたらどうだ？」

「……無理だな」

雄二は深秋を止めた方が良いかと言うのが誰も深秋を止める術を持ち合わせていないため、美春を見捨てようとするが、

「豚野郎ども！？ 美春を助ける努力くらいしなさい！？」

「いや、俺と美波の平和を考えるとここで徹底的にみあに清水が負けた方がいい気がするしな」

「そうね」

美春は自分の身の危険さに先ほどまで命を狙っていた咲耶にまで助けを求めると咲耶と美波は巻き込まれたくないのもあるため、美春を見捨てようすると、

「ま、待ちなさい？ た、助けられれば、一先ず、大河咲耶、豚野郎をお姉さまの2号と認めてあげても良いですわ！！ もちろん、お姉さまの本命は美春ですわ！！」

「……いや、それがあから見捨てようと思っているんだけど」

「ウ、ウチは美春と言うか何度も言ってるけど女の子に興味はないからね」

美春は咲耶に条件付きで美波との関係を許してやっても良いと言うがそれは彼女にだけ都合が良い提案であり、咲耶と美波は美春の提

案を却下する。

第170問

「で、次は魔法少女風なわけか？」

「うん。はるちゃん、ツインテールだし」

「……その理由はどうかならないのですか？」

美春を数回、着換えさせた深秋は満足げな表情で笑うが深秋とは対照的に美春はぐったりとしており、これ以上は咲耶に突っかかっていけないようであり、美波は少し警戒を解いたようで咲耶の後ろから顔を出すと、

「と言う事で、次はみなみちゃんだよ」

「う、ウチは着ないわよ!？」

深秋はどこからか美波用に取りだしたメイド服を手に笑い、美波は深秋の様子に再び、咲耶の背中に隠れてしまうと、

「お姉さまのメイド服？ 吉井深秋、1度、手を組みましょう」

「……復活、早いな」

「そうだな」

美春は欲望を最優先し、勢いよく立ちあがり、咲耶と雄二は苦笑いを浮かべる。

「みなみちゃん、覚悟……違うね。これを着て、さっくんを悩殺だよ」

「の、悩殺？」

「……美波、騙されるな」

深秋は咲耶を引き合いに出して美波の心を揺さぶると美波は少しだけ心を揺り動かさせるが咲耶はため息を吐いて彼女を引き止め、

「大河咲耶！！ 邪魔をするなど許しませんわ！！ だいたい、お姉さまのメイド服姿を見たくないと言うつもりですか！！」

「そうなの？ 咲耶」

「……いや、わざわざ、清水のような危険な猛獣に餌を見せるわけにはいかないだろ。それにそう言うのはできれば独り占めしたい」

「そ、そうなんだ」

美春は咲耶を罵倒し始めると美波は咲耶が自分のメイド服姿に反応してくれないのは少しショックなようで咲耶の顔を見上げると咲耶は美波の反応がかわいたため、照れくさそうに彼女から視線を逸らして頭をかき、美波は咲耶の言葉に恥ずかしくなったように顔を真っ赤にして目を伏せる。

「……なんだ？ この甘酸っぱい感じは？」

「……酷く、見てるこっちが恥ずかしくなるな」

咲耶と美波の周りには他者が入ってはいけない空気になっており、雄二と流は気まずそうに言うが、

『諸君、ここはどこだ!』』

『裏切り者に死の鉄槌を与える場所であります!』』

2人の甘い空気に反応した嫉妬の塊達が叫び声を上げ始め、

「……2人の邪魔は許さない」

「お、おい。翔子!？」

「……私は大河と美波を応援する。友達を応援するのは当然」

翔子は今にも咲耶に襲い掛かりそうなFクラスと咲耶の間に割って入り、去年からの友人である咲耶のために自分は戦うとFクラス生徒を睨みつける。

『霧島さん、避けてくれないか？ 我々は紳士だ。女子であるあなたを傷つける気はない。私達の目的は裏切り者である異端者大河咲耶をグロテスクに殺すだけだ』

「……紳士はそんな事はしない」

Fクラスは翔子を巻き込むわけにはいかないと彼女に避けるように言うが翔子には避ける気もなく少しの間、睨みあいが続いた時、

「そうやって、嫉妬で誰かを殺そうとするから、もてないんだよ
そう言う男の子って最低だよな」

『ぐはっ！？』

深秋は笑顔でFクラスの生徒達に精神攻撃をし、その言葉に多くの生徒が血を吐き、崩れ落ちる。

第171問

「まったく、役に立ちませんわ」

「……清水、お前も諦めたらどうだ？ 本人達の島田が咲耶を選んだわけだし」

美春はFクラスの生徒達を捨て駒扱いにしようと思っていたようで舌打ちをするとその姿を見た流はため息を吐く。

「はるちゃんは、みなみちゃんの幸せをお祝いしてあげられないのかな？」

「当然ですわ！！ 大河咲耶など認めませんわ！！」

「大河、お前と清水に何かあったのか？」

雄二は美春が2人の事を祝福できない事が咲耶に原因があるのではないかと思ひ咲耶に聞くが、

「いや、まったく」

「その態度が気に入らないのですわ！！」

咲耶は心当たりもないため、首を振ると美春は咲耶の態度が気に入らないと咲耶を指さして吠える。

「……平行線だな」

「そつだね……ん？　良い事を思いついちゃった」

「……みあ、どうしたの？」

美春の頑なな様子に雄二がため息を吐いた時、深秋が何かを思いついたようであり、

「あれだよ。こう言う時は勝負をするんだよ。全力で戦ってお互いを認め合えば良いんだよ」

「……いや、清水が相手だと咲耶の命が危ないだろ」

深秋は咲耶と美春を戦わせると言うが流はため息を吐く。

「違うよ。殺し合いだといろいろと問題があるから、せつかく、清涼祭があるわけだし」

「……売り上げ勝負か？」

「うん」

深秋の提案は喫茶店の売り上げ勝負であり、雄二はこの深秋の提案に客を呼べると判断したようで口元を緩ませる。

「みあ、調理班は俺より、土屋や須川がメインだぞ」

「大丈夫だよ」

「おーい。みあ、聞いているか？」

「問題なしだよ」

咲耶は自分が手伝うFクラスとBクラスは中華喫茶のため、自分は調理班の主力ではないため、勝負にはならないと言うが深秋は笑顔で押し切り、

「大河咲耶、美春に勝負を挑むなんて良い度胸ですわ！！ お姉さまにあなたではなく美春がお姉さまにとってふさわしい事を証明して見せますわ！！」

「……いや、話を聞けよ」

「大丈夫だよ。さつくん、みなみちゃん、今回の勝負ははるちゃんに2人の『愛』の力を見せつけるためだから」

美春は咲耶を指さしたまま、再度、吠えたと咲耶は大きく肩を落とすが深秋は咲耶1人で戦うわけではないと言って美波の背中を押し、

「う、うん。咲耶、ウチも頑張るから、一緒に美春を倒そう」

「ああ」

美波は深秋の言葉に乗せられ、咲耶、美波対美春の図式が出来上がる。

「何か、この状況だとCクラスとEクラスは置いてけぼりだな」

「なら、売り上げ勝負に三津屋、お前も乗れば良いだろ。これは面白そうだから代表会議で話そうぜ」

「……坂本、お前、対決とか好きだな」

「まあ、何か『勝負』とか『対決』ってわくわくするだろ？」

「否定はしないけど、それなら、優勝者はどうするんだ？」

雄二はこの勝負を学年全体でやってしまおうと言つと流は苦笑いを浮かべ優勝者をどうするかと聞くと、

「それなら決まりだよ。さっくん、はるちゃん、りゅーくん、勝つた人がゆづじくんとしようこちゃんの結婚式のウェディングケーキを作る」

「……賛成」

「おい！？ ちょっと待て!？」

深秋は優勝者はいつの日か必ずくる雄二と翔子の結婚式のウェディングケーキを作る権利が与えられると言い、

「ウチは甘味処だけど、目出度い席だから頑張るか」

「大河咲耶、三津屋流、首を洗って待っていないさい。美春の手で叩き潰してあげますわ!！」

雄二は声を張り上げるが場の空気は完全におかしな流れで出来上がっている。

第172問

「……どんな流れ？」

「……うるせえ、お前が遊んでいる間にこっちは大変だったんだ！」

「坂本くん、吉井くんは遊んでなんかいません！！　こんなに可愛い吉井くんが見れたんです！！　むしろ、プラスです！！」

「姫路さん、その写真を渡すんだ！！」

明久は美春が深秋に捕まっている間に着替えに行っており、教室に戻ってきた時のおかしな空気に首を傾げるが『アキちゃんの写真を』手に瑞希が吠えたため、清涼祭の売り上げ勝負などどうでも良くなったようである。

「しかし、売り上げ勝負か？　……勝てるのか？」

「……正直、難しいだろ」

咲耶と雄二は深秋からの精神攻撃で死屍累々になっているFクラス男子の様子に苦笑いを浮かべると、

「大丈夫だよ。さっくんとみなみちゃんだけじゃなく、ぼくやみずきちゃん、ヒデくん、アキちゃん、こうみちゃんも協力するから」

「康美？」

「ねえ、こつみちゃん」

「……………そんな人間を俺は知らない」

深秋はみんなで咲耶と美波を応援すると言つがその中にはおかしな名前が紛れ込んでおり、その場にいる人間が首を傾げた時、深秋は笑顔で康太の肩をつかみ、康太はこれから自分に起きるであろう事を理解したように顔は青ざめて行く。

「知らない？ そんなわけがないよ。ぼくはこんなに可愛いこつみちゃんを知っているんだから」

「……………これはなんだ？」

「えーと、確か、Dクラスとの試召戦争の昼休みの時の写真よね？ たしか、土屋は気絶してたわね」

深秋は笑顔で懐から大量の写真を取り出して広げ、康太は心当たりのない写真に眉間にしわを寄せるが美波にはこの写真に心当たりがあり、

「こんなに似合うんだから、着ないとダメだよ！！」

「……………俺は明久や秀吉と違ってそんなものを着る趣味はない。女装は2人の役目、だいたい、俺は調理班」

「ワシだつてないのじゃ！？ 絶対にワシは女装などしないのじゃ！！」

深秋は康太の女装写真を握り締めて吠ええると康太は女装は明久と秀

吉に任せると言って逃げようとし、秀吉は康太の言葉が不満のよう
で声をあげる。

「……そうなんだ。ヒデくんはさっくんとみなみちゃんの味方では
きないんだ。ぼくはヒデくんを見そこなつたよ」

「そ、そう言う意味ではないのじゃ!? そ、それに女装以外でも
手伝える事はいくらでもあるのじゃ!!」

「……さっくん、みなみちゃん、ヒデくんは協力してくれないって」

深秋は秀吉の反応に落ち込んだ様子を見せて咲耶と美波に謝り、

「まあ、仕方ないだろ。無理強いは良くないしな」

「う、うん。みあが手伝ってくれるだけでも心強いわよ。頼りにし
てるから」

咲耶と美波は深秋が手伝ってくれる事を喜んでいてくれている。

「……優勝賞品は別として、島田の事は助けてやりたいしな。明久、
みあ、姫路、召喚大会を勝ち抜くぞ。俺達が勝てば客引きにもなる」

「うん。当然だね」

「はい。美波ちゃん、大河くん、頑張りましょう」

雄二は半ば諦めも入っているようで頭をかきながら明久と瑞希に声
をかけると2人は大きく頷くなか、秀吉は意地を張って出遅れてし
まったため、どうしたら良いのかわからないようである。

第173問

「……秀吉、あんた、本当になっさけないわね」

「……返す言葉がないのじゃ」

意地を張り美波と咲耶の応援に乗り遅れて教室の隅でいじけている秀吉を見た優子は呆れたようで大きなため息を吐き、秀吉は姉である優子の言葉にさらに落ち込んで行く。

「……まったく、みあ、坂本くん、吉井くん、代表と清水さんから勝負の話を聞いたんだけど、どう言う話を考えてるの？ 代表と清水さんに聞いてもいまいち、よくわからないのよね」

「ん？ 何かあったか？」

優子は秀吉の姿にもう1度、ため息を吐くと売り上げ勝負の事を聞きに着たように深秋と雄二に声をかけると、

「島田さん、本当にこいつで良いの？ あたしは考え直した方が良いと思うわよ」

「……祝福の言葉の前にそれかよ」

「島田さんの事を思えばこそでしょ」

深秋と雄二と一緒に明久と瑞希、そして、売り上げ勝負の原因になった咲耶と美波を見て、美波に咲耶と付き合うのは考え直すべきだと美波の肩に手を置く。

「う、うん。咲耶が良い」

「そう？ ……まあ、本人同士の問題だし、これ以上、言っても仕方ないわね」

「……なら、言つなよ」

美波は照れ臭いようでもうつむくと優子は聞いた自分が恥ずかしくなってきたようで気まずそうに美波から視線を逸らし、咲耶は美波の様子に苦笑いを浮かべる。

「それで、木下姉、売り上げ勝負の事なんだが、正直、俺もわからん」

「……みあの思いつきって言うのが原因だからね」

「任せて」

「……みあ、机の上に乗らない」

明久と雄二はまだ何も決まっていな原因を作った深秋に視線を送り、深秋は清涼祭での良い余興を思いついた事を誉めて欲しいのか机の上にあがって両手をあげるとクラスメート達からは深秋をあがめる声とともに咲耶を罵倒する声が聞こえる。

「……とりあえず、現時点では優勝賞品しか決まってないわけね」

「ちょっと待て！？ 何で、あんなおかしなものを優勝賞品としてすんなり受け入れているんだ！？」

「別に良いでしょ。特に経費が関わるわけじゃないわけだし、だいたい、坂本くんは売り上げを2学年の設備に回す事は賛成したんだから優勝賞品に使う無駄な経費はないわ」

優子は深秋を机の上から引きずり下ろし、売り上げ勝負の事を次の代表会議で説明するために少し内容を煮詰めておきたいようであり、

「まあ、確かにそれに不細工な雄二と霧島さんの結婚式のケーキを咲耶や三津屋君、清水さんの誰かに依頼するわけだね。3人のうちの誰かの家の儲けにもなるし、サービスで値段交渉もしやすいし」

「ん。俺が勝った場合はただで作るぞ。俺と美波の事を応援してくれた礼だ。全身全霊を込めて、こんなのを作る」

「お前はなんでこんなものを持ち歩いているんだ!？」

明久は優勝賞品では誰も困らないと思っており、咲耶は既に構想が出来上がっているようで咲耶の作りたいウエディングケーキのデザインが何十枚も書かれているスケッチブックを取り出し、雄二は咲耶の行動に声を張り上げるが、

「決まってるだろ。この勝負が決まる前は俺が作る事になっていたんだ。来年の坂本の誕生日まで時間がないんだ」

「ゆうじくん、良かったね。来年のゆうじくんの誕生日は大変だよ。アキ兄、ぼくはしようこちゃんの友人席で招待されるけど、アキ兄はゆうじくんの方で良い?」

「雄二の方? 雄二に呼ばれるよりは霧島さんの友人の方が良いか

な？」

「わ、私も吉井くんと一緒でお願いします」

「待て！？ みあ、大河、お前らの中で話はどこまで出来上がっているんだ！？」

雄二の思っている以上に話は現実的リアルに進んでいるように見える。

第174問

「どこまでって、しようこちゃんとうづじくんの両親はうづじくんの誕生日に式場を押さえてるって」

「来年のお前の誕生日が日曜で良かったな。俺達もちゃんと出席するからな」

「待て！？ そんな事は聞いてないぞ！？」

深秋と咲耶は雄二が声をあげる理由がわからずに首を傾げるが雄二にとっては初めて聞かされる新事実のようであり、顔からは血の気が引いて行き、

「だ、だいたい。高校で学生結婚なんて文月学園がっしゅうが許すわけがないだろ？」

「おばあちゃんが許可してくれたよ。それでリハーサル代わりだって言って如月ハイランドのプレミアムチケットを1枚もらったから、しようこちゃんにあげといたよ」

「確か、ウェディング体験つてのができるんだっただか？」

学生結婚などあり得ないと叫ぶが学園長であるカヲルのお気に入り、深秋がいる事で完全に外堀は埋め尽くされている。

「如月グループもそんな貴重なチケットを学園に3枚もくれるなんて、よっぽどプレオープンに力を入れてるのね。吉井くん、姫路さん、ルールはこんな感じで良いと思う？」

「そうだね」

「はい。単純に純利益で出すのがわかりやすいと思いますから」

「待て。そこじゃねえ！！ 明久、姫路、木下姉、この状況がおかしい事になんて何も言わねえんだよ！！」

明久、瑞希、優子の3人は完全に逃げ道を潰されている雄二の事など気にする事なく、売り上げ勝負のルールの基礎を作る作業に移っており、雄二は3人に助けると叫ぶと、

「坂本、半分は冗談だから気にするな。優子、それなら、値段はある程度そろえた方が良いのか？」

「半分、本当なのかよ！？ って、どこから半分だよ！？」

咲耶はルールを決めている3人の姿に遊んでもいられないと思ったように雄二と翔子の結婚式の話を持ち上げる。

「……うーん。それは各店の考え方じゃないの。ちよっと高めのメニューも少し興味を魅かれるってのはあると思うし」

「あ。それ、わかります。やっぱり、値段が高い物があるとこれだけ何かあるのかな？ とか思いますよね」

「確かにそうだな。ウチの商品もそう言う傾向があるしな」

「あのだ。商品の値段とかより、ルールを煮詰めないと」

話はルールより商品の値段に変わっており、明久は苦笑いを浮かべる。

「そ、そうね。こつやって、余計なところに話が飛ぶから代表会議が進まないのよね」

「そつだな」

咲耶と優子は顔を見合せて苦笑いを浮かべ、

「それじゃあ、真面目にやりますか？ 清水に美波との事を認めて貰うのと来年のウェディングケーキの受注のために」

「うん。ウチも頑張る。一緒に美春を納得させよう」

咲耶は美波の顔を見て笑うと美波も咲耶と一緒に頑張ると小さく頷き、

「……こつちはこつちで順調みたいね。やっぱり、お祭りが近くなるとそつ言う空気になるのね」

「ゆづちゃんも当てられそつ？ さっくんとみなみちゃんに」

「あたしより、みあ、あんたはないの？」

優子は咲耶と美波の様子に少しは羨ましいようで小さく息を漏らすと深秋は優子の腕を突き、優子は未だに教室の隅でいじけている秀吉を見てため息を吐く。

第175問

「ぼく？　ないよ」

「……そんなあっさりと」

深秋はまったくその気はないようできょんとした表情をし、優子は深秋の様子に大きく肩を落とす。

「優子、みあに言っても無駄だぞ」

「ぼくは夢に向かって一直線なのだ」

咲耶は深秋と優子の様子に苦笑いを浮かべると深秋は笑顔で留学の事しか考えていないと笑う。

「……そうみたいね。って、言いたいところだけどそう思うなら、みあ、あんた、他にもやるべき事があるでしょ」

「何？」

「狙ってる学校、今の成績で入れるの？　後はフランス語もだけど、英語、まずは英語の成績をあげなさい。英語を使えば、とりあえず、どうにかなるでしょ。デッサンだけ描いて、衣装を作って立って成績が足りないと入学もできないでしょ！！」

「確かにな。今の成績じゃ、試験を通るかわからないからな」

優子は深秋が狙っている留学ができる衣装関係の専門学校に入学で

きるだけの学力を身につけさせたいようであり、咲耶は大きく頷くと、

「みあ、愛されてるわね」

「うん。兄としては嬉しい限りかな」

美波は咲耶が深秋を気にしているのが少しだけ面白くないようで頬を膨らませるが明久は美波の表情に気づく事なく笑う。

「まあ、みあの成績向上は兄嫁に任せるとして」

「そうね。あたしも吉井さんとウチの愚弟の成績向上で忙しいし」

咲耶と優子は瑞希を引き寄せると見てニヤニヤと笑い、彼女の耳元で深秋の成績向上を瑞希に頼み、

「な、何をいきなり言うんですか！？　そ、それにどちらかと言えば、私が吉井さんに勉強を教えたいです」

「いや、姫路と一緒にだと明久の理性が持たないから」

「それはそれであたしが女の子扱いされてない気がするんだけど」

瑞希は咲耶と優子の言葉に顔を真っ赤にすると咲耶と優子は彼女の反応に苦笑いを浮かべる。

「まあ、女なら誰でも良いって言うあんなバカども以外にも誰か一人だけ想いたい男ってのはやっぱりいるんだよ。素直になるかはまた別の話しなわけだしな。優子だってそっちの方が良いだろ？」

「それもそうね。確かにああ言うのはイヤね」

「な、何だよ」

咲耶は雄二に視線を向けると優子は見ると両思いなのに翔子を引き離す雄二を見てため息を吐くと雄二は何となく、居心地が悪いように声を裏返すが、

「みあ」

「何？ ゆづちゃん」

「いつも言っているけど夢を叶えたいなら、好きな事ばかりしない。好きな事だけやって成功できるなんて一握りなんだからね。こいつはまだしも、みあもうちの愚弟もあたしの言う事なんか聞きもしない」

優子は何度も深秋に言い聞かせているようでありため息交じりで言い、

「まあ、それでも何も考えないよりは良いだろ」

「そ、そうですね。みあちゃんは頑張ってます」

咲耶と瑞希は深秋を擁護するように深秋と優子の間に立つと、

「咲耶、ちよつと良い？」

「ん？ どうした！？ って、どこに行くんだ？」

「良いから、ちょっと来なさい」

美波は咲耶が深秋の味方をしている事が我慢できなくなったように、咲耶を引っ張って教室を出て行き、

「愛されてるわね」

「そ、そうですね」

優子と瑞希は美波の気持ちも理解出来るように苦笑いを浮かべる。

第176問

「えーと？」

「……何で、こんな事になってるんだ？」

美波に引っ張られてFクラスの教室から出た瞬間に咲耶と美波は陽菜と真子に見つかり、Eクラスの教室に引きずり込まれる。

「それでは、正式にお付き合いする事になったと言う事ですね？」

「う、うん」

「おめでとうございます。美波さん、大河くん」

「ああ。ありがとう」

陽菜と真子からの2人への祝福の言葉に咲耶は照れくさそうに笑い、美波は恥ずかしいようで顔を真っ赤にしてうつむいてしまう。

「それで、話はこれで終わりで良いのか？ Fクラスほどじゃないけど、男子の視線が痛いんだけど」

「うちのクラスはFクラスと模擬試召戦争をやった時に大部、Fクラスの人達に引っ張られましたからね」

咲耶はEクラスの男子から向けられる嫉妬の視線に多少、居づらいようで苦笑いを浮かべると陽菜はくすりと笑うが、

「まあ、嫉妬を受けるのは幸せな人達の特権ですから、嫉妬の視線を受けてください」

「まあ、確かに勝ち組の特権だ」

「ちよ、ちよつと、咲耶!? いきなり、何をするのよ!?!」

陽菜は嫉妬を受けるのは仕方ないと言うと咲耶は陽菜の言葉に乗るように美波を引き寄せ、美波の顔の赤みは耳まで広がって行く。

「……あ、あの。大河くん、島田さん、教室でそう言うのはちよつと」

「そ、そうよ。咲耶、放してよ」

4人の様子を見ていた薫は清涼祭の準備も続けないといけないため、遠慮がちに声をかけてくるが咲耶と美波の様子に見ていた自分まで恥ずかしくなってきたようで顔を真っ赤にしており、

「何だ? 原口、お前だって中林にこう言う事をしたんじゃないのか? 清涼祭、一緒に回ろうとか誘ったのか?」

「な、な、何を突然言い出すんですか!? そ、そんな事をするわけにじゃないですか!? だいたい、僕とヒロミちゃんは幼なじみであってそんな関係じゃないです!?!」

「原口くんの場合はみんなにバレバレですからね」

「……どうして、代表が気づいていないのかがわかりません」

咲耶は薫の様子に獲物を見つけたと言った感じでニヤリと笑って薫に宏美との進展具合を聞くが薫は慌てて否定するがその声は明らかに動揺しており、陽菜と真子は進展しそうでしないEクラスの幼なじみカップルの様子に苦笑いを浮かべると、

「まあ、中林のタイプって知的なクール系だって話だしな。タイプと言えは久保とかだよな？」

「う、うん」

咲耶は宏美のタイプの話聞いた事があるようであり、薫と宏美のタイプを比べると薫も宏美のタイプの男を知っているようで肩を落とすが、

「待て。落ち込むな。あくまでもそれは中林の思い込みって事だつてある。クール系は話も続かない事も多いし、中林なら絶対に耐え切れない。俺は中林と原口はお似合いだと思う」

「……確かに代表は感情で動く事が多いですからね。それをフオローしているのは原口くんですから、ちょっとしたきつかけさえあれば直ぐに上手くまとまると思います」

「そうね。そうなると清涼祭をやりぱりうまく使わない手はないわよね」

なぜか話は薫と宏美をくつつける方向に進み始めており、

「ちょ、ちょっと、どうしてそう言う話になるんですか!？」

「まあ、気にするな。俺と美波だけ、見せ物になってるのはしゃく

だから道連れを作ろうと思ったただけだから」

「そ、そんな理由で!?!」

薫は慌てて話を止めようとするが咲耶は話を止める気はなく、美波、陽菜、真子の3人も女子らしく恋愛話は好物のため完全に乗り気である。

第177問

「それで実際はどうしたら良いんでしょうか？ 代表と原口くんだと」

「待て。まずは最初にやるべき事はそこじゃない。卑怯かも知れないが中林に久保への告白をさせる事だ」

「ちょ、ちよっと、咲耶、何を言ってるのよ！？ そんな事をしてもし2人が付き合う事になったら」

陽菜は作戦を立てようとするが咲耶には何か考えがあるようで宏美に利光へ告白させようと言いだし、美波は驚きの声をあげるが、

「……大丈夫だ。中林は絶対に振られる。これは確実だ」

「そうですね」

咲耶と真子は何かを知っているようで視線を逸らす。

「ちょ、ちよっと、久保に何かあるのよ」

「美波さん、世の中には知らない方がいい事もあるんですよ。こっちに来たいなら相談に乗りますけど」

「……美波、深く追求するな。人にはそれぞれ趣味趣向と言うものがあったな。それは本人以外には踏み入れてはいけないものが多い」

美波は2人の様子に何か危険を感じたようであるが、咲耶と真子は

首を横に振ると、

「……どちらかと言えば中林より原口の方が危険だからな。間違っても久保には近づくなよ」

「な、何を言ってるんですか!? ボクは男ですよ!?!」

「……原口くん、だからこそ、危ないんですよ」

咲耶は薫から視線を逸らしながら利光に近づくなと警告すると薫は咲耶がまた自分を女子扱いしたと思ったようで顔を真っ赤にするが真子はそうではないと首を振り、

「ど、どう言う事ですか!? く、久保くんって、あれ、ちょっと待ってください!?!」

「……だから、中林と久保が付き合う事はまずあり得ない。そして落ち込んだところに付け込むんだ」

薫は真子の言葉に2人の言いたい事がわかったようであり、顔の血の気は引いて行き、咲耶は優しいげな笑みを浮かべて薫の肩を叩く。

「ま、待つてください。そ、そんな事をヒロミちゃんが聞いたら、酷くショックを受けるじゃないですか!! だいたい、そんな弱みに付け込むような事、ボクは嫌です。そんな事なら、ボクは」

「なら、告白してみようか?」

「な、何を言っているんですか!? ボ、ボクがヒロミちゃんに告白だなんて!?!」

薫は宏美が振られた時に付け込むと言う咲耶の作戦は卑怯であり、そんな事はできないと声をあげると咲耶は薫の肩に手を回して彼の耳元で宏美に告白する流れに持つて行こうとするが薫は顔を真っ赤にして告白などできないと首を振ると、

「なあ、原口、それなら、いつまで幼なじみってのを続けて行くつもりだ？ その場所は辛くはないのか？」

「そ、それは、で、でも気まずくなるよりは」

咲耶は煮え切らない薫の様子に本当に今のままで良いのかと聞くが薫はふられた時の事しか考えられないように目を伏せてしまい、

「あ、あのさ。咲耶、もう少し考える時間があっても良いんじゃないかな？ やっぱり、決心するって勇気がいるわけだし」

「確かにそれはあるかも知れませんが」

美波と陽菜は薫にも考える時間が必要だと薫の援護に回り、

「それもそうだな。原口、言って置くぞ。別に遊ぶつもりはないからな。お前が本気で行くつもりだったら、ちゃんと協力してやる」

「う、うん」

咲耶は薫に笑顔を見せて本気で応援している事を伝えると薫は咲耶の言葉が本心から言ってくれている事がわかったようで大きく頷く。

第178問

「レンちゃん」

「……放れて、暑苦しいわ」

「いや」

清涼祭の準備期間も終盤に入ると流の代わりにF、Bクラスにきたのは恋華であり、深秋は恋華に飛びつくが恋華の反応は極めて薄く、

「……みあ相手にあの反応か？ 有栖、侮れないな」

「確かにね」

「良いから、遊んでないで早くしろよ」

明久と雄二は深秋を軽くあしらう恋華の様子に苦笑いを浮かべるが打ち合わせ中だったのか恭二は舌打ちをする。

「まあ、打ち合わせも何もあまり、ないだろ。シフトもだいたい決まったわけだしな。召喚大会参加者はやっぱり、時間で抜けないといけないくらいだ」

「そうだね……根本くん、どうかした？」

「しかし、お前ら、本当に召喚大会に出るのか？ 姫路と吉井妹はまだしも、はつきり言わせて貰うがお前らより成績の良いのが転がってるだろ。ウチのクラスからも何人か出るって言ってたぞ」

雄二はこの時期までくるとあまり話し合う事もないと頭をかく姿に
恭二はため息を吐きながら清涼祭のメインイベントと言われる召喚
大会に明久と雄二が出る事が信じられないようであり、

「良いんだよ。宣伝のためなんだからな。根本、Bクラスの連中にも
も言っておけよ。召喚大会出場者で女子はチャイナだって」

「……それを言うと変態扱いされる気しかなかったけどな」

「まあ、確かにね」

雄二は店の宣伝のために召喚大会出場者には中華喫茶の服である『
チャイナドレス』着用を義務付けると恭二は大きく肩を落とし、

「それに外にも行くだろ。それを飲食店の制服で行くのは大丈夫な
のか？ ……なんだ？ 大河」

「土屋と須川から頭脳組に差し入れた。頭を動かすには糖分だって
言ってるな」

恭二は真面目に清涼祭の出し物を事を考えているようでチャイナド
レス着用は考え直した方が良いと言った時、3人が座っていたテー
ブルにゴマ団子が差し出され、咲耶が顔を出す。

「ん。さんきゅう……大河、最初に聞いておくが姫路は厨房に入っ
てないよな？」

「……ああ。あの惨事があったからな。Bクラスの女子が鉄壁の守
備を固めてくれている」

「なら、安心だね」

雄二はゴマ団子を1つ手に取ると数日前に瑞希が厨房で作ったゴマ団子を食べた数名が白い泡を口から出して倒れた事を思い出したように咲耶に厨房の様子を確認すると咲耶は問題ないと頷き、

「……飲食店をやる上で1番、注意しないといけないのが姫路とは思わなかったな。ん。これは美味しいな」

「ああ……おい。大河、これは本当にムツツリー二と須川が作ったのか？」

恭二はゴマ団子を口に運ぶと思っていたより、ずっと美味しかったように驚きの声をあげると雄二も恭二の言葉に続いて咲耶にゴマ団子を作った人間について聞くと、

「あの2人だ。はっきり言えば、一介の高校生が作るレベルじゃねえよ」

「なら、優勝は确实だね。良かったじゃないか。サク」

「そう言いたいところだな。相手が流や清水じゃなかったら、圧勝だ」

咲耶は素直に2人の料理のレベルを誉めると明久は売り上げ勝負は貰ったと笑うが咲耶は違った事を考えているように眉間にしわを寄せる。

第179問

「そんなに心配する必要があるのか？」

「まあ、三津屋はわかるが、清水は論外だろ」

雄二と恭二は咲耶の心配は杞憂だと言うが、

「流はたぶん、経営関係なら俺や清水よりしつかりしてると思うし、和喫茶の特性を考えると小山や他の茶道部が集まっているのは充分に戦力だろ。後は清水の野生の勘、清水の実家は結構、季節限定のメニューも有つてな。それを見極められる上にAクラスの予算、後は優子や平賀はクラスを統率するのに優れてるだろ。それに対して……」

「まとまりには欠けるね」

咲耶はあまりまとまっていないBクラスとFクラスの様子に大きく肩を落とし、明久は苦笑いを浮かべると、

「まあ、それでもうちには意外性を持った切り札がいるだろ」

「……おかしな風に行かなければ良いけどな」

雄二は恋華にまわりついていて深秋を見て苦笑いを浮かべると恭二は深秋は諸刃の剣だと言いたいように眉間にしわを寄せる。

「ま、まあ。大丈夫だよ。きっと」

「はい。私も大丈夫だと思えます。みあちゃんはお友達のために頑張る時は凄く頼りになりますから」

明久は苦笑いを浮かべると瑞希も話を聞いていたようで深秋は頼りになると言い、

「そう願いたいものだけだな」

「根本、顔をしかめるな。その時のみあの強さはお前が1番実感してるだろ？」

「うるせえよ。大河」

恭二は誰かのために戦う深秋に負けているためか、その時の事を思い出したようで舌打ちをして立ち上がり、

「おい。根本」

「ここでどれだけ話したって結局は当日の問題だろ。大河、遊んでるなら、積極指導でもしろよ」

「わかってるって」

雄二は恭二を呼ぶが恭二はこれ以上は話す事はないと話を切り上げ、咲耶は彼の中に芽生えた葛藤を嬉しく思っているのか恭二の後を追いかけて行く。

「まとまりに欠けるな」

「仕方ないよ。やっぱり、簡単にはいかないしね。それより、僕達

は僕達でやれる事をしないと」

「そうだな。一先ずは宣伝のために召喚大会を勝ちあがらないといけないしな。正直、それが1番、きついんだ」

雄二は改めて、まとまらないメンバーにため息を吐くと明久は先日
から深秋の事で迷惑をかけているため恭二には強く言えない事もある
ようであり、雄二は乱暴に頭をかくと、

「みあ、遊んでるな。宣伝するのに召喚大会を勝ち抜かないといけ
ないんだ。お前の成績が1番、不安なんだ。遊んでないでこつちこ
い」

「えー。ぼくはレンちゃんのチャイナを作ると言う使命が」

「……ないわ。吉井さん、あなたはあつちに行きなさい。阿久津さ
ん、お願いするわ」

「は、はい」

雄二は深秋の成績を錬創の腕輪が暴走しない程度まで引き上げたい
ようであり、深秋を呼ぶが深秋は恋華にまわりついたままであり、
恋華は深秋が鬱陶しいようで深秋を追い払い、衣装担当の鈴に声を
かけて深秋から離れて行き、

「うー、またレンちゃんに振られた」

「良いから、早くこつちにこい。遊んでる暇はないんだよ。現状で
言えば、姫路のフォローがあるとしてもみあの成績が1番、不安な
んだからな」

深秋は肩を落としながら3人の元に歩いてくる様子に雄二はため息を吐く。

第180問

「しかし、こうやって見ると……明久、成績が上がったな」

「はい。吉井くんは頑張っています」

4人は今の成績を確認しようとBクラスとの試召戦争後に受けた補給試験の点数を見比べ、雄二は明久の去年の底辺の成績を知っているためか驚きの声をあげると瑞希は明久は頑張っていたと大きく頷くが、

「……その分、みあの成績の悪さが目立つな」

「うん」

雄二も元神童は伊達じゃなかったように成績をあげており、瑞希はもちろんAクラス、明久、雄二はCクラス程度のなか、深秋の成績だけはあまり向上は見られていない。

「みあちゃんは得意教科は問題ないんですから、弱点教科をどうにかすれば大丈夫ですよ。わ、私がフォローしますし」

「確かにそうなんだが……みあ、選択肢も多い日本史や世界史が10点以下って言うのはどう言う事なんだ？ 家庭科や現代文とか取れる点数がある教科から考えるとこれはあり得ないだろ」

「え？ だって、選択肢はアキ兄から貰った『シャイニングアンサー』頼りだから、ぼくは考えないよ」

瑞希は深秋を全力でフォローすると言うが雄二は深秋の極端に悪い点数が納得がいかないようで深秋に聞くと深秋は自信ありげにポケットの中から1〜6まで書かれた鉛筆を取り出して選択問題はすべて鉛筆を転がしていると胸を張り、

「……こんなものに頼るな」

「ちょ、ちよっと、ゆうじくん、返してよ!？」

雄二はこの鉛筆が深秋の成績不振の原因だと思ったように鉛筆を取り上げると深秋は雄二から鉛筆を取り返そうとしている姿に、

『坂本、グツジヨブ』

『みあちゃん、可愛い』

『待て。確かにあのみあちゃんは可愛いが、坂本はみあちゃんを困らせているんだ。俺達『みあちゃんファンクラブ』としては坂本をグロテスクに殺してみあちゃんの鉛筆を取り返すべきじゃないか?』

『『『『『確かに』』』』』

教室にいる深秋のファンクラブを名乗っているおかしな生徒達は雄二に向けて殺意をまとい始める。

「……みあ、とりあえずは選択問題だけでも自分で考えてみる。これよりは正解率が上がりそうだから」

「えー」

雄二は周囲からの殺意に負けて深秋に鉛筆を返してテストの受け方を変えるように言うが深秋は不満げに声を上げ、

「あ、あの。吉井くん、みあちゃんって、成績の良い教科も選択問題は鉛筆を転がしているんですか？」

「わ、わからないけど、み、みあ、家庭科とかも鉛筆を転がしてるの？」

明久と瑞希はふと疑問に思った得意教科の選択問題はどうしているかと聞くと、

「もちろんだよ。家庭科と文系の選択問題は外した事がないよ」

「……シャイニングアンサー、侮れねえな」

「は、はい」

深秋は得意教科でも選択問題は自分で解いていないようであり、雄二と瑞希は眉間にしわを寄せ、

「……鉛筆も持ち主に似るって事があるのかな？」

「明久、俺が言うのもなんだが、みあを常識で測るな。何かおかしな事になりそうだな」

「そ、そうだね」

明久と雄二はこれ以上、深秋のテストの解答方法にツツコミを入れるとおかしな事になりそうだと思うたようであり、

「みあ、得意教科はそのままが良いが、他のテストの時の選択問題は少し考えるようにしてくれ」

「えー」

「きちんとやったら、明久にも清涼祭でチャイナドレスを着せてやるから」

「うん。わかったよ」

雄二は明久を餌に深秋に納得させ、明久は納得がいかに叫び声をあげるが誰も明久に味方するわけがない。

第180問（後書き）

どうも、作者です。

番宣です。サド邪ifシリーズと言うシリーズを作りました。
その中でサドで邪悪な召喚獣の理音と深秋のお話を書き始めました。
興味がありましたら作者のページからどうぞ。

第181問

「……ホントに着るんだな」

「雄二のせいだろ!!」

清涼祭1日目、雄二が教室に入ると明久はチャイナドレスを着ており、雄二は汚物を見るような視線を向けると明久は雄二を怒鳴りつけるが、

「ゆうじくん、どこに行ってたの?」

「ん? これを貰ってきたんだ」

「ちょっと、無視しないでよ!？」

深秋は明久の事など気にする事なく雄二がどこに行っていたのかと聞くと雄二は召喚大会のトーナメント表をチラつかせ、明久は完全に無視されている事に声を張り上げると、

「……吉井、別にいつまでも着てる必要はないんじゃないのか?」

さっさと男子の衣装に着替え直せ」

「そ、そうだよね……姫路さん、何かな?」

恭二はバカをやっているのに呆れているのか明久に着替えるように言い、明久は恭二の言葉で我に返ったのか着替えようとするがそんな事は許さないと叫びたげに瑞希が明久の肩をつかむ。

「……バカばかりかよ」

「まあ、そう言うな。それがあいつらの強さだし、それで、坂本、対戦表はどうなっているんだ？」

恭二は話が進まない事に大きいため息を吐くと咲耶は苦笑いを浮かべて雄二に召喚大会の対戦表を覗き込み、

「Aクラスは……ん？ 代表と優子も出るのか？ 優子はペアチケットを取ったって誘う相手もないだ……」

「……咲耶君、それはいったいどう言うことかしら？」

咲耶は対戦表から知った名前を探すと直ぐに翔子と優子の名前を見つけ、余計な事を言いかけた時、背後から咲耶に殺意が向けられるが、

「ん。だって、なあ、みあ」

「ゆうちゃん、こう言うのにしか興味がないし」

「み、みあ、おかしな物を出さないで！」

咲耶は優子の殺意など気にする様子もなく、深秋に話を振ると深秋は懐から優子の大好きな薄い本を取り出そうとするが優子は素早い動きで深秋の初動作を止め、

「「ちっ」「」

その場には深秋と咲耶の舌打ちが響く。

「みあ、咲耶君、あたしに嫌がらせをしたいの？」

「いや、せっかく、玩具おもちゃがきたからな。俺達なりの歓迎をしようと思っただけですよ……まあ、これは宣戦布告と思ってくれ」

「面白いわね。まさか、勝負に勝つ気でいるの？」

優子は額に青筋を浮かべて深秋と咲耶を睨みつけるが咲耶は彼女の怒りをのりくらしと交わすとFクラスとBクラスの喫茶店のおススメ賞品のゴマ団子を優子の前に差し出すと咲耶と優子の視線の交差する個所で火花が散っているように見えるが、

「咲耶、遊んでないで、こっちを手伝ってよ」

「お、おう」

美波は咲耶と優子の様子にやきもちを焼いているのか咲耶を引つ張って行き、

「……何か、食べる前にお腹いっぱいになったわ」

「そうですね」

優子は完全に毒気が抜けたようであめ息を吐くと近くにいた鈴は苦笑いを浮かべ、

「あ、あの。坂本さんと吉井くんはそろそろ、召喚大会なんじゃないですか？」

「お、そうだな。明久、行くぞ」

鈴は明久と雄二に召喚大会の時間に近づいてきてる事を教えると雄二はチャイナドレスのままの明久の首をつかみ、

「ま、待って!?! この格好はダメだよ!!!」

「大丈夫です。吉井くんは似合ってますから!!!」

明久は着替えさせてくれと叫ぶがその叫びは虚しく響くだけである。

第182問

「……みあ、吉井くんはあのままで良いのかしら？」

「何も問題ないよ」

優子は小さくなって行く明久の叫び声に眉間にしわを寄せながら深秋に聞くが彼女は当然、笑顔で問題ないと言い切り、

「……まあ、きちんとメイクもしていたし、見た目的には吉井くんは女の子顔だし、問題ないかな？」

「はい。まったく問題ありません!!」

優子はとりあえず、自分を納得させようと自分に言い聞かせるように言うと瑞希も深秋と同意見なようで大きく頷き、

「……姫路さんって本当に吉井くんの事が好きなのかしら？」

「えーと、姫路さんはこの中で一番、吉井さんと付き合いが長いわけですし」

「……要するに毒されていると言いたいわけね」

優子は好きな男子が女装している姿に興奮気味な瑞希の様子が理解できないように眉間にしわを寄せたまま首を傾げると鈴は苦笑いを浮かべ、鈴の言葉に恋華は落ち着いた口調で言う。

「そ、そんな事はないです!？」

「別に慌てて否定する必要はないわ。あの2人を見ていれば誰の目から見ても明らかでしょ。それより、木下さんは何の用？」

鈴は恋華の言葉に慌てて否定しようとするが恋華は否定する必要などないと言い切ると優子に何の用かと聞き、

「別にこれと言った用はないんだけど、みあの様子も気になったから、準備が終わってないと勝負にもならないと言っか、みあの暴走で咲耶さんと島田さんに迷惑をかけるわけにもいかないし……それに、心配なのはみあだけじゃないし」

「……そうですね」

優子は深秋が暴走してFクラスとBクラスの喫茶店で迷惑をかけそうだから、釘を刺しに来たようだがBクラスの女子生徒のチャイナドレス姿に歓声を上げているFクラス男子の様子に大きく肩を落とすと鈴はFクラスの男子から向けられる視線をあまり良く思っていないようで顔を引きつらせている。

「まあ、Fクラスの男子がおかしな行動に出たら、これを使って、他の女子にも渡してくれる？」

「こ、これって、スタンガンですか!？」

「……木下さん、どうして、スタンガンが出てくるのかしら？」

「代表がみあを心配して貸してくれたのよ」

優子は鈴の心境に同情しているようで彼女にスタンガンを渡すと恋

華は目の前で行われているあり得ない状況に眉間にしわを寄せると優子は自分でもどうしてこんな状況になったかわからないように鈴と恋華から視線を逸らし、

「……まあ、Fクラスの男子の行動からみると護身用にあつた方が
良い気もするから、私も借りておくわ」

「え、えーと、そ、それなら、私も」

恋華はFクラスの男子の行動から考えると優子の心配はあり得ない事でもないと思ったようであり、恋華は優子からスタンガンを受け取ると鈴は返そうとしていたスタンガンを引っ込め、優子に深々と頭を下げる様子に、

「……物騒だな」

「う、うん。でも」

「大丈夫。美波は俺が守るし」

恭二は眉間にしわを寄せるが美波は嫉妬で動くFクラスの男子の姿が想像できたようで咲耶の服をつかむと美波の様子に咲耶は優しく美波の頭をポンポンと叩き、そんな2人だけの空間にFクラス男子の殺意は1段階上がるが、

「嫉妬の塊には彼女なんかできないのだ」

深秋はFクラスの男子に精神攻撃を仕掛け、その攻撃は男子生徒の心をばつきりと折る。

第183問

「もうすぐ、時間だね」

「は、はい」

清涼祭が始まり、対戦表から深秋と瑞希が召喚大会の1会戦の時間が近づいてきていると話していると、

「こんな不味いもんを客に食わせるなんて、お前ら、舐めてるのか？」

「ホントだぜ。この不味さ。腐った材料でも使ってるんじゃないのか？」

店の真ん中で男子生徒2人組が店のメニューに言いがかりをつけたいように大声を上げ始め、

「あれは何だ？」

「さあな。ただ、ああ言うのは早めに退席して貰いたいな。とりあえず、女子は下げな」

咲耶と恭二は2人組が今にも暴言から暴力に移りだしそうなため、フロアに出ている女子生徒を2人組から遠ざけようとした時、

「こっちも盛況だな」

「ちょ、ちょっと、八幡くん、待ってよ。案内がくるまで待ってな」

いと」

公介に引きずられた蓮が喫茶店に入ってきて、

「……？ 咲耶、この2人って顔だけじゃなく、味覚もおかしいのか？」

「や、八幡くん、い、いきなり、何を言ってるの！？ す、すいません」

店の中で大声を張り上げている2人組を指差し、公介の失礼な反応に蓮は慌てて2人組に頭を下げるが、

「おい。てめえ、2年のくせに先輩をバカにするってのはどう言う見だ？」

「事と次第によっては許さねえぞ」

2人組は公介にバカにされた事もあるため、公介との距離を縮めて彼を威圧するように睨みつける。

「いや、少なくとも俺は事実しか言っていないからな」

『確かに普通に、いや、学生が出してくるレベルの味じゃないだろ』

『ここだけじゃないって、今年の2学年はレベル高すぎだって』

公介は2人組に睨まれる筋合いはないと言い切り、はっきりと断る公介の様子に他のお客さんも公介の言葉に頷きはじめ、

「これが世論だ。どっちが本当の事を言ってる。それにみあ、この2人は正直、不細工だろ」

「うーん。そうだね。不細工だし、髪型もおかしいし、それに何より、生理的に無理」

公介はそこで攻めどきだと判断したようで深秋に話を振ると深秋は笑顔で2人組はあり得ないと言い切るとすでに2人組から距離を取っていた女子生徒達が大きく頷くだけでなく、お客の女生徒達まで深秋の言葉に賛同すると、

「それにね。新聞部調べのデータ何だけど」

「あ、あの。みあちゃん、何をするつもりですか？」

深秋は教室の前の黒板代わりの巨大ディスプレイに新聞部が秘密裏に集めているアンケートを映し出し、

「『近寄りたくない男子トップ10』、『生理的に無理な男子トップ10』、『性格も顔も悪い男子トップ10』えーと、あの2人の名前は吉井妹、知ってるのか？」

「これとこれ」

「夏川に常村？ 面倒だから常夏で良いな」

恭二は騒いでいる2人組の名前を深秋に聞き、深秋は全てのアンケートに名前が入っている『常村勇作』、『夏川俊平』の2人を指差し、咲耶は既にこの2人組の事など取るに足らない存在だと思っているようで一まとめにすると2人組以外にいる生徒達は咲耶の言葉

に納得したようで大きく頷くが、

「なあ、みあ、このアンケート、常夏以外はFクラスの男じゃないか？」

「……八幡、だから、今はそれを言う事じゃないだろ」

公介だけは他のところに食いつき、恭二は大きく肩を落とす。

第184問

「膝から崩れ落ちたのう」

「これで自覚してくれると少しは楽なだけだな」

アンケートを見てFクラスの生徒は秀吉を抜かして崩れ落ち、咲耶はもう少し自分達で改善すると言う意志を見せて欲しいと頭をかくが、

「てめえら、バカにしてやがんのか!!」

「え？ これは事実であつてバカにしてるつもりはないですよ」

勇作は完全に自分達をバカにしている教室の生徒達を怒鳴りつけるが深秋は2人が怒っている意味がわからないようで首を傾げると、

「てめえ、女だからって調子に乗るんじゃないぞ」

「……事実を言われて他人に当たるのはどうなんだ？」

俊平は深秋の胸倉をつかもうとするがその腕を恭二がつかんだ時、

「根本、お前が言うな」

「だから、八幡、空気を読めって言ってるんだろ!!」

公介が茶々を入れ、恭二は公介を怒鳴りつける。

「常夏変態、すみませんけど、営業妨害なんで消えてくれませんか？」

「おい。こら！！ お前らは先輩に対して礼儀つてものがねえのか！！」

咲耶はこれ以上は揉められても面倒だと思ったようで2人組を追い出そうとするとその言葉はさらに2人組の怒りを煽るが、

「すみません。高だが、1年早く生まれただけで尊敬もできない人間に敬語を使う必要性を感じません。それにバカにバカにされる筋合いはないですよ」

「あ？ 俺達はAクラスだぞ！！」

「咲耶もAクラスよ」

咲耶は2人組の相手をする気はないと追い払うように手を振ると2人組は文月学園が成績至上主義のため、周りを見下すように叫ぶが美波は咲耶の後ろに隠れながら言う。

「……文月学園のテストは小学校レベルから大学レベルまでさまざま、Aクラス上位組の大河はバカにされる筋合いはないわね」

「ね。この2人はAクラスって言うても下位だし」

恋華は咲耶の成績から2人組に咲耶がバカにされる所以はないと言いつつと深秋はどこから手に入れたかわからないが2人組の成績をディスプレイに映し出し、その成績はAクラスとはいえ咲耶に比べればお粗末であり、

「成績、性格、顔、その他モロモロ、この顔面不細工コンビに負ける気はしないな」

「ちょ、ちよつと、さ、咲耶!? 何をするのよ?」

「いや、不細工コンビに俺の可愛い美波を見せつけようかと」

「な、何を言ってるのよ!?!」

「……お前、それを自分で言うのはどうかと思つぞ」

「えーと、完全にバカップルですね?」

咲耶は彼女である美波を引き寄せると自慢げに2人組に言い、恭二は眉間にしわを寄せ、鈴は苦笑いを浮かべ、

「て、てめえ、俺達は客だぞ!!」

「いや、あんたらはただのクレーマーだからな」

「みんな、何をしてるの? みあ、姫路さん、そろそろ行かないと時間だよ」

現状で勝てる要素のなくなった2人組はついに客に対する態度ではないと叫び出した時、召喚大会を終えた明久と雄二が教室に帰ってくると雄二は状況を理解したようだが明久は理解していないようで首を傾げ、

「そうだね。みずきちゃん、行こっか?」

「は、はい。でも、この状況で行っても良いんでしょうか？」

「良いの。良いの。それに時間は稼げたしね」

深秋の目的は他に有ったようであり、彼女がくすりと笑った時、

「……常村、夏川、下級生のクラスの営業妨害をしているとはいったいどう言った見だ？」

「……て、鉄人！？」

「詳しい話は生徒指導室で聞かせて貰おう。お前達は仕事に戻れ」

西村教諭が現れ、2人組の首根っこをつかみ、教室を出て行く。

第185問

「で、あいつらは何しにきたんだ？」

「クレームをつけにきた以外はわからねえな」

雄二は西村教諭に連れて行かれた2人組を見送った後に何があつたかと聞くが咲耶は意味もなくクレームをつけられただけだと首を横に振り、

「雄二、これって召喚大会の」

「そつだろつな」

明久は遅れながらも状況を理解したようで雄二に声をかけると雄二は頷き、

「お前ら、何か心あたりでもあるのか？」

「いや、ただ、あの2人組が目的が何かはわからないが、警戒はしないといけないな……誰か、3年Aクラスと話をつけられる人間いないか？」

恭二は明久と雄二のせいで騒ぎに巻き込まれたと思っているようで眉間にしわを寄せるが雄二は自分達は何も知らないと言い切るだけではなく、何か考えがあるようで先ほどの2人組の所属クラスである3年生のAクラスに知り合いがいる生徒はいないかと聞くがここにいる生徒達には知り合いがないようであり、

「みあが帰ってきた後にするか？」

「まあ、みあなら、学年関係なく知り合いがいそつだよな」

雄二は手が上がらないため、小さくため息を吐くと咲耶は苦笑いを浮かべる。

「……坂本くん、友香なら3年生に顔が利く」

「小山か？ ……Eクラスは部活やってる奴も多いし、誰かいるかもな。悪い。俺はちよつと出てくる。明久、お前もこい。根本、大河、こつちは任せるぞ」

「う、うん」

恋華は友香を頼ってみると提案すると雄二は友香がいる教室には部活を中心に生活しているEクラスもいるため、友香に話をすると言い、明久と一緒に教室を出て行き、

「つたく、あいつら」

「そんなに青筋立てるな。坂本は坂本で何か考えがあるんだろ。俺達がやるのはこつち」

恭二は雄二の勝手な行動に舌打ちをすると咲耶は苦笑いを浮かべた後、迷惑がかかってしまったお客さんに頭を下げ始め、

「咲耶、ウチも手伝う」

「仕方ないのう」

美波と秀吉も咲耶に続き、生徒達は不快な思いをしたお客さんに一杯の礼を尽くし、

「ちよつと、雄二、どうするの?」

「決まってるだろ。あいつらが同じ事をやらないとは限らないからな。釘を打って置くんだよ。小山、いるか?」

「坂本くん?」

「友香さん、私は後でも良いですよ」

明久と雄二はCクラスとEクラス合同の喫茶店に顔を出すと友香は一人の女生徒と話をしている。

「すみません。小暮先輩」

「先輩? 良いタイミングだな。先輩にも話を聞いて貰いたいんだが」

「ちよつと、雄二」

友香は女生徒に頭を下げると雄二は友香の言葉から女生徒が3年生だと理解したようで女生徒にも話を聞いて欲しいと言うが雄二の強引な態度に明久はため息を吐くと、

「ちよつと、坂本くん、何があつたのよ」

「私にもわかるようにお教え願いますか?」

友香は雄二の様子にため息を吐き、女生徒は苦笑いを浮かべて明久と雄二が自分にも話を聞いて欲しいと言う理由を聞き、

「ああ。すまない。2年Fクラス代表の坂本雄二だ」

「えーと、同じく、Fクラス吉井明久です」

「坂本さんと吉井くんですか？ ……みあちゃんのお兄さんですね」

女生徒は明久と雄二の名前を聞くと深秋とも知り合いのようであり、

「はい。そうですけど……」

「名乗るのが遅れてすいません。3年Aクラスの『小暮葵』です。みあちゃんは先日から、仲良くさせていただいています」

「こ、こちらこそ。みあが迷惑をかけてすいません!？」

女生徒は『小暮葵』と名乗ると明久に深々と頭を下げ、明久は慌てて葵に頭を下げる。

第186問

「慌てなくても良いですよ。それにみあちゃんは迷惑なんかかけていませんから」

「そ、そうですか」

葵は慌てて頭を下げた明久の様子にくすりと笑うと明久の杞憂だと言い、明久は葵の言葉に少し安心したように見え、

「……しかし、みあの交友関係はどこまで繋がってるんだ？」

「ちよつと、不思議よね。でも、小暮先輩は私と知り合ってからよ。この間、吉井くんが和服を着ている写真を見たんだけど、着付けが少しおかしくて聞いたら我流だって言うから、きちんと覚えた方が良いと思って、茶道部を見学してみないかって誘ったのよ」

「ちよつと待つて！？ 僕はそんなものを着た記憶はないからね！？」

雄二は深秋の交友関係の広さに苦笑いを浮かべると友香は自分が葵を紹介したと話すとき明久は友香から聞かされた自分の記憶のない写真がある事に驚きの声を上げると、

「明久、別に今更の事だろ。ぎゃあぎゃああと騒ぐな」

「今更って、どう言う事だ！！」

雄二は明久が知らない間に深秋が着替えさせられている事を今更だ

と言い切り、明久は声をあげ、

「……吉井くん、坂本くん、あまり騒がないでお客様の迷惑になるから」

「お、おう。悪い」

「うん。ごめん」

2人が騒ぎはじめた様子を見て接客をしていた宏美が2人に静かにするように言っていると明久と雄二は頷く。

「みあちゃんは、着付けのお礼だと言って、Bクラスの三津屋さんと一緒にお茶菓子を作ってくれたり私達の方がお世話になります」

「そ、そうですか」

葵は明久と雄二の様子に苦笑いを浮かべながら深秋は茶道部にも馴染んできていると言うと明久は一先ずは深秋がおかしな事をしていないと安心したようであり、

「それで2人とも何かあったの？」

「ああ。中林、お前も話を聞いてくれ。後、部活で3年のAクラスの先輩と繋がっている人間も集めて欲しい」

「何、面倒な事？ えーと、加賀谷さん、それに薫もちよつと来て」

宏美は明久と雄二がここにいる理由を聞き、雄二は宏美にも聞いて

欲しいと話し、宏美は雄二が協力を仰いでいる事に厄介事だとは思
いながらも薫と真子を呼び、

「どうかしたんですか？」

「ああ。さつき、ウチの喫茶店に夏川と常村って言う変態がきたん
だけど」

「夏川さんと常村くんって、ウチのクラスのですか？」

薫と真子が合流すると雄二はさつき自分達の喫茶店にきた2人組の
名前を出し、葵は同じクラスの2人かと聞き返す。

「はい。その2人が何があったかわからないんですが、ウチの喫茶
店で不味いってクレームをつけにきたんだよ」

「不味いって、そっちのメニューもかなり美味しいですよ。本当
にクレームね」

雄二は2人組がクレームをつけにきた事を話すと宏美は呆れたよう
にため息を吐き、

「ああ。それで目的がわからないからな。他のクラスにも難癖を付
けてくる可能性もあるから警戒をして欲しいってのとは3年Aク
ラスと繋ぎを付けられればおかしな事をしないで貰えるかなと思っ
てな」

「そうですね？ わかりました。代表に頼んであの2人には注意し
ておきます。ご迷惑をかけたみたいで申し訳ありません」

「小暮先輩、頭を下げないでください。小暮先輩は悪くないんですから」

雄二は自分がここにきた目的を話すと葵は2人が2年生に迷惑をかけた事に申し訳なさそうに頭を下げると明久は慌てて葵に頭をあげるように言い、

「それで小山、中林、原口も警戒を頼むぞ。さっき、鉄人に引き渡したが反省はするかわからないからな」

「は、はい。わかりました。坂本くんも吉井くんも気を付けてください」

「坂本くん、霧島さんにもきちんと伝えてくださいね」

雄二は言いたい事は全て言い終えた喫茶店を出て行くところだが薫は雄二に翔子達にも伝えてくるように頼み、

「……」

「そつだね。雄二、行くよ」

「ま、待て!? 明久、あっちにはお前だけで行って来い」

雄二は明久に引きずられながら、喫茶店を出て行き、

「坂本くんも素直になれば良いのにね」

「そつね」

素直にならない雄二の様子に友香と宏美は苦笑いを浮かべる。

第187問

「で、ゆうじくんはしょうごちゃんに捕まったんだね」

「うん。霧島さんが嬉しそうで連れてこれなかったよ」

「翔子ちゃん、坂本さんとデートですか？ 羨ましいです」

深秋と瑞希は瑞希の火力により、難無く勝利を収めて帰ってくと雄二が先ほどの変態2人組の警戒をするようにAクラス、Dクラスの喫茶店に行くと翔子に捕まったようであり、

「まあ、坂本はなんだか言っただけで働けばなしだったし、休憩にもなつて良いだろ。代表も頑張ってただろうしな」

「そうね。それにせつかくの清涼祭だし、霧島さんもデートはしたいだろうし」

「……いや、霧島と一緒にの方が坂本は休まらないだろ」

咲耶はバカをやりながらも準備に奔走していた雄二には良い休憩だと言つと美波も咲耶と一緒に清涼祭を見て回りたいようであり、咲耶の言葉に大きく頷くが恭二は翔子から逃げ回っているであろう雄二の姿が目に見えかねたよう眉間にしわを寄せると、

「まあ、人の癒され方は人それぞれだからね。きつとゆうじくんには良い休憩になるよ」

「……そこで切ると人の捕え方でおかしな方向に話が進まないか？」

深秋は笑顔で雄二には休憩になっていると言い切り、恭二は大きく肩を落とす、

「それより、お客さんの入りはどうなってるの？ 好調？」

「好調よ。他の喫茶店もね」

「はい。2学年の喫茶店はどれも好調です。全店共通のチケットが評判みたいです」

深秋は恭二の事など気にする事なく、喫茶店の売り上げ状況を聞き、恋華と鈴は大きく頷く。

「そっか。それじゃあ。ぼくとみずきちちゃんも接客に戻るね」

「はい。すぐに手伝います」

「待て。みあ、姫路。2人ともシフトを見たら決勝まで行ったら休まないだろ。休んでこい」

深秋と瑞希は接客に戻ろうとすると咲耶はシフト表を確認したように深秋と瑞希に休憩時間が無い事に気付いたようで2人の首をつかむと、

「み、みあ、それならワシと」

「ぼくは休憩はいらさないよ。召喚大会参加はぼくのわがまなわけだし、この合同喫茶店を元々言い出したのぼくなわけだしね。それにそれを言ったらさっくんだって休憩時間ほとんど取ってないでし

よ。さつくんこそ、休憩を取ってみなみちゃんとゆっくりデートでもしてきてよ。その間はぼくが働くから」

「俺は接客の責任者だからな。それに俺はちゃんと美波とデートの時間は確保してある。接客の責任者としての命令だ。休憩に入れ。それに召喚獣の操作は精神的に疲れるんだ。働いてばかりで集中力を切らして失敗されても困るんだよ」

秀吉は咲耶の言葉で深秋を清涼祭に誘おうとするが深秋は秀吉の話聞く事なく咲耶と言い合いを始め出し、

「えーと、みあもサクも落ち着いてよ」

「そうです。落ち着いてください」

明久と瑞希は2人の間に割って入り、

「えーと、木下くん、落ち込まないでくださいね」

「阿久津さん、放っておきなさい。根本くん、ここで遊んでいても仕方がないわ。私は仕事に戻るわ」

「そうだな。阿久津、お前も仕事に戻れ」

鈴は深秋をデートに誘う事に失敗して落ち込んでしまった秀吉に声をかけるが周りは秀吉の反応に冷たい。

第188問

「えーと、どうして、こうなったんだろっね」

「あ、あの。吉井くん、私と一緒にじゃつまらないですか？」

「そ、そんな事はないよ!？」

深秋と咲耶の言い合いは拡大し、最終的に召喚大会参加者と咲耶の休憩時間を見直しになり、休憩時間になった明久と瑞希は2人で清涼祭を歩いている。

「何か、みあとサクにはめられた気がするんだよね」

「そうですね？ そ、そうだとしたら、みあちゃんと大河くんに感謝しないと」

明久は深秋と咲耶の言い合い自体が演技ではないかと疑っているように大きく肩を落とすと瑞希は明久と一緒に清涼祭を歩けるのが嬉しいようであり、

「まあ、せつかく貰った休憩だし、楽しもつか。姫路さんはどこか行きたいところってある？」

「バカなお兄ちゃん」

「えっ？ ごぶっ!？」

明久は瑞希に行き先の希望を聞いた時、髪をツーンテールにまとめた

小学生くらいの少女が明久のみぞおちに頭から突撃してくる。

「よ、吉井くん!? だ、大丈夫ですか?」

「だ、大丈夫だよ。え、えーと、君は誰?」

瑞希は慌てて明久に駆け寄り、明久は自分に突撃してきた少女に心当たりがないようで腹をさすりながら少女に名前を聞くと、

「バカなお兄ちゃん、葉月の事、覚えてないですか?」

「ちょ、ちょっと待って!? 泣かないで!? 思い出すから、直ぐに思い出すから」

「やっぱり、覚えてないですか。葉月、一生懸命、バカなお兄ちゃんはいませんか? って、バカなお兄ちゃんを探してここまで来たのに」

少女は明久の言葉に目に涙を浮かべはじめ、明久は慌てるがその明久の言葉で少女は声をあげて泣き出し、

「ど、どどどどどうしよう。姫路さん!?!」

「ひ、一先ずは教室に戻りましょう!? ここだと目立ちますし」

「そ、そうだね」

明久は瑞希に助けを求め、瑞希も慌てているようで少女を連れて教室に戻ろうとした時、

「あれ？ 吉井くんに姫路さん、何をしてるの？」

「放しなさい！？ 美春はお姉さまをあのお豚野郎から救い出すと言う使命があるのですわ！！」

「くだらない事を言っていないで働け」

愛子が2人に声をかけ、愛子の後ろには美春の首根っこをつかんだ海が美春と言ひ合いをしている。

「えーと、ちょっと困った事になって」

「何々？ 吉井くん、こんなに小さい子を泣かせて、隅におけないね」

「ち、違うよ！？」

愛子は慌てている明久を見て彼をからかうように笑うと明久は声をあげるが、

「工藤さん、吉井、遊んでないで先にその子をどうにかするべきじゃないか？」

「そ、そうだね」

海は泣いている葉月を見てため息を吐くと明久は大きく頷き、

「まったく、豚野郎、1度、放しなさい。お姉ちゃんに名前を教えてください。」

「葉月です」

「そう。葉月ちゃんって言うのね。美春は清水美春って言いますわ。良ければ美春に葉月ちゃんが泣いている理由を教えてくださいませんか？」

「葉月、バカなお兄ちゃんに会いたくて一生懸命にバカなお兄ちゃんを探したんですけど、バカなお兄ちゃんは葉月の事を覚えてなかったです」

美春は海の腕を振り払うと泣いている少女に視線を合わせるようにしゃがみ、少女に名前を聞くと少女は名前を『葉月』と名乗り、美春は葉月を安心させるように優しくな笑みを浮かべて葉月がどうして泣いているのかと聞く。

第189問

「吉井くん、本当に心当たりがないの？」

「う、うん。どこかで会った気もするんだけど……」

美春が葉月の相手をしている隣で愛子は明久に葉月の事を覚えていないか明久に聞くが明久は葉月の様子に何かを思い出しかけているのか頭に指をあてながら葉月の事を思い出そうとした時、

「バカなお兄ちゃんは葉月がぬいぐるみを買うのに協力してくれました」

「ぬいぐるみ？ ……」

「はい。お姉ちゃんにプレゼントしたです」

葉月は明久に思い出して欲しいように必死に明久との出会った時の事を説明すると、

「思い出した。ノインの大きなぬいぐるみの子だ」

「はいです」

「じぶつ!?!?」

明久は葉月の事を思い出したようでポンと手を叩くと葉月は嬉しそうに明久に抱きつき、再度、葉月の頭がキレイに明久のみぞおちに吸い込まれる。

「吉井、大丈夫か？」

「う、うん。何とか」

海は明久のダメージに苦笑いを浮かべると明久は腹を押さえながら返事をし、

「それで、葉月ちゃんは吉井くんに会いに来ただけなの？ 1人で文月学園まできたの？」

「はいです……忘れてました。他にもお姉ちゃんとお兄ちゃんに会いにきたです」

「そうなんですか？ 葉月ちゃんのお姉ちゃんと豚……お兄ちゃんはどこにいるんですか？」

愛子は小さな葉月が1人で文月学園にきたのかと聞くと葉月は明久以外にも姉と兄に会いに来た事を話すと美春は葉月に2人の居場所を聞くと、

「えーと、中華喫茶をしてると!？」

「おい。清水!？」

「清水さん、中華喫茶に行く大義名分を手に入れちゃったからね」

「美波ちゃんと大河くんは大丈夫でしょうか？」

葉月は中華喫茶に行きたいと言った瞬間に美春は葉月を脇に抱えて

一気に駆け出し、海は驚きの声を上げて美春を追いかけに行き、瑞希と愛子はこれから中華喫茶で起きる事に察しがつくようで苦笑いを浮かべる。

「吉井くん、姫路さん、ボクは清水さんを連れ戻しに行くけど、2人はどうするの？ デートの続き？」

「デ、デート！？ ち、違いますよ！？」

「な、何を言ってるんだよ。工藤さん！？」

愛子は明久と瑞希の顔を交互に見た後、2人をからかうように言う
と明久と瑞希の顔は一気に耳まで真っ赤に染まり、直ぐに否定する
がその様子は明らかにお互いを意識しているようにしか見えぬ、

「あのさあ。顔を真っ赤にして否定しても説得力がないよ。それに誰が見てもお互いに意識してるんだから、はっきりとさせなよ。みあや大河くんが2人の背中を押してくれてるのだから、気づいてるんですよ」

「そ、それは、だってあのさ」

「あつ」

愛子はため息を吐きながら、2人の関係をはっきりさせるべきだと言つと明久と瑞希はお互いに顔を見合わせるが直ぐに視線を逸らしてしまい、

「もう。これ以上、ボクは付き合ってもらえないよ。ボクは清水さん達を追いかけるから、デートの続きを楽しんでよ」

「ま、待って。工藤さん、僕達も戻るから」

「は、はい。お店が心配ですし」

愛子は明久と瑞希には付き合っていられないと中華喫茶に向かって歩き始めると明久と瑞希は顔を真っ赤に染めたまま愛子を追いかける。

第190問

「お姉さま」

「み、美春!? ど、どうして、ここにくるのよ!? み、みあ、
どうにかして!？」

美春は中華喫茶に飛び込むなり、美波に飛びつこうとするが美波は
身の危険を感じ、直ぐに深秋に助けを呼び、

「はるちゃん、そんなにチャイナドレスが着たかったんだね」

「よ、吉井深秋？」

深秋は音もなく美春の背後に回り込むと笑顔で美春の肩をつかみ、
美春は捕食者から一気に被食者に一変したようで背後に感じる深秋
からのプレッシャーに顔を引きつらせると、

「みあお姉ちゃん、葉月もチャイナドレスが着たいです」

「え? 葉月? どうしたの?」

美春に抱えられたままの葉月が深秋の顔を見上げてチャイナドレス
を着たいと手を上げ、美波はそこで葉月が美春に抱えられている事
に気づき、驚きの声をあげる。

「お姉ちゃん、葉月、遊びにきたです」

「葉月ちゃんはお姉さまの妹? そう言う事は美春の義妹いせむとになるわ

けですわね?」

「……いや、その答えはないからな」

葉月は美春の手からはい出ると美春は美波と葉月の顔を見比べた後におかしの事を言い始め、咲耶は大きくため息を吐くと、

「お兄ちゃんもこんにちはです」

「葉月ちゃん、いらっしやい。ごふっ!?!」

葉月は咲耶と美波が付き合っている事をすでに知っており、それどころか咲耶に懐いているのか葉月は咲耶に突撃して行き、彼女の頭はキレイに咲耶のみぞおちに吸い込まれて行き、

「ここでもきれいに入ってるね」

「……あれ痛いんだよね」

遅れて中華喫茶に入ってきた明久、瑞希、愛子、海の4人は咲耶と葉月の様子に苦笑いを浮かべる。

「咲耶、大丈夫?」

「ああ……それより、明久、姫路、何しに戻ってきたんだよ。せつかく、両想いでもお互いに何も言いだせないへタレな2人のためにみあとケンカする演技までして追い出したんだから帰ってくるなよ」

美春は深秋に拉致され、葉月は2人に付いて行き、美波は葉月の突撃を喰らった腹をさすりながら明久と瑞希を追い払うように手を振

り、

「な、な、な、何を言ってるんだよ。サク!?」

「そ、そうです。何を言ってるんですか!? そ、それに演技って」

「見るか? 優子の弟のついでで演劇部の3年生に作って貰った台本もあるぞ」

明久と瑞希は顔を真っ赤にするが咲耶は深秋との言い合いは演技だと言いつ切り、

「大河くん、手が込んでるね」

「ああ。これくらいしないとお互いにデートに誘えないって言うへタレ同士だからな」

「それも清水によって潰されたけどな」

愛子は深秋と咲耶の行動に苦笑いを浮かべると咲耶は表情を変える事なく2人をへタレと言いつ切り、海は美春の暴走に無駄になった深秋と咲耶の気づかいを哀れむように咲耶の肩を叩き、

「それが1番の問題だよな。と言うか、工藤に神村、こっちで遊んでて良いのか? ……と言うか、そろそろ、忙しくなって手が回らなくなつた優子が仕事を放棄して遊んでいる奴らを狩りに動き出すので怖いな」

「……………そうだね。まず、代表が帰ってこないし」

咲耶はため息を吐くと愛子と海に中華喫茶にいて良いのかと聞くと
愛子は雄二を追いかけ回しているであろう翔子を思い浮かべて大き
く肩を落とす。

第191問

「……やっと戻ってこれた」

「噂をすればってヤツか？」

雄二がため息を吐きながら喫茶店に戻ってくると海は苦笑いを浮かべ、

「坂本くん、代表から逃げ切れたの？」

「翔子も木下姉と召喚大会に出てるだろ。それで時間になったから、その間に逃げてきたんだ」

「逃げたって応援してきてやれよ」

雄二の後ろには翔子がいないため、愛子は疑問に思い首を傾げると翔子は召喚大会の時間になったようであり、雄二はその間に逃げてきたと言つと海は雄二の言葉にため息を吐いた後、

「工藤さん、1度、戻ろう。木下さんもないとなると人手が足りなくなってる可能性も高いし」

「そうだね。大河くん、清水さんの事を任せるよ」

「いや、清水はみあに任せるからある程度したら、送り返す」

愛子と海は自分達の喫茶店が心配になってきたようで美春を咲耶に任せると言つが咲耶は苦笑いを浮かべながら深秋任せだと答えると

2人は苦笑いを浮かべながら喫茶店を出て行き、

「それじゃあ、働きますか？」

「違うよ。サクはこっち」

「そうですね」

咲耶は仕事に戻ろうとすると笑顔の明久と瑞希が彼の肩をつかむ。

「何だよ？ お前らがヘタレでデート1つできないのは本当の事だろ」

「そう事じゃないよ！！」

「そうです。みあちゃんと大河くんがケンカしてるのにどれだけ心配したと思ってるんですか」

咲耶は2人から文句を言われる必要はないと言い切るが明久と瑞希は騙された事もあるのか納得がいていないようであり、

「……島田、あれは何があったんだ？」

「えーと、簡単に説明すると」

雄二は3人の様子に何があったかわからないため、美波に今の状況を確認すると深秋と咲耶が明久と瑞希をデートさせるために使った手段を雄二に説明し、

「なるほどな。おい。お前ら、そこでもめるな。客に迷惑がかかる

だろ。島田、しばらく、大河を連れて行け」

「え？ 良いの？」

「この状態で3人を店に置いておいてもダメだろ。それにお前らがいると清水が帰ってきた時にまた問題になる」

雄二は場を収めるために美波と咲耶に休憩を言い渡し、美波は雄二の言葉に首を傾げるが雄二は美春が帰ってきた時の事も考えている。

「明久、姫路も遊んでないで働け。だいたい、周りに気を使わせたお前らに問題があるんだよ」

「それは坂本には言われたくないだろうな。お前だつて素直に代表と付き合っていないのに」

「そうよね」

雄二は咲耶を養護するが直ぐに咲耶に裏切られ、美波は咲耶の意見に同意すると、

「うるせえ。さっさと休憩に入れ！！」

「ああ。召喚大会組は午後から試合間隔も短くなるし、その間に休ませて貰う。美波、行くぞ」

「う、うん。それじゃあ、休憩入るから」

雄二は顔を真っ赤にして咲耶を怒鳴りつけ、咲耶は雄二の反応にニヤニヤと笑うと美波の手を引っ張って喫茶店を出て行き、

「ただいま」

「ただいまです」

「……」

咲耶と美波と入れ替わるように深秋、葉月、美春の3人が戻ってくるが美春は深秋に捕まった事で体力を根こそぎ持って行かれたようでごつたりとしており、

「……お、お姉さまはどこですか？ 美春を癒してください」

「バカなお兄ちゃん、お姉ちゃんはどこに行つたですか？」

「えーと、さつき、休憩時間に入った」

「そ、そんな」

美春は美波を探すように周囲を見回すが美波は先ほど咲耶と一緒に休憩に入ったため、喫茶店にはいなく、がっくりと膝を付き、

「ゴメンね。清水さん、僕にはこれくらいしかできないから、これでも食べて体力を回復させて、葉月ちゃんも」

「バカなお兄ちゃん、ありがとうございます」

「……ごちそうになりますわ」

明久は苦笑いを浮かべながら、美春と葉月にゴマ団子を出す。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7326n/>

僕と歪んだ愛情表現？

2011年12月24日12時51分発行